

岩手県文化財調査報告書第72集

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

— XVII —

(北上地区)

昭和57年3月

岩手県教育委員会  
日本道路公団

# 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

— X VII —

(北 上 地 区)

岩手県文化財調査報告書第72集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XVII 正誤表  
(北上地区)

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
序文3	4、5	遺物~した。	削除	96~200	191ほか	逸き、逸く	挽き、挽く
	13	住脚	柱脚	100	9	血状	皿状
序文5	13	(YHM76)	(THM76)	126	6	トレンチに	トレンチを
	76	(NAM75)	(KMD75)	142	第5表	(坏)口径	口縁
7	2、19	平担	平坦	187	2	鑛	鑛
	21	少く	少なく	191、197	8、4	湾曲	彎曲
13	9	鳩岡崎遺跡遺跡	鳩岡崎遺跡	206	9	0.5~4.8合	1.0~2.25
14	1	12km	12m	216	23	大山ガラス	火山ガラス
16	10	約13cm	約18cm		25	英崗岩、ジルマン	火崗岩、ジルコン
17	6	磨減	磨減	219	図版1	2、同トレンチ写真	天地逆にする
	7	約20.08cm、口縁部	約20.8cm、残存部	267	3	0.3	0.3m
	29	コーナー部	コーナー部		27	pitが	pit3、4、5が
21	26	磨減	磨減	269	2、13	0.4、煙道は	0.4m、煙道の長さ は
22	4	胎部	胎土	276	28	大形	大型
25	3	丹塗り	丹塗り	280	第13図	左上1段、左下2段	1、5を入れる
27	1、12	1部	一部	283	26	11は	10は
29	12	基準点のり	基準点より	291	15	胎土に	胎土には
	15	8.25	8.25m	292	11	内黒	内面
35	下1	網縄文	網縄文	385	25	拳大	拳大
37	第10図上	Ab56ビット、 Ab59ビット	Ad56ビット、 Ad59ビット	388	9	1部	一部
41	3、11	13.68、火山。	13.68m、 火山灰土。	390 ~396	2ほか	口径、体	口縁部、体部
42	7	17.46~路線外m。	17.46m~路線外。	401	8	49×58	49×58cm
43	4、12、19	18.75、18.27、 16.94	mを入れる	409	表6	(B118住居跡) 防水車	紡錘車
45	23	基点	基準点	429	10	C地区が105m~ 平坦地。	重複部分削除
46	15、25	4/3YR、18.64	4/3、18.64m		15、19	粗堀	粗掘
47	20	瓜形	瓜形		16	千鳥	千鳥
49	21	書いたにも	書いたようにも	441	1	少く	少なく
88	10	抗	杭		参考文献	7)、8)、9)	5)、6)、7)
89	注3、下1	礎か、分布に	礎が、分布は				

## 序

地域開発に伴う道路など交通網の整備事業は、現代社会の進歩発展から生ずる必然的な要請であり、本県においても、このような建設事業が多く計画・実施されております。

これらの開発事業に関連して、私たちには、先人が長い歴史の中で培いはぐくんできた貴重な文化遺産を保護し、新たな文化創造の糧として活用していく責務があります。

国土開発計画に基づいて建設される東北縦貫自動車道は、産業・経済開発の大動脈として多方面からの期待をになう国家的な大事業であり、宮城県境より西根インターまでは、すでに供用され、現在は更に秋田・青森県境へと工事が進められております。

岩手県教育委員会は、この供用区間に関係した99遺跡について、日本道路公団仙台建設局の委託によって、昭和47年度から7か年にわたって発掘調査を実施し、その整理と報告書の作成を、昭和53年度から4か年計画で実施して参りました。本年度は、その最終年度にあたります。

本報告書は、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書の第XVII冊目として、北上地区に所在する下谷地B遺跡外12遺跡について、調査結果をとりまとめたものであります。

おもなものには、旧石器時代の石器工房跡（下成沢遺跡）、平安時代の集落跡（成沢・上大谷地遺跡など）等があります。また、異色あるものとしては、埋没した旧河道の中から発見された平安時代の遺物堆積層（下谷地B遺跡）があり、多量の土器・木製品にまじって、墨書土器（300点）・木簡（1点）が検出されました。これらは、律令政治の浸透に伴うこの地区における識字層の存在をうかがう貴重な資料として注目されます。

この報告書が、研究者のみならず、広く一般のかたがたに活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められるよう願ってやみません。

ここに、調査について御援助・御協力をいただいた地元教育委員会はじめ関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

昭和57年3月

岩手県教育委員会

教育長 新 里 盈

## 例 言

1. 本書は東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書第XVII分冊として、岩手県北上市および同和賀郡江釣子村に所在する遺跡のうち、別表の13遺跡について作成したものである。
2. 調査および資料について、次の方々からご指導、ご助言を賜った。(敬称略)

板橋 源 (岩手県立博物館館長)	草間俊一 (岩手県立盛岡短期大学学長)
司東真雄 (岩手県文化財保護審議会委員)	田中喜多美 (岩手県文化財保護審議会委員)
岡村道雄 (東北歴史資料館研究部技師)	菊池強一 (岩手県立釜石南高校教諭)
小林達雄 (国学院大学助教授)	渋谷孝雄 (山形県教育庁文化課)
富樫泰時 (秋田県教育長文化課学芸主事)	林 謙作 (北海道大学助教授)
藤沼邦彦 (東北歴史資料館考古研究科長)	岩手県埋蔵文化財センター
3. 資料の鑑定・分析・保存処理について、次の方々からご指導、ご協力を賜った。(敬称略)

井上克弘 (岩手大学助教授)	火山灰
佐々木達夫 (金沢大学助教授)	陶磁器
佐藤二郎 (岩手県立大船渡農業高校教諭)	石材、地形
照井一明 (岩手県立種市高校教諭)	胎土
早坂松次郎 (岩手県木炭協会経営指導員)	樹種
平川 南 (東北歴史資料館企画科長)	墨書土器、墨書木製品
本堂寿一 (北上市立博物館学芸員)	木製品
増沢文武 (元興寺文化財研究所研究室長)	木製品の保存処理
村井三郎 (岩手県文化財保護審議会委員)	種子
山田一郎 (東北大学文部教官)	火山灰
岩手県工業試験場	胎土、火山灰、鉄滓
日本アイソトープ協会	年代測定

尚、井上克弘、佐藤二郎、照井一明、村井三郎、山田一郎の各氏よりご執筆いただいた玉稿は当該遺跡に、また内容が2遺跡以上に及ぶ場合は巻末付篇にそれぞれ掲載させて戴いた。
4. 本書に掲載する地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1、同20万分の1地形図を複製使用するものである。また、遺跡地形図は日本道路公団作成の「東北高速道計画図」(第十系座標による)を使用した。
5. 遺跡における層相、遺物の色調観察は、農林省農林水産技術会議事務局監修による「新版標準土色帖」を使用した。
6. 調査は日本道路公団の委託をうけ、岩手県教育委員会が主体となり、次の通り実施した。

No.	遺跡名 (略号)	所在地	調査期間 自～至	調査面積 (対象面積)	発掘調査者	整理 執筆者
1	飯 豊 (IT74)	北上市飯豊町第19地 割45-1ほか	昭和 49. 5. 16 49. 5. 22	m <sup>2</sup> 3,000 (3,000)	高村嘉夫	狩野敏男
2	藤 沢 (FS74)	北上市飯豊町藤沢 14-139ほか	49. 6. 3 49. 10. 20	1,600 (1,750)	高村嘉夫・阿部省吾・菊地郁雄 三上 昭・高橋義介・中村清也	三上 昭
3	下谷地A (SY73)	和賀郡江釣子村北鬼 柳第12地割13ほか	48. 9. 14 48. 10. 8	610 (3,500)	高村嘉夫・中川重紀	昆野 靖 三上 昭
4	下谷地B (SY74)	"	49. 6. 19 49. 8. 1	580 (600)	高村嘉夫・阿部省吾 三上 昭・高橋義介	"
5	上 藤 木 (KF73)	和賀郡江釣子村北鬼 柳14-20-1	48. 8. 27 48. 9. 17	970 (3,530)	高村嘉夫	狩野敏男
6	成 沢 (NS72)	北上市相去町字下成 沢54-1ほか	47. 6. 9 47. 7. 9	1,250 (2,500)	林 謙作・菊地郁雄・鳴 千秋 山口興典・佐々木勝・伊藤博幸	石川長喜
7	下 成 沢 (SNS72)	北上市相去町字中成 沢44ほか	47. 5. 8 47. 6. 10	1,200 (3,500)	高橋文夫・高橋信夫・中村清也	"
8	大 谷 地 (OY74)	北上市相去町高前田 74	47. 7. 10 47. 7. 20	800 (2,500)	山口興典	狩野敏男
9	上大谷地 (KOY72)	北上市相去町上大谷 地	47. 7. 11	2,500 (7,500)	林 謙作・菊地郁雄・鳴 千秋 山口興典・佐々木勝・伊藤博幸 高橋文夫・高橋信夫・中村清也	三上 昭
10	土 井 A (DIA72)	北上市相去町土井	47. 10. 11	50 (200)	林 謙作・高橋文夫・高橋信夫 伊藤博幸・中村清也・古谷洋子	"
11	土 井 B (DIB72)	"	47. 11. 11	625 (1,250)	"	"
12	土 井 C (DIC73)	"	48. 10. 15 48. 10. 31	230 (420)	高村嘉夫・三上昭	"
13	土 井 D (DID80)	"	50. 7. 7	700 (900)	瀬川司男	"

調査には北上市・江釣子村両教育委員会をはじめ、地元の方々の多大なご協力をいただいた。

7. 本書の執筆は、序文を吉田努、相原康二、地区概観を斎藤 淳、各遺跡については別表の通りである。また、索引および写真図版は、秋葉良子、阿部由美、菊池純子、小林史子、桜井芳彦、佐々木智子、佐々木信子、田中ヒデ、堀間好子、藤原周子の協力を得て作成した。

8. 調査資料や遺物は、すべて岩手県教育委員会事務局文化課において保管している。

# 目 次

## 序 文

- 1 経過
- 2 調査の方法について
- 3 整理について

## 本 文

### 北上地区概観

- 1 地形概観…………… 1
- 2 遺跡の分布…………… 1

### 飯豊遺跡

- I 位置と立地…………… 7
- II 調査の概要及び結果…………… 7
- III 今後の問題点…………… 7

### 藤沢遺跡

- I 位置と立地…………… 13
  - II 調査の経過…………… 13
  - III 層序と土質…………… 13
  - IV 発見された遺構と遺物…………… 14
    - 1 住居跡…………… 14
    - 2 ピット…………… 27
    - 3 溝状土壇…………… 41
    - 4 土壇…………… 45
    - 5 焼土遺構…………… 45
    - 6 溝…………… 47
    - 7 表採等の遺物…………… 47
  - V まとめ…………… 66
- 写真図版…………… 69

### 下谷地A遺跡

- I 位置と立地…………… 88
  - II 調査の経過…………… 88
  - III 遺跡の層序…………… 88
  - IV 調査の結果…………… 89
  - V 出土遺物…………… 91
  - VI まとめ…………… 110
- 写真図版…………… 113

### 下谷地B遺跡

- I 位置と立地…………… 125
- II 調査の経過…………… 125
- III 遺跡の層序…………… 126
- IV トレンチの出土遺物…………… 128
- V トレンチ以外の出土遺物…………… 142
- VI まとめ…………… 198

### 遺物の鑑定と分析

- 1 植物種子の同定…………… 214
  - 2 土器の岩石学的方法による  
分析結果…………… 215
- 写真図版…………… 217

<b>上藤木遺跡</b>	
I 位置と立地	259
II 調査の概要及び結果	259
III 今後に残された問題	259
<b>成沢遺跡</b>	
I 位置と立地	263
II 調査経過及び方法	263
III 調査結果	265
1 藩境塚	265
2 竪穴住居跡	266
3 その他の遺構	288
4 遺構以外の出土遺物	289
IV まとめと考察	297
1 藩境塚について	297
2 竪穴住居跡について	298
3 まとめ	301
付章 出土遺物の分析と年代測定	303
写真図版	305
<b>下成沢遺跡</b>	
I 位置と立地	323
II 調査経過及び方法	323
III 調査結果	326
1 As 18 溝跡	326
2 As 15 焼石 Pit	327
<b>大谷地遺跡</b>	
I 位置と立地	379
II 調査の概要及び結果	379
III 今後の問題点	379
<b>上大谷地遺跡</b>	
I 位置と立地	384
II 遺跡の層序	384
III 発見された遺構と遺物	384
IV 「上大谷地遺跡調査概要」 のまとめ	408
V まとめ	415
写真図版	417
<b>土井 A・B・C・D 遺跡</b>	
I 位置と立地	429
II 調査の経過と結果	429
<b>付 篇</b>	
1 和賀川流域の地形について	佐藤二郎・435
2 東北地方における奈良～平安時代遺跡 埋土中の粉状パミスについて	井上克弘・山田一郎・442
岩手県教育委員会事務局文化課職員一覧	460



# 序 文

## 1、経 過

県内の東北縦貫自動車道建設は、昭和40年11月仙台・盛岡間の基本計画の決定に始まり、昭和43年4月の施行命令によって具体化される。

これによって破壊される埋蔵文化財の取扱いについては、文化庁と日本道路公団の覚書により、岩手県教育委員会がおこなうことになった。

まず、一関・盛岡間の路線予定地内の分布調査が、昭和42年及び43年に実施され、昭和45年2月19日水沢・花巻間40km、同年11月25日一関・胆沢間30km、46年2月10日石鳥谷・盛岡間29kmの路線発表がなされたことに伴い、昭和47年8月～9月に、用地巾50mで現地確認調査、同年10月インターチェンジ及び付帯施設予定地内の現地確認調査等が順次実施され、一関・盛岡間の調査対象遺跡は当初82ヶ所確認された。

これらの破壊される遺跡について、できるだけ詳しく調査記録し、遺跡のもつ歴史的価値を永く後世に伝えることを目的とし、昭和47年度に北上市・花巻市・金ヶ崎町所在の遺跡から調査が開始され、用地買収、着工順位に従って順次にすすめられた。

この間、調査除外としたもの4ヶ所がある。一関市苅又遺跡は過去の開田による破壊の程度が大きく煙滅、一関市松の木遺跡は宅地化による破壊、衣川村柵形陣場跡は所在位置が路線からはずれる。衣川村二枚貝化石層は遺跡としての調査対象としないことなどの理由による。

また、路線変更によって保存されたのが、平泉町伝護摩堂跡である。この遺跡は奥州平泉文化との関連が考えられ、路線発表後に路線内に所在することが確認され、急遽日本道路公団と協議し、路線を西側に変更した。一方、工事直前もしくは工事中に新しく確認されたものに、土取場の和賀町梅ノ木Ⅰ～Ⅶ遺跡、路線内では江釣子村下谷地B遺跡・紫波町墳館遺跡および柳田館遺跡がある。

昭和49年6月20日、盛岡・安代間53kmの路線発表があり、この区間のうち、盛岡・西根（松川まで）間が調査対象の日程にくりこまれ、当初、8遺跡が確認されたが、工事中に滝沢村卯遠坂遺跡が発見追加され、更に紫波インターチェンジの誘致新設に関連し、栗田Ⅰ～Ⅲ遺跡が調査対象となる。

以上のように、一関・西根（松川まで）区間の調査対象遺跡数は、除外、新規発見などによる変動を見て来た。このことは、埋蔵文化財保護の基本の一つとして、分布調査の重要性が改めて問われる一面でもある。結局、調査遺跡数は、99遺跡、18市町村におよぶものとなった。

調査をすすめる一方、文化庁、日本道路公団との協議によって、前述の伝護摩堂跡を完全保

存したのをはじめ、江釣子村鳩岡崎遺跡の縄文中期の大型穴住居跡の一部、水沢市石田遺跡では、奈良時代から平安時代初期に相当する焼失家屋1棟、紫波町上平沢新田遺跡で、平安時代相当の焼失家屋1棟の路線境検出遺構を一部精査の上、それぞれ埋めもどし現地保存をした。

また、江釣子村猫谷地遺跡の古墳1基、紫波町墳館遺跡の墳墓1基、柳田館遺跡・盛岡市太田方八丁遺跡の一部は、施工法や設計変更等によって可能な限りの保存策をとった。

しかし、これらの保存遺構や遺跡の管理、活用は今後十分に留意しなければならないものであり、それがなされなければ完全な保存策であったとは言い得ない。

昭和47年度に始まった調査は、昭和53年度の紫波町栗田Ⅲ遺跡を最後に終り、現在、整理作業をすすめているが、東北縦貫自動車道建設の具体化以来、事業をすすめるに当たって、終始指導と助言をくださった県内外の協力者、および献身的な協力を得た関係市町村教育委員会、学校、関係諸機関、地元作業員の方々をはじめ各位に改めて敬意を表したい。

なお、西根町以北の東北縦貫自動車道関連遺跡は、(財)岩手県埋蔵文化財センターによって調査されることになり、昭和53年度から実施されている。

## 2 調査の方法について

(1) 調査対象範囲の選定 遺跡の中で用地内および付帯施設を含む関連部分は、すべて調査対象とした。更に、当該遺跡周辺の分布調査を可能な限り実施することにつとめ、調査地とそれをとりまく遺跡群との関連解釈の一助に資することとした。

(2) 調査対象全域に次のような地区を設定

①地区設定のための原点は、日本道路公団測量の路線内中心杭の任意のものに定め、それと他の中心杭の2点間を見通す直線と、原点を通りこれに直交する直線を座標の基準線とした。

②南北の基準線をもとに、30mを1ブロックとし、北から順にA・B……の記号を付し、これを東西、南北に10等分し3m×3mのグリッドを設定、グリッド名は北から順にa-j、南北基準線から東方へ50・53・56……。西方へ03・06・09……。の記号を付し、これとブロック記号の組合せで表わした。例えば、Aa03・Aa50 のようになる。

(3) 発掘および記録 発掘調査は絶対にくりかえしのできない作業であって、特に、緊急調査という性格と記録保存を考えると、調査の過程で観察された事項は可能な限り詳細に、しかもすべて客観的データーとして記録されねばならないし、記録者の解釈と観察された事実とが混同されぬよう留意しながら①遺構群をひとつのまとまりとして把握すること、文化層が重なっている場合、層序とともにそれぞれの文化層のひろがりを実に把握すること、更に緊急調査の場合、事後の保存が困難である以上、トレンチによる部分発掘は回避すべきであることからグリッド設定にもとづく平面発掘につとめた。

②原則として3 m×3 mのグリッドで、調査地における遺物・遺構の分布状況を把握するため、「ちどり」状に人力による粗掘をすることにしたが、結果的に機械力の導入も多かった。遺物・遺構の検出を見た場合、その具体的内容を究明するため必要な範囲の全面発掘を実施した。遺物・遺構の検出を見た場合、その具体的内容を究明するため必要な範囲の全面発掘を実施した。

③遺構が検出された場合、該当グリッド名を付した。その場合もっとも北西に位置するグリッド名で呼称することを原則とした。精査に当っては、2分法・4分法による平面発掘に留意し遺構の性格と内部堆積状況・構造・重複等を把握しながら完掘することとした。

④遺物は、原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡記号・出土年月日・出土地点・出土層位を記録し、遺構に直接関連するものや、年代決定の資料となり得るものについては出土レベル、位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

⑤遺物の出土状況・層位・遺構に関する所見等の記録は、実測図・遺構カード・フィールドノートを用い、全体の問題点、進行は調査日誌に記録した。

⑥写真調録は、35mm版モノクロ、カラー・6×7cm版モノクロを主として用いた。

(4) 実測方法 ①発掘された遺構の実測は、原則として遣り方実測を用い、平板実測は補助にとどめた。②原図の縮尺は1/20に統一したが、遺構・遺物の細部については、必要に応じて1/10縮尺を採用した。

(5) 関連科学との連けい 総合的な見地からの記録作業という意味で、考古学のみならず関連科学の研究者、とくに自然科学系統の分野との連けいに留意し、調査現場の実見と見解を求めることにつとめた。

### 3 整理について

整理にあたっては調査の性格（「緊急調査」と「記録保存」）を十分に考慮した。したがって可能な限り詳細な記録を作成することと、その公開を主目的とした。なおいわゆる「行政調査（とくに緊急調査）」と「学術調査」の異同を、その「現場」に投入された技術、方法の次元に還元して論ずるのは妥当ではない。「緊急調査」の「現場・調査」の位置づけについては、本課にも若干の反省点がある。

(1) いわゆる「珍品主義」・「一番主義」を排し、得た資料のすべてを観察し、それぞれに応じた記録を作成することを旨とした。各調査地（「遺跡」）・調査資料の正当な評価の資料を提示するためであるし、それが「記録保存」の趣旨にも連なるからである。その結果として記述が若干繁雑になった。ただし実際上は、調査担当者の設定仮説が整理担当者に十分伝わっていないなどのことも目立ち、満足のいく整理を必ずしもなしえなかった調査地もまた多い。遺憾で

ある。また本書に提示した諸仮説、見解は本課の統一見解ではなく、整理担当のそれである。具体的には、①観察事項の正確な伝達 ②仮説の提示とその展開、吟味 ③新規の仮説、問題点の提起 ④新しい資料操作法の提示などを目ざしたが、前述のように必ずしも十分には実施できなかった。

(2) 調査地はそれのみ単独での評価は避け、一定の地域内とりわけ他の「遺跡」との関係重視して解釈・評価するように努めた。『周辺の遺跡』の項がやや繁雑にわたっているのはそのためである。これらは(1)の実践をめざすのみならず、遺構存在を遺跡成立の絶対条件視する見解への反論のためにも必要であり、とりわけ埋蔵文化財保護にはきわめて重要な観点である。

(3) 調査時と同様に「関連諸科学・諸技術との連携」に留意した。(1)で述べた目的を満足させるために必要不可欠であり、さらにはその保存処理・各種データの蓄積・その公開も本課に課せられた責務だからである。今後の継続実施を考慮し、可能なものは努めて本県内の機関・公所・その他に連携ないし委託先を求めた。具体的実施例は、年代測定（カーボンディATING・熱ルミネッセンス法他）・材質鑑定（石材他）・樹種鑑定（木器・木材・住脚他）・種子鑑定（炭化米・雑穀類・雑草類他）・花粉分析・人骨（歯）鑑定・獣骨（家畜を含む）鑑定・組成分析（釉薬・土器胎土・火山灰他）・燐分析・地質学的諸分析等にわたるが、今後も新分野を加える必要がある。保存処理は、木器・木材・柱脚類・鉄器類を中心に実施しているが、これも今後さらに新分野のものについて実施する必要がある。地質学的知見・教示は(2)などとの関連で、調査地および周辺の「遺跡」の立地・占地に関して、また遺物と出土層（とくに火山灰層）との関連に留意して援用した。大規模調査地については航空写真・ステレオカメラにもとづく作図を採用した。

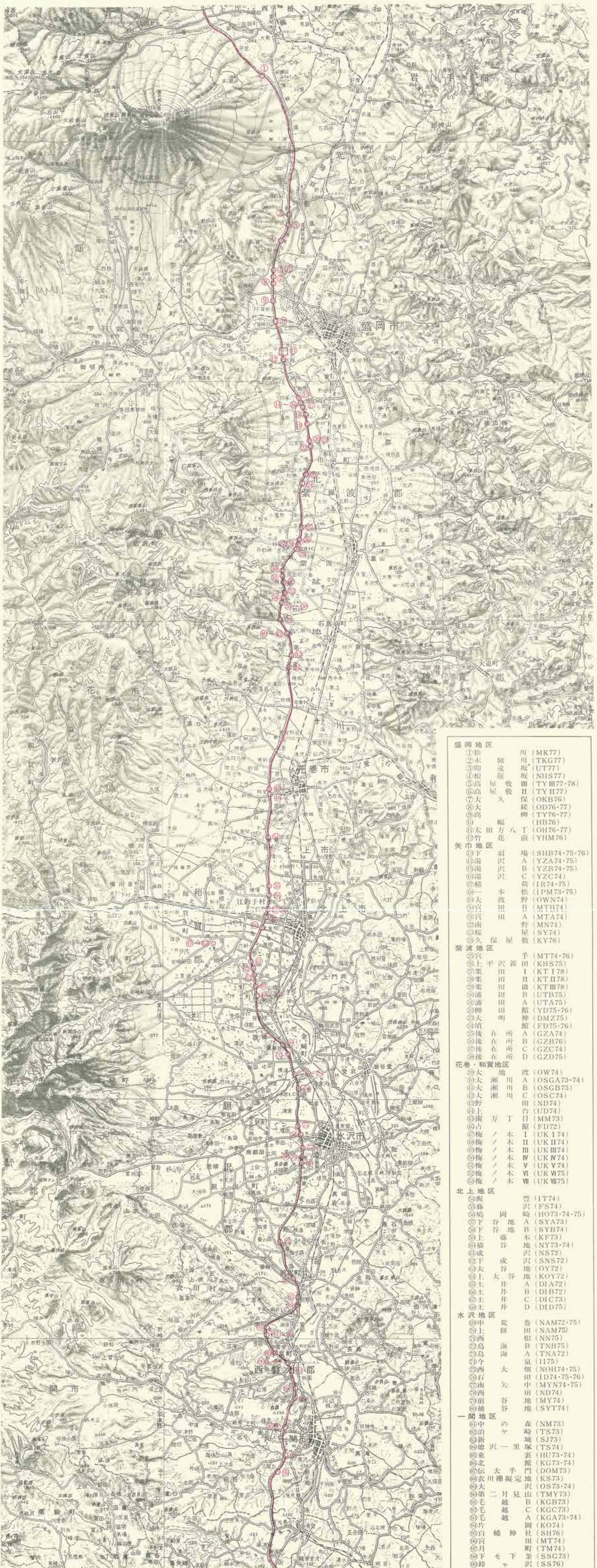
(4) すべての対象（遺構・遺物・「遺跡」）について、技法的分析に加え組み合わせの重視の観点をも加えてある。

(5) 以上の技術的基準・指標として「出土遺物の整理について」（昭和47年度作成のうち一部修正）を作成し大略それに準拠した整理を実施した。細部は省略するが、大枠は①観察事項を正確に伝えるための作図法他の技術的部門、②文章表現上の留意点とからなる。後者については観察事項と解釈の峻別・不明事項の不明の理由明示などがとくに求められている。

(6) 得た膨大な資料の公開は、別途計画のもとに実施されるであろう。

東北縦貫自動車道関係調査遺跡一覧

地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度	地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度				
盛岡	西根町 滝沢村	1	松川	昭和52	和賀		51	梅ノ木 V	昭和49				
		2	木賊川	52			52	梅ノ木 VI	50				
		3	卯遠坂	52			53	梅ノ木 VII	50				
		4	根掘坂	52			北上	北上市	54	飯	豊	49	
		5	高屋敷 III	52・53					55	藤	沢	49	
		6	高屋敷 II	52					56	鳩岡	崎	48・49・50	
		7	高大久	51					57	下谷地 A	48		
		8	大大	51・52					58	下谷地 B	49		
		9	高高	51・52					59	上藤木	48		
		岡	盛岡市	10					幅	51	60	猫谷地	48・49
				11					太田方八丁	51・52	61	成沢	47
				12					竹花	51	62	下成沢	47
矢巾	都南村  矢巾町	13	下羽場	49・50・51	水上	北上市			63	大谷地	47		
		14	湯沢 A	49・50					64	上大谷地	47		
		15	湯沢 B	49・50					65	土井 A	47		
		16	湯沢 C	49			66	土井 B	47				
		17	稲本	49・50			67	土井 C	48				
		18	一本松	48・50			68	土井 D	50				
		19	大渡野	49			水沢	水沢市	69	中荒	卷	47・50	
		20	宮田 A	49					70	上餅	田	50	
		21	宮田 B	49					71	西根	根	50	
		22	宮南野	49					72	鳥海	B	50	
		23	桜屋敷	49					73	鳥海	A	47	
		24	保屋	51					74	鳥海	泉	50	
紫波	紫波町	25	宮上平沢新	49・51	沢	平泉町			75	西大	畑	49・50	
		26	田	50					76	石南	田	49・50・51	
		27	栗田 I	53					77	南矢	中	49・50	
		28	栗田 II	53					78	西前	谷地	49	
		29	栗田 III	53					79	前谷	地	49	
		30	浦田 B	50					80	袖谷	地	49	
		31	浦田 A	50			一関	一関市	81	胆泊	森	48	
		32	柳田明	50・51					82	前沢	ヶ	崎	48
		33	大墳	50					83	新	城	48	
		34	墳	50・51					84	徳沢一里	塚	49	
		35	後在所 A	49					85	東北	裏	48・49	
		36	後在所 B	51					86	北	館	48・49	
		37	後在所 C	49					87	伝大手門	跡	48	
		38	後在所 D	50					88	衣川柵擬定	地	48	
花巻・和賀	石鳥谷町  花巻市 和賀町	39	大地渡	49	一関	一関市			89	大	沢	48・49	
		40	大瀨川 A	48・49					90	第二月見	山	48	
		41	大瀨川 B	48					91	毛越	B	48	
		42	大瀨川 C	49					92	毛越	C	48	
		43	野田台	48					93	毛越	A	48・49	
		44	上	49					94	白片	岡	49	
		45	南万丁	48			95	宮幡神	社	51			
		46	古	47			96	月下	田	49			
		47	梅ノ木 I	49			97	月下	町	49			
		48	梅ノ木 II	49			98	下	釜	48			
		49	梅ノ木 III	49			99	鈴ヶ	沢	51			
		50	梅ノ木 IV	49									



盛岡地区	川 (MK77)
①松川	川 (TKG77)
②木根	坂 (NHS77)
③卯根	田 (TY III 77-78)
④根	田 II (TY II 77)
⑤高	保 (OKB76)
⑥大	保 (OD76-77)
⑦大	柳 (TY 76-77)
⑧大	(IB76)
⑨太	丁 (OH76-77)
⑩竹	前 (YHM76)
矢野地区	場 (SHB74-75-76)
①下	A (YZA74-75)
②湯	B (YZB74-75)
③湯	C (YZC74)
④湯	(IR74-75)
⑤桶	野 (IPM73-75)
⑥大	野 (OWN74)
⑦大	B (MTB74)
⑧宮	A (MTA74)
⑨宮	野 (MN74)
⑩南	野 (SY74)
⑪久	野 (KY76)
紫波地区	手 (MT74-76)
①宮	新 (KHS75)
②上	I (KT 178)
③采	II (KT II 78)
④采	III (KT III 78)
⑤采	B (UTR75)
⑥浦	A (UTA75)
⑦浦	A (YD75-76)
⑧柳	館 (DMZ75)
⑨大	館 (FD75-76)
⑩墳	A (GZA74)
⑪後	B (GZB76)
⑫後	C (GZC74)
⑬後	D (GZD75)
花巻・和賀地区	渡 (OW74)
①大	A (OSGA73-74)
②大	B (OSGB73)
③大	C (OSC74)
④野	田 (ND74)
⑤野	台 (UD74)
⑥上	日 (MM73)
⑦南	館 (FD72)
⑧古	I (UK 174)
⑨梅	II (UK II 74)
⑩梅	III (UK III 74)
⑪梅	IV (UK IV 74)
⑫梅	V (UK V 74)
⑬梅	VI (UK VI 74)
⑭梅	VII (UK VII 75)
北上地区	豊 (IT74)
①取	沢 (FS74)
②取	崎 (HO73-74-75)
③取	A (SYA73)
④下	B (SYB74)
⑤下	本 (KF73)
⑥下	地 (NY73-74)
⑦下	沢 (NS72)
⑧下	沢 (SNS72)
⑨下	地 (OY72)
⑩上	A (DIA72)
⑪上	B (DIB72)
⑫上	C (DIC73)
⑬上	D (DID75)
水沢地区	卷 (NAM72-75)
①中	田 (NAM75)
②上	根 (NN75)
③西	B (TNB75)
④西	A (TNA72)
⑤西	(I175)
⑥西	畑 (NOH74-75)
⑦南	田 (ID74-75-76)
⑧南	中 (MYN74-75)
⑨西	田 (ND74)
⑩前	地 (MY74)
⑪抽	地 (SYT74)
一関地区	森 (NM73)
①中	崎 (TS73)
②油	城 (SJ73)
③新	塚 (TS74)
④東	(HU73-74)
⑤東	(KG73-74)
⑥北	門 (DOM73)
⑦衣	地 (KS73)
⑧大	(OS73-74)
⑨大	山 (TMY73)
⑩大	B (KGB73)
⑪大	C (KGC73)
⑫大	A (KGA73-74)
⑬大	園 (KO74)
⑭白	社 (SH76)
⑮月	田 (MT74)
⑯下	野 (TM74)
⑰下	野 (SSG73)
⑱下	野 (SS76)

岩手県における東北縦貫自動車関係道跡分布図

1 : 200,000

本 文





## 北上地区概観

### 1. 地<sup>註(1)</sup>形

北上川の支流和賀川が東流するこの地区は、北上川中流域のほとん中央部にあたり、特に段丘の発達<sup>註(2)</sup>が著しい。上位段丘より順に西根・村崎野・金ヶ崎の各段丘に区分され、ともに小河川によって開析され、奥部に向かって大小の谷が入りこんでいる。

奥羽山系の和賀岳を源流とする和賀川はその支流とする尻平川、夏油川などを合せて東流し、北上市の南東部において合流する。特に南西部には広大な扇状地性段丘が多達し、河川低地は幅2km前後におよんでいる。和賀川の南岸における比高は10m以上であり、急崖が連続している。

和賀川南岸に広がる台地は、もっとも広く分布する金ヶ崎段丘が扇状地として形成された時期に上・中位の段丘を残丘状に残して発達している。和賀川の北岸においても、大小の扇状地、段丘の発達が良好であり、金ヶ崎段丘面が広く分布し、その間に西根・村崎野の上・中位段丘が残丘状に認められるのは南岸と同様である。また、和賀川北岸の河岸低地との間には、比較的規模の大きい自然堤防が形成されている。段丘崖の比高は4m前後である。

### 2. 遺跡の分布

現段階において把握される北上川西岸の遺跡の分布は、大別して和賀川の南・北岸に分けられ、遺跡数によっては和賀川流域に集中し、北方の新堰川以北に希薄となる。

和賀川の北岸では、中位段丘やその緑辺部および開析された支谷に沿って縄文時代の遺跡が比較的多く分布し、河岸低地にも若干認められている。調査された遺跡には鳩岡崎遺跡、藤沢遺跡、藤沢Ic遺跡、同Id遺跡、藤沢II遺跡、九年橋遺跡<sup>註(3)</sup>などがある。一方、低位段丘上や和賀川沿いの河岸段丘緑辺部および自然堤防上には、奈良～平安時代にかけての遺跡が多く分布している。調査された主な遺跡は、長沼古墳群、五条丸古墳群、猫谷地古墳群、および猫谷地遺跡、八幡古墳群、下谷地A・B遺跡<sup>註(4)</sup>などである。

北岸に比して高い段丘崖を形成する南岸においては、段丘状に比較的広い面を形成する中位段丘上や開析された支谷沿いに縄文～平安時代にかけての遺跡が多く分布している。主な調査遺跡は、成沢、上大谷地、高前田、高前壇遺跡を含む相去遺跡群、滝ノ沢遺跡<sup>註(5)</sup>などがある。また、南岸沿いの中・低地段丘緑辺部には、湧泉や深く入り込んだ小谷を利用して、鹿島館、丸子館、白髭館、都鳥館、観音館などの城館遺跡が立地している。そのほか、東方の沖積低地の微高地には八木畑遺跡、松ノ木遺跡、西野遺跡<sup>註(6)</sup>などの平安時代の遺跡がある。

注(1) 詳細は本書付篇「和賀川流域の地形について」

(2) 中川久夫他「北上川上流沿岸の第4系および地形」『地質学雑誌』第18号(1963)

(3)~(6) 岩手県教育委員会「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」IX(1981)



北上地区遺跡分布図

0 1 2 km

北 上 地 区 遺 跡 一 覧 表

No	遺 跡 名	時 代	No	遺 跡 名	時 代	No	遺 跡 名	時 代
1	轟 木	中近世・その他	55	田代古墳群	縄文・中近世・その他	109	清水小路東	平 安 時 代
2	飯 豊 森	"	56	野 崎 I	古墳・奈良・平安	110	九 年 橋	縄 文 時 代
3	飯 豊	平 安 時 代	57	" II	"	111	六八丁館跡	中・近世・その他
4	富士大ランド	縄 文 時 代	58	下谷地A・B	平 安 時 代	112	和 野	縄 文 時 代
5	中 笹 間	縄 文 時 代	59	朴 島 IV	平 安 時 代	113	浮 島 古 墳	中・近世・その他
6	長 根	古墳・奈良・平安	60	朴 島 I	"	114	黒沢尻柵跡	"
7	平和観音東	縄 文 時 代	61	朴 島 II	"	115	上 川 岸	"
8	森 下	中・近世・その他	62	中 田	中・近世・その他	116	館 III	縄 文 時 代
9	飯 豊 館	"	63	清 水 端	古墳・奈良・平安	117	館 II	"
10	中 館	"	64	曾 山 I	平 安 時 代	118	立 花	中・近世・その他
11	向	縄 文 時 代	65	曾 山 II	中・近世・その他	119	館 IV	縄 文 時 代
12	唐 戸 崎	"	66	村崎野駅東	"	120	館 I	"
13	月 館	中・近世・その他	67	二子一里塚	"	121	沢 野	中・近世・その他
14	飯 豊	"	68	下春木場	"	122	花 曾 根 上	縄 文 時 代
15	成田一里塚	"	69	黒沢尻上野岡住宅	"	123	三十人町	中・近世・その他
16	下 成 田	縄文・中・近世・その他	70	野 田 I	縄 文 ・ 弥 生	124	上 成 沢	"
17	八 森 館	中・近世・その他	71	念 仏 車 I	縄文・中・近世・その他	125	成 沢	平 安 時 代
18	成 田	"	72	蔵 屋 敷	弥生・古墳・奈良	126	下 成 沢	"
19	伊 勢	"	73	念 仏 車 II	縄 文 ・ 弥 生	127	高 前 田	中近世・その他
20	二子城跡	"	74	大 坊	中・近世・その他	128	新堤ライスセンター	縄 文 時 代
21	秋 子 沢	平 安 時 代	75	下江釣子羽場	古墳・奈良・平安	129	滝 ノ 沢	"
22		中・近世・その他	76	土 析	縄文・中・近世・その他	130	滝ノ沢地区	縄文・中・近世・その他
23	北 藤 根	縄 文 時 代	77	梅ノ木(岩崎城)	"	131	中 成 沢	平 安 時 代
24	南 笹 間	古墳・奈良・平安	78	久 田	"	132	葛 西 檀	"
25		中・近世・その他	79	欠 坂	"	133	大 谷 地	中・近世・その他
26	遺ノ上長根	古墳・奈良・平安	80	田 中	縄 文 時 代	134	高 前 檀 I	平 安 時 代
27	蓮見館跡	縄文・中・近世・その他	81	塚	古墳・奈良・平安	135		"
28		"	82	本 宿 羽 場	平 安 時 代	136	大 谷 地	縄 文 時 代
29		"	83	五 条 丸 館	中・近世・その他	137	高 前 檀 II	平 安 時 代
30		縄 文 時 代	84	五 条 丸 II	"	138	北長根道合	中・近世・その他
31		縄文・中・近世・その他	85	本 宿	縄文・古墳・奈良	139	上 大 谷 地	平 安 時 代
32	藤 根 駅 北	平 安 時 代	86	五 条 丸 I	中・近世・その他	140	土 井 A ~ D	弥 生 時 代
33		縄文・中・近世・その他	87	五 条 丸 古 墳 群	古 墳 ・ 奈 良	141	鶴 野 館	古墳・奈良・平安
34		縄文・中・近世・その他	88	朴 島 III	中・近世・その他	142	平 林 I	平 安 時 代
35		中・近世・その他	89	上 藤 木	"	143	平 林 II	"
36		"	90	高 橋	平 安 時 代	144	観 音 館	中・近世・その他
37	荒 屋	"	91	猫谷地(古墳群)	古墳・奈良・縄文	145	鬼 柳 西 裏	縄 文 ・ 弥 生
38		縄 文 時 代	92	八幡古墳群	古 墳 ・ 奈 良	146	南 館	縄文・中・近世・その他
39	芦 萱	縄文・古墳・奈良	93	萩 島	中・近世・その他	147	西 野	平 安 時 代
40	新 平	"	94	三 枚 橋	"	148	陣 ケ 丘	中・近世・その他
41	藤 沢 沢	古墳・奈良・平安	95	柳 田	"	149	展 勝 地	"
42	高 畑	中・近世・その他	96	黒 小 屋	平 安 時 代	150	西 谷	"
43	持 川	縄 文	97	八 幡	中・近世・その他	151	松 ノ 木	平 安 時 代
44	下 糠 塚	中・近世・その他	98	鳥 海 柳	古墳・奈良・縄文	152	小 糖 沢	縄文・中・近世・その他
45	中 通 I	古墳・奈良・平安	99	鍛 冶 町 南	中・近世・その他	153	岩 脇	"
46	中 通 II	"	100	火 薬 庫 西	"	154	八 木 畑	"
47	横 堰 I	縄文・古墳・奈良	101	六 軒	縄 文 時 代	155	春 木 台	縄 文 時 代
48	横 堰 II	古墳・奈良・平安	102	柳 上	中・近世・その他	156	上 の 台	縄文・中・近世・その他
49	鳩岡崎開墾	平 安 時 代	103		"	157	相 田	縄 文 ・ 弥 生
50	鳩岡崎	縄文・古墳・奈良	104	常 盤 台	平 安 時 代	158	前 稗 沢	中・近世・その他
51	鳩岡崎三館	中・近世・その他	105	黒沢尻北高ランド	"	159	館	古墳・奈良・平安
52	藤 沢 I	縄文・古墳・奈良	106	梨 子 山	縄 文 時 代	160		中・近世・その他
53	析 橋	中・近世・その他	107	ボ タ ン 畑	"	161	馬 場 先	平 安 時 代
54	清 水	"	108	諏訪神社境内	中・近世・その他	162	下門岡塚	中・近世・その他
						163	樺 山	縄 文 時 代



飯 豊 遺 跡

遺 跡 名：飯豊(略号IT74)

遺 跡 所 在 地：北上市飯豊町字飯豊  
第19地割45-1

調 査 期 間：昭和49年5月16日～5月22日

調 査 対 象 面 積：3,000m<sup>2</sup>

発 掘 調 査 面 積：3,000m<sup>2</sup>



## I 位置と立地

本調査地は、国鉄東北本線村崎野駅北西4.5kmの中位段丘平坦部に立地し、南側には飯豊川をのぞむ。標高約92mで現状は宅地、田畑であった。調査範囲は東北縦貫高速自動車道・本線及び側道部分の南北に長い部分であるが、遺跡範囲は東西方向にも伸びると思われる。周辺の遺跡としては、南東方向に唐戸崎遺跡（縄文時代中期・包含地）、北東方向には大谷地遺跡（平安時代、集落）、西方には中笹間遺跡（縄文時代中期・野营地）轟木遺跡（平安時代・集落）等がある。

## II 調査の概要及び結果

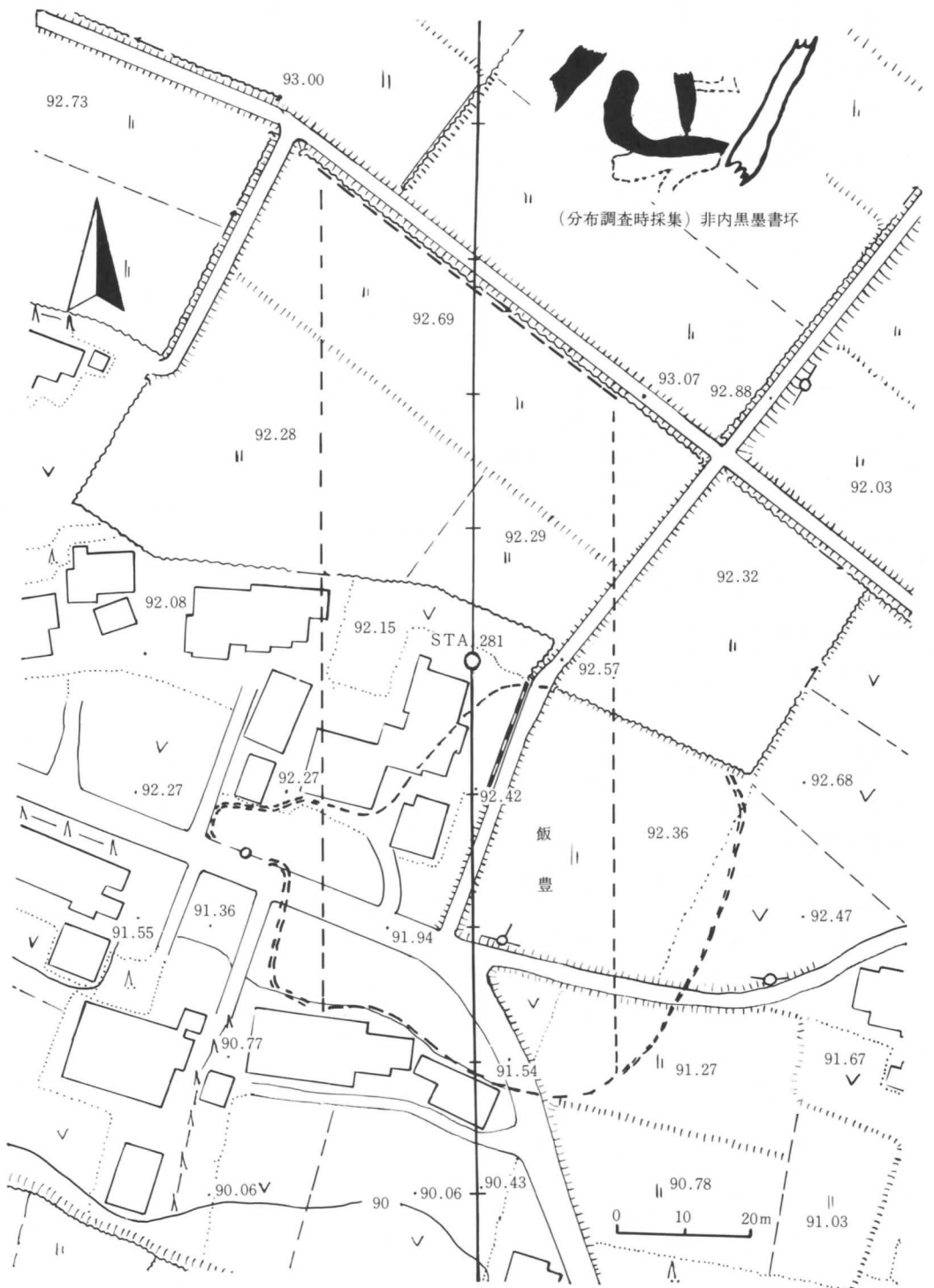
調査は昭和49年5月16日から5月22日までの6日間で行なわれた。道路敷となる区域について路線中心杭 STA281 をほぼ中間に南北約60mの範囲を調査した。表土の除去・住宅の基礎部・雑物撤去作業は重機（ブルドーザー）によって行なった。

地山面（黄褐色粘土層）までの検出作業によっても、遺構、遺物の確認は出来なかった。

周辺の畑地からは微量ではあるが平安期のロクロ使用土師器・須恵器の小破片が採取されている。分布調査時に発見された土器片については第1図に図示してある。これはロクロ使用土師器坏で墨書痕が認められるが、欠落やかすれ等で判読は難しい。

## III 今後の問題点

IIにおいてはふれなかったがすぐ西方には飯豊館遺跡がある。調査地西側は宅地であるので小規模な現状変更の可能性が考えられるのみであるがその際においても遺跡を破壊する事のないように注意する必要がある。又、調査地は平坦とはいえ南斜面上に位置するので北方及び北西方向よりの遺物の流れ込みの可能性及びそれらの供給地としての集落等の存在の可能性も考えられる。現状が田の場合分布調査の結果遺物が発見される可能性は少く、その為に調査の行なわれない事も多いが遺跡が破壊されてしまわないように注意する必要がある。



第1図 飯豊遺跡地形図



ふじ 藤 さいわ 沢 遺 跡

遺 跡 名：藤沢(略号FS74)

所 在 地：北上市飯豊町藤沢14-139ほか

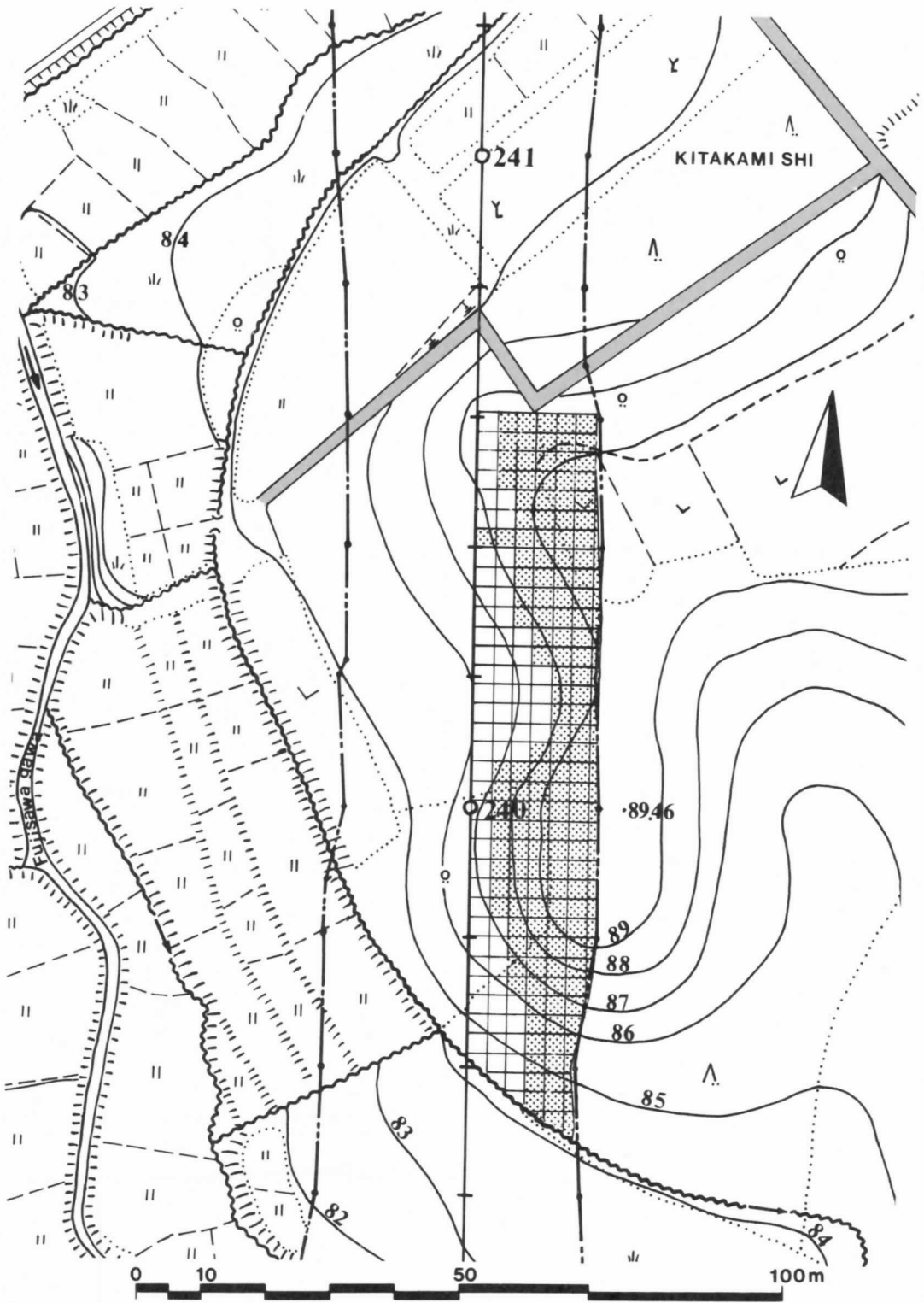
調 査 期 間：昭和49年6月3日～10月20日

調査対象面積：1,750 m<sup>2</sup>

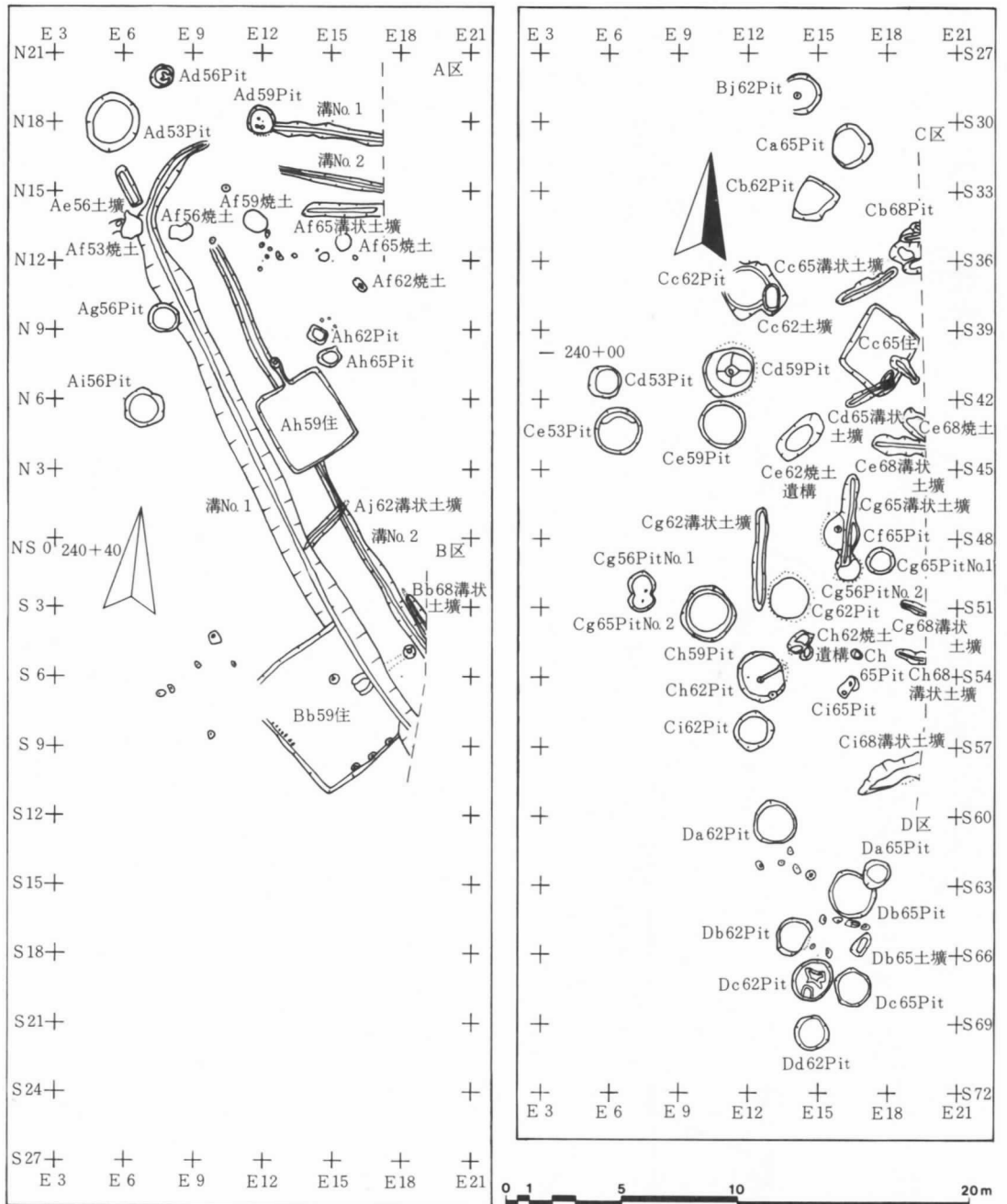
発掘調査面積：1,600 m<sup>2</sup>

## 図 表 目 次

第1図 地形・グリッド配置図……………	11	第14図 溝実測図……………	48
第2図 遺構配置図……………	12	第15～17図 石器実測図Ⅰ～Ⅲ……………	56
第3図 土層図……………	13	第18～21図 剥片石器実測図Ⅰ～Ⅳ……………	59
第4図 Ah 59住居跡……………	15	第22図 剥片石器実測図Ⅴ・土器実測図……………	63
第5団 Ah 59住居跡出土遺物……………	16	第23図 土器・鉄器実測図……………	64
第6図 Bb 59住居跡……………	18		
第7図 Bb 59住居跡出土遺物……………	20	ピット一覧表……………	28
第8図 Cc 65住居跡……………	24	溝状土壌一覧表……………	40
第9図 Cc 65住居跡出土遺物……………	26	土壌一覧表……………	40
第10～11図 ピット実測図Ⅰ～Ⅱ……………	37	焼土遺構一覧表……………	40
第12図 ピット・溝状土壌実測図……………	39	石器実測図説明Ⅰ～Ⅳ……………	52
第13図 溝状土壌・焼土遺構・土壌実測図……………	44	遺物一覧表……………	65



第1図 地形・グリッド配置図



第2図 遺構配置図

## I 位置と立地

藤沢遺跡は、北上市飯豊町藤沢14-139他に在り、国鉄東北線北上駅の北西約4.8kmに位置する。北上市飯豊町に在る流通センターの北西端になる。

北上市の北西部に発達した村崎野段丘の南西に面した緩斜面に立地し、新堰川より分流した藤沢川の東側約60m地点で、河畔との比高は約9mである。

遺跡の現状は、植林された針葉樹の防風雪林と雑木林、北東側に1部畑地がある。この林は段丘崖に沿って南東へ長く続いていく。遺跡の東側と西側、及び北側は水田地帯である。

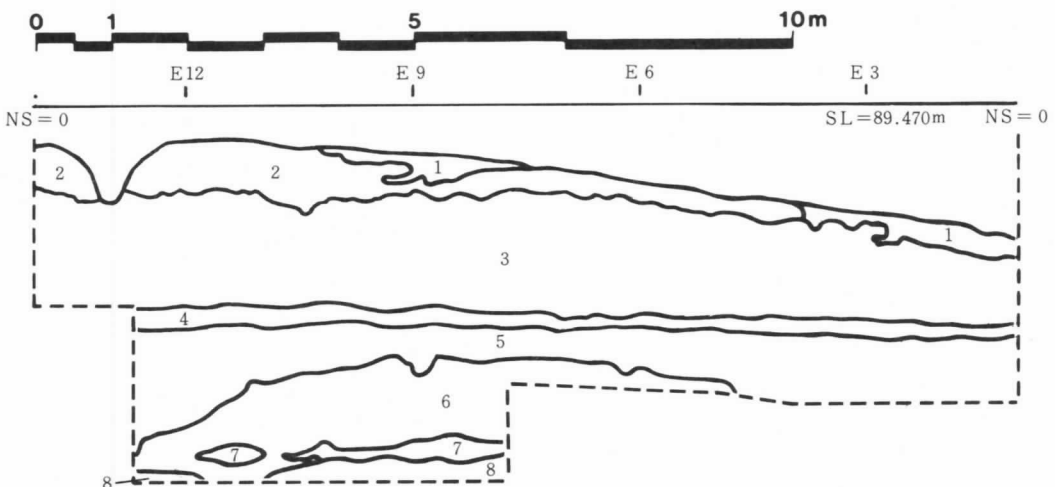
藤沢遺跡の南約300mには鳩岡崎遺跡。南約1.9kmには下谷地A・B遺跡。南約2.7kmには猫谷地遺跡がある。また藤沢川の西岸にも鳩岡崎遺跡の延長と思われる遺物包含地がある。

## II 調査の経過

分布調査によって登録された藤沢遺跡の位置は、本調査地区の北約60mの地点で、農業用水路とその周辺の低湿な水田であったため、昭和48年4月に現地確認の際、本調査地区西側の畑地(第1図)で遺物が散布されているのを確認し、調査地区を変更した。

調査は昭和49年6月3日から10月20日迄であるが、その間6月19日から8月1日迄は、下谷地(A)遺跡の南端で、農業用水路にヒューム管理設工事中に多量の木器、土器等が発見されたため、下谷地(B)遺跡の調査を実施し、藤沢遺跡の調査を中断した。

## III 層序と土質



第3図 土層図

前項、第2図の如く、公団中心杭240+40の地点から東へ深掘りを実施した。東へ12kmの地点で第2層から4.45mまで掘り下げた。図版14参照。

- 1層 7.5Y R4/4、褐色火山灰腐植土混合層、密で粘性有り。
- 2層 7.5Y R5/6、明褐色火山灰層、粗で粘性有り、パミス若干混入。
- 3層 10Y R6/8、明黄褐色パミス層、密で粘性有り、植物根有り。
- 4層 7.5Y R5/6、明褐色粘土質火山灰層、非常に密で粘性有り。
- 5層 2.5Y R7/4、浅黄色粘土層、粘性強い、植生痕有り。
- 6層 2.5Y R7/3、浅黄色シルト層、密で粘性無し。
- 7層 10Y R5/8、黄褐色砂礫層
- 8層 礫層

#### IV 発見された遺構と遺物

発見された遺構は、住居跡3棟、ピット33基。溝状土壇（陥し穴状遺構）11基。土壇3基。焼土遺構8基。他に最近造られたと思われる溝2条である。

発見された遺物は、縄文土器片、石器と剥片。弥生式土器片、土師器、須恵器、紡錘車、刀子で、主に住居跡とピットから出土した。遺物一覧表参照。

##### 1 住居跡

###### (1)Ah 59 住居跡（第4図 図版1）

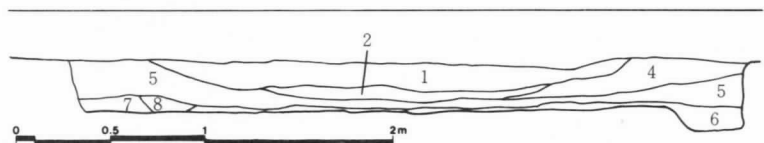
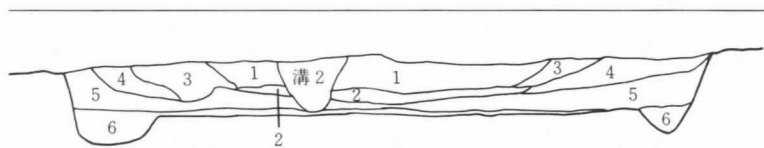
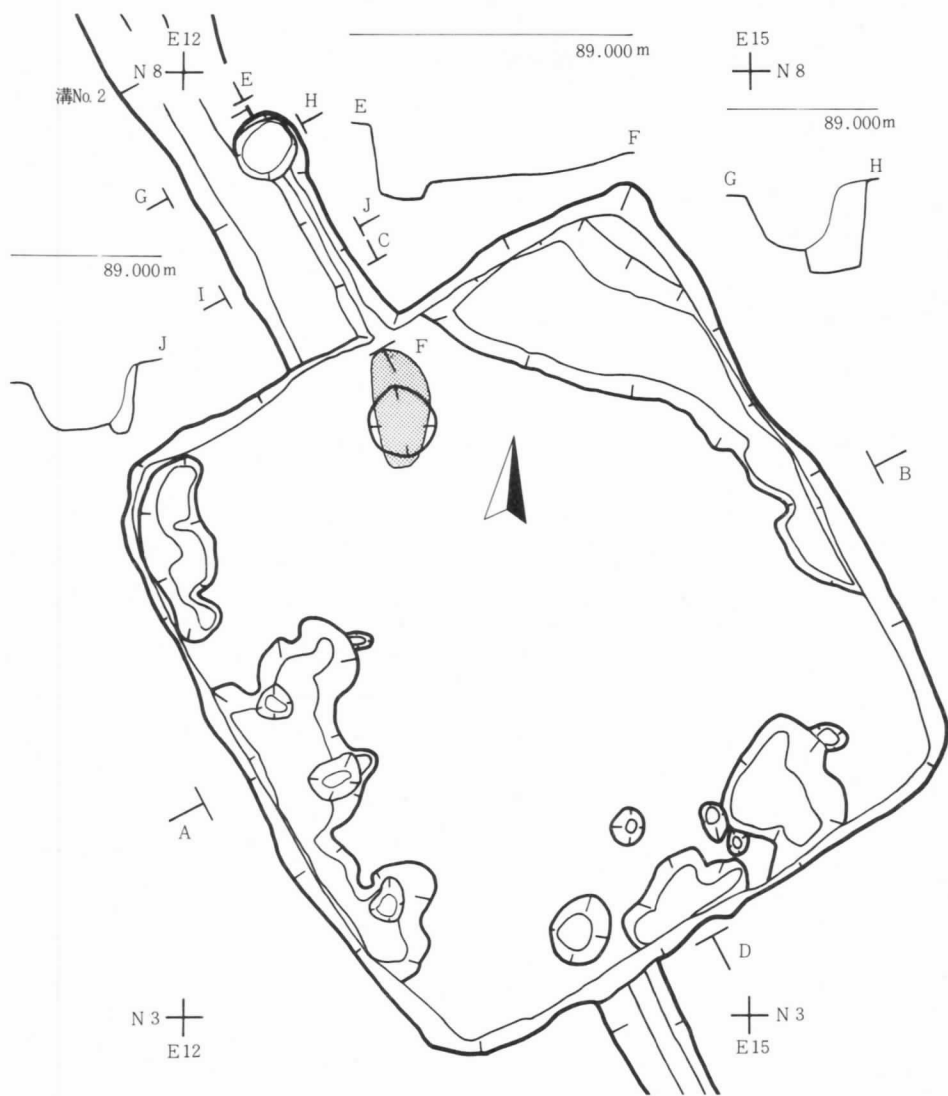
〔遺構の確認〕基準点240+40から北へ2.80~7.39m、東へ11.68~16.05mの地点Ah 59地区と周囲に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は明褐色火山灰層である。

〔重複・増改築〕溝No.2が、煙道、煙出の西半分を切り、南壁中央部も切っている。

〔平面形・規模・方向〕東西3.45m、南北3.6mの方形で、軸線はN-35°-Wで北西向き。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/1黒色腐植土、指痕若干つく、粘性なし。2層：2.5Y R7/6明黄褐色粉状パミス、指痕つく、粘性なし、腐植土混入。3層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土、指痕若干つく、粘性なし、火山灰土若干混入。4層：7.5Y R4/3褐色火山灰土、指痕若干つく、粘性ややあり、腐植土混入。5層：7.5Y R4/4褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、腐植土、炭化物を含む。6層：7.5Y R4/4褐色火山灰土、指痕つく、粘性なし、腐植土混入。7層：褐色火山灰土、指痕ややつく、粘性ややあり、焼土、炭化物混入。8層：7.5Y R4/3褐色火山灰土、指痕つく、粘性なし、焼土、炭化物混入。

〔床面〕中央部は、地山面を利用し、固くしまっている。東・西・南の各壁下は柔らかく、掘方状の落ち込みがある。壁への立ち上りは急角度で、壁高は約30cmである。



0 0.5 1 2m

第 4 図 Ah59住居跡

〔柱穴〕確認されなかった。

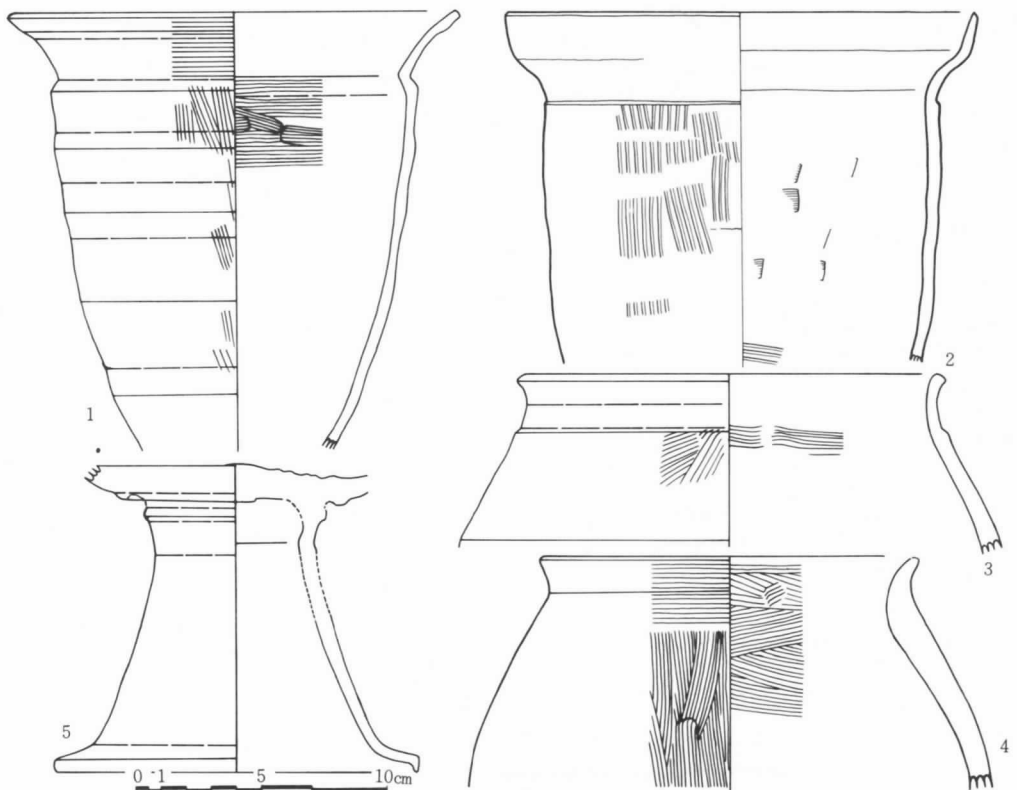
〔かまど〕北壁中央にあり、燃烧部は直径36cmの浅い掘込みで、焼土が堆積する。両袖は欠損する。煙道は長さ90cm。深さは15～30cm。下場の中4～6cm。先下がりになる。煙出は上場径約35cm。下場径27×20cm。深さ40cm。溝No.2に西半分を切られる。

〔貯蔵穴〕確認されなかった。また、その他の施設も確認されなかった。

〔年代決定資料〕遺物一覧表の通り、土師器長胴甕79点、球胴甕2点、内黒坏2点、高坏1点。須恵器非内黒坏1点が出土した。

### 出土遺物

土師器 長胴甕（5図1・2 図版1-1・2）2点共かなり磨滅している。1は推定口径約13cm。頸部径約14cm。体部最大径約14.5cm。口縁部高さ2.7cm。口縁部は横なで、かなり外反する。頸部有段。外表面は篋削り篋なで、かなり凸凹がある。内面は刷毛目痕がある。胎土軟質砂粒多い。色調灰白色、焼成は不良である。2は推定口径約18.8cm。頸部径約15.5cm。体部最大径15.8cm。口縁部高さ3.5cm。口縁部は横なで、内湾外傾する。頸部有段外表面は縦に刷



第5図 Ah59住居跡出土遺物



毛目、内体面は横に刷毛目と篋などで、凸凹がある。胎土は軟質砂粒多い。褐色で、焼成は不良である。他に77点の破片が出土しており、図版1—6～10の様に、口縁部は横などで、体部は篋などで篋削り刷毛目痕、下底面は木葉痕が認められる。

土師器球胴甕（第5図3・4 図版1—3・4）3は推定口径約17cm。頸部径約16.6cm。残存する体部最大径約21.5cm。口縁部高さ2.2cm。口縁部は横などで、やや外反する。頸部有段、体部内外面は磨滅し成形調整は不明である。胎土軟質、色調は浅黄橙色、焼成は不良である。

4は推定口径約15cm。頸部径約14.4cm。残存する体部最大径約20.08cm。口縁部高さ7.5cm。口縁部は横などで、やや外反する。頸部無段。体部内外面は篋なのである。胎土やや軟質。色調は橙色～灰褐色、焼成はやや不良である。

高坏（第5図 図版1—5）底部と高台部若干残存で、底径9.4cm。台部上端径7.5cm。台部下端径14.5cm。台部高さ10.8cm。畳付部はかなり薄くなる。底部上面は上に張り出し、底部中央の厚さは1.6cmである。胎土軟質。色調灰白色。焼成不良である。

内黒坏 2点出土したが、両者共小破片で実測不能である。1点は底1/2残存で、丸底である。内面は放射状磨きである。1点は体下底1/3残存で、丸底である。磨滅しているため内面の磨き方向は不明である。

## (2)Bb 59住居跡（第6図 図版2—上）

〔遺構の確認〕基準点240+40から南へ3.52～11.05m。東へ11.23～18.2mの地点、Bb 59地区とその周囲に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は明褐色火山灰層である。

〔重複・増改築〕溝Na 1が東壁とかまど煙道の一部を切っている。中央から北壁にかけて攪乱がかなり広い範囲に確認され、床面も壊されている。

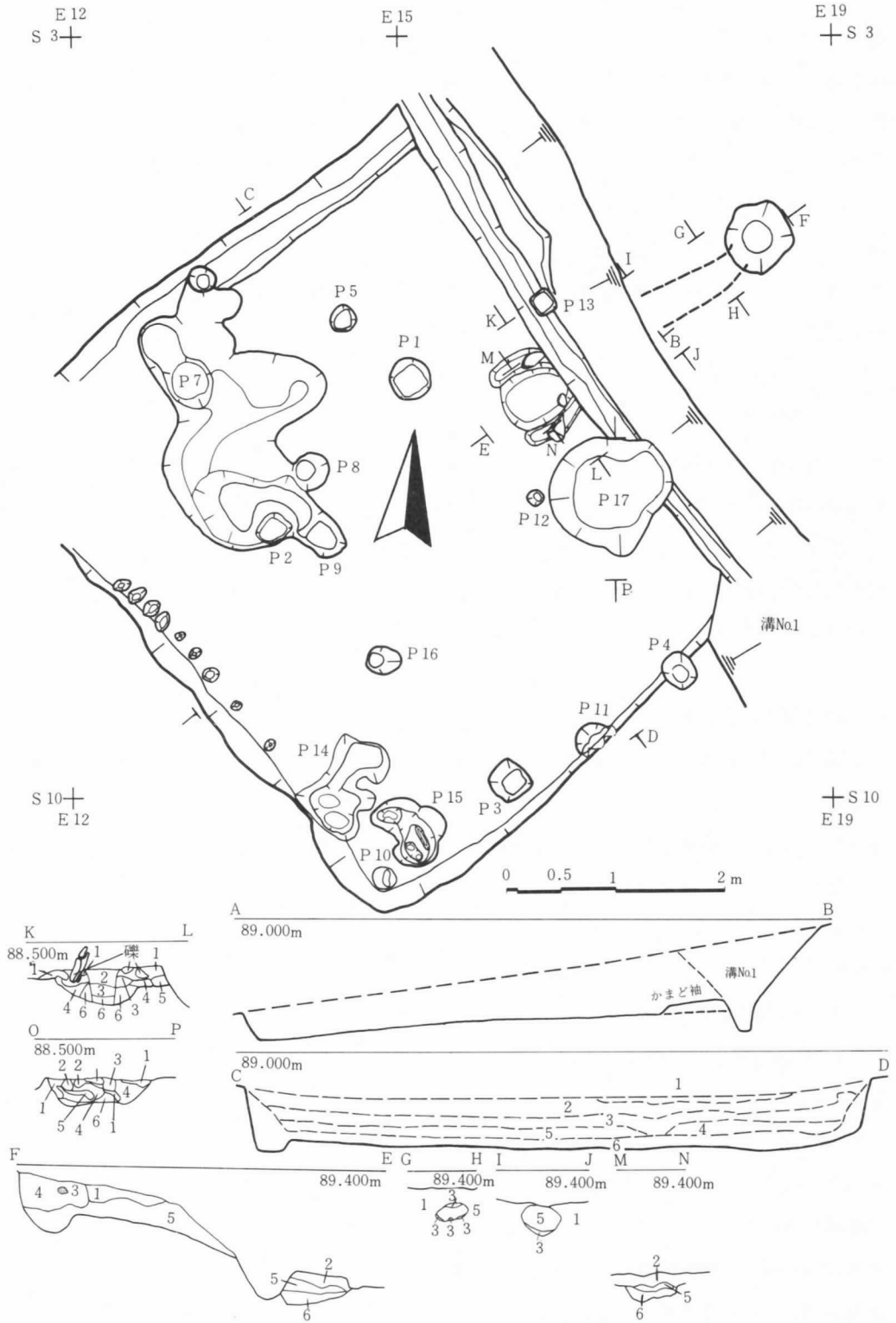
〔平面形・方向〕東西4.5～5m、南北5.85mの長方形で、軸線はN—50°—Eで北東向き。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/1黒褐色腐植土、指痕つく、粘性なし、炭化物焼土、火山灰を含む。2層：7.5Y R2/1黒色腐植土、指痕若干つく、粘性ややあり、火山灰を少量含む。3層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土、指痕若干つく、粘性なし、炭化物を少量、火山灰軽石を含む。4層：7.5Y R4/6褐色土、指痕若干つく、粘性なし、炭化物を少量、火山灰軽石を含む。5層：7.5Y R3/3暗褐色土、指痕若干つく、粘性ややあり、焼土炭化物を少量含む。6層：7.5Y R3/2黒褐色土、指痕つく、粘性なし、腐植土、火山灰、軽石、パミス混合。

〔床面〕地山面を利用してつくられ、若干西側が低い。かなりの傾斜面につくられているため北西コーナ部は、検出面とほぼ同じで、壁の輪郭は不明であり、中央部から北壁にかけて1部床面がかなり掘り込まれている。壁への立ち上りは急角度で、壁高は15～70cmである。

〔柱穴〕主柱穴は4と思われ（P. 1～P. 4）、他に柱穴状のピットが9（P. 5～P. 13）ある。

— 藤 沢 遺 跡 —



第 6 図 Bb59住居跡

支柱穴は、ほぼ方形のプランを呈し、径30～40cm、深さは床面下30～40cmである。

〔かまど〕東壁中央にあり、燃烧部は横約50cm、奥行き約70cmの楕円形プランで、中央部は約20cmほど掘り込まれる。両袖は共に残存し、礫が埋め込まれる。埋土(6図K-L)は、1層：10Y R6/4にぶい黄橙色粘土、指痕ややつく、粘性あり、焼土を含む。2層：5 Y R3/4暗赤褐色粘土焼土混合土、指痕つく、粘性わずか。3層：2.5 Y R4/8赤褐色焼土、指痕つかない、粘性なし。4層：10 Y R4/6褐色火山灰腐植土混合土、指痕つく、粘性ややあり。5層：7.5 Y R5/6明褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり。6層：7.5 Y R6/8橙色パミス焼成変質土、指痕つかない、粘性なし。6図M-Nの2層はK-L 1層、5層はK-L 3層、6層はK-L 6層。煙道は、長さ約1.7m。巾22～35cm、縦15～30cmの割り貫きで、先上りである。埋土6図E-Jは、1層：7.5 Y R5/4褐色火山灰土、指痕ややつく、粘性あり。2層：10 Y R6/4にぶい黄橙色粘土、指痕ややつく、粘性あり。3層：2.5 Y R4/4赤褐色焼土ブロック。4層：7.5 Y R3/4暗褐色腐植土、指痕つく、粘性あり、焼土炭化物、礫、遺物を含む。5層：2.5 Y R4/8赤褐色焼土、指痕つかない、粘性なし。6層：7.5 Y R6/8橙色パミス焼成変質土。煙出しは、上場径約60cm。下場径約27cm。深さ約50cm。埋土は上記3・4・5層(6図E-F)である。

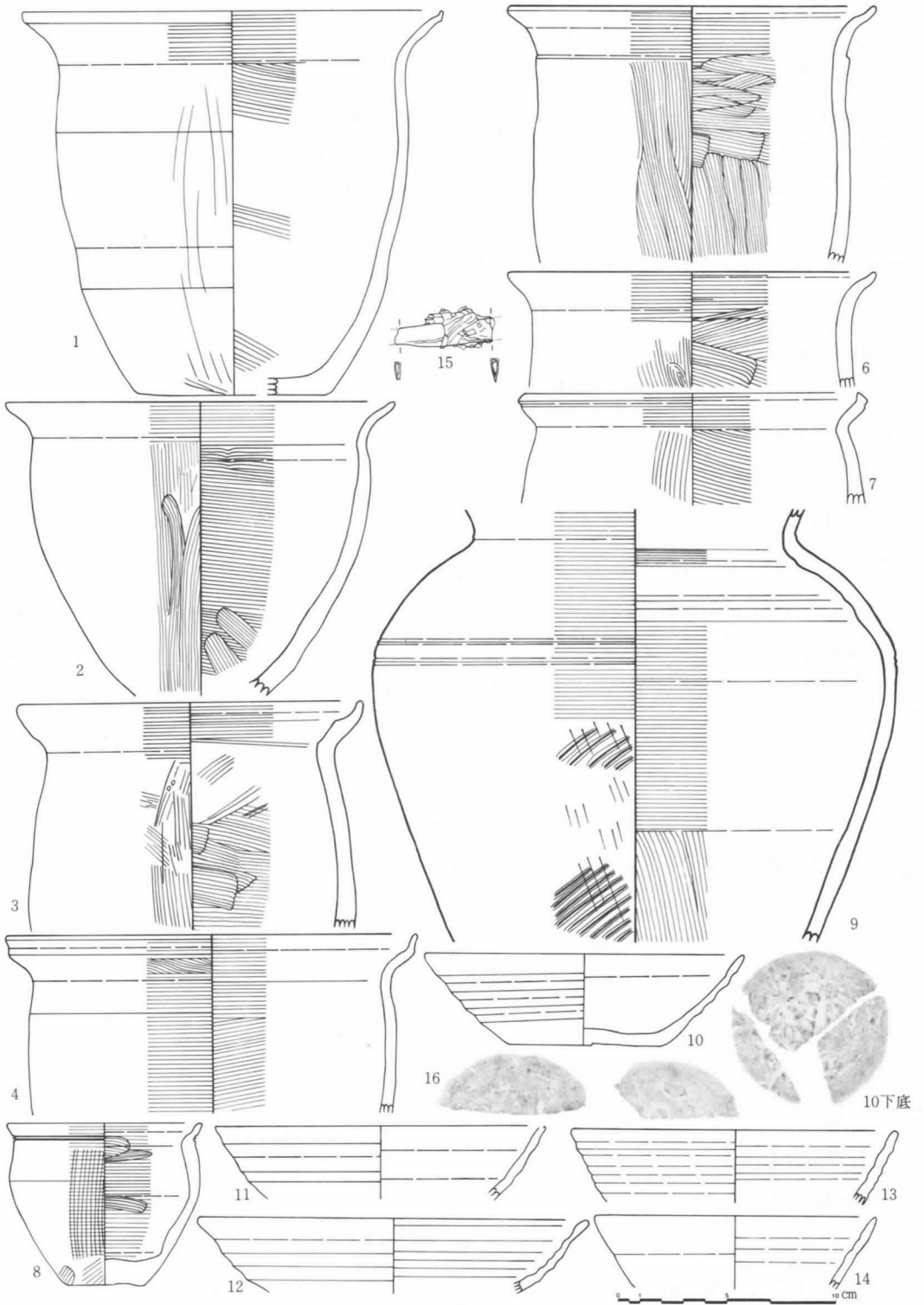
〔貯蔵穴〕貯蔵穴状ピット(P.17)は、上場径約1.1m、下場径約0.7m、深さ約25cmの不整形で、埋土(6図O-P)は、1層：7.5 Y R3/2黒褐色腐植土、指痕ややつく、粘性ややあり。2層：10 Y R7/6明褐色粘土、指痕ややつく、粘性あり。3層：7.5 Y R5/6明褐色火山灰土、指痕ややつく、粘性ややあり。4層：7.5 Y R4/6褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり。焼土、炭化物、遺物を含む。5層：7.5 Y R4/4褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、焼土、炭化物を含む。6層：10 Y R4/6褐色火山灰土、指痕つかない、粘性ややあり。

〔その他の施設〕北壁下東半分、溝が平行してつくられている。西壁下に9つの小ピットがある。P.14～P.16は浅く、遺物は発見されなかった。

〔年代決定資料〕土師器、長胴甕135点。球胴甕4点。内黒坏10点。須恵器、壺53点。坏21点。刀子1点。その他石器、剥片29点が出土した。甕は、頸部が有段のものと無段のものがあり、底部下面は木葉痕のものがある。坏は大部分が平底で、ろくろ使用、回転篋切りのものがみられる。石器、剥片は北側攪乱層から出土したものが多い。

## 出土遺物

長胴甕(7図1～9 図版2-1～9) 1は、口縁部1/5、体部1/3、底部若干残存で、推定口径約19.4cm。底径約9cm。器高17.6cm。口縁部は横なで、外反。口端部は上に若干挽き出される。頸部無段。外体面は縦の篋なで、内体面は横の篋なで痕がある。2は、口・体部各1/4残存で、推定口径約18cm。頸部径約15.4cm。体部最大径約15.6cm。口縁部は横なで、外反。口端



第 7 図 Bb 59住居跡出土遺物

部は丸みをもつ。頸部無段。外体面は縦の篋などで、内体面は横の刷毛目痕がある。3は、口・体上部各1/3残存で、推定口径約16cm。頸部約13.2cm、体部最大径約15.1cm。口縁部は横などで、内湾外傾。口端部は上に挽き出される。頸部無段。外体面は縦の篋などで、内体面は横の刷毛目痕がある。4は、口・体上部各1/3残存で、推定口径約19cm。頸部径約16.6cm。体部最大径約17cm。口縁部は横などで、内湾外傾。口端部は上に挽き出される。頸部無段。体部は内外面共に横などでである。5は、口・体上部各1/4残存で、推定口径約17cm。頸部径約14.4cm。体部最大径約14.6cm。口縁部は横などで、外反。口端部は丸く、やや上に挽き出される。頸部有段。外体面は篋などで、内体面は刷毛目痕がある。6は、口・体上部各1/6残存で、推定口径約17cm。頸部径約14.7cm。残存体部最大径約15cm。口縁部は横などで、外反。口端部は丸く、やや上に挽き出される。頸部無段。体部内外面共に刷毛目痕がある。7は、口・体上部各1/8以下残存で、推定口径約16cm。頸部径約14.4cm。残存体部最大径約15.8cmで、胴がやや張ると思われる。口縁部は横などで、内湾外傾。口端部は上に挽き出される。外体面は磨滅し、調整痕は認められない。内体面は横位の刷毛目痕がある。8は、口・体部1/6、底部1/2残存の小型長胴で、器高7.5cm。推定口径約9cm。底径3.6cm。口縁部高さ0.8cm。頸部径約8.2cm。体部最大径約8.8cm。底部中心の厚さ1.1cm。体壁厚さ0.3~0.6cm。口縁部は横などで、外反。口端部は丸みがあり薄くなる。頸部は、体部との境に沈線が2本施される。外体面は、横に篋などで後、縦に篋などで、内体面は横に刷毛目痕がある。底下面には切離し痕は認められない。他に131点の小破片が発見された。遺物一覧の通り、長胴甕と思われるもの128点、球胴甕と思われるもの3点で、図示した甕を合わせると、長胴甕135点。球胴甕4点になる。図示しない131点の中には、外体面が篋削り篋などで調整のもの他に、平行叩き目痕のあるものが1点。底部破片では図版2—16の如く木葉痕のあるもの2点、丸底で平行叩き目痕のあるものが1点発見された。

内黒坏10点共小破片で、実測不能、全容不明である。4点は口縁部、6点は体部破片で、底部は発見されなかった。口縁部破片中2点はろくろなどで成形。1点は、外面が黒色、磨き、篋削りの痕が認められ、1点の外面は、端部黒色処理の外は磨滅著しく、成形と調整は不明である。体部破片中2点は、磨きと篋削り痕が認められ、1点は、篋削り痕が認められる。他の3点は、磨滅し小破片であるため、成形と調整は不明である。(図版2—17)

**須恵器** 壺(7図9 図版2—9) 9は、頸部若干、体部約1/4残存で、16点同一個体と思われる破片で、推定頸部径約14.8cm、体部最大径約24cm。外面は頸部と肩部が横などで、体部が平行叩き後、篋削り篋などで調整である。器形と成形技法は須恵器の壺と同様であるが、胎土は砂混入で軟質、色調は浅黄橙色に近く、焼成は不良で、土師質である。他に、同一個体と思われる、口縁部5点、頸部1点、体部1点の小破片は、口縁部が横などで、口端部は上に挽き出され、頸部は平行叩き後横などで、外体面は平行叩き目痕、内体面は篋などでである。他に、同一個体と

思われる、体部24点の小破片は、外体面が平行叩き目痕、内体面が篋などで、外体面の1部に灰釉が付着する。胎土硬質、色調灰色～黒色、焼成良好である。他の同一個体と思われる、体部2点の小破片は、外面が平行叩き後、横に篋などで、内面は同心円紋の当て工具痕、胎土硬質、色調は表面が褐灰色、胎部がにぶい橙色。焼成良好である。他の同一個体と思われる体下底部2点の破片は、体部内外面共に篋などで、底下面は砂粒の圧痕がかなりあり、中央が上に張り出す。胎土硬質。色調黒色。焼成良好である。他の同一個体と思われる、体下底部2点の破片は、内外面共に篋などで、かなり歪みがある。内面に灰釉が付着する。胎土硬質。色調褐灰色～黒色。焼成良好である。

須恵器坏（7図10～14 図版2—10～14）10は、口体部1/8、底部5/6残存で、器高4.2～4.3cm。推定口径約14.7cm。底径7.3cm。ろくろなどで成形無調整。回転篋切りである。体部は、ほぼ直線的に外傾し、底部との境は丸みをもつ。胎土軟質砂粒を含む。色調浅黄橙色。焼成不良である。11は、口体上部1/5残存で、推定口径約15.2cm。ろくろなどで成形無調整。体部はやや丸みをもち外傾する。胎土軟質砂粒を含む。色調浅黄橙色。焼成不良である。12は、口体上部1/8残存で、推定口径約18cm。ろくろなどで成形無調整。口縁部はわずかに外反し、体部はわずかに丸みをもち、かなり外傾する。胎土やや軟質砂粒を含む。色調灰白色。焼成やや不良である。13は、口体上部1/8残存で、推定口径約15cm。ろくろなどで成形無調整。口体部は直線的に外傾する。胎土軟質砂粒を含む。色調浅黄橙色。焼成やや不良である。14は、口体上部1/8残存で、推定口径約13cm。ろくろなどで成形無調整。口体部は直線的に外傾する。胎土軟質砂粒を含む。色調灰褐色。焼成不良である。他に、口体部6点。体部7点。底部3点が出土している。口体部13点は、何れもろくろなどで成形無調整。胎土軟質砂粒を含む。色調は橙色系。焼成は酸化炎焼成である。底部3点は、共に回転篋切りで、体下端との境は丸みがある。7図16は、体下端に篋削り痕が認められ、7図17と共に底下面は、回転篋切りである。

刀子（7図15、図版2—15）棟区と刃区を中心に若干の刀身部と茎が残存する。刀身部の巾6mm。棟の厚さ4mm。茎の巾10～8mm。厚さ3mm。残存部の長さ4.6cmである。平造り、平棟、甲伏鍛と思われる。

### (3)Cc 65住居跡（第8図 図版3）

〔遺構の確認〕基準点240+40から南へ37.87～41.76m。東へ15.92～19.42mの地点、Cc 65地区とその周囲に、黒色の落込みを確認した。遺構確認面は明褐色火山灰層である。

〔重複・増改築〕住居跡の南隅とピットの南半が、Cd 65溝状土壌と重複する。増改築の痕跡は確認されない。

〔平面形・規模・方向〕NE—SW：3.1m。NW—SE：2.75mの四辺形で、軸線は南東方向

で、E-40°-S。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/1黒色腐植土、指痕つく、粘性ややあり、火山灰と焼土を少量含む。2層：7.5Y R3/2黒褐色火山灰土、指痕つく、粘性なし、腐植土、粉状パミスを含む。3層：7.5Y R3/2腐植土粉状パミス混合土、指痕つく、粘性なし。4層：2.5Y R6/4粉状パミス、火山灰土、腐植土混合土、指痕若干つく、粘性なし。5層：7.5Y R4/4暗褐色火山灰土腐植土混合土、指痕若干つく、粘性ややあり。炭化物少量含む。6層：7.5Y R4/6褐色火山灰土、指痕若干つく、粘性ややあり、腐植土、炭化物、焼土を少量含む。7層：7.5Y R4/6褐色火山灰土、指痕つかない。粘性ややあり、軽石、腐植土、炭化物、焼土を少量含む。8層：7.5Y R4/6褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、腐植土若干混入。9層：7.5Y R4/3褐色火山灰土腐植土混合土、指痕つく、粘性なし、炭化物わずか含む。10層：7.5Y R4/3褐色火山灰土腐植土混合土、指痕つく、粘性なし、焼土炭化物わずか含む。11層：7.5Y R4/4褐色火山灰土腐植土混合土、指痕つかない、粘性なし、焼土炭化物わずか含む。12層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土、指痕つく、粘性なし。

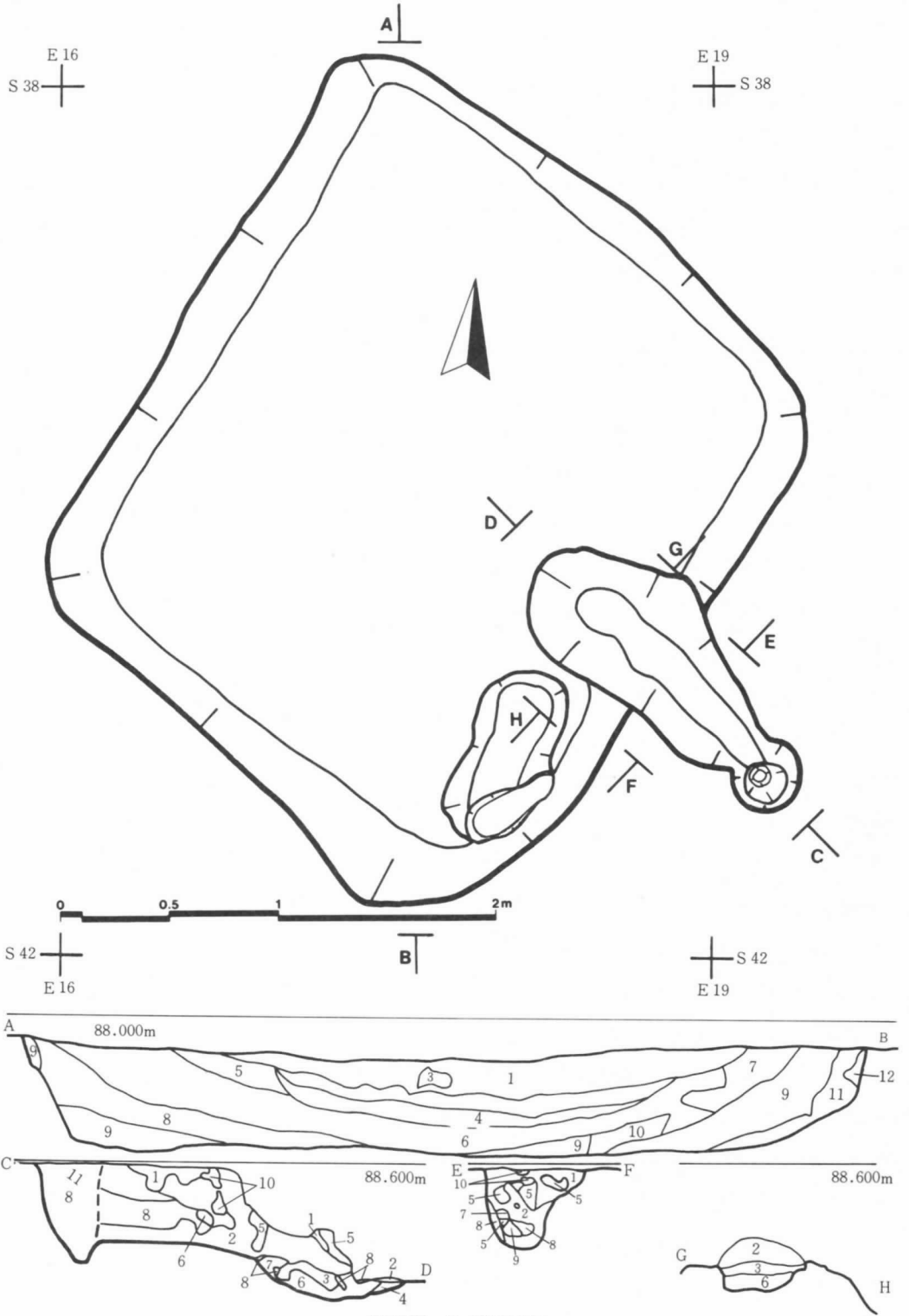
〔床面〕地山面を直接利用し、貼床や掘り方は確認されなかった。壁への立上りは緩やかで、壁高は約45cm前後である。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔かまど〕南東壁中央にある、燃焼部は、巾約60cm。奥行き約55cm。床面より約10cm掘下げている。両袖は欠損している。煙道は長さ約70cm。巾23～65cm。深さは検出面から36～40cmで、やや先上りになる。煙出しは東側路線境下にあり、最終確認の段階で発見された。上場径34cm。下場径5cm。深さは検出面から46cmである。堆積土（8図C-H）は、1層：7.5Y R4/3褐色火山灰腐植土混合土、指痕若干つく、粘性ややあり、炭化物わずか含む。2層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土火山灰混合土、指痕つく、粘性ややあり、焼土炭化物少量含む。3層：7.5Y R3/4明褐色火山灰土、指痕若干つく、粘性ややあり、腐植土、焼土ブロック、炭化物混入。4層：7.5Y R4/4褐色火山灰土、指痕若干つく、粘性ややあり、腐植少量含む。5層：7.5Y R4/4褐色火山灰土、指痕つかない、粘性なし。6層：2.5Y R4/6赤褐色焼土、指痕つかない、粘性なし。7層：7.5Y R4/3暗褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、腐植土少量含む。8層：7.5Y R4/2灰褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、腐植土、焼土を少量含む。9層：5Y R3/6暗赤褐色火山灰土、指痕つかない、粘性なし、焼成を受ける。10層：5Y R3/4暗赤褐色火山灰土、指痕つかない、粘性なし、焼成を受ける。11層：7.5Y R4.6赤褐色火山灰土、指痕つかない、粘性ややあり、腐植土を若干含む。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴状ピットは、かまどの南西側に隣接し、長軸84cm、短軸約40cm。中央部がやや括れる瓢箪形で、深さは床面下約18cmである。

— 藤 沢 遺 跡 —



第 8 図 Cc65住居跡



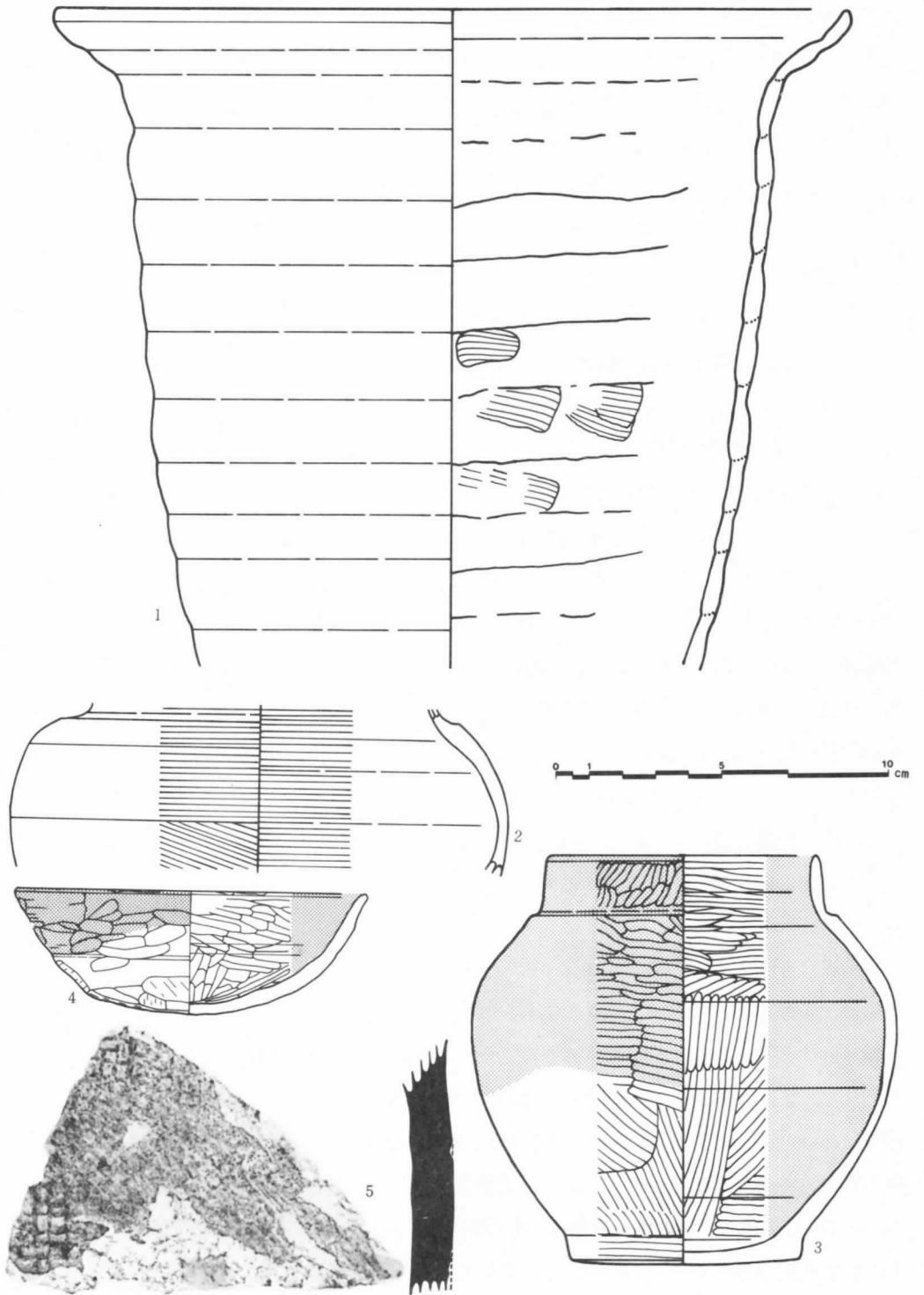
〔その他の施設〕確認されなかった。

〔年代決定資料〕遺物一覧の如く、土師器、長胴甕26点、球胴甕4点、内黒坏9点。須恵器、壺1点が出土した。球胴甕には、円塗りのものや、内外面磨き、黒色処理のものが各1点ある。坏は、有段、丸底のものがみられる。他に縄文中期土器(22図15 図版13—15)や、敲石?(15図4、図版8—4)、剥片5点が出土した。

## 出土遺物

**土師器** 長胴甕(9図1 図版3—1) 1は、口体上部1/4残存で、推定口径約24cm。頸部径約22cm。体部最大径19.4cm。残存部高さ19.8cm。口縁部高さ1.9cm。口縁部は横なで、やや内湾しかなり外傾する。口端部は若干上に挽き出される。頸部無段。体壁は凸凹と歪みが著しく、かなり内外面が磨滅し、内面の一部に刷毛目痕が若干認められる。胎土軟質砂を多く含む。色調灰白～浅黄橙色。焼成不良。かまど焚口出土である。他に25点出土しているが、1点(図版3—2)は、口縁部1/8、体上部1/4残存で、口縁部は横なで、外反。口端部は若干上に挽き出される。頸部無段。体壁は凸凹が著しく、外面は縦の刷毛目、内面は横の刷毛目痕が施される。胎土軟質砂粒を含む。色調浅黄橙色。焼成不良。かまど焚口出土である。1点は、口縁部1/8以下残存で、口縁部は横なで、外反。口端部は若干上に挽き出される。頸部無段。胎土軟質砂を多く含む。色調浅黄橙～橙色。焼成不良。かまど南西側ピット出土である。1点は、口縁部1/8以下残存で、口径10cm前後の小型と思われる破片である。直線的に外傾し外面は横なで、内面は刷毛目痕がある。他に体部の小破片が20点、底部破片が1点発見された。体部破片は、外面に縦の刷毛目痕のあるもの6点。外面に篋削り篋なで痕のあるもの5点。磨滅し不明のもの9点である。底部破片は、縁部が外側に張り出し、下面は篋なで。外体部下端は縦の刷毛目痕が認められる。

球胴甕(9図2・3 図版3—2・3・6) 2は、肩・体上部2/3残存で、頸部径約10.4cm。体部最大径約15cm。頸部横なで、有段、肩・体部は、2次焼成を受け磨滅変質しているため、成形調整痕は不明である。胎土軟質砂を多く含む。色調浅黄橙色。焼成不良。かまど燃焼部から出土した。3は、口体底共1/3残存で、器高12.3cm、推定口径8.2cm、頸部径約8.8cm。体部最大径約12.8cm。底径約7cm。口縁部高さ1.8cmである。口縁部は、ほぼ直線的で垂直。口端部は丸みをもつ。外面は横なで後右上一左下に篋磨き黒色処理。内面は横に篋磨き黒色処理。頸部有段。肩部体上部外面は横磨き黒色処理。体下半部底下面是篋削り篋なで。内体面は縦と右上一左下の篋磨き黒色処理である。胎土やや軟質砂を含む。色調浅黄橙色。焼成はやや不良。かまど焚口出土である。図版3—6は、肩部体上部1/5残存で、頸部有段。体部外面は左上一右下方向に磨き、丹塗り。内面は頸部付近が刷毛目、他は篋なでと刷毛目痕がある。胎土軟質砂を含む。



第 9 図 Cc65住居跡出土遺物

色調浅黄橙色。焼成やや不良。かまど燃焼部出土で、1部変質磨滅が著しい。他の1点は、頸部肩部1/8以下残存で、頸部有段。外面篋など。内面縦の磨き黒色処理。胎土軟質砂を含む。色調浅黄橙色。焼成やや不良である。

内黒坏（9図4 図版3-4・7・8）4は、ほぼ完形で、器高3.6cm。口径10.8cm。口縁部はわずかに外反し、横に篋などで黒色処理。体部外面は明確ではないが段がある。底部は丸底で、篋削り後刷毛目が施され、体部から底部に丹を塗っている。内面は、横又は斜めに磨き黒色処理をしている。胎土やや軟質砂粒を含む。色調灰白～浅黄橙色。焼成やや不良。底部下面に粗か藁片と思われる圧痕がある。図版3-7は、口体部1/8以下残存で、口縁部は直線的に外傾し、外面は横などで黒色処理。体部外面は篋削り、篋磨きで、有段である。内面は磨き黒色処理である。胎土軟質砂を若干含む。色調浅黄橙～にぶい橙色。焼成やや不良である。図版3-8は、口体部1/8以下残存で、口縁部はわずかに外反し、口端部は薄くなる。体部外面は、篋削り、篋磨きで、1部刷毛目痕が認められる。内面は横磨き黒色処理で、黒色処理は若干消えかかっている。胎土やや軟質。色調にぶい橙色。焼成やや不良である。他に、底部2点(丸底)。体部小破片4点が発見された。

須恵器 壺（9図5 図版3-9）体部1/8以下残存の小破片で、外面は格子目叩き文、内面は篋などで。胎土硬質。色調灰白色。焼成良好である。

## 2 ピット（ピット一覧表）

### (1)Ad 53ピット（10図上段左）

〔遺構の位置〕基準点より北へ17.04～18.89m。東へ4.62～6.4m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰土混合土。密で、粘性あり。パミス、焼土を含む。2層7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性あり、火山灰を含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。腐植土・遺物（22図1 図版12-1）を含む。4層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土、粗で、粘性あり。

### (2)Ad 56ピット（10図上段左から2 図版4-1上段左）

〔遺構の位置〕基準点より北へ19.5～20.44m。東へ7.16～8.15m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性なし。2層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり、炭化物を含む。3層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性若干あり、腐植土を含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性ありパミスブロックを若干含む。5層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性なし、パミスブロックを若干含む。

〔出土遺物〕縄文土器口縁部1点。土師器長胴甕体部1点。球胴甕肩部1点。

ピ ッ ト 一 覧 表

名 称	上 場 径 cm		下 場 径 cm		深 さ cm	平面形	下場の状態	断面形	備 考
	N-S	E-W	N-S	E-W					
Ad53ピット	194	194	245	234	62	円 形	周溝(巾20cm、深さ10cm)	フラスコ形	縄文早期土器片22図1
Ad56ピット	94	98	85	88	30	〃	周溝(巾6cm、深さ5cm)	ピーカー形	中心部に小ピット
Ad59ピット	118	123	105	122	26	〃	中心部に小ピット	〃	溝No.1と切り合い
Ag56ピット	117	112	99	104	40	〃	平 坦	〃	溝No.1と切り合い
Ah62ピット	80	70	65	55	30	やや方形	東端に小ピット	浅鉢形	南北に長い溝下面にあり
Ah65ピット	80	105	56	75	30	不整楕円形	中央に小ピット	〃	
Ai56ピット	154	170	125	125	44	円 形	平 坦	ピーカー形	縄文早期土器片22図7、8
Bj62ピット	165	180	140	150	20	〃	中央に小ピット	〃	西壁不鮮明
Ca65ピット	196	168	155	134	55	〃	平 坦	〃	〃
Cb62ピット	190	172	150	140	20	四 辺 形	〃	浅鉢形	〃
Cc62ピット	190	190	167	165	40~74	円 形	周溝(巾50cm、深さ2cm)	ピーカー形	Cc62土壌と切り合い
Cd53ピット	142	140	113	103	36	〃	平 坦	〃	下場東へ寄る
Cd59ピット	200	200	230	210	70	〃	周溝、小ピット2、溝4	フラスコ形	溝の巾40cm、深さ3cm
Ce53ピット	197	190	171	160	40~65	〃	北縁、南東縁に溝	ピーカー形	北溝巾15cm、深さ5cm 南東溝巾10cm、深さ5cm
Ce59ピット	198	193	182	175	60	〃	平 坦	〃	
Cf65ピット	145	143	150	160	80	〃	中央に小ピット	フラスコ形	小ピット径30cm、深さ10cm
Cg56ピットNo.1	171	113	154	92	40	〃	南東隅に小ピット	ピーカー形	Cg56ピットNo.2と切り合い
Cg56ピットNo.2		110		83	40	〃	中央に小ピット	〃	Cg56ピットNo.1と切り合い
Cg62ピット	186	180	214	202	60	〃	平 坦	フラスコ形	
Cg65ピットNo.2	100	94	115	110	45	〃	〃	〃	Cg65溝状土壌と切り合い
Cg65ピットNo.1	120	115	90	86	28	〃	〃	ピーカー形	
Ch59ピット	220	220	200	190	56~70	〃	周 溝	〃	周溝巾20cm、深さ3cm
Ch62ピット	207	200	180	180	60	〃	中央、北東、南東に小ピット各1、溝	〃	溝は中央、北東ピット間
Ch65ピット	50	50	40	35	30	〃	平 坦	〃	
Ci62ピット	160	165	120	130	50	〃	〃	〃	
Ci65ピット	95	65	NE 15×15 SW 30×25	NE 60 SW 50	60	不 整 形	北東側と南西側に小ピット各1	フラスコ形?	
Da62ピット	186	185	165	164	40~60	円 形	平 坦	ピーカー形	
Da65ピット	128	116	80	87	70	〃	〃	〃	Db65ピットと切り合い
Db62ピット	150	145	135	130	40	〃	〃	〃	
Db65ピット	195	200	170	183	50	〃	〃	〃	Da65ピットと切合い
Dc62ピット	172	164	135	142	40	〃	中央・南端に小ピット	〃	小ピット2の平面形は不整形、深さ44cmと20cm
Dc65ピット	155	160	132	135	30~40	〃	平 坦	〃	
Dd62ピット	145	145	130	116	14~22	〃	中央西寄りに小ピット	〃	小ピット径約10cm、深さ5cm

(3)Ad 59ピット (10図上段左から3 図版4—上段右)

〔遺構の位置〕 基準点より北へ17.45～18.68m。東へ11.32～12.5m。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性あり、火山灰混入。

〔出土遺物〕 なし。 付記：底面の小ピットは、木根跡と思われる。

(4)Ag 56ピット (10図上段右 図版4—2段左)

〔遺構の位置〕 基準点より北へ8.88～10.05m。東へ7.13～8.39m。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。パミスブロックを若干含む。

2層：7.5Y R4/4褐色腐植土。密で、粘性あり。火山灰を含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。腐植土、パミスを含む。4層：7.5Y R6/8橙色火山灰土。密で、粘性あり。各層共に遺物を含まない。

(5)Ah 62ピット (10図2段左)

〔遺物の位置〕 基準点のり北へ8.34～9.21m。東へ13.94～14.8m。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(6)Ah 65ピット (10図2段左から2)

〔遺構の位置〕 基準点より北へ7.38～8.25。東へ14.32～15.39m。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(7)Ai 56ピット (10図2段左から3 図版4—2段右)

〔遺物の位置〕 基準点より北へ4.84～6.45m。東へ6～7.72m。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。火山灰を含む。2層：7.5Y R2/1黒色腐植土。粗で、粘性なし。火山灰、炭化物を若干含む。3層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性なし。炭化物わずか含む。4層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性なし。

〔出土遺物〕 縄文土器片5点。1点(22図7 図版12—7)は、体部破片で、繊維を含み、内外面に縄文が施される。1点(22図8 図版12—8)は、口縁部破片で、単節斜縄文の下に、横位の綾絡文が施される。他に、剥片石器6点(18図46、18図50、19図55、19図70、20図89、22図148)が出土した。

(8)Bj 62ピット (10図2段右 図版4—3段左)

〔遺構の位置〕基準点より南へ27.92～29.6m。東へ13.6～15.08m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土を含む。2層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、パミス若干含む。3層：7.5Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性あり。パミスブロック若干含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性あり。パミス混入。

〔出土遺物〕遺物一覧表の通りで、甕は、口縁部5点、体部19点で、体部破片の外表面は、縦の刷毛目痕があるもの2点。横に刷毛目痕があるもの3点。横なでのもの2点。篋削り篋なでのもの9点。不明のもの3点である。内黒坏で平底（23図31 図版31—13）のものは、器高が4.2cm。口径14.1cm。底径7.0cm。外表面と底表面は、篋削り調整がなされ、内表面は山形に磨きが施される。他の2点は、口縁部1、体部1の小破片である。非内黒坏は、口縁部1、体部1の細片である。縄文土器片は文様のない体部破片である。剥片石器は、19図68、21図122、21図123である。

(9)Ca 65ピット（10図3段左 図版4—3右）

〔遺構の位置〕基準点から南へ30.03～32.0m。東へ15.64～17.33m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。軽石、火山灰、炭化物を少量含む。2層：7.5Y R4/4褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性ややあり。軽石パミス少量含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を含む。4層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。5層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。6層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土、密で、粘性ややあり。小円礫、軽石パミス多数混入。

〔出土遺物〕甕は体部破片で、外表面に縦の刷毛目痕のあるもの4点。他は篋削り篋なでである。内黒坏は、口体上部小破片。非内黒坏は、口体上部小破片である。

(10)Cb 62ピット（10図3段左から2 図版4—4段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ32.3～34.3m。東へ13.9～15.92m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性ややあり。焼土を少量含む。2層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。3層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物を若干含む。

〔出土遺物〕小型長胴甕（23図25・26 図版13—25・26）のうち1点（25）は、口径約10.6cm。頸部径約9.8cm。体部最大径10.1cm。頸部に2本の沈線状の段がある。外表面は、縦に篋磨き？を施す。内表面は、横と斜の刷毛目痕がある。他の1点（26）は、口径約14cm。頸部径約11.4cm。体部最大径約12.7cm。頸部に3本の沈線状の段がある。外表面は、磨滅し成形・調整は不

明。内体面は、横の刷毛目痕がある。他の9点は、口縁部4点の内外反するもの3点、内湾外傾するもの1点。体部5点の内外面に縦の刷毛目痕があるもの1点、篋削り篋なでのもの2点、他は不明である。内黒丸底は、口体部2点、体底部4点で、5点が篋削り篋なで、1点が刷毛目痕がある。内黒丸平底(23図28)は、口縁部1/8、体底部1/4残存で、器高4.8cm。推定口径約13cm。底径6.8cm。外体面と底下面は篋削り篋磨き、体底の境に稜線はあるが、底中央は下に張り出す。不明の2点は、口体上部の小破片である。紡錘車(23図33)は土製、上面径約4cm、下面径約4.8cm。高さ2.7cm。孔径7mm。縄文土器は、体部細片。

(11)Cc 62ピット (10図3段右 図版4一下段左)

〔遺構の位置〕基準点より南へ36~38.48m。東へ10.8~13m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。密で、粘性なし。パミスブロックを若干含む。2層：7.5Y R4/4褐色腐植土、密で、粘性なし。パミスブロックを含む。3層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土を含む。4層：5Y R4/4にぶい赤褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。腐植土を含む。5層：5Y R4/6赤褐色火山灰土。密で、粘性あり。パミスを若干含む。6層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。パミス若干含む。7層：7.5Y R5/8明褐色パミス層、密で、粘性あり。

〔出土遺物〕剝片石器2点(19図76・20図100)が出土した。

(12)Cd 53ピット (10図下段)

〔遺構の位置〕基準点より南へ40.52~41.94m。東へ5.06~6.46m。

〔堆積土〕1層：10Y R4/3黄褐色腐植土。粗で、粘性なし。火山灰、パミスを含む。2層：10Y R4/4褐色腐植土、密で、粘性ややあり。火山灰、パミスを含む。3層：褐色火山灰土、密で、粘性ややあり。4層：10Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を若干含む。5層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。パミスを少量含む。

〔出土遺物〕縄文土器体部小破片1点。

(13)Cd 59ピット (10図下段中 図版5一上段左右)

〔遺構の位置〕基準点より南へ39.77~41.91m。東へ10.06~12.16m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。パミスブロック若干含む。2層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性あり。腐植土、パミス若干含む。3層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性あり。パミスを若干含む。4層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。5層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性あ

り。パミス若干含む。6層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。パミス混入。  
7層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性あり。

〔出土遺物〕縄文土器体部小破片1点。

(14Ce 53ピット (10図下段右))

〔遺構の位置〕基準点より南へ42.33～44.32m。東へ5.42～7.33m。

〔堆積土〕1層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。粗で、粘性なし。2層：10Y R4/4褐色腐植土、粗で、粘性ややあり。パミスを含む。3層：10Y R5/8黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。パミスを少量含む。4層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を少量含む。5層：10Y R5/8黄褐色火山灰土、やや密で、粘性ややあり。6層：10Y R8/7黄橙色パミス。密で、粘性ややあり。

〔出土遺物〕土器器甕体部破片1点で、外面に縦の刷毛目痕がある。

(15Ce 59ピット (11図上段左))

〔遺構の位置〕基準点より南へ42.03～44.02m。東へ9.88～11.82m。

〔堆積土〕1層：10Y R2/3黒褐色腐植土。密で、粘性なし。パミスブロックを若干含む。2層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。腐植土、パミスを含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性あり。パミスを若干含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土、粗で、粘性あり。各層共、遺物を含まない。

(16Cf 65ピット (11図上段左2 図版5—3段右))

〔遺構の位置〕基準点より南へ46.82～48.55m。東へ15.24～16.7m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性ややあり。火山灰、焼土、炭化物を含む。2層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性ややあり。炭化物、焼土を含む。3層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物、焼土を少量含む。4層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。密で、粘性ややあり。火山灰、炭化物、焼土を少量含む。5層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物を少量含む。6層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土、焼土を少量含む。7層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。腐植土を若干含む。8層：7.5Y R2/1黒色腐植土。焼土、炭化物を少量含む。

〔出土遺物〕縄文土器体部小破片4点。



(17)Cg 56ピットNo.1 (11図上段左3 図版5—4段左)

〔遺構の位置〕基準点から南へ49.47～?m。東へ6.82～7.96m。

〔堆積土〕1層：10Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性ややあり。2層：10Y R4/6褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性ややあり。パミスを含む。3層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。やや密で、粘性ややあり。各層共に遺物を包含しない。

(18)Cg 56ピットNo.2 (11図上段左3 図版5—4段左)

〔遺構の位置〕基準点から南へ?～51.2m。東へ6.86～7.86m。

〔堆積土〕1層：10Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。2層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。密で粘性ややあり。3層：10Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。

〔出土遺物〕3層より縄文土器体部破片4点。

(19)Cg 62ピット (11図2段左 図版5—2段右)

〔遺構の位置〕基準点より南へ49.6～51.48m。東へ12.76～14.56m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。火山灰、焼土、炭化物を少量含む。2層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土、焼土、炭化物を少量含む。3層：7.5Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性なし。軽石パミス、炭化物を少量含む。4層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、軽石パミス、炭化物を含む。5層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、軽石パミス、炭化物を少量含む。6層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、炭化物を少量含む。7層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。8層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土、炭化物を少量含む。

〔出土遺物〕土師器長胴甕、体部破片1点は、外面が縦の篋などで、内面が横に篋などでしている。内黒坏(12図19・30)29は、有段丸底、内外面篋磨き。口縁部内外面黒色処理。30は、無段丸底。外面の一部と内面が篋磨き。外面体底部の一部に篋削り痕がある。縄文土器は、体部小破片である。剥片石器は、18図26、19図63、20図86である。

(20)Cg 65ピットNo.2 (11図2段左2、図版5—3段右)

〔遺構の位置〕基準点より南へ48.54～49.85m。東へ15.89～16.85m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性ややあり。火山灰を含む。

〔出土遺構〕なし。

(21)Cg 65ピットNo.1 (11図上段右 図版5-3段左)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ48.4~49.6m。東へ17.08~18.24m。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土火山灰混合土、密で、粘性ややあり。2層：7.5Y R3/2黒褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物、焼土を少量含む。3層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土を含む。4層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性なし、腐植土を少量含む。5層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性ややあり。6層：7.5Y R2/1黒色腐植土。密で、粘性なし。炭化物を少量含む。7層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、炭化物を少量含む。8層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を若干含む。

〔出土遺物〕 縄文土器体部小破片1点。剥片石器(21図110) 1点。

(22)Ch 59ピット (11図2段左3 図版5-4段右)

〔遺構の位置〕 基準点から南へ50.01~52.37m。東へ9.09~11.43m。

〔堆積土〕 1層：10Y R4/6褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性ややあり。パミス、炭化物を含む。2層：10Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性なし。パミスを少量含む。3層：10Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性あり。パミスを少量含む。4層：10Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性あり。5層：10Y R6/8明黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。6層：10Y R6/8明黄褐色火山灰土。密で、粘性あり。7層：10Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。

〔出土遺物〕 剥片石器(20図85) 1点。

(23)Ch 62ピット (11図3段左、図版5-一下段左)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ52.81~53.32m。東へ16.41~16.91m。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土層。粗で、粘性なし。炭化物、パミスブロックを含む。2層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。腐植土、炭化物を含む。3層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。パミスブロック若干含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。5層：7.5Y R6/8橙色火山灰土。粗で、粘性なし。

〔出土遺物〕 土師器、長胴甕口縁部小破片1点。直線的に外傾し、口端部は薄くなる。外面は横なで、内面は横の刷毛目痕がある。体下底部小破片1点。体部内外面共刷毛目痕がある。

(24)Ch 65ピット (11図2段右)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ52.81~53.32m。東へ16.41~16.91m。

〔堆積土〕 1層：10Y R4/6褐色火山灰腐植土混合土。やや密で、粘性ややあり。

〔出土遺物〕 縄文土器、体部小破片 3点。

(25)Ci 62ピット (11図 3段左 2 図版 5 一下段右)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ55.43～57.07m。東へ11.44～13.10m。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性あり。腐植土、パミスを含む。2層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。腐植土、パミスを少量含む。3層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。密で、粘性あり。パミスブロック若干混入。4層：7.5Y R2/3暗褐色腐植土。密で、粘性あり。火山灰、焼土を含む。

〔出土遺物〕 繊維を含む縄文土器片は、体部破片 (22図11 図版12—11) と、体部小破片 2点。剥片石器は、21図112。

(26)Ci 65ピット (11図 3段右)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ54.02～54.92m。東へ15.89～16.8m。

〔堆積土〕 1層：10Y R4/4褐色火山灰腐植土混合土。やや密で、粘性ややあり。遺物含まず。

(27)Da 62ピット (11図 5段右 図版 6 一上段左)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ59.27～61.2m。東へ12.26～14.11m。

〔堆積土〕 1層：10Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。パミスを含む。2層：10Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。パミスを含む。3層：10Y R6/8明黄褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。

〔出土遺物〕 縄文土器体部破片 (22図12 図版12—12) 1点。土師器長胴甕、体部破片 1点。石錘 (16図10 図版 8—10) 1点。

(28)Da 65ピット (11図 4段右 図版 6 一上段右)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ61.84～63.12m。東へ16.98～17.17m。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R5/4にぶい橙色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性あり。2層：10Y R4/6褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。3層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。パミスを若干含む。4層：10Y R4/6褐色火山灰土。やや密で、粘性あり。

〔出土遺物〕 縄文土器、繊維を含むもの口縁部 1点。口端部丸み、外面文様なし、地文 L—R。繊維を含まないもの、口縁部 1点、口端部平坦、外面文様なし、地文 R—L。体部 4点、内 1点は綱縄文。他の 3点は磨滅著しく不明。剥片石器19図72。20図101の 2点。

(29)Db 62ピット (11図下段左 図版6—2段左)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ62.34～64.35m。東へ15.18～17.52m。

〔堆積土〕 1層：10Y R3/4～4/6褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性若干あり。炭化物、パミス若干含む。2層：10Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。パミスを含む。3層：10Y R4/4褐色火山灰土。粗で、粘性なし。パミスを含む。

〔出土遺物〕 縄文土器、繊維を含むもの体部7点、1点は羽状文。繊維を含まないもの体部小破片3点。

(30)Db 65ピット (11図下段中 図版6—2段右)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ64.46～66.02m。東へ13.23～14.70m。

〔堆積土〕 1層：10Y R4/6褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。2層：7.5Y R5/6暗褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。パミス若干混入。2層共遺物を含まない。

(31)Dc 62ピット (12図上段左 図版6—3段左)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ66.20～67.90m。東へ13.92～15.56m。

〔堆積土〕 1層：10Y R3/4～4/6褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性若干あり。炭化物、パミス若干含む。遺物を含まない。

(32)Dc 65ピット (12図上段左2 図版6—3段右)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ66.58～68.13m。東へ15.70～17.30m。

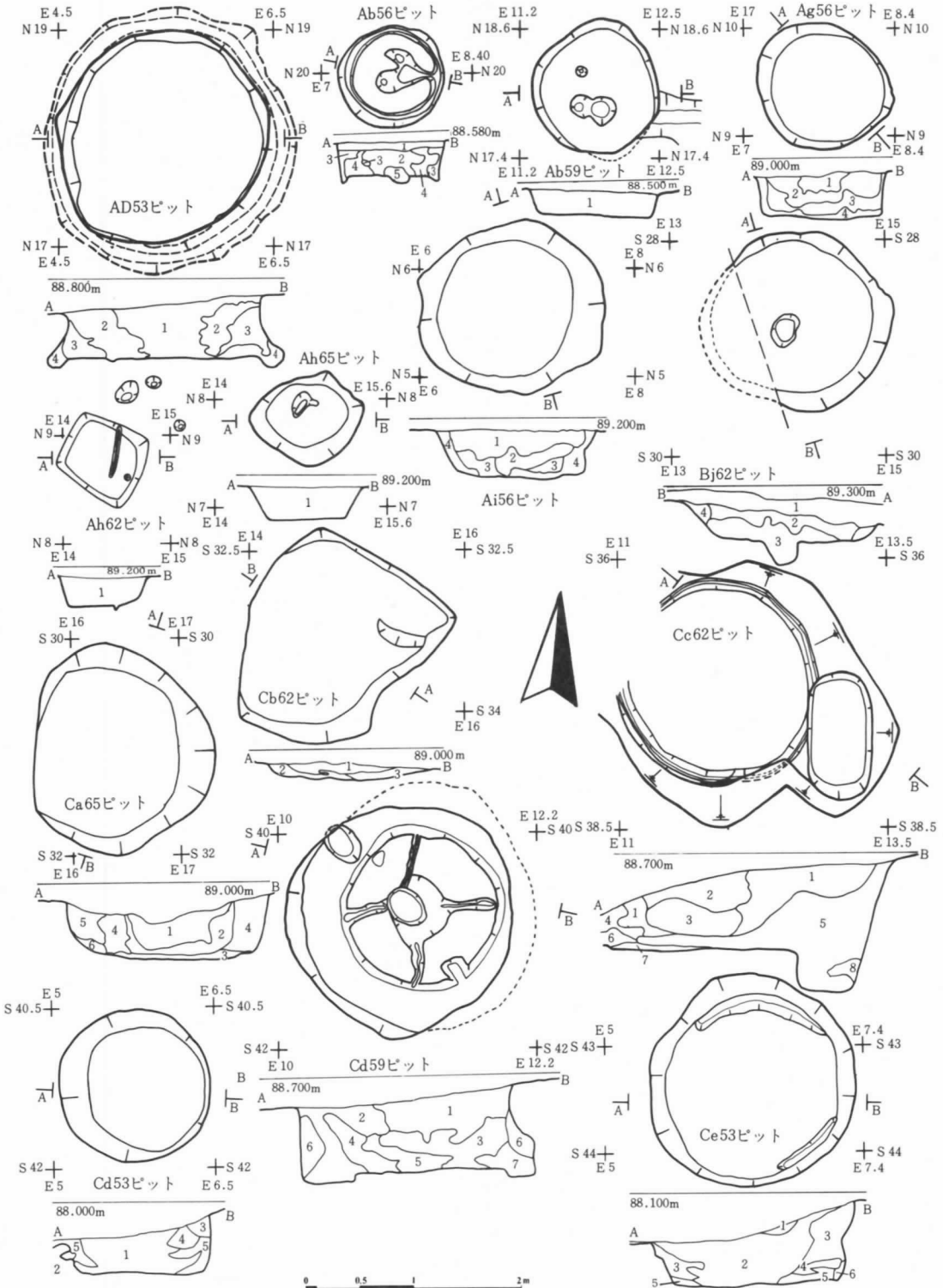
〔堆積土〕 1層：10Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。2層：10Y R3/3暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。パミスを少量含む。3層：10Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。パミスを少量含む。各層共に遺物を含まない。

(33)Dd 62ピット (12図上段左3 図版6—4段左)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ68.60～70.08m。東へ14.03～15.50m。

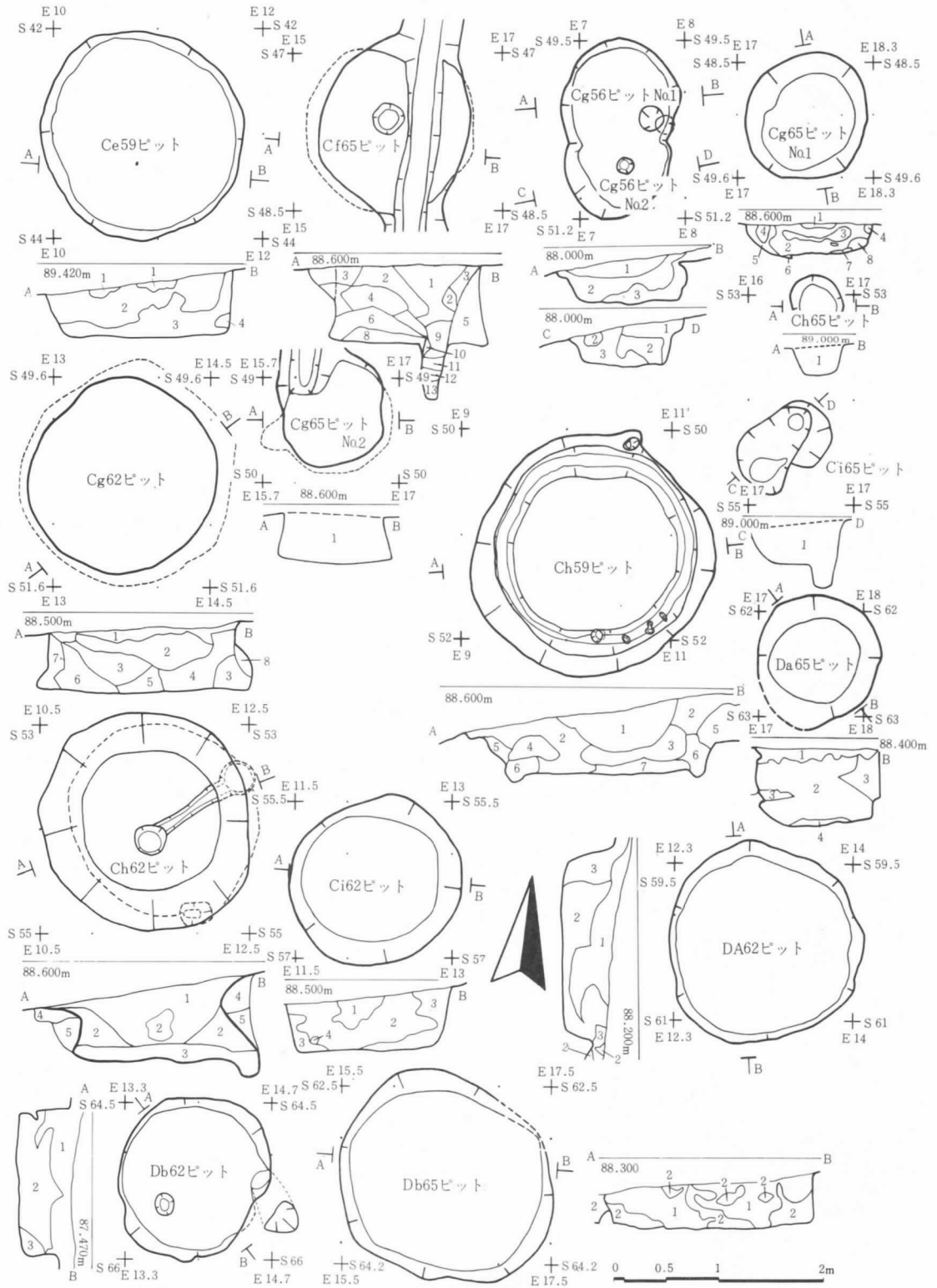
〔堆積土〕 1層：10Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。パミス、炭化物を若干含む。2層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。パミスを若干含む。3層：10Y R4/4褐色腐植土。やや密で、粘性若干あり。パミスを若干含む。4層：10Y R5/6黄褐色粘土腐植土混合土。粗で、粘性あり。各層共に、遺物を包含しない。

(34)その他、Cb 68土壌群 (図版4—下段右) は、大部分路線外のため記述省略。

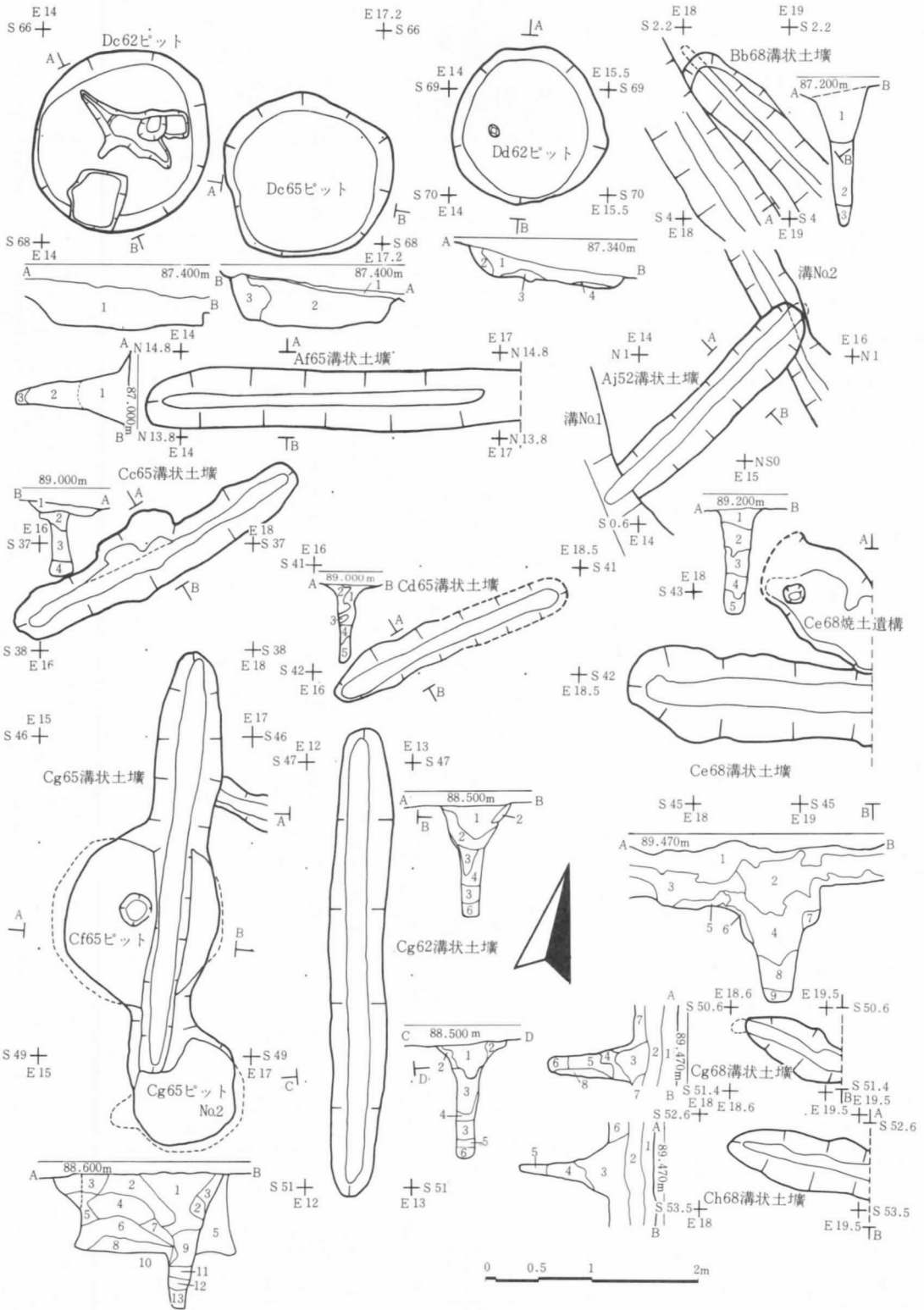


第10図 ピット実測図 I

— 藤沢遺跡 —



第II図 ピット実測図II



第12図 ピット・溝状土壌実測図

溝 状 土 坑 一 覧 表

名 称	上場長さ cm		下場長さ cm		深 さ cm	断 面	長軸方向	上場長さ と 下場長さ	備 考
	長 軸	短 軸	長 軸	短 軸					
Af65	408	53	302	11	100	V	N-83°-E	上>下	東端路線外
Aj62	-	40	268	13	100	U	N-40°-E	上<下	溝1、2と切合い
Bb68	-	40	-	7	130	V	N-50°-W	上<下	東半分路線外
Cc65	300	45	279	7	70	U	N-60°-E	上>下	下場両端膨む
Cd65	300	30	224	7	70	U	N-60°-E	上>下	Cc65住と切合
Ce68	-	70	-	22	140	U	N-90°-E	上>下	東半分路線外
Cg62	440	50	418	15	110	U	N-5°-W	上>下	
Cg65	400	74	382	28	130	U	N--°-S	上>下	Cf65ビット、Cg65ビット 2と切り合い
Cg68	-	40	-	10	63	U	E-15°-S	上<下	東半分路線外
Ch68	-	50	-	5	125	V	N-85°-E	上>下	東半分路線外
Cj68	-	90~ 120	-	65~ 25	86	V	N-65°-E	上>下	東半分路線外

土 坑 一 覧 表

名 称	上場長さ cm		下場長さ cm		深 さ cm	平 面 形	長軸方向	備 考
	N-S	E-W	N-S	E-W				
Ae56	184	56	152	41	40	長 方 形	N-30°-W	刀子出土
Cc62	117	60	98	50	120	小 判 形	N-5°-W	Cc62ビットと切り合い
Db65	110	50	70	35	116	小 判 形	N-27°-E	

焼 土 遺 構 一 覧 表

名 称	上場径 cm		下場径 cm		深 さ cm	平 面 形	出 土 遺 物	備 考
	N-S	E-W	N-S	E-W				
Af53	104	87	80	78	15	不 整 円 形	な し	断面浅鉢形
Af56	72	97	63	78	13	"	な し	断面浅鉢形
Af59	92	95	70	77	16~ 20	"	な し	断面浅鉢形
Af62	44	46	33	36	11	円 形	な し	断面浅鉢形
Af65	74	70	54	44	14	"	な し	断面浅鉢形
Ce62	240	117	140	80	65	楕 円 形	土師器壺1坏等19 縄文土器片2、刺片5	長軸方向N-40°-E
Ce68	85	-	55	-	55	-	縄文土器10片	東半分路線外
Ch62	100	65	40	45	50	楕 円 形	土師器甕2片	長軸方向N-40°-E



### 3 溝状土壌（溝状土壌一覧表）

#### (1)Af 65溝状土壌（12図2段左）

〔遺構の位置〕基準点より北へ13.86～14.46m。東へ13.68～路線外。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。2層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を若干含む。3層：10Y R2/1黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。各層共に遺物を含まない。

#### (2)Aj 62溝状土壌（12図2段右）

〔遺構の位置〕基準点から北へ1.5～南へ0.40m。東へ13.68～15.56m。

〔堆積土〕1層：極暗褐色腐植土。密で、粘性なし。2層：暗褐色腐植土火山灰混合土。粗で粘性あり。炭化物を若干含む。3層：7.5Y R4/6明褐色火山灰土。密で、粘性あり。4層：7.5Y R5/8褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。5層：7.5Y R5/8明褐色火山。粗で、粘性あり。各層共に遺物を含まない。溝No 1、No 2 に切られる。

#### (3)Bb 68溝状土壌（12図上段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ2.44～4.10? m。東へ18.0～19.44? m

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性なし。2層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。腐植土を若干含む。3層：10Y R2/1黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。各層共に遺物を含まない。

#### (4)Cc 65溝状土壌（12図3段左 図版6一下段中）

〔遺構の位置〕基準点より南へ36.24～37.90m。東へ15.75～18.42m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/5暗褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。2層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。3層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性あり。4層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。

〔出土遺物〕1層より剥片石器（20図84、20図90、21図106）3点。

#### (5)Cd 65溝状土壌（12図3段中 図版6一下段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ41.10～42.28m。東へ16.20～18.40m。

〔堆積土〕1層：10Y R2/3黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。炭化物を含む。2層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。3層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘

性あり。4層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性あり、5層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。

〔出土遺物〕1・2層より、土師器甕口縁部小破片（頸部有段）1点。体部破片2点、1点は内外面共刷毛目痕あり、1点は内外面共篋など。体下底部小破片1点。縄文土器？体下底部破片1点。

(6)Ce 68溝状土壌（12図3段右 図版6一下段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ43.60～44.35m。東へ17.46～路線外m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性若干あり。火山灰を含む。2層：10Y R2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。4層：7.5Y R2/4暗褐色火山灰土。粗で、粘性あり。腐植土を含む。6層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。7層：7.5Y R2/3極暗褐色腐植土。粗で、粘性なし。8層：7.5Y R3/4暗褐色火山灰土。粗で、粘性あり。腐植土を含む。9層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性なし。3・5層はCe 68 焼土遺構の堆積土。

各層共に遺物は含まない。

(7)Cg 62溝状土壌（12図下段左2 図版7一上段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ46.69～51.09m。東へ12.21～12.82m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。火山灰、炭化物を少量含む。2層：7.5Y R3/4：暗褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。腐植土、炭化物を少量含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。腐植土を少量含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。5層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。腐植土を含む。6層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。腐植土を含む。

各層共に遺物を含まない。

(8)Cg 65溝状土壌（12図下段左 図版7一上段中）

〔遺構の位置〕基準点より南へ45.21～49.32？m。東へ15.83～16.72m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性若干あり。火山灰、炭化物、焼土を少量含む。2層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性若干あり。炭化物、焼土を少量含む。3層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物、焼土を少量含む。9層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。腐植土、炭化物を少量含む。10層：7.5Y R3/1黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。11層：7.5Y R3/4暗褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土を少量含む。12層：7.5Y R3/1黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。火山灰

を少量含む。13層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、軽石パミスを含む。4層～8層は重複するCf 65ピットの堆積土。各層共に遺物を含まない。

(9)Cg 68溝状土壌 (12図5段右 図版7—上段右)

〔遺構の位置〕基準点より南へ50.70～51.31m。東へ18.75～路線外。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。2層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。やや密で、粘性若干あり。3層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。4層：7.5Y R2/3極暗褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。5層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性あり。腐植土を少量含む。6層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で粘性あり。7層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。8層：7.5Y R5/6明褐色火山灰山。密で、粘性あり。各層共に遺物を含まない。

(10)Ch 68溝状土壌 (12図下段右 図版7—2段右)

〔遺構の位置〕基準点から南へ52.75～53.40m。東へ18.27～路線外。

〔堆積土〕7.5Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性なし。根毛多量にあり。2層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性あり。根毛多量にあり。3層：7.5Y R2/3極暗褐色腐植土。密で、粘性あり。4層：7.5Y R4/6褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性あり。5層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。6層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性若干あり。根毛あり。各層共に遺物を含まない。

(11)Ci 68溝状土壌 (13図上段左 図版7—2段左)

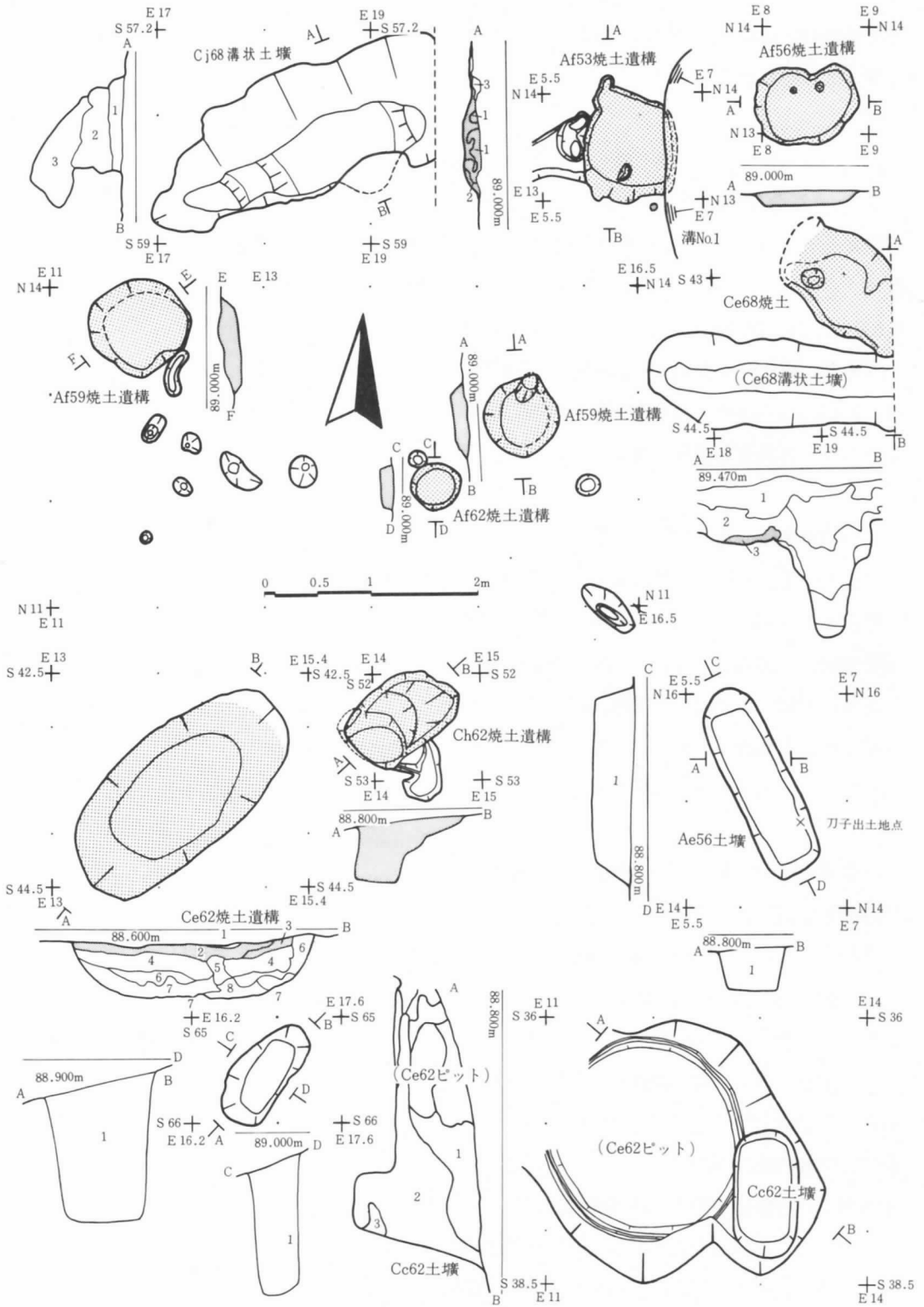
〔遺構の位置〕基準点より南へ57.23～59.10m。東へ16.94～路線外。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。やや密で、粘性若干あり。炭化物を含む。2層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。粗で、粘性あり。火山灰、炭化物を少量含む。3層：10Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。

〔出土遺物〕縄文土器、繊維を含む体部破片1点。外面がかなり磨滅しているため明確ではないが、羽状縄文で、結節らしき痕跡がある。繊維を含まないものは、口縁部1点、体部破片2点で、口縁部破片(22図5 図12—5)は、わずかに外反し、口端部と地文の間約1cmは横なでされ、口端部は平坦で、外縁に刻みが約1cm間隔に付される。地文はL—R。胎土は砂粒を多量に含む。色調は橙色である。体部破片2点は小破片で、磨滅著しい。

この溝状土壌は、平面形、断面形、堆積土の状態等、他の溝状土壌と異なっており、この項に入れるのは適当でないと思われるが、他に例がないため便宜上ここに記入した。

— 藤 沢 遺 跡 —



第13図 溝状土坑・焼土遺構・土坑実測図

#### 4 土壌 (土壌一覧表)

##### (1)Ae 56土壌 (第13図3段右 図版7-3・4段右)

〔遺構の位置〕基準点より北へ14.27~16.06m。東へ5.66~6.74m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。単層で、堆積土の状態や、壁面上部の土が埋土に入り込んでおらず、自然堆積ではないように思われる。

〔出土遺物〕刀子(23図34、図版13-34)1点。刀身先半部欠損で、茎の長さ4.5cm。巾0.4~1.1cm。厚さ0.3cm。刀身残存部長さ5.3cm。巾0.6~1.1cm。棟の厚さ0.3cmである。

##### (2)Cc 62土壌 (第13図下段右 図版7-3段左)

〔遺構の位置〕基準点より南へ37~38.40m。東へ12.55~13.6m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。密で、粘性なし。パミス若干含む。2層：7.5Y R4/4褐色腐植土。密で、粘性なし。パミスブロックを含む。3層：7.5Y R6/8にぶい橙色火山灰土パミス混合土。粗で、粘性あり。各層共に遺物を含まない。

##### (3)Db 65土壌 (第13図下段左 図版7-4段右)

〔遺構の位置〕基準点より南へ65.07~66.20m。東へ16.48~17.31m。

〔堆積土〕1層：10Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

#### 5 焼土遺構 (焼土遺構一覧表)

##### (1)Af 53焼土遺構 (第13図上段中)

〔遺構の位置〕基準点より北へ12.96~14.05m。東へ5.88~6.76m。

〔堆積土〕1層：2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。2層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性あり。焼土を含む。3層：10Y R5/6黄褐色シルト腐植土混合土。密で、粘性なし。焼土を若干含む。各層共に遺物を含まない。

##### (2)Af 56焼土遺構 (第13図上段右)

〔遺構の位置〕基点より北へ12.90~13.65m。東へ7.94~8.90m。

〔堆積土〕1層：2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

##### (3)Af 59焼土遺構 (第13図2段左)

〔遺構の位置〕 基準点より北へ13.16～14.06m。東へ11.36～12.32m。

〔堆積土〕 1層：2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(4)Af 62焼土遺構 (第13図2段左2)

〔遺構の位置〕 基準点より北へ11.94～12.40m。東へ14.35～14.84m。

〔堆積土〕 1層：2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(5)Af 65焼土遺構 (第13図2段左3)

〔遺構の位置〕 基準点より北へ12.40～13.14m。東へ15.05～15.76m。

〔堆積土〕 1層2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(6)Ce 62焼土遺構 (第13図3段左 図版7一下段左)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ42.65～44.63m。東へ13.22～15.20m。

〔堆積土〕 1層：2.5Y R6/6明黄褐色パミス。やや密で、粘性なし。2層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。焼土、炭化物が粒状で全面に含まれる。3層：10Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。4層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性なし。炭化物粒を含む。5層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。火山灰を含む。6層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。7層：7.5Y R4/3Y R褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。8層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。

〔出土遺物〕土師器。長胴甕。口縁部1/8以下残存2点。1点は頸部有段、1点は無段。体部小破片9点。内4点は外面が篋などで、5点は磨滅により不明。底部小破片4点、内2点は下面に木葉痕がある。他の2点は外体面下半から底下面が篋削り痕がある。球胴甕(23図27)は、体下半と底部1/1残存で、外体面と底下面は篋削り篋などで、底径8.7～9.0cmで、2次焼成を受ける。接合しないが、Cc 65住居跡出土の甕(9図2)に類似する。内黒坏は、体部小破片2、体底部破片1点で、体底部破片は丸底風と思われるが、明確でない。縄文土器片(22図14、図版13—14)口体部1点。剥片石器(18図28・37・48、19図66、20図87)5点。

(7)Ce 68焼土遺構 (13図2段右)

〔遺構の位置〕 基準点より南へ42.45～43.78m。東へ18.64～路線外。

〔堆積土〕 1層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性若干あり、火山灰を含む。2層：10Y R3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性あり。火山灰を含む。3層：5Y R2/3極暗赤褐色焼土層。粗で粘性あり。

〔出土遺物〕縄文土器、口縁部小破片（22図16 図版13-16）口縁部は内湾内傾し、外面に粘土帯貼付文とそれに平行して沈線が内側に施される。口端部は1本の沈線状の凹みが横位に施される。体部破片の内1点（22図13 図版13-13）は、L-Rの地文の上から三本単位の沈線が横位に施される。器壁は外反する。他に6点の体部小破片が出土した。

#### (8)Ch 62焼土遺構（13図3段左2 図版7一下段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ51.98～52.89m。東へ13.72～14.80m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R4/4褐色焼土腐植土混合土。粗で、粘性なし。

〔出土遺物〕土師器、長胴甕2点。1点は口頸部の小破片で、口縁部はわずかに外反し、外面横なで、内面は横の刷毛目痕がある。口縁部高さ2.3cm。頸部有段である。1点は、体下底若干の破片で、外体面は篋削り篋なで、内面は篋なで。底部周縁は外側に張り出す。

## 6 溝（第14図）

No.1、No.2共に、調査開始時には、堆積土は無く、最近掘られた様な状態であった。それが重機が入って、表土除去と抜根を実施した際に、一部掘削して消滅し、表土が埋めたてられた。溝の両端は東側路線外に続いており、これと平行して、東側路線外にもう1本溝があった。

溝の性格は不明であるが、溝の内側に土地所有者名を記した杭があったことから、何らかの境界を示すものであるかもしれない。北側にある木立の中にも同様の溝が存在する。

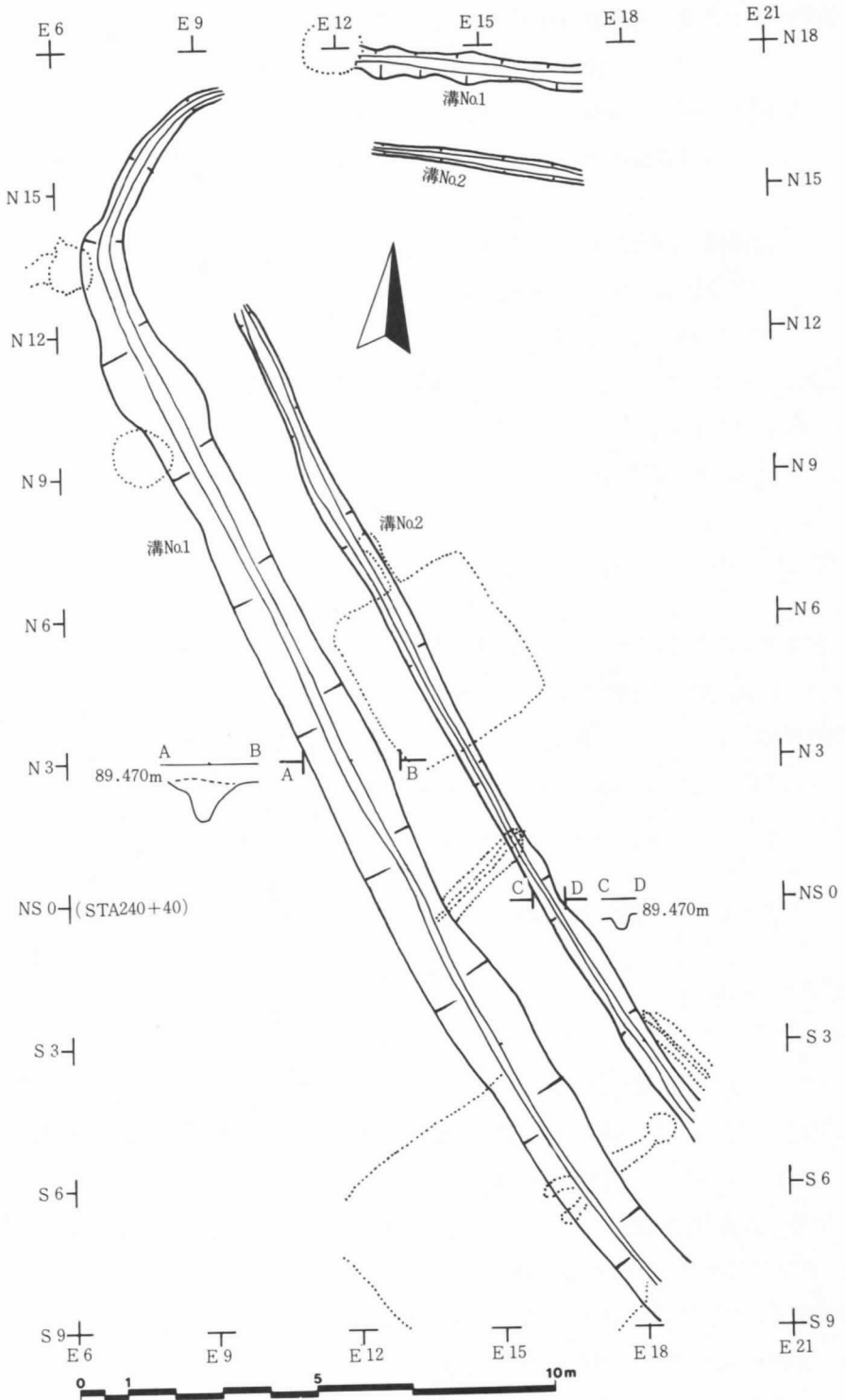
## 7 表採等の遺物（遺物一覧表）

### (1)縄文時代の遺物

縄文土器（22図1～7・10～17 図版12・13-1～7・10～17）

1は、瓜形と条痕文、口端部に刻みがある。Ad 53ピット出土。2は、綾杉文。A区表土採集。3は、口端部に粗い刻みがある。Cb 68ピット出土。4は、胎土に繊維を含む。D区表土採集。5は、口端部に刻みがある。Ci 68溝状土壇出土。6は、口端部に刻み？、捺糸文が施される。A区表土採集。以上口縁部破片。7は、体部破片、胎土に繊維を含み、内外面に縄文が施される。10は、体下半部破片。捺糸文が施される。Ce 62焼土遺構出土。以上は縄文早期と思われる。11は、体部破片。外面は羽状縄文で結節があり、胎土に繊維を含む。Ci 62ピット出土。12は、体部破片。孔が穿たれ、胎土に繊維を含む。Da 62ピット出土。以上2点は縄文前期かと思われる。13は、体部破片で、3本単位2組の平行沈線と、もう1本の沈線がある。Ce 68焼土遺構出土。14は、口体部破片で、波状口縁。頂部下に隆帯渦巻文。体部は、2本の平行粘土帯貼付の

— 藤 沢 遺 跡 —



第14図 溝実測図



両脇に沈線が施される。Ce 62焼土遺構出土。15は、口体部破片で、頸部に3本、その下に2本の平行沈線。体部は、3本の平行沈線を施し、その下に3本組の縦の沈線を4箇所施し、その中に3本組の渦巻状沈線を施す。Cc 65住居跡かまど焼部出土。小型で接合しないが底部破片も出土している。16は、口縁部破片で、口端部に沈線状の凹みがあり、外面に粘土帯貼付文とそれに沿って沈線が内側に施される。Ce 68焼土遺構出土。以上4点は、縄文中期かと思われる。17は、口縁部破片で、5本の沈線が横位に施され、内面に1本隆帯?が横位に施される。A区表土採集。縄文晩期かと思われる。8は、口縁部破片で、単節斜縄文と綾絡文が施される。Ai 56ピット出土。9は、体下底部破片で、撚糸文が施される。B区表土採集、共に縄文土器か弥生式土器か判断がつかぬ。他に胎土に繊維を含む体部破片34点。胎土に繊維を含まない体部破片139点が、出土した。

#### 石器（遺物一覧表、石器実測図説明I～IV）

- 1) 石剣（石器実測図説明I、第15図1 図版8-1）半欠で、断面形は楕円形である。長軸の両端と先端部に、かなりの打痕が認められる。
- 2) 敲石（石器実測図説明I、第15図2～5 図版8-2～5）2は、半欠で、断面形は四辺形、角は丸い。1部に擦痕があり、上下面は平坦である。先端に打痕が若干みられる。3は、完形品で、断面形は卵形。一方の端は擦痕があり、他の端は打痕がある。4は、半欠で、断面形は長楕円形。全面に擦痕がある。先端部には打痕がある。5は、両端と面の1部が欠損する。面の1方に擦痕がある。両端は自然欠損でなく、打ち欠いた加工痕かもしれない。
- 3) 石皿（石器実測図説明I、第15図6、第16図7・8 図版8-7・8）6は、2辺が縁部で、かなり傾斜する。上面が若干磨滅するが、擦痕や凹みは認められない。7は、小破片で、下辺が縁部と思われる。上面の線刻は、最近鉛筆で書いたにも思える。8は、小破片で、上面が若干磨滅している。何れも石質は軟質である。
- 4) 石錘（石器実測図説明I、第16図9・10 図版8-9・10）9は、ほぼ三角形で、両側辺に、各1ヶ所打ち欠いて凹みをつくる。10は、四辺形で、両側辺に、各1ヶ所打ち欠いて凹みをつくる。
- 5) 磨石（石器実測図説明I、第16図11～13、第17図14・15 図版8-11～15）11・12・13は両端が欠損し、13は下面も欠損する。14・15は完形品である。上面と側面の1部に研磨痕があり、13以外の下面は擦痕がある。
- 6) 舟底形石器（石器実測図説明I、第17図16 図版8-16）完形品で、断面形は三角形である。後端部に自然面が残る。旧石器との教示を得ている。
- 7) 石鏃（石器実測図説明I、第17図17 図版8-17）先端部が欠損する。

8) 剥片 (遺物一覧表、石器実測図説明 I~IV、第17~22図 図版 8~12)

剥片石器の分類については、形態や大きさ、用途等によってなされているが、こうした分類に該当するのかどうか疑問のものがかなり有るため、刃部加工の部位と使用痕の部位によって分類してみた。中には第17図16と同様旧石器と思われるものも含むが、明確ではない。

①：刃部加工痕（2次調整）が、ほぼ全辺にみられるもので、これを2つに細分した。

1-1：楕円形で、一端が尖るもの。(18~20)

1-2：楕円形で、両端が尖るもの。(21)

②：刃部加工痕（2次調整）が、1部にあるもので、これを7つに細分した。

2-1：刃部加工痕が、両側辺と上辺か下辺のいずれかにあるもの。(22~35)

2-2：刃部加工痕が、1方の側辺と上辺か下辺のいずれかにあるもの。(36~50)

2-3：刃部加工痕が、上下両辺と1方の側辺にあるもの。(51)

2-4：刃部加工痕が、両側辺のみにあるもの。(52~70)

2-5：刃部加工痕が、1方の側辺のみにあるもの。(71~90)

2-6：刃部加工痕が、上辺と下辺のみにあるもの。(91)

2-7：刃部加工痕が、上辺か下辺のいずれかにあるもの。(92~105)

③：刃部加工痕が認められず、使用痕のみがあるもので、6つに細分した。

3-1：使用痕が両側辺のみにあるもの。(106~119)

3-2：使用痕が1方の側辺のみにあるもの。(120~135)

3-3：使用痕が上辺か下辺のいずれかと、1方の側辺にあるもの。(136~142)

3-4：使用痕が上辺か下辺のいずれかと、両側辺にあるもの。(143・144)

3-5：使用痕が上辺か下辺のいずれかにのみあるもの。(145~147)

3-6：使用痕が上辺と下辺のみにあるもの。(148)

(2)弥生時代の遺物 (遺物一覧表)

弥生式土器 (第22図18~24 図版13-18~24)

18は、口縁部小破片で、外面に2本、内面に1本の沈線が横位に施される。口端部は平坦である。19~22は、体部小破片で、沈線と、縄文の磨り消しが認められる。20には、そのほかに点状の刺突文がある。23は、弥生式土器かどうか明確ではないが、体下半底部の小破片で、外体面は撚糸文、底下面には網代痕がある。24は、高坏の台部約1/2の破片で、胎土に石英粒を主とする砂粒をかなり多く含む。無文で、内外面共に、不定方向の篋などで調整である。7点共に胎土に砂粒を含み、色調は黄橙色~橙色、焼成はやや不良である。18の外表面は丹塗と思われる赤色部分が、かすかに残っている。

(3)古代の遺物 (遺物一覧表)

土師器長胴甕は、遺物一覧表にある通り合計112点で、頸部有段が4点。頸部無段のもの6点。小型甕2点。不明100点。頸部有段のものは、口縁部破片1点、頸部破片3点。頸部無段のものは、口縁部破片2点、頸体上部破片4点。段の有無不明のもの100点で、A区表土採集のもの34点は、口縁部破片1点。体部破片32点、内刷毛目を施した後に篋削りをしているもの1点。篋削り篋などを施しているもの17点。磨滅著しく調整痕の不明なもの14点である。底部破片1点である。B区表土採集のもの9点は、いずれも体部破片で、平行叩き目文を施した後に横などでしているもの2点。平行叩き目文を施した後に縦に篋削り篋などでしているもの1点。篋削り篋などを施しているもの2点。縦に刷毛目痕のあるもの1点。磨滅著しく外面調整不明のもの3点である。C区表土採集のもの16点は、口縁部破片1点。体部破片14点、内7点は外面に縦の刷毛目痕があり、他の7点は篋削り篋などで、中に磨滅著しく明確でないものもある。底部破片1点である。D区表土採集のもの1点は、体部破片1点で、外面は、縦の篋などでである。採集地点不明の表土採集のもの40点は、口端部破片3点。体部破片37点で、内外面に縦の磨きがあるもの2点。外面に縦の刷毛目痕があるもの5点。他の30点は、篋削り篋などで痕がある。

球胴甕は13点で、頸部有段が採集地点不明の表土採集のもの3点。3点共に頸・肩部小破片である。段の有無不明のもの3点は、1点が肩部破片。2点が体部破片で、3点共外面が磨滅著しく調整は不明である。かなり壁面が内湾している。C区表土採集の7点は段の有無は不明で、いずれも体部破片である。1点の外面には篋磨きが施され、6点の外面には刷毛目痕が施されている。

内黒坏16点のうち、A区表土採集の2点は、共に有段丸底で、1点は体底部破片、1点は口体部破片で、外面も黒色処理される。B区表土採集の3点は、口縁部破片。C区表土採集の3点は、口縁部1、体部1、底部1の小破片。D区表土採集の1点は、口縁部破片で外面にも磨きがある。採集地点不明の7点中、丸底の1つ(23図32 図版13—32)は、口体底1/4残存で、口体部外面は横などで、底部との境は1部に段が付く、底部は篋削り。内面の黒色は1部消えている。推定口径約11cm。器高5.2cm。他の2点は体底の小破片である。他に器形不明の体部小破片4点は、内外面共かなり磨滅している。

須恵器、壺。採集地点不明の4点のみで、口縁部1点。肩部2点。体部1点の小破片で、口縁部破片は口端が上下に強く挽き出される。肩部と体部破片は3点共外面に平行叩き目文が施され、肩部破片の1点は内面に当て工具痕がある。

須恵器坏A区出土5点は、共に酸化炎焼成で、口体部3点、底部2点で、みなろくろ使用である。B区出土3点は、共に還元炎焼成で、口縁部2点、底部1点、3点共ろくろ使用、底部破片は下面が回転糸切りである。C区表土採集の1点は、体下底部1/5残存で、回転篋切り、体

石 器 実 測 図 説 明 I

登 録 番 号	実測図 番 号	図 版 番 号	種 別	形 状	出 土 地 点	最 大 長 cm			重 量 g	調 整		材 質
						縦	横	厚 さ		a 面	b 面	
57	15-1	8-1	石 剣	—	Bb59住埋土	(15.5)	(4.0)	1.8	147.02	(両側面に打痕)		粘 板 岩
55	15-2	8-2	敲 石	—	”	(15.2)	(4.3)	4.1	327.08	—	—	”
56	15-3	8-3	”	球 形	”	9.0	7.3	6.5	630.00	(先端擦痕)	(先端打痕)	安 山 岩
58	15-4	8-4	”	—	Cc65住埋土	(7.9)	(4.3)	2.5	131.04	—	—	粘 板 岩
59	15-5	8-5	”?	長 方 形	C区表土	9.1	4.4	2.3	125.02	—	—	”
73	15-6	8-6	石 皿	—	”	(16.0)	(15.4)	2.3	798.00	擦 痕	擦 痕	安 山 岩
74	16-7	8-7	”	—	”	(9.0)	(6.2)	2.3	228.47	”	”	”
75	16-8	8-8	”	—	”	(8.2)	(7.1)	1.2	58.56	”	”	”
60	16-9	8-9	石 錘	三 角 形	”	12.9	11.9	4.6	945.00	両側部剥離	両側部剥離	流 紋 岩
61	16-10	8-10	”	四 辺 形	Da62ビット	10.6	12.6	3.1	640.00	”	”	プロビライト
64	16-11	8-11	磨 石	—	C区表土	8.1	6.4	5.1	358.18	下面擦痕	—	”
65	16-12	8-12	”	—	A区表土	6.1	6.8	4.9	279.26	”	—	”
66	16-13	8-13	”	—	”	5.5	4.0	3.2	79.48	—	—	”
62	17-14	8-14	”	三 角 形	”	12.2	11.9	4.7	830.00	下面擦痕	—	凝 灰 岩
63	17-15	8-15	”	”	”	14.8	10.1	5.3	1,140.00	”	—	プロビライト
54	17-16	8-16	舟(底) 形石器	舟 底 形	Bb59住埋土	11.3	2.0	2.5	66.40	1部両側辺	一部左辺	流 紋 岩
12	17-17	8-17	石 鏃	不 柄	A区表土	(1.2)	1.3	0.3	0.46	全辺全面	全辺全面	泥 岩
3	17-18	8-18	剥片 1-1	楕 円 形	Bb59住埋土	2.7	1.7	0.5	1.92	ほゞ全辺	両側辺	”
22	17-19	8-19	”	”	A区表土	2.2	1.2	0.4	1.06	”	ほゞ全辺	玉 ず い
6	17-20	8-20	”	”	”	4.2	2.5	0.8	7.82	両側辺	”	凝 灰 岩
11	17-21	8-21	1-2	”	”	5.1	3.3	1.0	17.46	”	両側辺	”
26	17-22	8-22	2-1	円 形	”	3.4	3.2	0.9	12.18	両側下辺	右 辺	”
30	18-23	8-23	”	楕 円 形	”	3.9	3.8	0.6	7.45	両側下辺	な し	”
68	18-24	8-24	”	”	Cc65住埋土	4.4	6.2	1.5	47.18	”	”	”
67	18-25	8-25	”	不 整 形	Bb59住埋土	3.9	4.9	0.9	19.08	”	両側辺	”
33	18-26	8-26	”	横 長	Cg62ビット	5.3	7.2	1.1	39.23	上下・左辺	な し	凝 灰 岩
29	18-27	8-27	”	縦 長	A区表土	7.1	3.3	1.5	40.06	上両側辺	上両側辺	泥 岩
27	18-28	8-28	”	”	Ce62焼土遺構	6.6	4.7	1.1	29.58	両側辺	下両側辺	”
72	18-29	9-29	”	”	Bb59住埋土	7.5	3.5	1.6	37.67	下両側辺	両側辺	”
92	18-30	9-30	”	”	”	6.2	4.5	1.3	32.65	下両側辺	(使用痕のみ)	”
16	18-31	9-31	”	”	D区表土	7.9	3.4	1.4	32.56	”	両側辺	凝 灰 岩
137	18-32	9-32	”	”	表 土	4.9	2.0	0.7	6.58	”	(使用痕のみ)	”
140	18-33	9-33	”	”	”	3.8	1.8	1.0	5.95	”	( ” )	泥 岩
119	18-34	9-34	”	台 形	C区表土	3.1	3.0	0.5	4.97	下 辺	下両側辺	凝 灰 岩
113	18-35	9-35	”	多 角 形	”	5.7	5.0	1.0	26.32	両側辺	上・右辺	”
28	18-36	9-36	2-2	横 長	A区表土	3.5	6.6	1.1	22.58	下両側辺	(使用痕のみ)	泥 岩
31	18-37	9-37	”	縦 長	Ce62焼土遺構	7.1	3.3	1.1	27.44	左 辺	下・右辺	凝 灰 岩

石 器 実 測 図 説 明 II

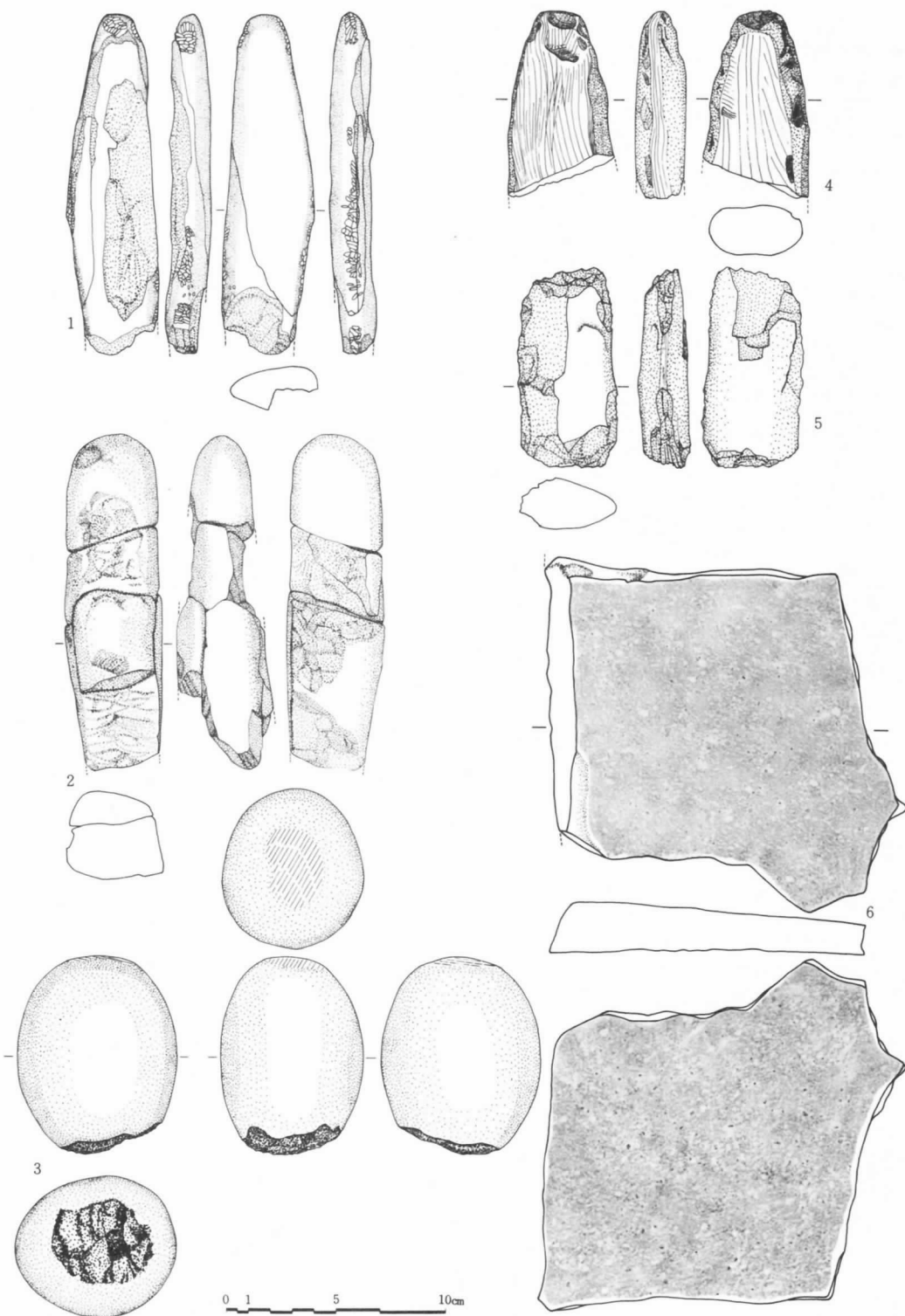
登 録 番 号	実 測 図 番 号	図 版 番 号	種 別	形 状	出 土 地 点	最 大 長 cm			重 量 g	調 整		材 質
						縦	横	厚 さ		a 面	b 面	
37	18-38	9-38	割片 2-2	縦 長	Bb59住埋土	5.2	2.8	0.9	13.14	下・右辺	(使用痕のみ)	泥 岩
21	18-39	9-39	〃	〃	C区表土	3.7	5.5	0.9	16.06	〃	( 〃 )	凝 灰 岩
5	18-40	9-40	〃	〃	A区表土	4.5	2.5	0.6	7.84	上 左 辺	( 〃 )	め の う
13	18-41	9-41	〃	〃	〃	11.8	5.0	1.6	98.40	下 右 辺	( 〃 )	泥 岩
133	18-42	9-42	〃	方 形	表土	2.0	1.9	0.7	2.97	下 左 辺	( 〃 )	〃
105	18-43	9-43	〃	縦 長	Bb59住埋土	2.8	2.1	0.6	3.77	下 右 辺	下 辺	〃
110	18-44	9-44	〃	〃	〃	3.0	2.5	0.6	5.41	上 辺	右 辺	凝 灰 岩
79	18-45	9-45	〃	〃	A区表土	3.8	2.2	1.0	8.47	下 右 辺	(使用痕のみ)	〃
89	18-46	9-46	〃	不 整 形	Ai56ピット	5.3	4.7	1.1	25.84	右 辺	下 辺	〃
85	18-47	9-47	〃	縦 長	A区表土	1.8	1.2	0.2	0.45	下・左辺	(使用痕のみ)	泥 岩
147	18-48	9-48	〃	不 整 形	Ce62焼土遺構	2.2	2.3	0.5	2.03	下・右辺	( 〃 )	〃
102	18-49	9-49	〃	〃	Ah59住埋土	4.7	5.7	0.7	19.23	下 辺	左 辺	〃
84	18-50	9-50	〃	〃	Ai56ピット	3.1	2.4	1.0	8.27	下・左辺	右 辺	〃
90	19-51	9-51	割片 2-3	〃	Bb59住埋土	5.7	5.5	1.6	60.17	上・下右辺	下・右辺	流 紋 岩
1	19-52	9-52	割片 2-4	縦 長	Ce65住埋土	7.0	5.0	1.2	44.82	両 側 辺	左 辺	凝 灰 岩
103	19-53	9-53	〃	〃	Bb59住埋土	4.2	3.9	1.0	21.26	—	両 側 辺	泥 岩
118	19-54	9-54	〃	三 角 形	C区表土	5.8	3.9	0.6	13.08	両 側 辺	左 辺	凝 灰 岩
80	19-55	9-55	〃	〃	Ai56ピット	5.1	4.8	0.7	22.64	〃	(使用痕のみ)	〃
97	19-56	9-56	〃	縦 長	Cj68溝状土壌	7.9	2.9	0.9	17.94	〃	( 〃 )	泥 岩
9	19-57	9-57	〃	〃	A区表土	7.3	2.6	0.8	16.72	〃	( 〃 )	〃
7	19-58	9-58	〃	〃	C区表土	5.9	3.4	0.9	19.56	〃	( 〃 )	〃
69	19-59	9-59	〃	〃	A区表土	8.1	4.9	1.4	51.82	〃	( 〃 )	〃
145	19-60	9-60	〃	横 長	〃	5.1	5.8	1.3	49.83	〃	( 〃 )	凝 灰 岩
15	19-61	10-61	〃	縦 長	C区表土	4.8	3.1	0.9	9.66	〃	( 〃 )	〃
14	19-62	10-62	〃	〃	〃	( 3.3 )	( 2.2 )	0.8	4.52	右 辺	右 辺	泥 岩
34	19-63	10-63	〃	〃	Cg62ピット	5.8	3.5	0.6	12.15	両 側 辺	(使用痕のみ)	凝 灰 岩
71	19-64	10-64	〃	横 長	A区表土	4.2	4.5	1.0	18.27	〃	( 〃 )	〃
19	19-65	10-65	〃	縦 長	Ch65ピット2	3.9	3.0	0.8	9.84	〃	( 〃 )	泥 岩
148	19-66	10-66	〃	不 整 形	Ce62焼土遺構	2.7	2.1	0.5	2.43	右 辺	右 辺	〃
25	19-67	10-67	〃	縦 長	A区表土	2.8	2.1	0.7	4.48	両 側 辺	〃	〃
108	19-68	10-68	〃	〃	Bj62ピット	3.6	2.4	0.9	6.86	(使用痕のみ)	両 側 辺	凝 灰 岩
18	19-69	10-69	〃	〃	C区表土	5.7	3.2	0.9	13.54	両 側 辺	(使用痕のみ)	泥 岩
24	19-70	10-70	〃	ナイフ形?	Ai56ピット	3.5	0.7	0.3	1.36	〃	両 側 辺	〃
43	19-71	10-71	割片 2-5	縦長?	Bb59住埋土	( 2.8 )	( 3.2 )	0.5	6.28	右 辺	(使用痕のみ)	〃
20	19-72	10-72	〃	〃	Da65ピット	( 2.8 )	2.6	0.5	3.69	〃	( 〃 )	〃
45	19-73	10-73	〃	〃	Bb59住埋土	4.0	3.1	0.5	8.42	(使用痕のみ)	右 辺	凝 灰 岩
78	19-74	10-74	〃	〃	A区表土	4.2	3.0	0.6	6.25	右 辺	(使用痕のみ)	泥 岩

石 器 実 測 図 説 明 III

登 録 番 号	実測図 番 号	図 版 番 号	種 別	形 状	出 土 地 点	最 大 長 cm			重 量 g	調 整		材 質
						縦	横	厚 さ		a 面	b 面	
2	19-75	10-75	割2-片5	縦 長	Cc65住埋土	4.5	1.4	0.7	4.93	右 辺	(使用痕のみ)	泥 岩
36	19-76	10-76	〃	〃	Cc62ピット	3.3	2.0	0.4	3.94	(使用痕のみ)	左 辺	〃
96	19-77	10-77	〃	〃	Cb68ピット	4.1	2.1	0.7	6.04	右 辺	(使用痕のみ)	〃
126	19-78	10-78	〃	不整形	C区表土	2.5	2.0	0.4	1.95	左 辺	( 〃 )	〃
121	19-79	10-79	〃	四辺形	〃	2.5	2.9	1.6	10.95	右 辺	左 辺	〃
136	19-80	10-80	〃	横 長	表 土	2.4	3.7	1.0	10.53	(使用痕のみ)	右 辺	凝 灰 岩
146	19-81	10-81	〃	不整形	Cd59ピット	3.4	3.8	0.9	12.16	( 〃 )	〃	泥 岩
122	19-82	10-82	〃	横 長	C区表土	2.8	4.2	1.0	12.58	左 辺	(使用痕のみ)	凝 灰 岩
107	19-83	10-83	〃	四辺形	Bb59住埋土	3.4	3.6	0.5	6.62	右 辺	( 〃 )	泥 岩
17	20-84	10-84	〃	縦 長	Cc65溝状土壌	5.0	3.5	1.0	20.88	左 辺	( 〃 )	〃
32	20-85	10-85	〃	〃	Ch59ピット	6.2	3.5	0.7	17.06	〃	右 辺	〃
35	20-86	10-86	〃	〃	Cg62ピット	7.2	4.3	1.5	41.68	右 辺	左 辺	凝 灰 岩
51	20-87	10-87	〃	〃	Ce62焼土遺構	5.3	3.5	0.6	12.48	〃	(使用痕のみ)	〃
128	20-88	10-88	〃	〃	C区表土	8.1	6.6	1.0	50.13	(使用痕のみ)	左 辺	泥 岩
46	20-89	10-89	〃	不整形	Ai56ピット	3.7	1.9	1.2	7.76	左 辺	(使用痕のみ)	〃
81	20-90	10-90	〃	縦 長	Cc65溝状土壌	1.6	1.4	0.3	0.82	右 辺	( 〃 )	凝 灰 岩
77	20-91	10-91	割2-片6	〃	A区表土	4.4	2.3	1.0	7.76	(使用痕のみ)	上・下辺	〃
39	20-92	10-92	割2-片7	不整形	Bb59住埋土	3.1	3.1	0.5	4.96	下 辺	(使用痕のみ)	泥 岩
93	20-93	10-93	〃	縦 長	〃	4.3	2.4	0.4	4.06	〃	( 〃 )	〃
95	20-94	10-94	〃	四辺形	〃	2.4	2.1	0.9	4.36	(使用痕のみ)	下 辺	〃
142	20-95	10-95	〃	不整形	表 土	4.0	2.5	0.4	3.68	下 辺	(使用痕のみ)	〃
23	20-96	10-96	〃	台 形	C区表土	3.3	3.4	0.9	11.46	〃	( 〃 )	凝 灰 岩
4	20-97	10-97	〃	〃	A区表土	2.3	4.0	0.9	9.63	〃	( 〃 )	泥 岩
111	20-98	10-98	〃	不整形	C区表土	3.1	4.3	1.2	16.07	〃	( 〃 )	〃
8	20-99	10-99	〃	〃	〃	5.6	3.7	1.0	23.36	上 辺	( 〃 )	凝 灰 岩
70	20-100	10-100	〃	横 長	Cc62ピット	3.8	7.3	1.2	42.28	下 辺	( 〃 )	〃
10	20-101	10-101	〃	〃	Da65ピット	6.8	3.0	0.7	20.86	〃	( 〃 )	〃
117	20-102	10-102	〃	縦 長	C区表土	5.2	4.2	1.2	25.14	〃	下 辺	〃
44	20-103	10-103	〃	不整形	Bb59住埋土	4.8	4.3	0.9	14.08	〃	〃	〃
104	20-104	10-104	〃	〃	Ah59住埋土	4.9	6.4	1.1	44.78	〃	(使用痕のみ)	〃
125	20-105	10-105	〃	〃	C区表土	5.8	7.2	1.7	72.96	〃	( 〃 )	泥 岩
82	21-106	11-106	割3-片1	〃	Cc65溝状土壌	5.0	4.3	1.1	21.96	(使用痕のみ)	( 〃 )	〃
129	21-107	11-107	〃	三角形	D区表土	5.2	2.8	0.8	16.28	( 〃 )	( 〃 )	〃
130	21-108	11-108	〃	〃	〃	4.5	2.2	0.7	8.02	( 〃 )	( 〃 )	〃
149	21-109	11-109	〃	四辺形	表 土	8.4	4.5	1.7	47.36	( 〃 )	( 〃 )	〃
98	21-110	11-110	〃	〃	Cg65ピット1	3.9	2.6	0.8	6.43	( 〃 )	( 〃 )	〃
47	21-111	11-111	〃	縦 長	表 土	5.4	2.3	0.9	8.08	( 〃 )	( 〃 )	凝 灰 岩

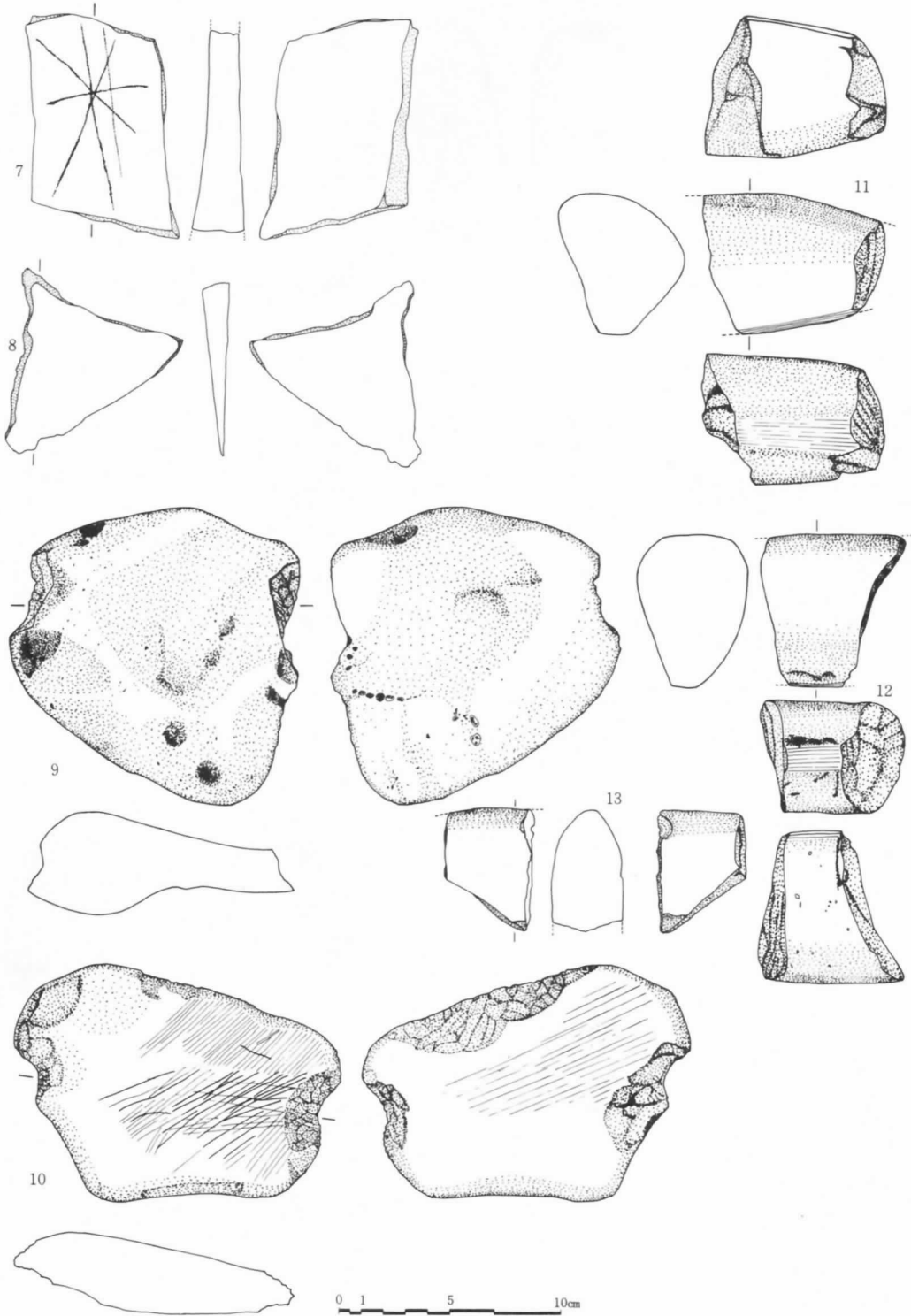
石 器 実 測 図 説 明 IV

登 録 番 号	実測図 番 号	図 版 番 号	種 別	形 状	出 土 地 点	最 大 長 cm			重 量 g	調 整		材 質
						縦	横	厚 さ		a 面	b 面	
100	21-112	11-112	剥3-片1	縦 長	Ci62ピット	5.0	2.8	0.9	14.14	(使用痕のみ)	(使用痕のみ)	凝 灰 岩
141	21-113	11-113	"	"	表 土	3.7	1.3	0.5	3.36	( " )	( " )	泥 岩
50	21-114	11-114	"	"	Cc65住埋土	8.0	4.2	1.6	35.56	( " )	( " )	凝 灰 岩
76	21-115	11-115	"	"	A区表土	4.8	2.4	0.4	5.93	( " )	( " )	"
109	21-116	11-116	"	"	Bb59住埋土	3.1	2.4	0.4	3.16	な し	( " )	"
94	21-117	11-117	"	不整形	"	5.1	4.6	1.1	19.53	(使用痕のみ)	( " )	泥 岩
135	21-118	11-118	"	四辺形	表 土	3.3	3.5	1.2	14.64	( " )	( " )	"
112	21-119	11-119	"	横 長	C区表土	2.8	4.3	0.6	6.65	( " )	な し	"
139	21-120	11-120	剥3-片2	縦 長	表 土	5.1	3.3	1.0	14.72	( " )	"	凝 灰 岩
99	21-121	11-121	"	"	B区表土	4.0	2.8	1.3	20.92	( " )	(使用痕のみ)	"
86	21-122	11-122	"	四辺形	Bj62ピット	4.4	3.9	1.2	19.82	( " )	( " )	"
87	21-123	11-123	"	縦 長	"	6.5	2.8	1.0	16.42	な し	( " )	"
115	21-124	11-124	"	不整形	C区表土	2.9	2.4	0.5	3.42	(使用痕のみ)	( " )	"
123	21-125	11-125	"	"	"	3.1	2.3	0.8	5.78	( " )	( " )	泥 岩
48	21-126	11-126	"	縦 長	表 土	6.0	3.9	0.5	11.32	( " )	( " )	凝 灰 岩
52	21-127	11-127	"	不整形	Ah59住埋土	4.0	4.0	1.5	22.45	( " )	( " )	"
91	21-128	11-128	"	横 長	Bb59住埋土	3.6	5.5	1.5	35.58	( " )	( " )	泥 岩
114	21-129	11-129	"	不整形	C区表土	5.7	5.2	1.1	26.72	( " )	( " )	凝 灰 岩
131	21-130	11-130	"	"	表 土	4.8	4.6	1.4	29.04	( " )	( " )	泥 岩
53	21-131	11-131	"	縦 長	Cc65住埋土	3.3	2.0	0.8	6.72	( " )	( " )	"
127	21-132	11-132	"	"	C区表土	3.4	2.3	0.6	4.24	( " )	( " )	"
134	21-133	11-133	"	四辺形	表 土	2.9	2.9	0.8	6.48	( " )	( " )	"
40	21-134	11-134	"	不整形	Bb59住埋土	3.0	3.4	0.9	5.93	( " )	( " )	凝 灰 岩
132	21-135	11-135	"	縦 長	表 土	5.1	2.2	0.7	6.24	( " )	( " )	泥 岩
143	21-136	12-136	剥3-片3	三角形	"	2.6	2.4	0.3	1.89	( " )	( " )	"
41	21-137	12-137	"	縦 長	Bb59住埋土	5.6	3.8	0.7	17.56	( " )	( " )	"
106	21-138	12-138	"	"	"	4.7	3.3	1.0	15.53	( " )	( " )	"
49	21-139	12-139	"	"	A区表土	5.2	3.3	1.2	14.26	( " )	( " )	"
38	22-140	12-140	"	"	Bb59住埋土	5.5	3.7	0.9	19.81	( " )	( " )	凝 灰 岩
101	22-141	12-141	"	"	"	5.5	3.3	1.0	16.92	( " )	( " )	"
124	22-142	12-142	"	"	C区表土	5.3	3.8	1.1	25.36	( " )	( " )	泥 岩
120	22-143	12-143	剥3-片4	"	"	4.4	4.7	1.3	23.76	( " )	( " )	"
138	22-144	12-144	"	不整形	表 土	4.1	4.2	0.6	11.32	( " )	( " )	"
88	22-145	12-145	剥3-片5	縦 長	Bb59住埋土	3.4	2.2	1.1	7.30	( " )	な し	"
116	22-146	12-146	"	不整形	C区表土	1.9	1.9	0.3	1.98	( " )	(使用痕のみ)	"
42	22-147	12-147	"	縦 長	Cb59ピット	6.6	2.9	0.7	16.04	な し	( " )	凝 灰 岩
83	22-148	12-148	剥3-片6	"	Ai56ピット	3.2	2.9	0.3	3.12	(使用痕のみ)	( " )	"

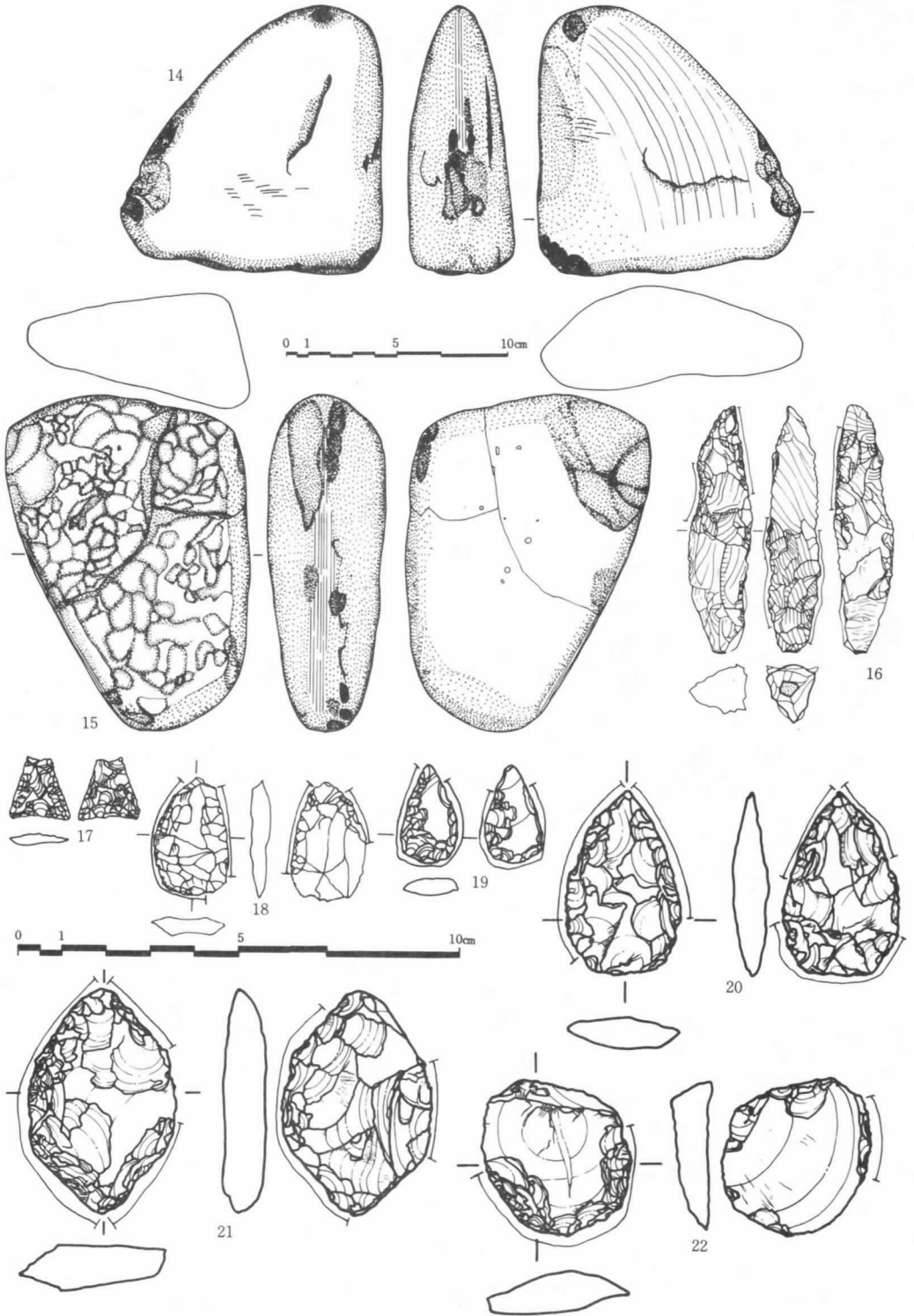


第15図 石器実測図 I





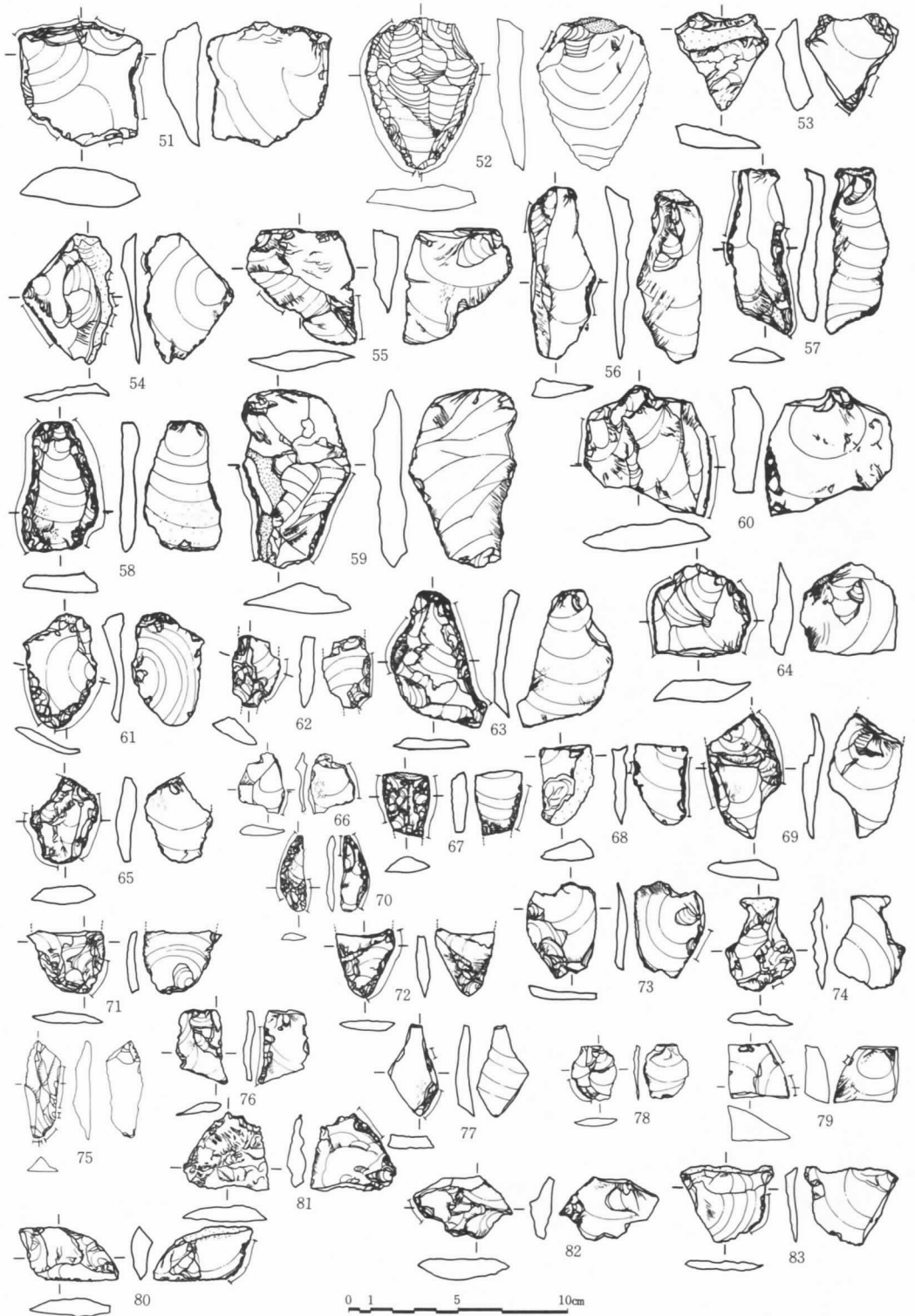
第16図 石器実測図II



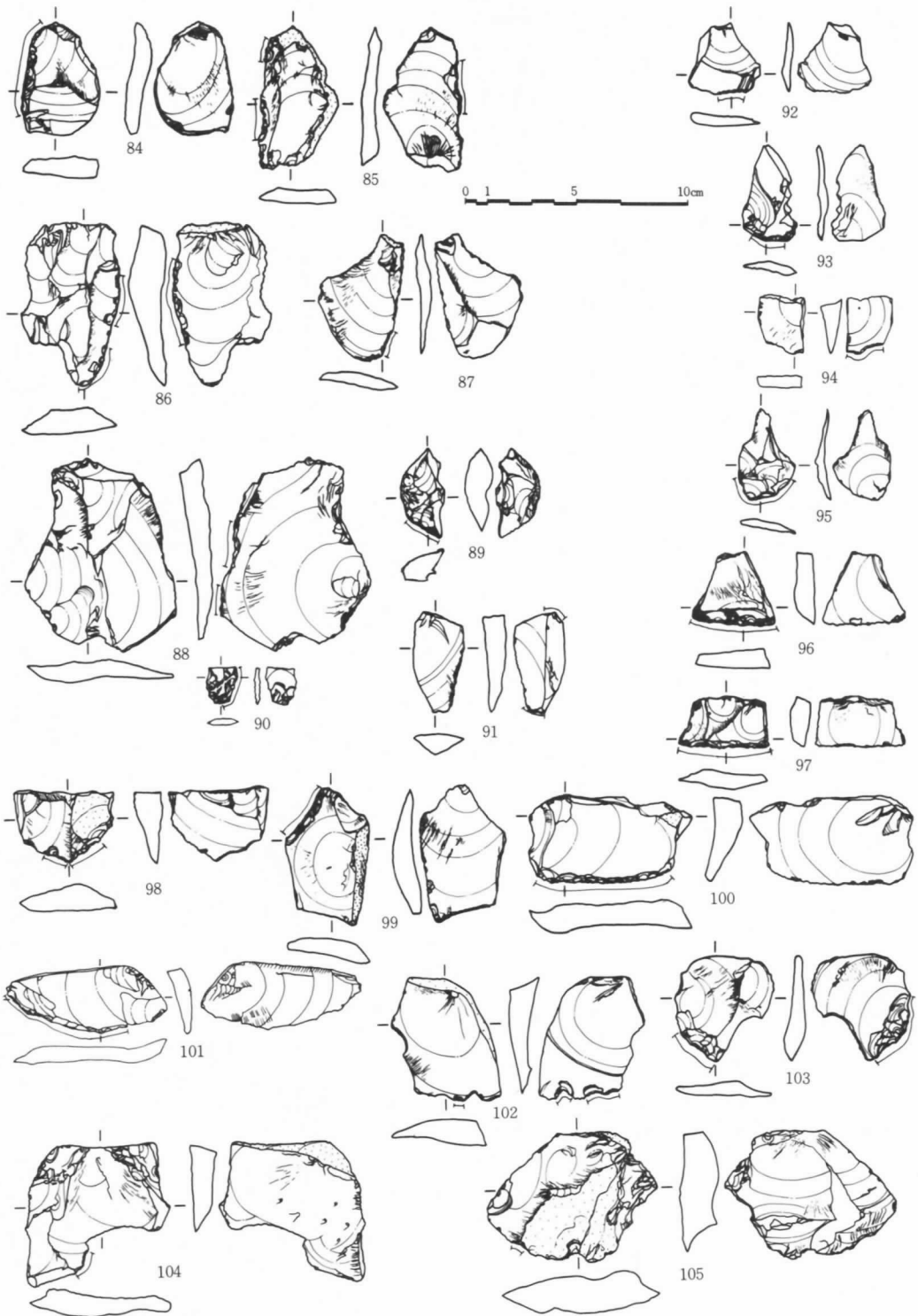
第17図 石器実測図Ⅲ



第18图 剥片石器实测图 I



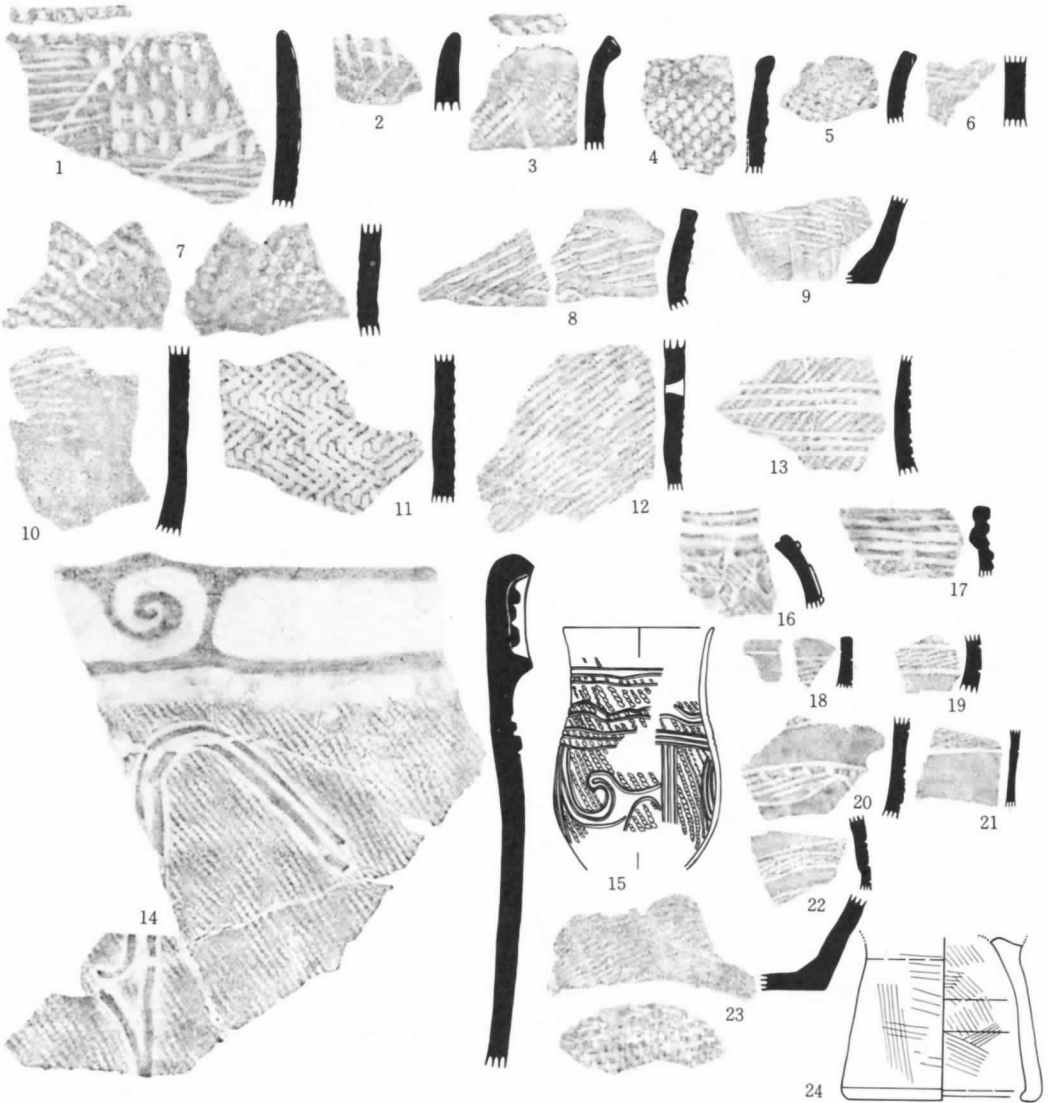
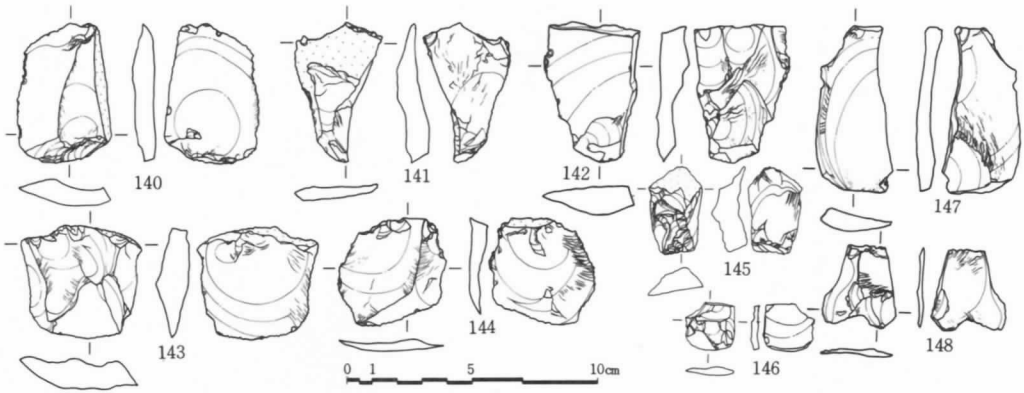
第19図 剝片石器実測図II



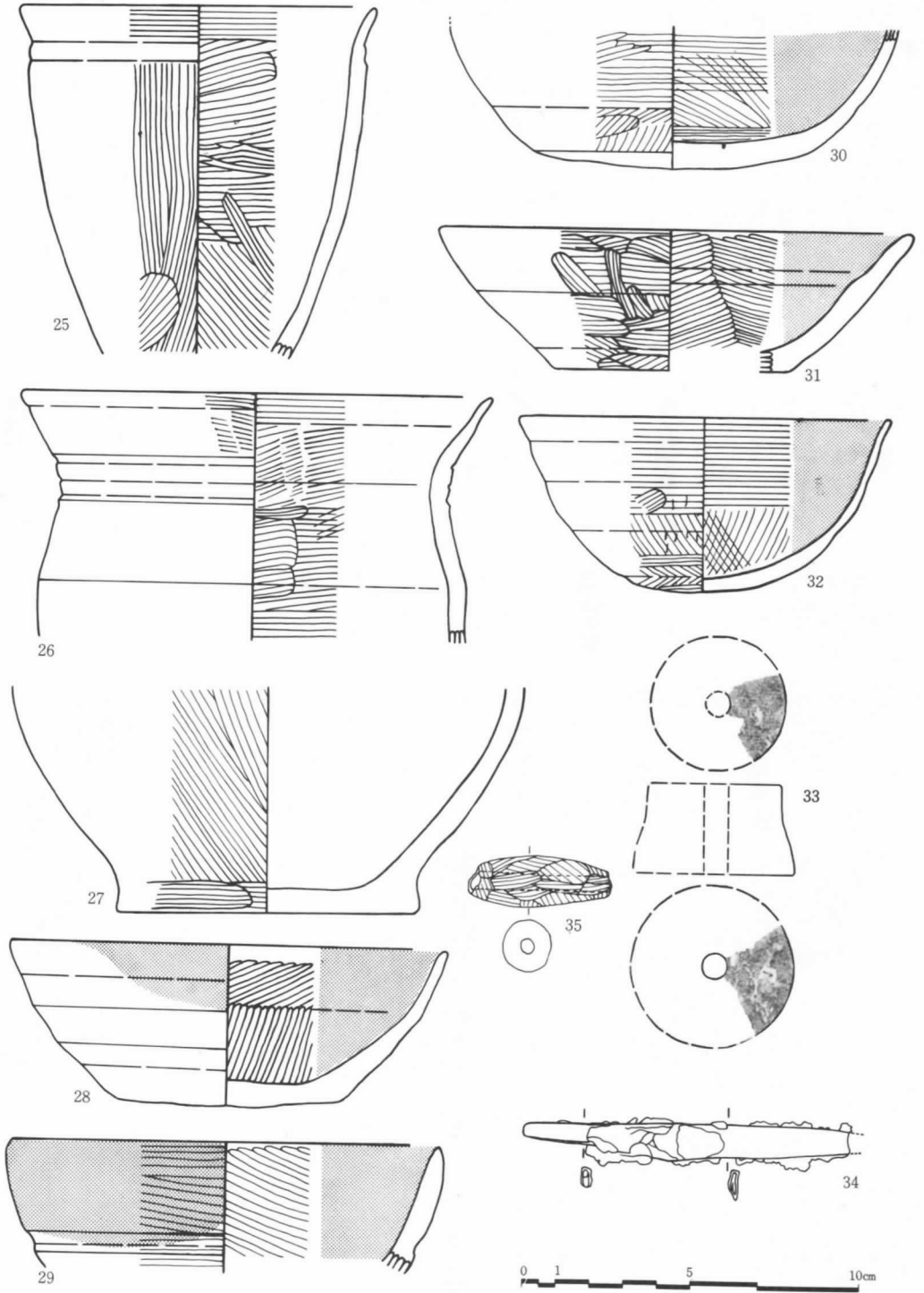
第20図 剝片石器実測図Ⅲ



第21图 剥片石器实测图Ⅳ



第22図 剝片石器実測図V・土器実測図



第23図 土器・鉄器実測図





部外面に火禱の痕がある。採集地点不明の3点は、共に還元炎焼成で、体部破片2点、体下底部破片1点である。みなろくろなで成形。底部破片の下面は磨滅著しく切り離し痕は明確でない。

土錘 (23図35 図版13—35) 長さ4.2cm、最大径1.5cm、孔径0.4cm。C a 区表土出土。

## V まとめ

当調査地区から発見された遺構と遺物は、住居跡3棟、フラスコまたはピーカー形のピット33基。陥し穴状遺構といわれる溝状の土壌11基。土壌3基。焼土遺構8基。及び、縄文土器193点。旧石器と考えられるものを含む石器148点+ $\alpha$ 。弥生式土器と思われるもの7点。土師器甕483点。土師器内黒坏55点。須恵器壺58点。須恵器坏37点。土師質の高坏1点。紡錘車1点。刀子2点である。

旧石器との教示をうけた石器は、舟底形、或は舟形石器や、剝片石器中のいずれかと思われる。剝片石器には縄文早期のものと思われるものが、かなり含まれており、その区別は明確になし得ない。搔器や彫器、削器といわれているものと思われる。

縄文時代の遺構は、ピットと溝状土壌の大部分と、焼土遺構の1部と思われる。ピットの中で、Bj 62, Ca 65, Cb 62等は、包蔵された遺物が古代のものが多く、古代の住居跡の存在した頃に造られて使用されたか、縄文時代につくられたものを再利用したかと思われる。

フラスコ形、或はピーカー形のピットは、底面の状態が、中央に小ピットのあるもの、周溝のあるもの。中央から周縁に溝が造られているもの。周縁に小ピットのあるもの。平坦であるものが認められる。また、2つのピットが重複しているものが、2ヶ所にみられ、Cg 56については、底面や堆積土に明確な新旧関係を示すものはなく、Da 65とDb 65については、底面のレベルと堆積土に若干の相違があり、Da 65が新しいのではないと思われる。

溝状土壌は、遺物の包含層が上部で、年代決定資料にはならないが、他遺跡の例により、縄文時代ではないかと判断した。長軸方向が、等高線と平行するのが、Af 65, Bb 68, Cg 62, Cg 65の各遺構。ほぼ直行するのがAj 62, Cc 65, Cd 65, Ce 68, Cg 68, Ch 68, Ci 68の各遺構である。Ci 68については、溝状ではあるが、平面形や断面形、短軸の長さ等が他の溝状土壌と異なっており、性格が違うのではないかとと思われるが、東半分が路線外で全体の形状が不明のため、この項目に入れた。

焼土遺構では、焼土層の中に縄文土器のみを包含しているCe 68が、縄文時代と判断した。路線境でCe 68溝状土壌の北壁を切っているようにみえるが、明確でない。出土した縄文土器片中2点 (22図13・16 図版13—13・16) は、中期と思われる。

縄文時代の遺物は、早期 (22図1～7・10 図版12—1～7・10) とと思われる土器片が8点

と、明確でないがそれらしいもの若干が出土している。早期末か前期と思われる繊維を含んだ体部土器片（22図11・12 図版12—11・12）が36点出土している。中期（22図13～16 図版13—13～16）と思われる土器は、Ce 62, Ce 68の2焼土遺構とCc 65住居跡から出土している。Cc 65住居跡の貯蔵穴状ピットは、Cd 65溝状土壌を切って造られており、そこから出土（22図15 図版13—15）している。晩期（22図17 図版13—17）と思われる破片は1点で、A区表土から出土した。

弥生時代と思われる遺構は確認されず、遺物のみが、A区表土から7点（22図18—24 図版18—24）出土している。いずれも石英粒を主とする砂粒をかなり含んだ破片で、口縁部1点、体部4点、体下底部1点、台部1点である。

古代と思われる遺構は、住居跡3棟と、1部のピット・焼土遺構・土壌である。

Ah 59住居跡は、北壁中央にかまどが設けられ、球胴の甕や、ろくろ使用前の丸底の内黒坏、高坏の底・台部が出土している。

Bb 59住居跡は、東壁中央にかまどが設けられ、頸部有段の長胴・球胴の甕も出土しているが、須恵器の壺、坏が出土し、坏は酸化炎焼成で回転篋切りである。

Cc 65住居跡は、南東壁中央にかまどが設けられ、球胴の甕や、外壁有段で丸底のろくろ使用前の内黒坏が出土している。

以上の事から、Ah 59, Cc 65の各住居跡は、ろくろ使用前の住居跡、Bb 59住居跡は、ろくろ使用期の住居跡と思われ、前者の2住居跡出土の内黒坏は、国分寺下層期の内黒坏に類似する点があり8世紀前後と思われる。後者の住居跡出土の須恵器坏は、底部と体部との境がはっきりせず丸味をもっており、調整が行なわれていない点やはり8世紀前後と思われるが、前者より後者の方が、若干時代が新しくなるのではないかと思われる。

古代と思われる1部のピットは、Bj 62, Ca 65, Cb 62の各ピット等で、3者は他のピットより浅く、Bj 62ピットは中央に小ピットがあり、縄文期のピットに類似するが、3者共に古代の遺物を堆積土下層に包含している。遺物は、Bj 62ピット出土のものが、外面にも刷毛目痕のある長胴有段の甕や、体部外面や底部下面に手持ち篋削り調整のある内黒坏（23図31 図版13—31）、体底境が丸味のある還元炎焼成の須恵器坏等がある。Ca 65ピットのもの小破片で、遺物一覧表の通り甕の破片43点、内黒坏1点、須恵器坏2点である。Cb 62ピットのものは、長胴有段の甕（23図25 図版13—25）。球胴有段の甕（23図26 図版13—26）。内黒坏（23図28 図版13—28）は、体部外面や底部下面が篋削りで、他に丸底風のものや、底部下面に刷毛目痕のあるものがみられる。また、土製の紡錘車破片（23図33 図版13—33）が出土している。

古代と思われる焼土遺構は、Ce 62とCh 62の2焼土遺構である。Ce 62焼土遺構は、Cc 65住居跡の南西側にあり、長胴甕15点や、球胴甕（23図27 図版13—27）1点。内黒坏3点が出土

している。Ch 62焼土遺構からは、長胴甕2点が出土している。

古代と思われる土壌は、Ae 56土壌が長方形で、浅い。東壁下南寄り底面近くから刀子(23図版32 図版13—34)は、平造り平棟で、古代刀の特色がみられる。

溝No.1とNo.2は、最近造られた様な状態で、堆積土はほとんどなかった。

年代不明の遺構は、焼土遺構5基と、土壌2基である。焼土遺構は、Af 53、Af 56、Af 59、Af 62、Af 65で、いずれの焼土も、締りの状態、粘性、色調が類似し、同地区に集中している。Af 53焼土は溝No.1に切られているが、年代決定の資料にはならない。

土壌2基は、Cc 62とDb 65で、ほゞ同じ様な規模である。Cc 62土壌は、Cc 62ピットの東端部を切っているが、年代決定資料にはならず、遺物も出土しなかった。

小ピット Ad 59ピット底面、Af 59焼土遺構からAh62ピットにかけて、Bb 59住居跡の西隣り、Da 62ピットからDc 62ピットとDb 65土壌にかけて存在する小ピットで、壁面がかなり屈曲するものや、下部側面で連絡するもの等があり、木根跡と思われる。

#### 参 考 文 献

- 「日本の旧石器」(4)ほか 『考古学ジャーナル』 5月号ほか 芹沢長介 1967
- 「図録 石器の基礎知識」I 加藤晋平・鶴丸俊明 柏書房 1980
- 「大平山元II遺跡発掘調査報告書」 青森県立郷土館 昭和55
- 「大台野遺跡」 湯田町教育委員会 昭和50
- 「岩手県蛇王洞洞穴」 『石器時代』 第7号 芹沢長介・林謙作 昭和40
- 「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」 『物質文化』 27 今村啓爾 1976
- 「都南村湯沢遺跡」 (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和53
- 「弥生土器」 日本の美術125 佐原 真 至文堂 昭和51
- 「須恵器」 日本の美術170 八賀 晋 至文堂 昭和55
- 「刀剣のみかた」 <技術と流派> 広井雄一 第一法規 昭和46
- 「東北土師器の型式分類とその編年」 『歴史』 第14輯 氏家和典
- 「多賀城周辺における古代埴形土器の変遷」 『研究紀要』 I 岡田・桑原 宮城県多賀城跡調査研究所 1974
- 「胆沢城跡」 昭和51年度発掘調査概報 水沢教育委員会 1977
- 「北奥古代文化」 第4号 特集奥羽土師文化論 北奥古代文化研究会 昭和47

付記 旧石器について、小林達雄氏・林謙作氏・菊池強一氏からご教示を賜わった。

写 真 图 版

写真図版目次（藤沢）

Ah 59 住居跡・同出土遺跡……………	図版 1	石器 I ……………	図版 8
Bb 59 住居跡・同出土遺物……………	図版 2	石器 II ……………	図版 9
Cc 65 住居跡・同出土遺物……………	図版 3	石器 III ……………	図版 10
ピット I ……………	図版 4	石器 IV ……………	図版 11
ピット II ……………	図版 5	石器 V・土器 I ……………	図版 12
ピット III・構状土壌……………	図版 6	土器 II・鉄器……………	図版 13
溝状土壌 II・土壌・焼土遺構……………	図版 7	深掘り・全景……………	図版 14

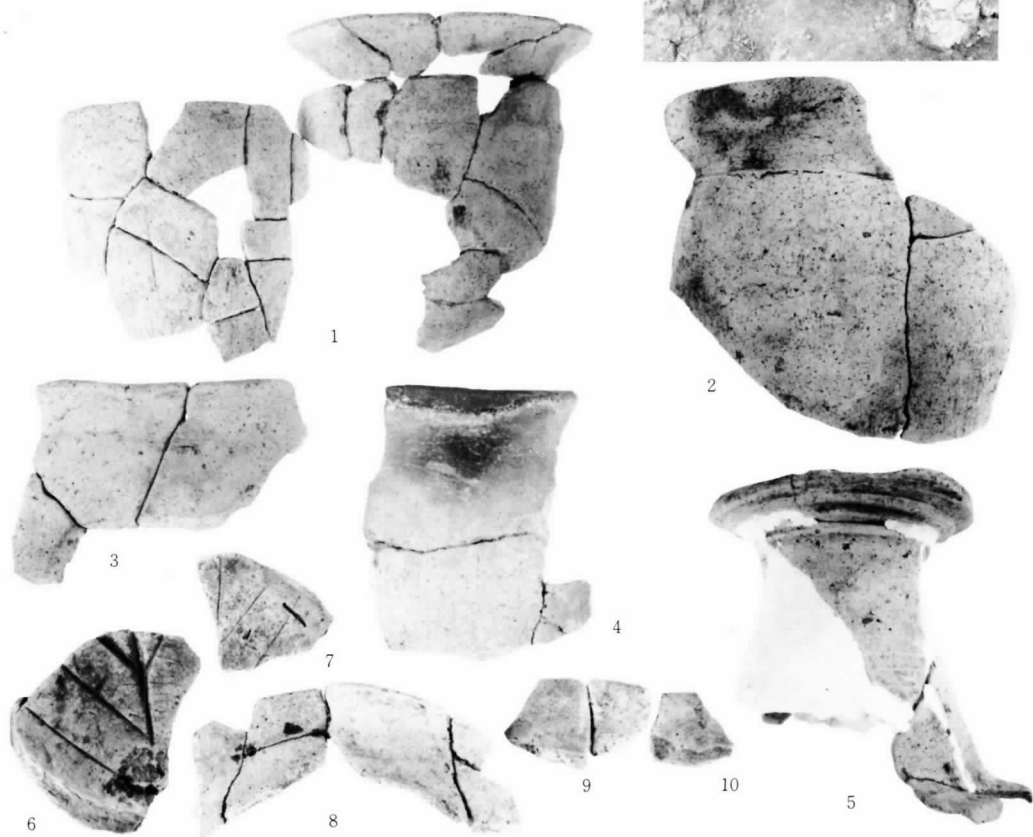
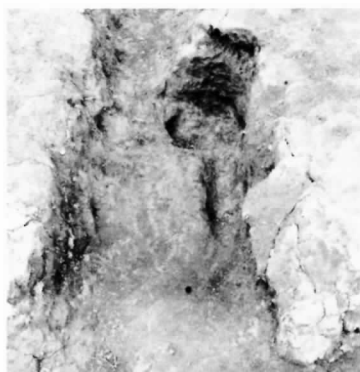
(南から)



煙道煙出(右が北)



煙道煙出(上が北)



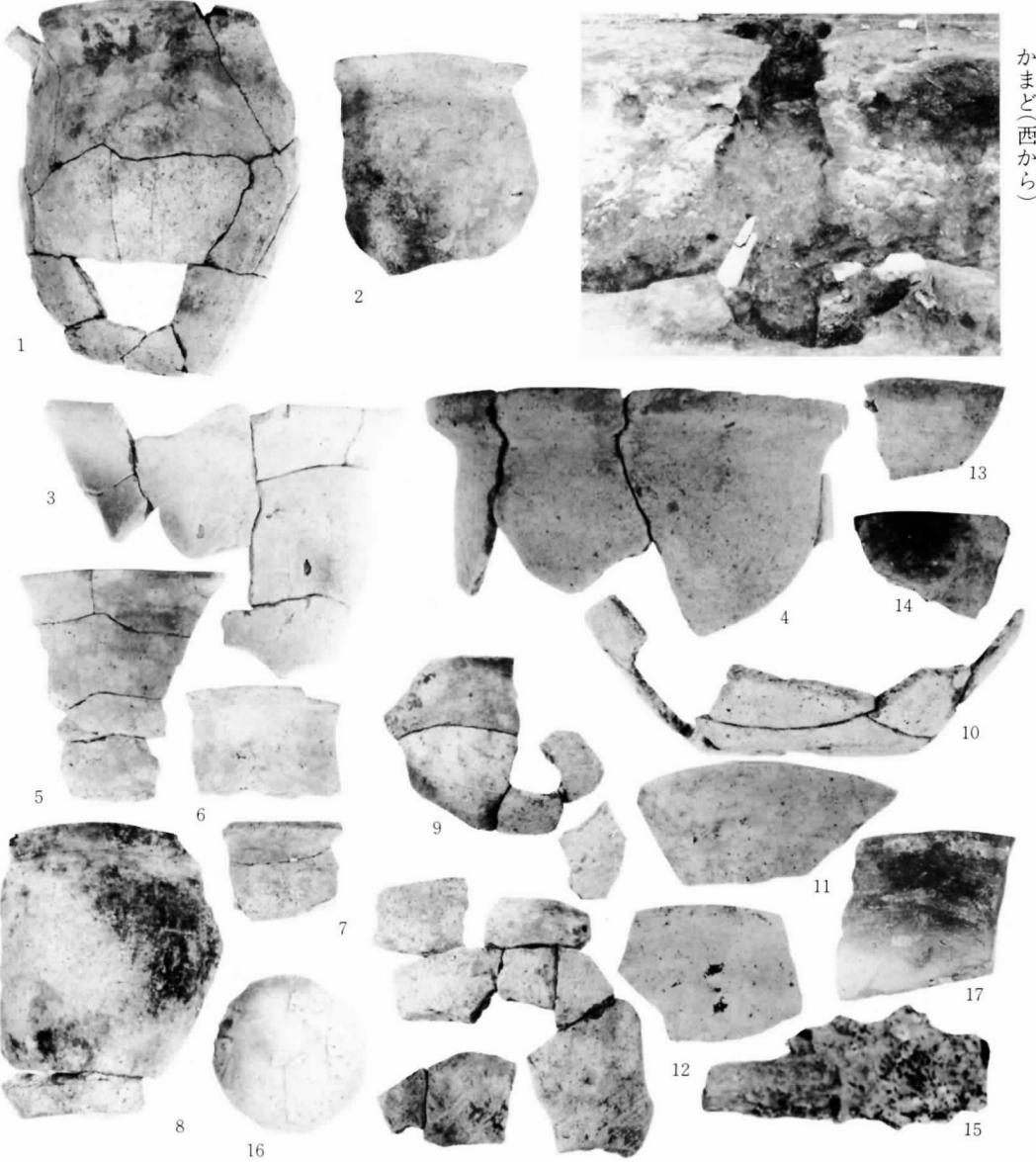
1・2：長胴甕	5：高坏	8～10：甕口縁部
3・4：球胴甕	6・7：甕底下面	6～10：甕底部ほか(実測図なし)

図版 I Ah59住居跡・同出土遺物

(東から)



かまど(西から)



1 ~ 9 : 甕      15 : 刀子      17 : 内黒坏破片 (実測図なし)  
10 ~ 14 : 坏      16 : 甕底部 (実測図なし)

図版 2 Bb59住居跡・同出土遺物



(西から)



1・5：長胴甕      4・7・8：内黒坏  
2・3・6：球胴甕      5～8：実測不能  
図版3 Cc65住居跡・同出土遺物

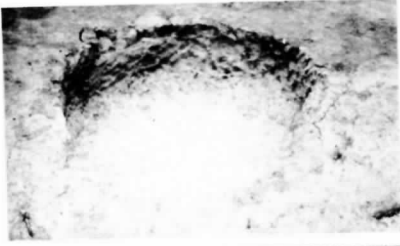
Ad56  
ピット



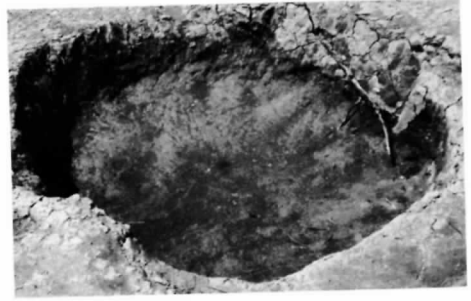
Ad59  
ピット



Ag56  
ピット



Ai56  
ピット



Bj62  
ピット



Ca65  
ピット



Cb62  
ピット



Cc62  
ピット  
右はCc62  
土壌



Cb68  
土壌群

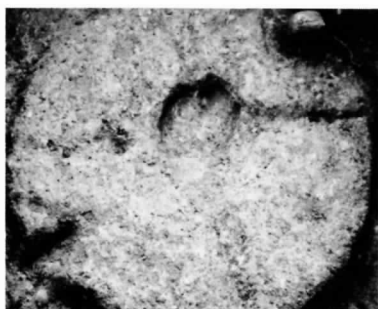


図版4 ピット I

Cd59  
ピット



Cd59  
ピット  
底面

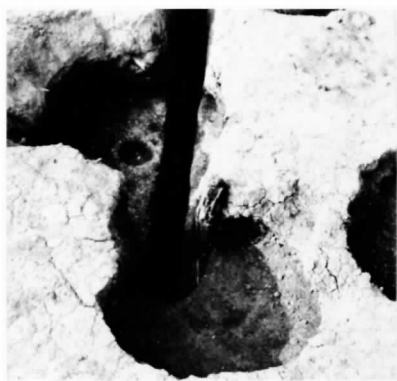


Cc59  
ピット



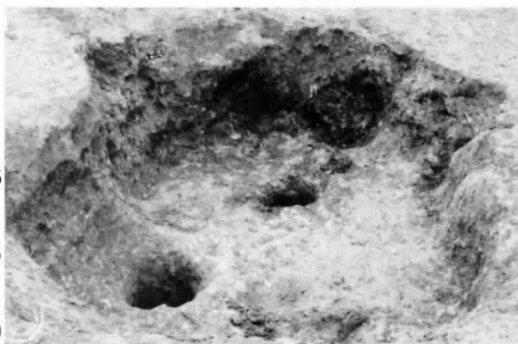
Cg62  
ピット

Cg65  
ピット  
No. 1



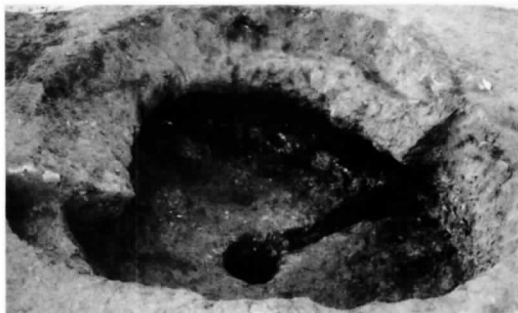
左上Cf65  
ピット  
中Cf65  
溝状土壌  
下Cg65  
ピットNo. 2

上Cg56  
ピット  
No. 2  
下Cg56  
ピット  
No. 1  
(北から)

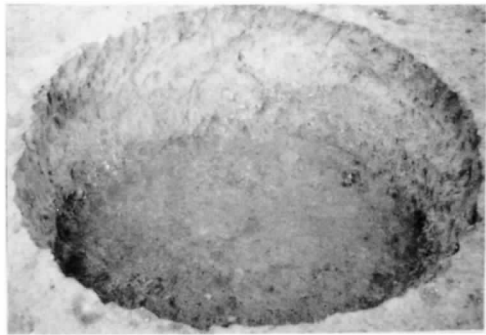


Ch59  
ピット

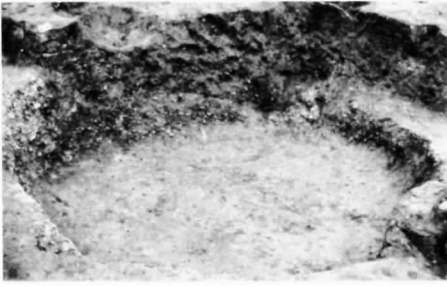
Ch62  
ピット



Ci62  
ピット



Da62  
ピット



Da65  
ピット



Db62  
ピット



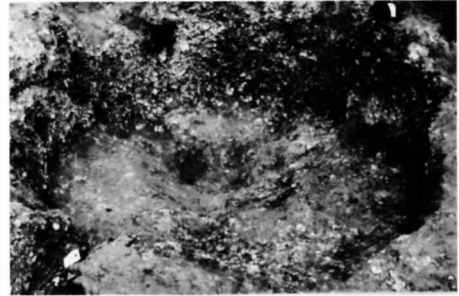
Db65  
ピット



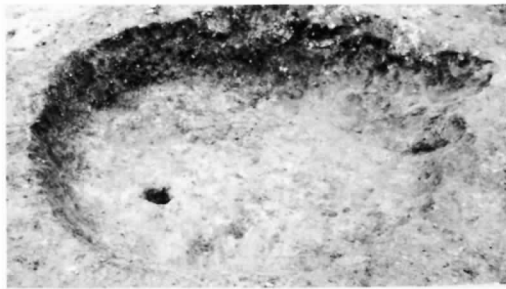
Dc62  
ピット



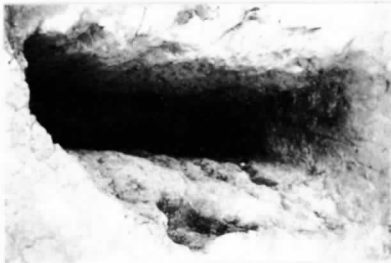
Dc65  
ピット



Dd62  
ピット



Ce68  
溝状土壌



Cc65溝状土壌



Cd65溝状土壌



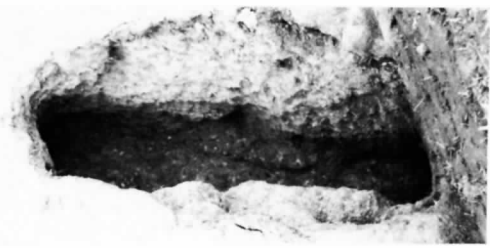
図版 6 ピット III ・ 溝状土壌 I



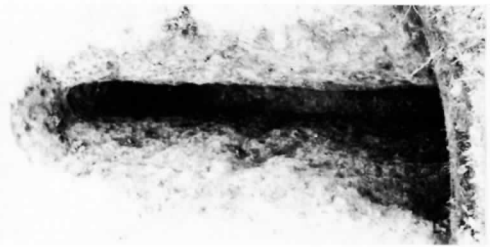
Cg62  
溝状土壙



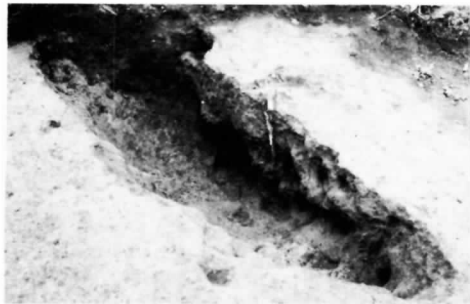
Cg65溝状土壙



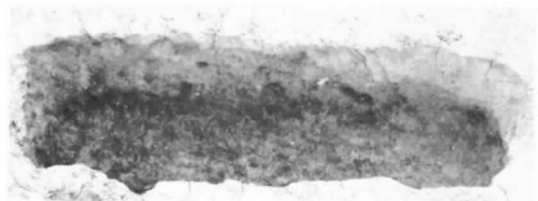
Cg68  
溝状土壙



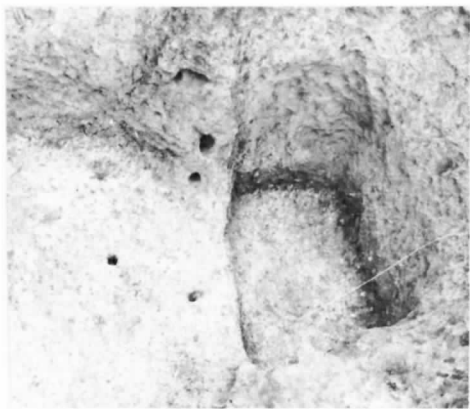
Ch68  
溝状土壙



Ci68  
溝状土壙



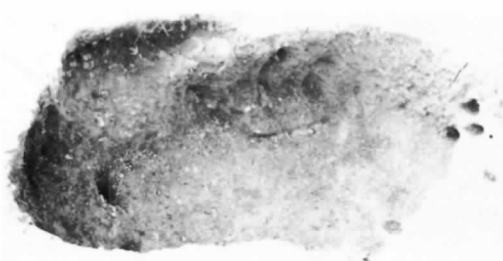
Ae56  
土壙



右Ce62  
土壙  
(右)



Dh65  
土壙

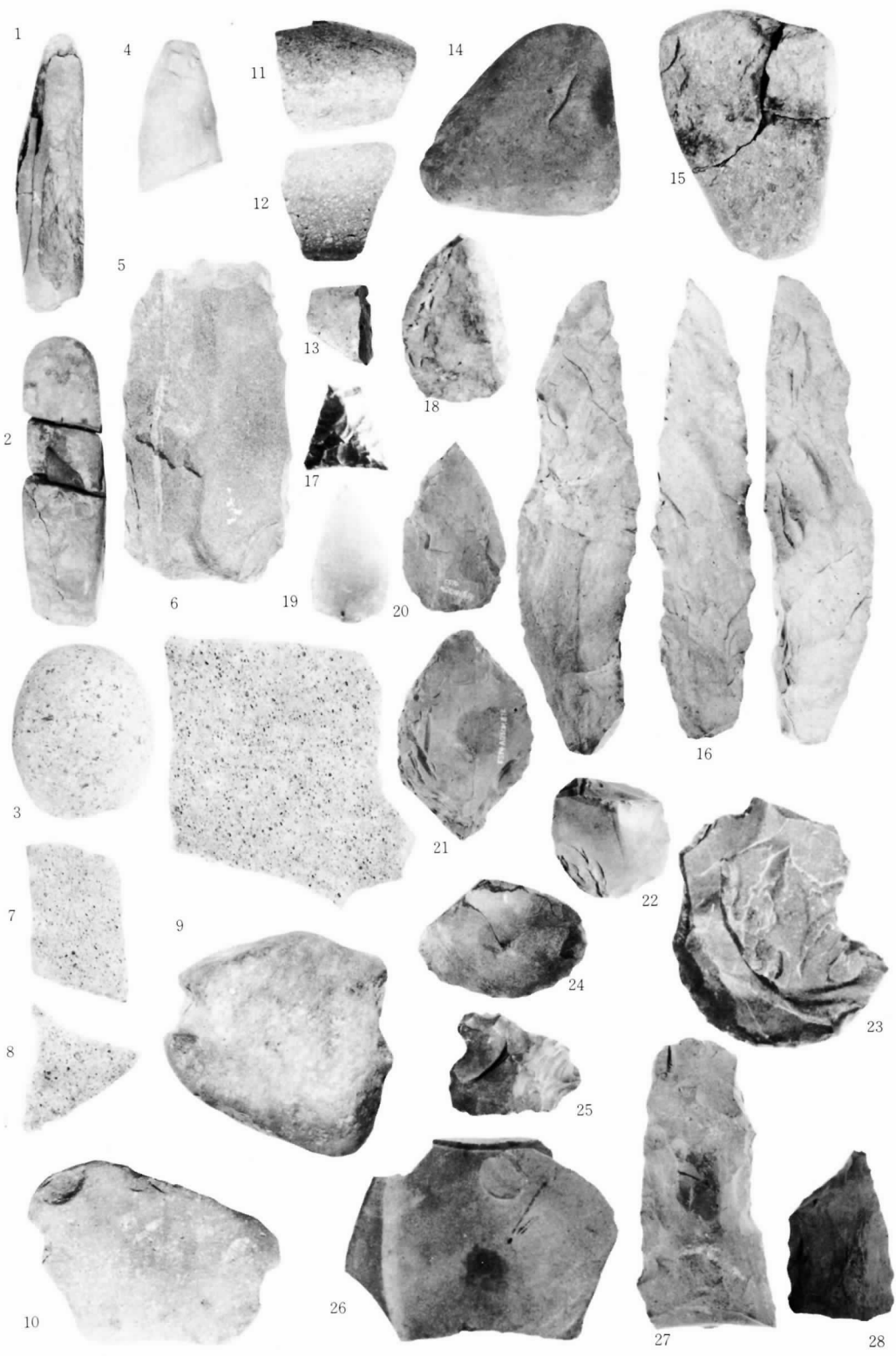


Ce62  
烧土遺構



Ch62  
烧土遺構

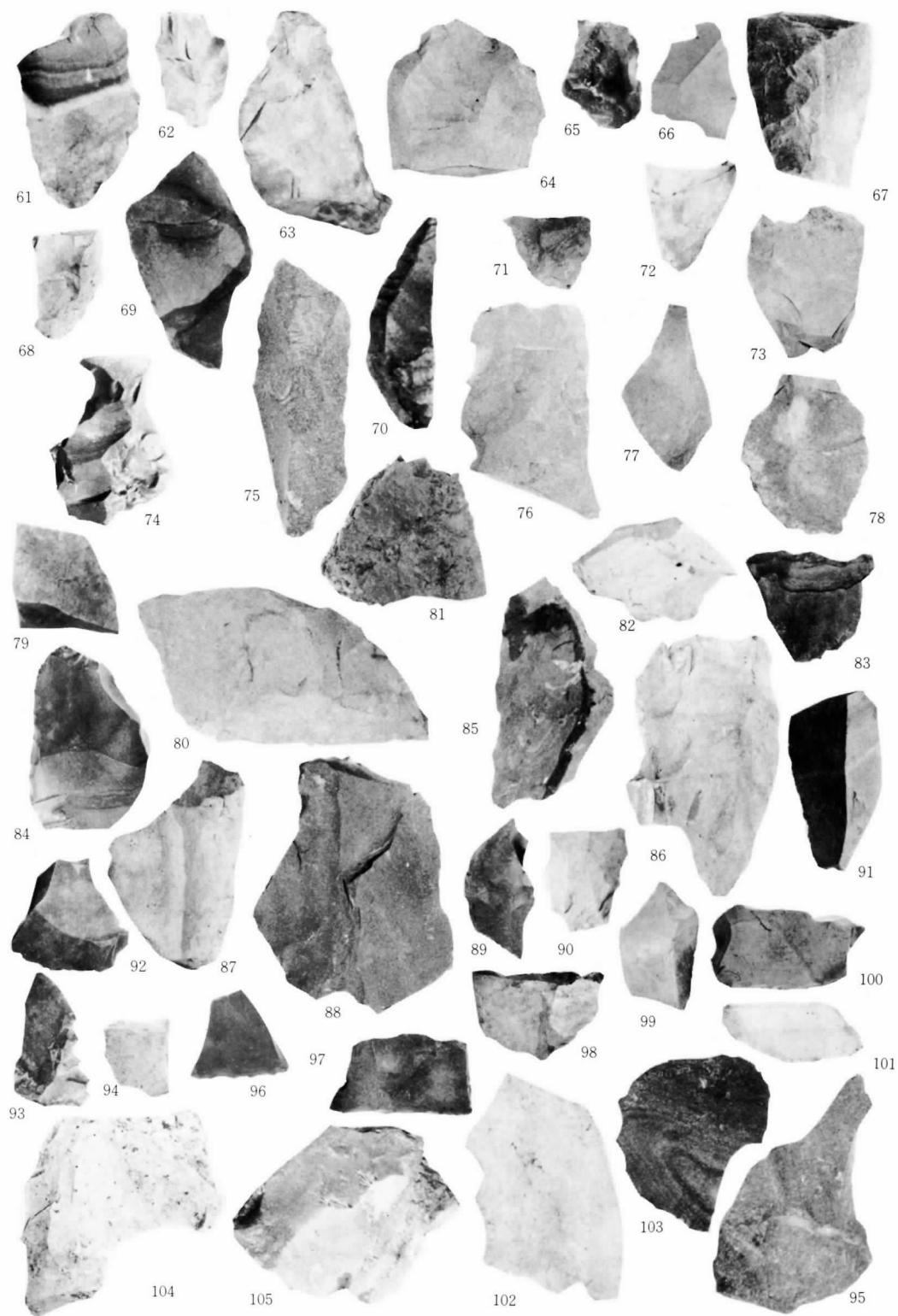
図版 7 溝状土壙 II · 土壙 · 烧土遺構



图版 8 石 器 I

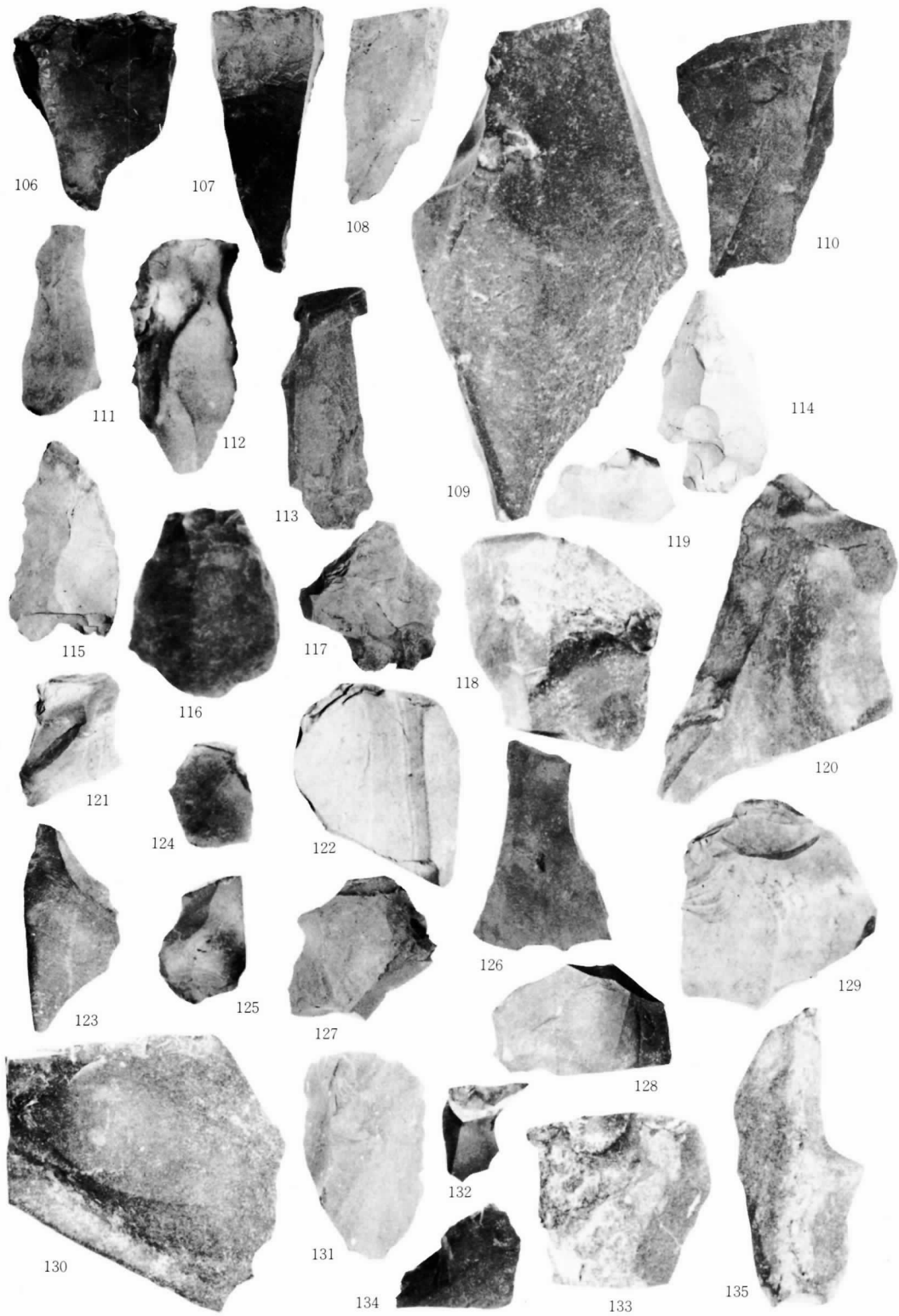


图版 9 石 器 II

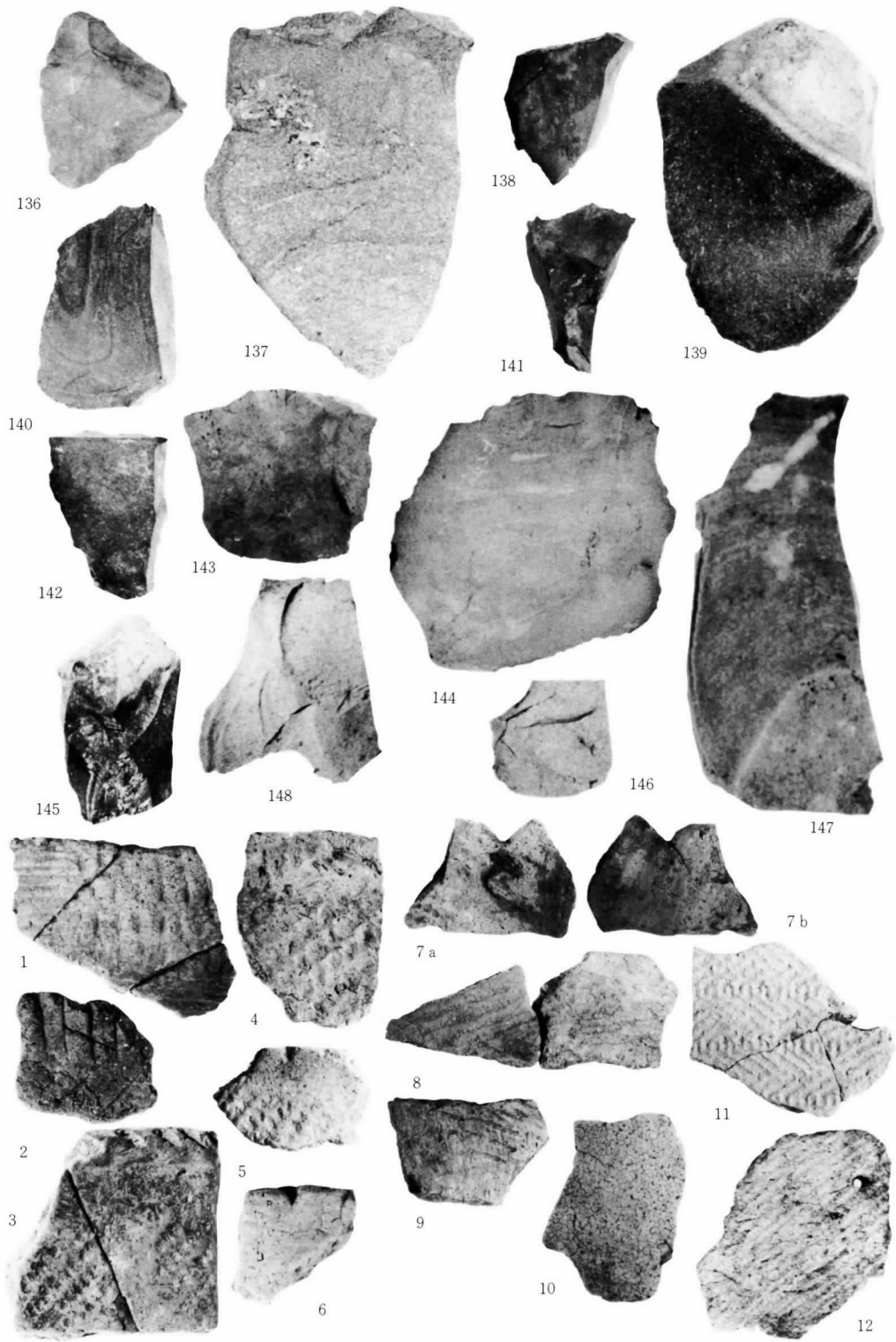


图版10 石 器 III





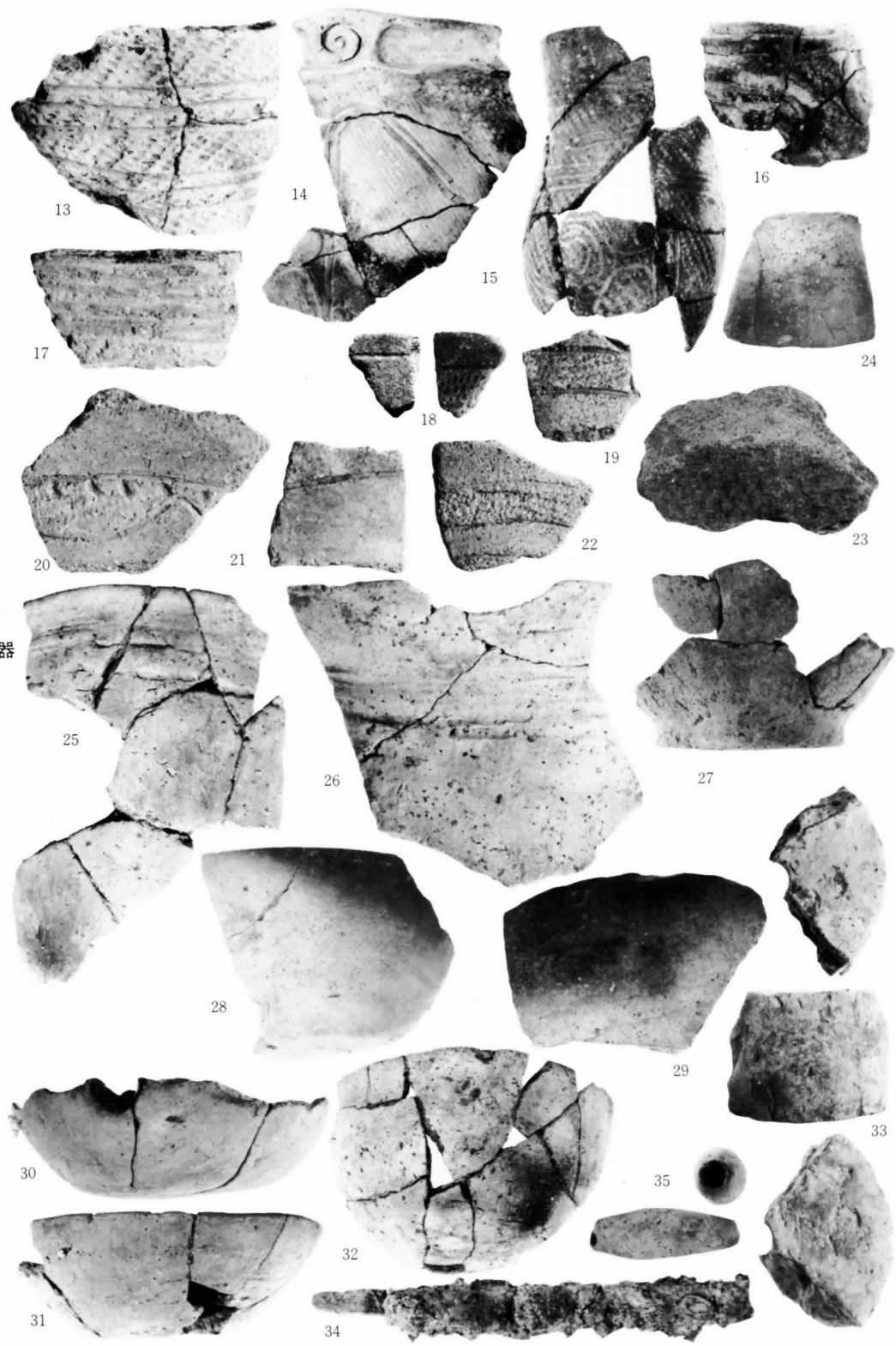
图版II 石器 IV



- 1 : Ad53ピット
- 2 : A区表土
- 3 : Cb68ピット
- 4 : D区表土
- 5 : Ci68溝状土壙
- 6 : A区表土
- 7 : Ai56ピット
- 8 :     "
- 9 : B区表土
- 10 : Ce62焼土遺構
- 11 : Ci62ピット
- 12 : Da62ピット

図版12 石器V・土器I

- 13 : Ce68焼土遺構
- 14 : Ce62焼土遺構
- 15 : Cc65住居跡
- 16 : Ce68焼土遺構
- 17 : A区表土
- 18 : A区溝No. 1
- 19 : "
- 20 : A区溝No. 2
- 21 : "
- 22 : A区溝No. 1
- 23 : A区表土
- 24 : "
- 25 : Cb62ピット
- 26 : "
- 27 : Ce62焼土遺構
- 28 : Cb62ピット
- 29 : Cg62ピット
- 30 : "
- 31 : Bj62ピット
- 32 : 表土
- 33 : Cb62ピット
- 34 : Ae56土壌
- 35 : Ca区表土
- 13~17 : 縄文土器
- 18~24 : 弥生式土器
- 25~27 : 土師器壺
- 28~32 : 内黒坏
- 33 : 紡錘車
- 34 : 刀子
- 35 : 土錘



図版13 土器II・鉄器



深掘り



全景(南から)



遠方鳩岡崎遺跡  
全景(北から)

図版14 深掘り・全景

# しもやち 下谷地 A 遺跡

遺跡名：下谷地 A (略号 SY73)

遺跡所在地：和賀郡江釣子村北鬼柳

第12地割13ほか

調査期間：昭和48年9月14日～10月8日

調査対象面積：3,500m<sup>2</sup>

発掘調査面積：610m<sup>2</sup>

## 図 表 目 次

第87図 下谷地A・B遺跡地形図……………87	第1表 出土遺物一覧表……………90
第88図 グリット配置図……………88	第2表 黒色処理の土器観察表……………93
第89図 土層断面図……………89	第3表 非黒色処理の土器観察表(1)……………98
第4図 出土遺物分布図……………91	第4表 非黒色処理の土器観察表(2)……………99
第91図 縄文土器……………91	第5表 非黒色処理の土器観察表(3) ……103
第6図 黒色処理の土器出土分布図……………92	第6表 須恵器観察表(1) ……105
第7図 黒色処理の土器……………93	第7表 須恵器観察表(2) ……106
第8図 非黒色処理の土器出土分布図……………96	第8表 土器遺存率比較表 ……111
第9～11図 非黒色処理の土器(1)～(3) ……97	
第12図 須恵器出土分布図 ……104	
第13～15図 須恵器(1)～(3)……………105	



第1図 下谷地A・B遺跡地形図

## I 位置と立地 (第1図 図版1)

遺跡は、和賀郡江釣子村北鬼柳第12地割13ほかに所在し、国鉄北上線の江釣子駅より東北東1.1kmに位置する。

遺跡の南1.5kmには黒沢川が東流し、東へ低位となる下位段丘に立地する。現在低地の大部分は水田と化し、畑地、宅地が僅かに散見される。周辺の遺跡のうち、南は0.8kmの同一面に本宿遺跡が位置し、更に猫谷地遺跡に続いている。

調査地の現状は、畑地・宅地・水田の一部であり、標高は71.27~72.34mである。

## II 調査の経過 (第1・2図)

発掘調査は、畑地と隣接する水田を中心に進め、更に南の水田を対象としている。道路中心抗221+40、222+00の2点を基点にグリットを設定し、東西42m、南北60mに及んでいる。すべて東西3.0m、南北6.0mのグリットに基いて、人力による表土除去、遺構検出を行ない、合せて68グリットを調査する。

尚、畑地と水田を境する水路は、下谷地B遺跡として調査しており、分割して報告するものである。

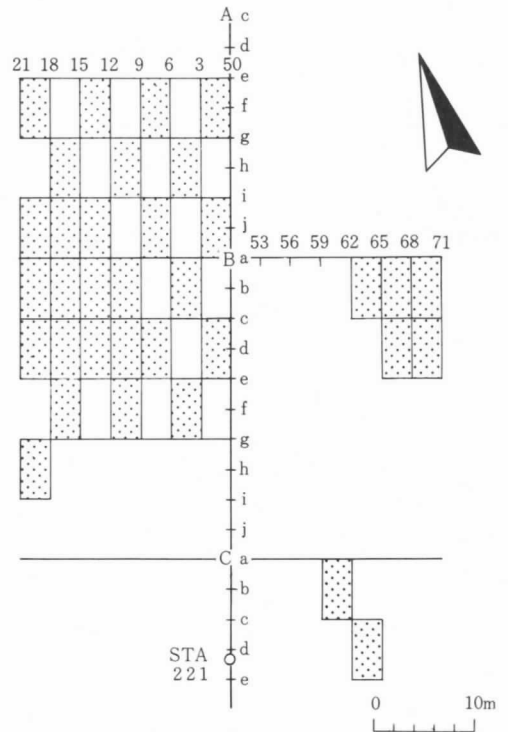
## III 遺跡の層序 (第2・3図)

調査区域の中央部より南へかけての層序は、以下の通りである。

第1層 黒褐色土 耕作土とシルト質土を含むa・b層に細分される。小礫・炭化物粒が点在する遺物包含層である。層厚は0.30~0.50mである。

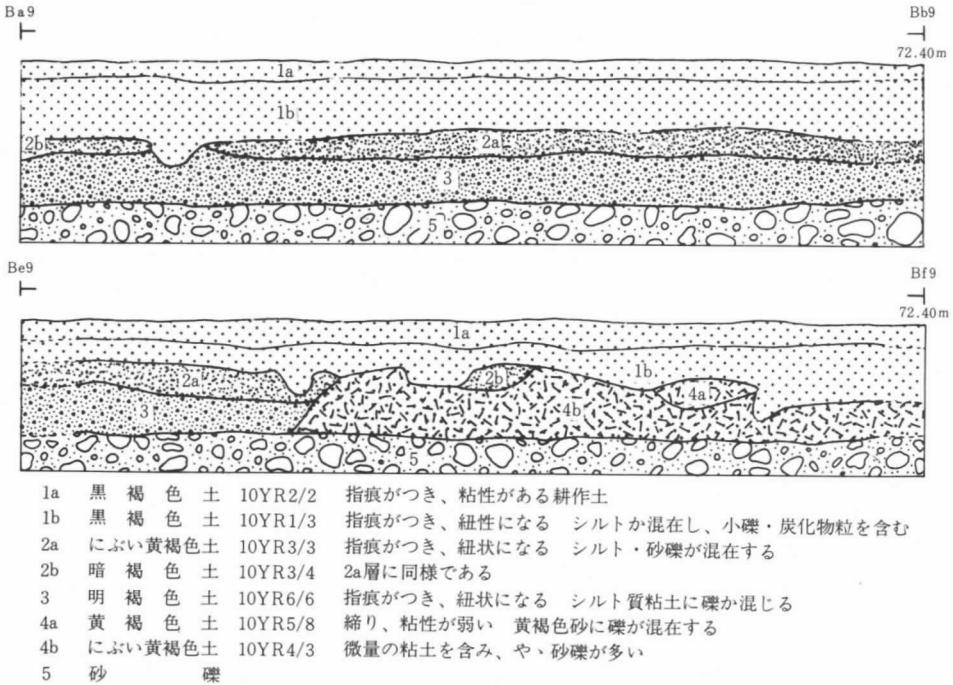
第2層 におい黄褐色土、または暗褐色土シルト質で砂礫が混在する。南進して不明となり、黄褐色土層にの。色調によってa・b層に識別される。層厚は0.10~0.20m。

第3層 明褐色土 シルト質土で礫が混入する。南側ほどやゝにおい黄褐色土となる。層厚は0.25~0.45mである。



第2図 グリット配置と調査区域





第3図 土層断面図

第4層 黄褐色土、またはにぶい黄褐色土 黄褐色砂質土に礫が混じる a 層、粘土を含み、砂礫の多い b 層に 2 分される。共に南側に形成され、礫層を被っている。層厚は最大 0.48m である。

第5層 砂礫 殆ど同一面をなして形成される。現地表面下 0.85~0.95m を計り、南に若干浅い。

遺物は第1層に包含され、特に 1 b 層に多量に出土する。遺構の検出面は 1 b 層、または第2層上面とみられ、第2層のにぶい黄褐色土、更に第3層の明褐色土を切る黒褐色土が部分的に認められるが、明確に遺構として確認されているものはない。

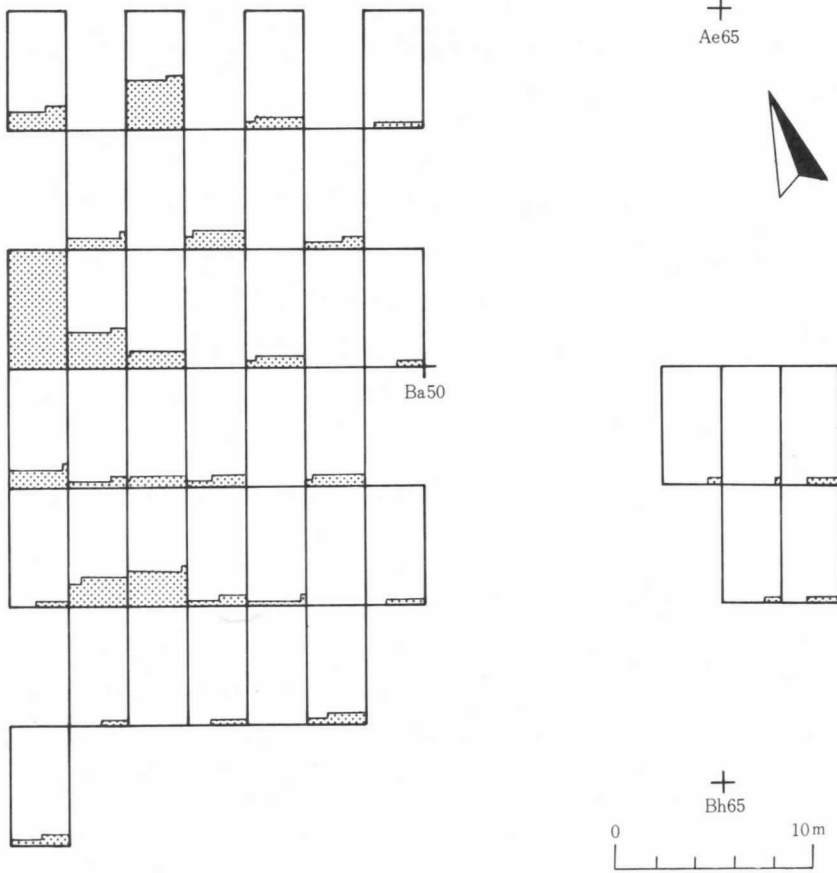
#### IV 調査の結果 (第4図 第1表)

水路以北の調査区域全域に多量の遺物が出土する。しかし、明確な遺構として検出されるものは皆無である。また、南端の水田では遺構・遺物共に認められない。

出土遺物は縄文土器 26 点、石器 1 点、土師器 7,616 点、須恵器 602 点、陶器 4 点、石製品 2 点の合わせて 8,251 点に及ぶ。その殆どは小破片となるものであり、比較的中央部より西方に偏在し、南・東に希薄となる。特に Aij 21 グリットには 2,027 点が集中し、遺物総数の 24.6% に及んでいる。

遺物の出土分布に次表の通りである。



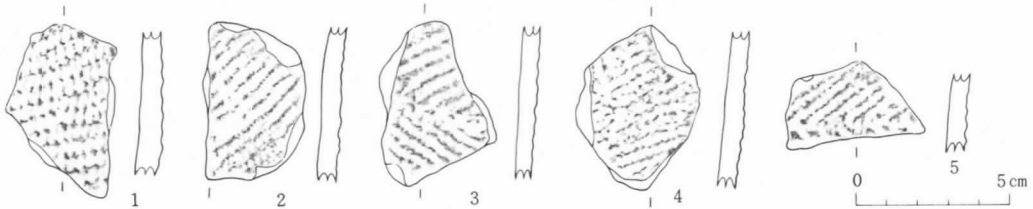


第4図 出土遺物分布図

V 出土遺物 (第5~15図 第1~7表 図版2~7)

1 縄文土器 (第5図 第1表 図版2)

26点の小破片である。調査区域の北東にもっとも多く分布するほか、比較的西方に散布し、中央部及び西方では僅か3点である。若干摩耗するものが含まれるが、21点は異原体による結節羽状縄文を施す深鉢型の体部片とみられる。焼成は固く、褐色、または灰褐色を呈し、黒褐色の1点が含まれる。また、捺糸文を有し、内面にミガキを施される赤褐色をなす1点がある。いずれも繊維を多量に含み、砂粒が目立つ。器厚は0.50~0.95cmを計る。



第5図 縄文土器

## 2 石器 (第1表)

調査区域の西方に出土するフレイク 1 点である。長さ5.8cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmの不定形をなす。石材は硬質頁岩である。

## 3 土師器 (第6～11図 第1・2表 図版2～5)

非黒色、または黒色処理をうける酸化炎焼成の土師器は、合せて7,617点である。その大部分は小破片であり、完形の土器 1 点を含めて器形の全体が推定可能なものは僅か19点である。推定される器種には坏のほか、高台付坏・甕・鉢・壺等が含まれる。その比率は非黒色処理の坏がもつとも多く、高台付坏を含めて5,645点で土師器全体の74.1%である。次いで甕・鉢が18.3%、黒色処理の坏・高台付坏が7.5%となり、黒色処理の壺・鉢が若干である。黒色処理の有無によっては、非黒色処理の土師器が92.4%を占めて圧倒的に多い。

分布は調査区域の南端を除いてほぼ全域に渡り、特に北西に密である。特に Aef15、Aij21 グリットに集中する傾向が認められる。

### (1) 黒色処理の土師器 (第6・7図 第1・2表 図版2)

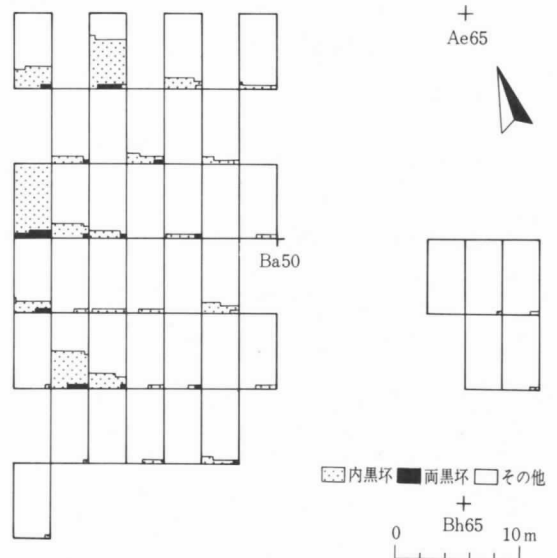
黒色処理の施される土師器は579点であり、全体の7.0%である。非黒色処理のものを含む土師器中では7.6%を占める。内面を黒色処理する549点には坏・高台付坏のほか、鉢とみられる体部・底部片 7 点がある。また、内外面共に黒色処理される35点には坏・高台付坏があり、外面の黒色処理する破片には鉢とみられる 2 点が含まれる。部位別によっては坏・高台付坏の口縁部及び底部片が57.6%を占め、非黒色処理のそれに殆ど近似する比率を占めている。

出土破片数による分布は、調査区域の南・東に少なく、北西に比較的密であるが、特に Aij21、Aef15 の 4 グリットに集中し、非黒色処理の甕の分布にほぼ共通している。部位別ではもっとも集中する Aij21 グリットで、口縁部及び底部片に比して体部片が少なく、全体28.5%となるほかは著しい相違は認められない。

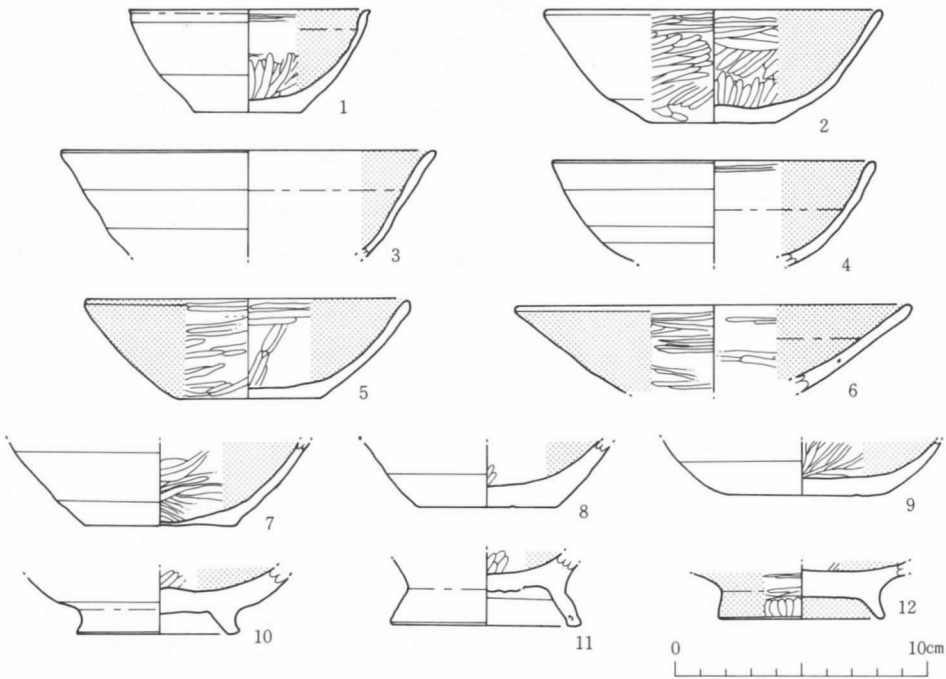
### 坏 (第6・7図 第1・2表 図版2)

内面に黒色処理を施す坏は、高台付坏を含めて549点である。内外面黒色処理の坏は同様に32点であり、その比率は5.5%で著しく少ない。共に完形品は含まれず、全体の明らかなものはない。

内面黒色処理の坏は、高台付坏と識別で



第6図 黒色処理の土器出土分布図



第 7 図 黒色処理の土器 第 2 表 同観察表

実測図 No.	登録 No.	出土地点・層位	器種	残存率		口 径	底 高台 径	器 高	径高指数	外傾指数	器面調整		切り離し 調整	外色 面調	備考
				口縁 分の 3	底部 分の 1						内面	外面			
1	15	Aij21 III	坏	3/3	1/1	(9.6)	4.2	4.1	(42.7)	30.5	ロクロナデ 放射 ヘラミガキ	ロクロナデ	糸切り	灰黄褐色	内面に炭化物付着
2	31	"	"	2	1	13.3	5.0	4.5	33.8	42.2	ヘラミガキ 横放	ヘラミガキ 横	ヘラケズリ	にぶい橙	黒色処理内面消失
3	5	"	"	9		(14.9)					" 横	ロクロナデ		浅黄橙	
4	4	"	"	7		(12.9)					" 横放	"		にぶい橙	
5	16	"	"	7	3	(13.0)	(5.6)	3.9	(30.0)	48.7	" "	ヘラミガキ 横	ヘラケズリ	黒	内外面黒色処理
6	2	"	"	3		(15.8)					" "	" "		"	"
7	1	"	"	2		6.0					" 斜	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	
8	2	"	"	2		5.5					" 横放	"	"	灰白	
9	1	Bab27 II	"	2		5.6					" "	"	"	にぶい黄橙	
10	1	Aef3 III	高台付坏	2		6.5					" 放	"	"	にぶい橙	
11	1	Bab15 III	"	1		7.5					" "	"	菊花状	浅黄橙	
12	1	Aij21 II	"	2		6.6					" "	ヘラミガキ 縦	糸切り	黒	高台内に細線1条が走る。

( )は推定値

きないものを含めて口縁部149点、体部242点、底部146点の破片である。口縁部より底部まで遺存するものは僅か2点である。

口縁部は3分の1以上の破片が3点であり、10分の1未満の細片は89.0%で大部分を占める。いずれもロクロ成形によるものとみられ、外面に凹凸の目立つものとやゝ滑らかなものがある。内面は篋磨き痕の判明する91点のうち、横方向のミガキ痕は72点に及ぶ。体部に続く破片では横・斜方向、横方向・放射状を呈し、摩耗して不明なものが多い。胎土はにぶい黄橙色のほか赤褐色7点、暗褐色9点等があり、大部分は均質な細粒である。粗粒を比較的多く含むものにはぶい黄橙色を呈する3点である。そのほか、内面に付着物を有する1点、打ち欠いたとみら

れる破片 2 点、二次加熱をうけているものが 3 点まで識別される。推定口径は 9.6~19.2cm であり、もっとも集中する 14.0~15.8cm の 48 点における平均は 14.3cm である。口縁部の器壁は 0.20~0.55cm を計り、その 86.8% は 0.30~0.45cm である。

体部片は 232 点である。外面は口縁部と同様にクロコナデ痕を残すほか、横方向 5 点、斜方向 1 点の篋磨き痕が認められ、うち 1 点はヘラ削り後の横ミガキ痕を有する。黒色処理される内面は不明な 139 点を除いて横、または斜方向のミガキ 60 点、底部より続く縦、または放射状のミガキ 14 点があり、他はいずれか 2 方向の組合せである。外面の色調は大部分にぶい黄橙色をなし、赤褐色を呈するものは 28 点である。やゝ粗粒の胎土を有するものは 12 点である。また、二次加熱をうける破片 3 点が含まれる。器厚は 0.25~1.20cm を計り、概して下方に厚手となる。全体では 0.35~0.65cm に集中し、82.5% を占める。

底部は 146 点のうち、4 分の 1 以上を遺存するもの 35 点、5 分の 1~9 分の 1 が 52 点であり、口縁部に比して細片が少ない。外面は不明な 27 点を除いて回転糸切り痕を残すもの 85.1%、回転糸切り後のヘラ削り痕 7.0%、ヘラ削り痕のみを認めるもの 7.9% である。内面は放射状のミガキ痕が 74.6% でもっとも多い。他は横方向と放射状、横・斜方向、横、または斜方向のミガキ痕である。胎土や焼成は口縁部及び体部に同様であるが、雲母の点在するものが含まれる。底径は 78 点によって 4.1~7.0cm と推定され、5.5~6.2cm が 48 点で 61.5% を占める。底部の厚さは 0.20~1.05cm を計り、0.40~0.65cm が 109 点、74.7% でもっとも多い。

図示する 7 点のうち、(1)は口径・器高共に小さい坏であり、口縁端部が僅かに外反する。(2)、(4)は内彎気味に立ちあがり、(3)はやゝ外反する。(2)は外面に篋磨きが施される内面黒色処理の坏である。

内外面を黒色処理する坏は、高台付坏と識別できない口縁部及び体部を含めて口縁部 13 点、体部 10 点、底部 9 点の破片である。口縁部より底部まで遺存するものは 1 点のみである。

口縁部は 3 分の 1、7 分の 1 を残す各 1 点のほかはすべて 10 分の 1 以下の細片である。外面は、横方向の篋磨き痕が認められ、横・斜方向のものが 1 点含まれる。内面のミガキは横方向のほか、体部に続いて横・斜方向、横・放射状のもの 3 点がある。推定口径は 13.2~15.6cm に分散している。口縁部における器厚は 0.25~0.55cm である。

体部は共に細片であり、内外面のミガキは口縁部と同様である。厚さは 0.25~0.80cm を計り、体部下端に肥厚する。

底部 9 点のうち 6 点の破片は、底径の 8 分の 1 以上が残存する。外面は回転糸切り痕 4 点、回転糸切り後のヘラ削り痕 2 点、全面ヘラ削り痕 1 点が認められる。内面のミガキ痕は、横方向 3 点、放射状 3 点が含まれる。底径は 5.3~6.4cm と推定され、器厚は 0.30~0.70cm を計る。

図示する(5)は内彎気味に立ちあがり、器高 3.9cm を計る。推定値による径高指数は 30.0 となる。

(6)は高台付坏ともみなされる。

高台付坏 (第6・7図 第1・2表 図版2)

内面黒色処理の高台付坏は、高台の一部を残す底部片22点、高台部片1点の合わせて23点である。内外面黒色処理のものは同様に3点まで確認される。共に器形の全体が判明するものは含まれず、口縁部及び体部では坏のそれと識別できないが、それぞれ同様の比率で坏に含まれていると推定される。

内面黒色処理の底部片には2分の1以上を遺存する11点が含まれ、比較的大きい破片が多い。外面は回転糸切り痕15点、高台貼付けに伴うロクロナデによって不明となる2点がある。内面の篋磨き痕は、放射状11点、放射状と横、または斜方向の5点で他は摩滅して不明である。底径は4.7~6.2cm、器厚0.40~0.90を計る。

高台はロクロ成形され、胎土・焼成共に坏と同様である。高台径6.7~7.5cm、高台高2.0~2.2cmを計る。

内外面黒色処理の3点は、7分の1以上を遺存する。底部外面は回転糸切り痕1点があり、高台内は貼付けによって菊花状を呈する1点が含まれる。内面は放射状の篋磨き痕である。高台の外面は図示する(12)の縦方向のほか、横方向のミガキ痕が認められる。高台径は6.6~7.6cm、高台高1.2~2.1cm、器厚は0.40~0.55cmのほか、0.95cmの厚手のものが含まれる。

鉢 (第6図 第1表)

内面黒色処理の体部5点、底部2点の破片があり、口縁部は明確でない。坏に比して底径がやゝ大きく、体部から外傾するものと推定され、鉢とするものである。

体部は外面にロクロナデ痕、内面に横方向のミガキ痕を有し、底部に続いて放射状を呈する。底部の切り離しは、回転糸切りによるものが1点含まれる。胎土・焼成は坏と同様である。底径は8.0cm前後と推計され、厚さは体部で0.55~0.85cm、底部では0.50~0.65cmを計る。

壺 (第6図 第1表)

体部の小片2点である。北辺のAef 9、Agh 6グリットに出土し、同一個体の小型の壺と推定される。外面は横方向のミガキ痕を有し、黒色処理される。内面はロクロ成形痕を粗雑に残し、にぶい黄橙色を呈する。胎土は均質な細粒であり、焼成も良好である。器厚は0.60~0.70cmである。

(2)非黒色処理の土師器 (第8~11図 第1・3~5表 図版3~5)

坏・高台付坏5,646点、甕・鉢1,391点である。総数7,037点で遺物全体の85.3%に達する。坏の完形品1点のほかはすべて破片であり、全体の器形の不明なものが大部分である。

その分布は調査区域の南端を除いて全域に及び、西方に若干密になる傾向にあるが、特にAij 21グリットでは1,810点が集中し、非黒色処理の土師器中25.7%を占めて偏在する。器種によっては、坏・高台付坏がAij 21グリットに1,594点で全体の28.3%、甕・鉢は北東のAef 15、Aij

21グリットに528点、37.9%を占めて僅かに散布する南・東グリットと対称的である。

尚、高台付坏の口縁部及び体部の破片については識別が明瞭でないため、一括して坏の口縁部及び体部に含めるものである。

坏 (第8～9図 第1・4表 図版3)

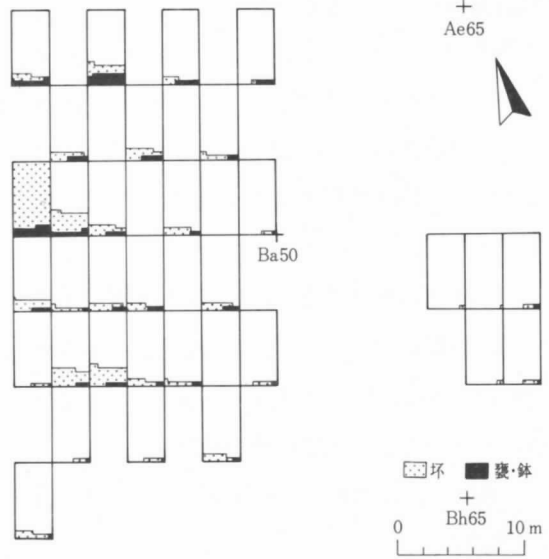
口縁部1,928点、体部2,306点、底部1,006点の合せて5,240点である。このうち口縁部より底部まで遺存し、器高の求められるものは完形の1点を含む19点である。他に口縁部より体部、体部より底部まで残存する破片があるが、それぞれ口縁部及び底部に含めると、10分の1以下の小片が口縁部で93.3%、底部では37.3%となり、口縁部に

細片化するものが多い。9分の1以上の口縁部は、Aij 21、Bab 21、Bcd 18～15グリット等の西方に分布し、北辺に若干散布している。また、底部では口縁部及び体部の出土量にほぼ対応して分布し、残存率による分布の変化は特に認められない。

口縁部はすべてロクロによる成形である。体部より直線状に外傾して立ち上がるもの、僅かに内彎気味に立ちあがるものがあり、口縁端部で薄く逸き出されてやゝ外反するものや若干肥厚するものが含まれる。大部分はロクロナデ痕を有するが、歪みの大きいものや口縁部直下の外面に凹凸の著しいものが混在し、後者は高台付坏の口縁部と推定されるものに多い。また、横方向の篋磨き痕を有するものが含まれ、内外面1点、内面9点に認められる。色調はにぶい黄橙色、または黄橙色を呈するものが、全体の73.7%、赤褐色24.5%、暗褐色1.8%等である。胎土は均質な細粒であり、粗粒を含むものは少ない。焼成は比較的橙色を呈するものが良好である。そのほか、内面に煤に付着するもの、二次加熱をうけているものが若干含まれる。また、口縁部より体部まで遺存する2点に墨書があり、「風」、「天」と認められる。

口径は9.7～20.1cmまで推定され、838点中では13.8～15.5cmに618点が集中し、72.7%を占めている。口径の得られる12点では10.8～15.5cmを計って分散している。口縁部における器厚は0.15～0.70cmで厚薄があるが、1,872点中83.8%の1,586点が0.30～0.45cmを計る。

体部は殆ど外面にロクロ痕を残し、特に凹凸の目立つものは44点である。また、体部下端にヘラ削り痕を有するものが若干含まれるほか、横方向のミガキ痕が内面に18点、外面に4点まで認められる。色調はにぶい黄橙色、または黄橙色を呈するものがもっとも多く、78.3%を占

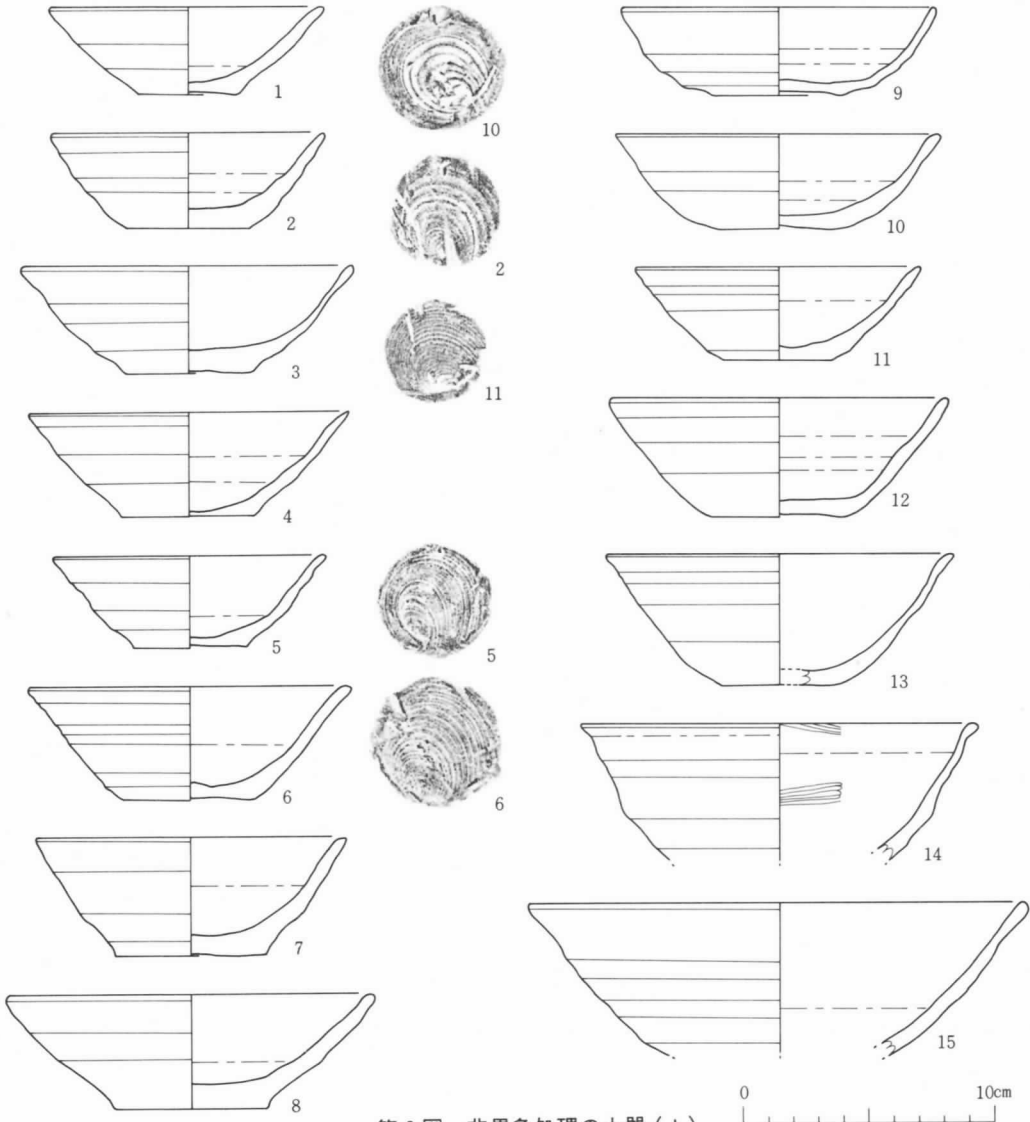


第8図 非黒色処理の土器出土分布図



め、次いで赤褐色21.0%と口縁部の色調に近似する。胎土、焼成共に同様であり、やゝ粗粒なものは0.8%にすぎない。器厚は下方に厚手となって0.20~1.05cmを計り、全体では0.30~0.60cmに76.0%が集中する。

底部は摩滅して不明な97点を除き、回転糸切り痕を残すもの99.0%、回転糸切り後のヘラ削りされるもの0.2%、全面のヘラ削りによって切り離しが不明となるもの0.8%である。ヘラ削りはいずれも手持ちによるものである。内面ではロクロ痕の凹凸を残すものが混在する。また、放射状の篋磨き痕を認める2点が含まれる。そのほか、内面の一部に煤の付着するもの5点がある。胎土は口縁部・体部に同様であるが、砂粒の含まれるものがあり、比較的粗粒のものは



第9図 非黒色処理の土器(1)

第 3 表 非黒色処理の土器観察表

実測図 No	登録 No	出土地点・層位	器種	残存率 口縁 底部	口 径 cm	底 高 台 cm	径 器 cm	高 器 高 cm	径高指数	外傾指数	器面調整		切り離し 調整	色調		備考
											内面	外面		内面	外面	
1	25	Bed21 III	坏	2	10.9	3.9	3.5	32.1	60.0	60.0	クロロナテ	クロロナテ	糸切り	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面磨減
2	23	Aef21 "	"	2	10.9	4.9	3.8	34.9	42.1	42.1	"	"	"	"	"	
3	5	Aij21 "	"	~10	2 (13.3)	4.9	4.2	(31.6)	52.4	52.4	"	"	"	にぶい橙	"	
4	21	"	"	~10	2 (12.7)	5.2	4.1	(32.7)	52.4	52.4	"	"	"	"	"	
5	24	Bed15 II	"	5	1 10.9	4.5	3.7	33.9	36.5	36.5	"	"	"	明褐灰	明褐灰	内面に黒色付着あり
6	2	Aij21 III	"	~10	1 (12.9)	5.1	4.6	(35.7)	48.9	48.9	"	"	"	橙	橙	
7	3	"	"	~10	3 (12.3)	6.0	4.8	(39.0)	37.5	37.5	"	"	"	"	"	
8	9	"	"	~10	1 (14.6)	6.0	4.6	(31.5)	57.6	57.6	"	"	"	浅黄橙	浅黄橙	
9	19	"	"	2	1 12.6	5.1	3.5	27.8	42.9	42.9	"	"	"	橙	橙	
10	20	"	"	~10	1 (13.0)	4.3	3.8	29.2	46.1	46.1	"	"	"	にぶい橙	にぶい橙	
11	15	"	"	~10	1 (11.4)	4.3	3.7	(32.5)	55.4	55.4	"	"	"	にぶい褐	褐灰	
12	1	Bed15 II	"	2	1 13.5	5.4	4.7	34.8	46.8	46.8	"	"	"	橙	橙・黒	外面磨耗
13	4	Aij21 III	"	~10	2 (13.8)	4.6	5.2	(37.7)	47.1	47.1	"	"	"	にぶい褐	にぶい褐	
14	30	Bed15 II	"	3	15.8						"	"	"	浅黄橙	浅黄橙	
15	29	Bed18 II	"	3	19.9						ヘラミ ガキ機	"	"	にぶい橙	にぶい橙	

( ) は推定値

44点である。色調はにぶい黄橙色、または黄橙色をなすものが84.0%、赤褐色14.6%、暗褐色、または黒褐色1.4%となり、口縁部及び体部に比して赤褐色を呈する破片の比率が若干減少している。

底径は489点で3.6~6.8cmを計る。5.0~5.2cmが17.0%、5.4~5.6cmが37.4%、5.8~6.0cmが21.3%を占める。総平均では5.46cmである。底部における器厚は計測不能な45点を除いて0.15~1.20cmであり、0.35~0.65cmに77.1%が集中している。

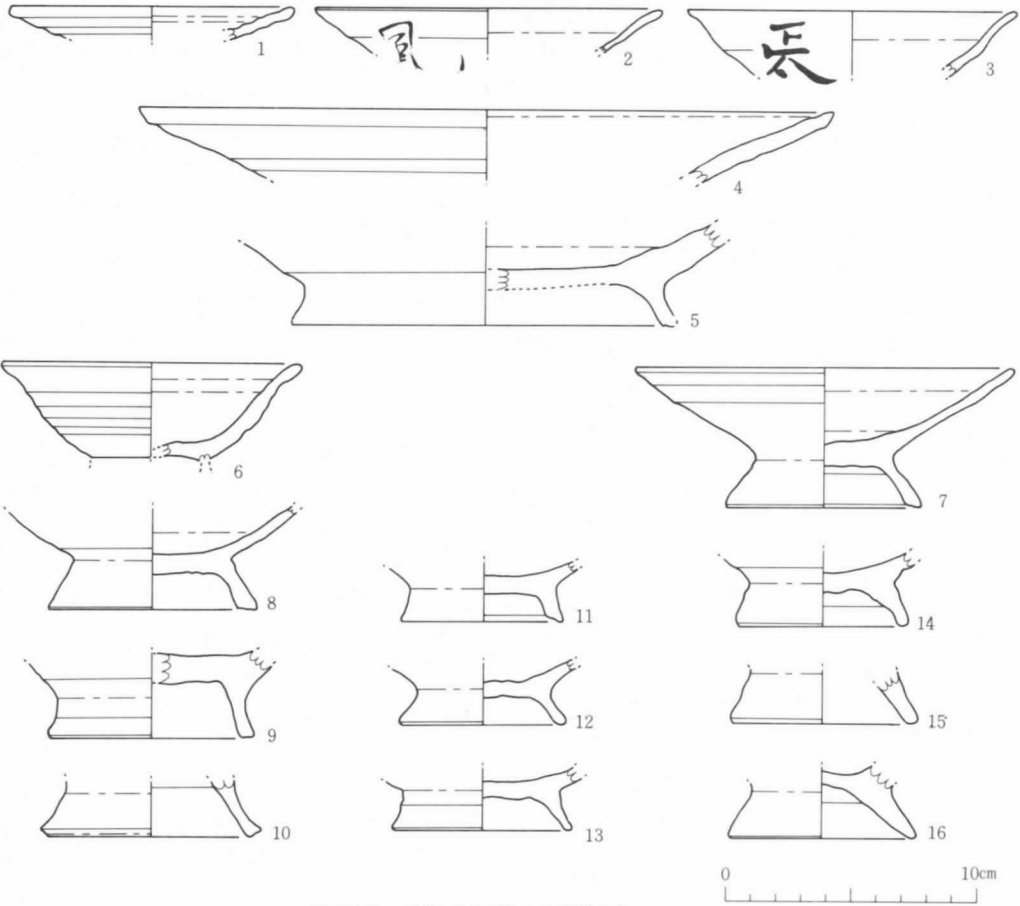
器高は口縁部より底部まで残存する18点によって3.15~5.30cmを計る。3.15~3.90cm 8点、4.25~4.90cm 7点、5.00~5.30cm 4点である。これによって径高指数を求めるならば、24.3~24.5が2点、30.0~33.6が8点、36.9~44.9が3点となる。

図示する(1)、(2)、(4)、(9)、(11)等はほぼ直線状に立ちあがるものであり、器高がやや低いものが多い。(9)は内彎して立ちあがる。口縁端部の外反する(14)は内面に篋磨きされるものである。また、(15)は口径のもっとも大きい坏とみられる。推定値を含む径高指数は29.2~39.0、外傾指数は36.5~60.0である。

尚、径高指数は器高に対する口径の比率であり、外傾指数は器高の3分の1を底部より体部に求め、この点より口縁端部までの幅を器高によって除した比率である。

#### 高台付坏 (第 8・10 図 第 1・4 表 図版 4)

口縁部及び体部は、坏と識別できない破片があつて坏に一括しているため、概数は明確でない。口縁部より高台部まで遺存するものは1点、口縁部より底部まで残存するもの1点であり、全体の器形の不明なものが多い。高台の痕跡及び高台の一部を欠損するものを含めて底部229点、高台部177点の合せて406点の破片である。坏を含む底部片全体の18.5%にあたり、口縁部



第10図 非黑色処理の土器(2)

第4表 同 観察表(2)

実測図 No	登録 No	出土地点・層位	器種	残存率 口の1 分の2 分の1	口径	底高台 径	器高	器面調整		切り離し 調整	色調		備考		
								内面	外面		内面	外面			
1	1	Aij21 III	高台付杯?		11.4 <sup>cm</sup>			ロクロナデ	ロクロナデ		〃	〃			
2	188	〃	〃	~10	(13.8)			〃	〃		に 黄	に 黄	体部外面に墨書文字「風」あり		
3	189	〃	〃	6	(13.2)			〃	〃		浅黄橙	浅黄橙	体部外面に墨書文字「天」あり		
4	24	〃	〃	杯?	~10	(27.6)		〃	〃		〃	〃			
5	8	〃	〃	高台付杯?	5	(15.3)		〃	〃		〃	〃	内外面磨減		
6	16	〃	〃	高台付杯	10	(12.0)		〃	〃		橙	橙			
7	2	〃	〃	〃	~10	3 (15.1)	( 7.8)	5.6	〃	〃	糸切り	明褐灰	に 黄	高台欠損	
8	1	〃	〃	〃	1		8.3		〃	〃	〃	橙			
9	7	〃	〃	〃	3		( 8.3)		〃	〃	〃	明褐灰	に 黄		
10	2	Bed21	〃	〃	1		8.8		〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙		
11	3	Bab6	〃	〃	3		( 6.4)		〃	〃	〃	に 黄	灰	白	
12	4	Aij21	〃	〃	2		6.6		〃	〃	糸切り	〃	に 黄		
13	1	Bed15 II	〃	〃	2		7.2		〃	〃	〃	〃	〃		
14	2	Bab6 III	〃	〃	3		( 6.9)		〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙		
15	5	Aij21	〃	〃	1		7.4		〃	〃	〃	に 黄	に 黄		
16	1	Bed12	〃	〃	2		7.5		〃	〃	ロ 子	ク 子	〃	〃	

( )は推定値

及び体部についてもほぼ同様の比率で含まれるものと推定される。

底部及び高台部の分布は、調査区域の中央部より西方にかけて密となり、北・東に著しく減少している。坏のそれと殆ど同様の傾向を示し、もっとも集中するのはAij 21グリットの104点であり、全体の25.6%を占める。また、遺存率によっては4分の1以上の底部が23.6%を占め、坏の底部の20.2%に近似する。同様に4分の1以上の高台は3.9%であり、5分の1未満の小破片が多い。

口縁部及び体部は、図示する3点によってみるならば共に坏に比して体部より外傾して立ちあがり、口縁端部にやゝ肥厚、または薄く逸き出される。2点は外面にロクロ成形痕を明瞭に残す。共に坏部の器高が低い血状を呈する。そのほか、体部下半より高台まで遺存するものによっては、坏に比して口径の大きいもの、坏と同様のものが含まれていると推測される。

底部は切り離しの判明するものすべてに回転系切り痕が認められる。切り離しの不明な11点は高台の貼付けによるものであり、ロクロナデ痕9点、菊花状のナデ痕2点がある。内面には明瞭なロクロ成形痕を有するものが多い。平滑なものには半円状に断続する細紐状の粘土が付着するもの1点が認められる。底径は坏と同様と推定され、胎土・焼成共著しい相違は認められない。色調はにぶい黄橙色、または黄橙色を呈するものが70.3%、赤褐色26.0%、暗褐色、または黒褐色1.3%である。

高台部はすべてロクロナデ仕上げによっており、直立するもの、若干の強弱を有して外傾するもの等が混在し、後者が圧倒的に多い。また、高台端部は大部分高台内に沿って沈線状の条線が認められる。高台径及び高台高は、比較的大小差が大きい。高台径は多少歪みのあるものが含まれるが、98点によって5.1~15.5cmと推計される。8.8~9.2cmにもっとも多く、31.6%を占め、6.0cm以下と12.0cm以上のものは極めて少ない。高台高は82点中0.75~3.80cmを計り、1.5~2.5cmが78.0%である。ほぼ高台径に対応するものと把握され、高台高3.80cmを計る1点は、最大径を有するものである。高台部の器厚は0.25~0.80cmであり、0.40~0.55cmが全体の65.9%となる。胎土・色調はいずれも底部に準ずる。

図示するもののうち器高の得られる(7)は5.6cmであり、推定口径に対する高台径の比率は1.95となる。

#### 鉢 (第11図 第1・5表 図版5)

甕に比して器高が低く、体部より外傾する鉢形と推定される破片は合せて24点である。殆ど中央部以西に散布し、口縁部が比較的北・西に、体部及び底部が南に多いが、甕や高台付坏と識別できないため明確でない。

口縁部18点は、体部より直線状に外傾して立ちあがり、口縁部がやゝ外反するもの、口縁端に不明瞭な稜を残すもの、僅かに薄手となって丸味をなすもの、肥厚して上下に若干逸きださ

れるもの等が含まれる。共にロクロナデされる。胎土は粗粒を含むものが多く、殆ど浅黄橙色を呈する。口径は24.2~30.4cmと推計される。器厚は0.45~1.10cmを計り、0.60~0.80cmに13点があつて比較的厚手である。

体部は14点まで確認され、すべてロクロナデ痕を残す。全体に厚手となるが、胎土・焼成等は口縁部や底部と同様である。

底部は6点である。底部の切り離しは、回転糸切り痕2点、糸切り後のヘラ削り痕1点が判明する。底径は8.0cm、11.0cmの2点が推定され、器厚は0.55~1.50cmを計る。

#### 甕 (第6・11図 第1・5表 図版5)

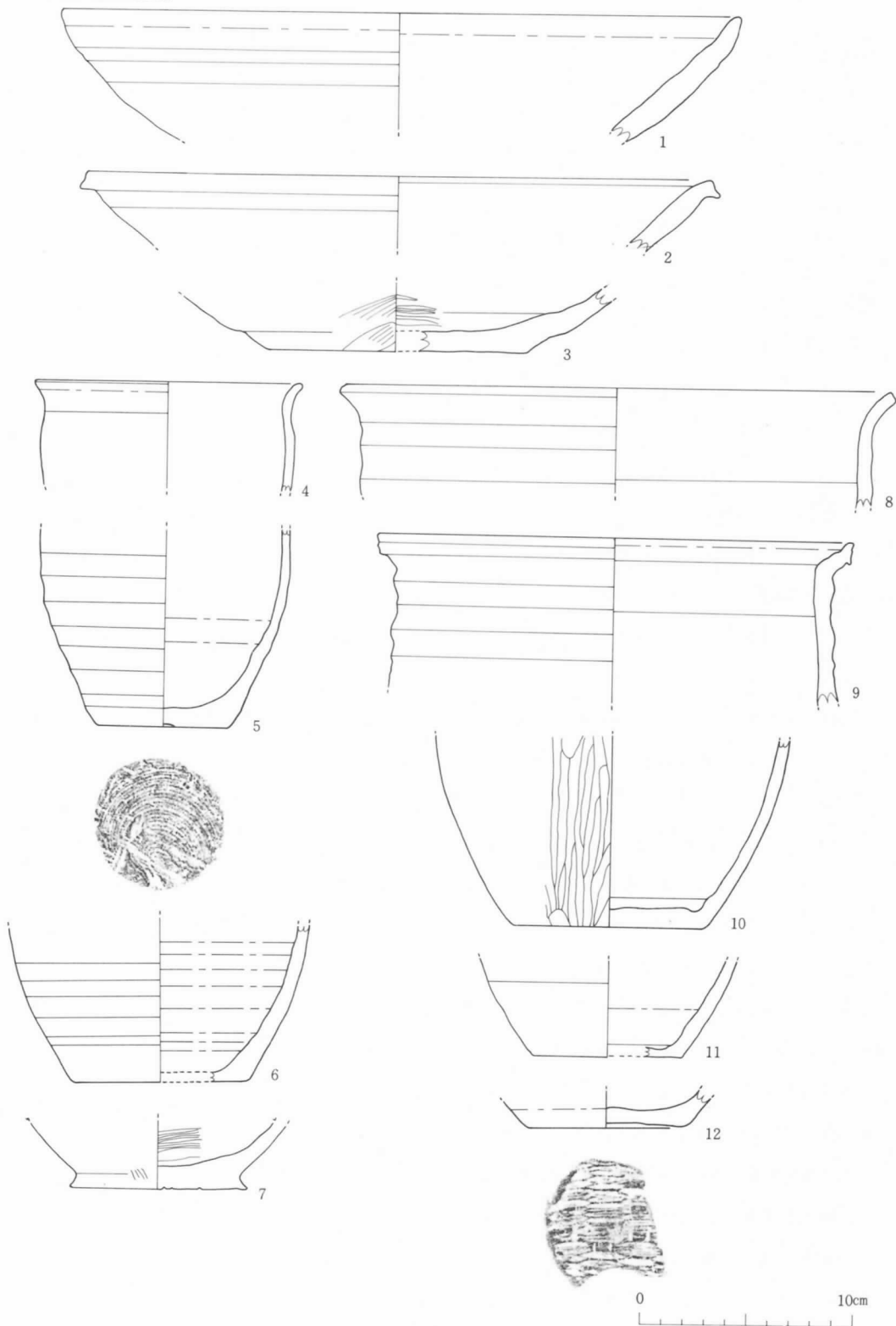
細片を含めて1,369点に及び、全体では坏に次いで16.6%を占める。いずれも破片で全体の明らかなものはない。部位によっては他と識別できない小片が含まれるが、口縁部12.0%、体部80.1%、底部7.9%となる。

分布は坏と同様に南端を除いて全域に及び、中央部より北西にかけて密である。特にAef 15及びAij 21の4グリットに集中し、甕全体の34.3%に達する。全体に希薄となる東方や中央部の一部に口縁部、または底部を欠いているが、部位別では全体の出土比率に対応する分布を示し、特に変化は認められない。また、遺存率によっては、口縁部及び体部に小片が多く、底部4分の1以上が16点となるが、分布における特徴は求め得ない。

口縁部は体部上半に続く破片を含めて164点である。大別してロクロ成形によるものと若干のロクロ不使用の口縁部が含まれる。前者は頸部よりやや薄手となつてくの字状に外反し、滑らかに終息するものと短く上方に逸き出されるものがあり、共に強弱や厚薄が認められる。また、折り返し状に下方に逸き出されるものが若干含まれる。共に内外面に横ナデ痕を有し、不明なものを除いて157点にのぼる。うち3点は頸部に打圧痕が残る。後者の7点はすべて横ナデ痕が認められる。胎土はいずれも砂粒が目立ち、小石を含むものが多い。色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色87.8%、赤褐色7.9%、暗褐色2.4%であり、内外面に黒色の付着物を有する2点がある。口径は歪みがあつて一様でないが、11.2~31.4cmと推計され、52点中26点が25.0~29.6cmに集中する。口径部における器厚は0.20~1.30cmを計り、0.45~0.55cmが50.0%を占めている。

体部は1,081点である。外面の調整は不明なものを除く889点中主として縦、または斜方向のヘラ削り痕が59.3%でもっとも多く、以下ハケ毛目8.5%、ナデ8.4%、斜方向の叩き目0.2%、ミガキ0.2%等である。内面では846点中ロクロナデ50.9%、ハケ毛目25.2%、ナデ23.4%である。胎土は粗砂を含むものが多く、サンドイッチ状の色調を呈するものが若干認められる。また、外面に煤の付着するものが8点含まれる。内外面の色調は大部分にぶい黄橙色、または浅黄橙色を呈し、全体の83.4%を占め、ほかに赤褐色13.1%、暗褐色、または黒褐色3.9%である。器厚は下方ほど厚手となるが、0.25~1.30cmを計り、0.35~0.70cmに619点があつて56.5%を占

— 下谷地 A 遺跡 —



第11図 非黒色処理の土器(3)

第 5 表 非黒色処理の土器観察表 (3)

実測図 No	登録 No	出土地点・層位	器種	残存率		口 径	底 径	器 高	器 面 調 整		底 部	色 調		備 考			
				口縁 分の1 ~10	底部 分の1				内 面	外 面		内 面	外 面				
1	1	Bab18 II	鉢	分の1 ~10	分の1	(31.9)	cm	cm	cm	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラツヅリ		にぶ黄橙	にぶ黄橙			
2	1	Agh6 III	〃	~10		(29.4)				〃	ロクロナデ		〃	〃			
3	1	Bab6 〃	〃		3		(18.0)			ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラツヅリ	糸切り	にぶい橙	にぶい褐			
4	1	Bab21 II	甕	~10		(12.6)				ナ	デ	ナ	デ	橙	橙		
5	1	Bcd21 III	〃		1		6.0			ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄橙	にぶい褐			
6	1	Aef21 〃	〃		2		8.1			〃	〃	糸切り	灰	白	灰	白	
7	2	〃	〃		3		(8.3)			ハ	ケ	メ	ナ	テ	木葉底	にぶい褐	にぶい褐
8	1	Aij21 〃	〃	~10		(26.1)				ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄橙	淡	橙	口縁部の歪み大きい	
9	1	Bcd15 〃	〃	~10		(22.3)				〃	〃		にぶい褐	にぶい橙			
10	35	Bgh21 II	〃		2		8.9			〃	ヘラミガキ	砂	底	にぶい橙	〃		
11	1	Agh6 IV	〃		4		(7.0)			〃	ロクロナデ		にぶ黄褐	にぶい褐			
12	1	Aij21 〃	〃		3		(7.4)			ナ	デ	ナ	テ	網代底	灰	褐	にぶい橙

( ) は推定値

めている。

底部は108点であり、その大部分は10分の1未満の小片である。外面は回転糸切り痕31点、糸切り後のヘラ削り3点、ヘラ削り13点、砂粒が全面に付着する5点、木葉痕5点、平編みの網代痕2点等である。内面はロクロナデ、またはナデ痕を残し、ロクロ成形痕を明瞭に残すものが含まれる。胎土・色調は体部と同様であり、黄橙色を呈するものが91.7%である。底径は24点で4.8~11.5cmと推定され、6.2~8.7cmに22点と分散して一定していない。

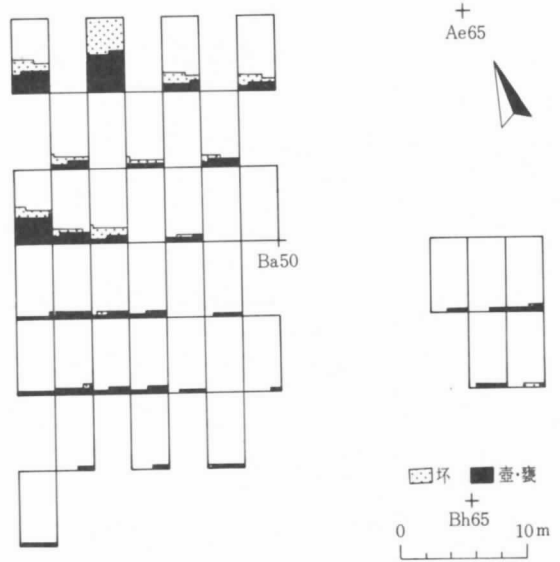
#### 4 須恵器 (第12~15図 第1・6表 図版6)

灰色、または灰白色を呈し、環元炎焼成をうける須恵器は、合せて612点である。完形のもの1点も含まれず、破片数による比率は遺物全体の7.4%である。推定される器種には、坏・蓋・壺・甕があり、坏は須恵器の31.5%、壺・甕は68.0%を占めている。

分布は南端を除く調査区域のほぼ全域に及び、北西グリットに密になり、特に Aef15 グリットにもっとも集中する。坏は同グリットに35.7%を占め、これを中心に次第に南・西に粗となり、南西では皆無となる。部位によっては Agh12 グリットに口縁部が含まれていないが、他はいずれも口縁部より底部まで出土し、特に分布による相違は認められない。壺・甕はやゝ北西に多いが、口縁部及び底部の合せて35点が比較的点在して粗となり、体部は東方の1グリットを除いて全域に広がり、特に北西の4グリットに偏在している。特に Aef15 グリットでは底部を含まず、体部全体の19.0%に及んでいる。壺・甕の遺存率によっては、口縁部及び底部共4分の1以上のものが東西両端の8グリットに限られ、壺の底部3点が6~8分の1を残し、他は9~10分の1以下の細片となって分散している。また、蓋3点は北辺の6グリットに出土するものであり、1点は下谷地B遺跡出土片に接合する。

坏 (第12・13図 第1・6表 図版6)

口縁部69点、体部57点、底部67点の合せて193点の破片である。口縁部より底部まで遺存するものは3点であり、全体の器形の明らかなものはない。色調や焼成によって灰色を呈する硬質の坏が43点、灰白色、または淡褐色がかかった坏が24点であり、後者のうち軟質のものは12点含まれる。遺存率によってみると、口縁部は4分の1以上が3点、6～9分の1が13点であり、底部では2～6分の1までが40点あり、推定径に対しては底部の遺存率がやゝ高いといえる。しかし、焼成や底部の切り離し技法による分布の変化は特に認められない。



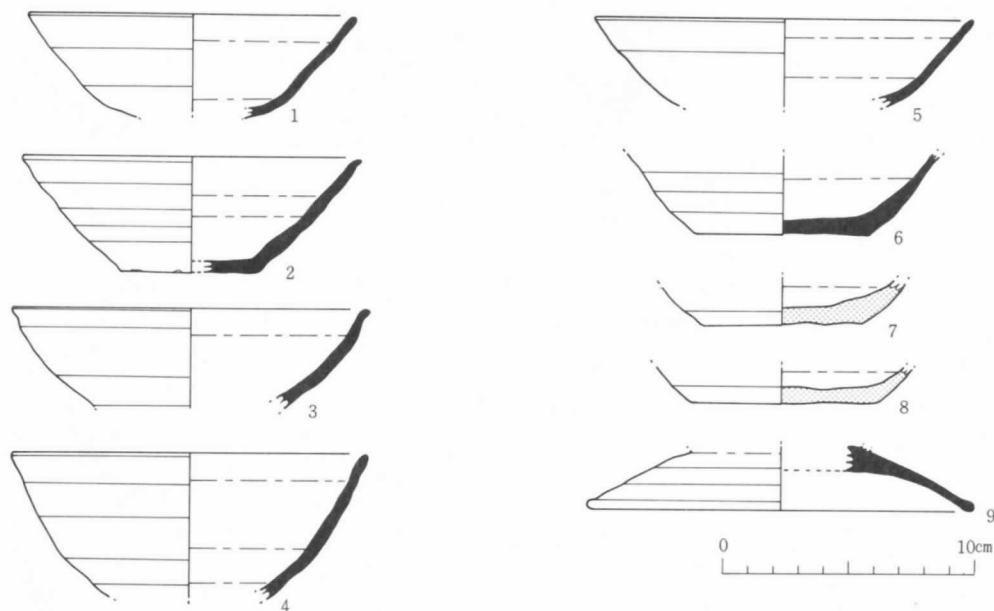
第12図 須恵器出土分布図

口縁部は体部より内彎気味に立ちあがり、やゝ外反するもの、直線状をなすもの、口縁端部のやゝ肥厚するもの等が含まれる。外面は概して灰色を呈するものにロクロ成形痕を残し、灰白色の軟質の坏では滑らかである。胎土は灰色で堅緻な43点、灰白色、灰褐色・淡褐色等を呈する26点があり、後者のうち特に軟質なものは12点である。また、灰色を呈し、中央部に褐色、または赤褐色となるサンドイッチ状をなす2点が含まれる。推定口径は灰色の43点で13.1～16.8cmであり、14.0～14.5cmが11点、15.0～15.4cmが13点である。白色がかかった7点では15.2～16.2cmと推定され、前者に比してほぼ一定した推定値が得られる。器厚は0.20～0.50cmを計り、灰白色、白色かかった褐色のものに薄手となる。

体部は内外面共に滑らかであるが、外面にロクロ成形痕を明瞭に残す3点が含まれる。胎土は口縁部を準じ、硬質のもの20点、特に軟質のものは15点である。また、中央部が赤褐色を呈する破片は3点である。器厚は0.25～0.70cmを計り、0.35～0.05cmに70.0%が集中している。

底部は切り離しの相違によってヘラ切り12点、回転糸切り48点に分けられる。前者には摩擦するものが含まれるが、共に灰白色がかかった褐色を呈して軟質であり、更にヘラ削りされる1点がある。10点における推定底径は6.0～8.0cmであり、6.5～7.0cmに7点がある。器厚は0.30～0.70cmである。後者は回転糸切り後のヘラ削りをうける1点が含まれ、ほかにヘラ削りによって切り離しの不明となる1点がある。共に灰色を呈する硬質の焼成であるが、前者に比して小片化するものが多い。底径は41点で推計され、5.0～7.1cmである。5.0～6.5cmが37点で90.2%を占め、底径の小さいものが多い。器厚は0.25～0.95cmを計る。





第13図 須恵器 (1)

第6表 須恵器観察表(1)

実測図 No	登録 No	出土地点・層位	器種	残存率		口径 cm	底 高 白 径 cm	器 高 cm	径高指数	外傾指数	器面調整		切り離し 調整	色調		備考	
				口縁 分の1 5	底部 分の1 5						内面	外面		内面	外面		
1	1	Aij21 III	坏			(13.0)					ロクロナデ	ロクロナデ		に よ い 黄 褐	灰		
2	22	Aef3 #	#	7	3	(13.4)	5.9	4.6	(34.3)	54.3	#	#	糸切り	灰	白	灰	白
3	2	Aef21 #	#	5		(14.2)					#	#		黄	灰	黄	灰
4	1	Aef21 #	#	3		(14.2)					#	#		灰		灰	
5	2	Aef15 I	#	~10		(15.0)					#	#		#		#	
6	1	Agh18 III	#	3		(6.8)					#	#	糸切り	灰	白	灰	白
7	1	Aef3 #	#		2		6.4				#	#	へら切り	#		#	
8	1	# I	#		3		(7.4)				#	#		#		#	
9	4	Aef15 SYB	蓋	5		(15.4)					#	#		灰		灰	抓部欠損

( ) は推定値

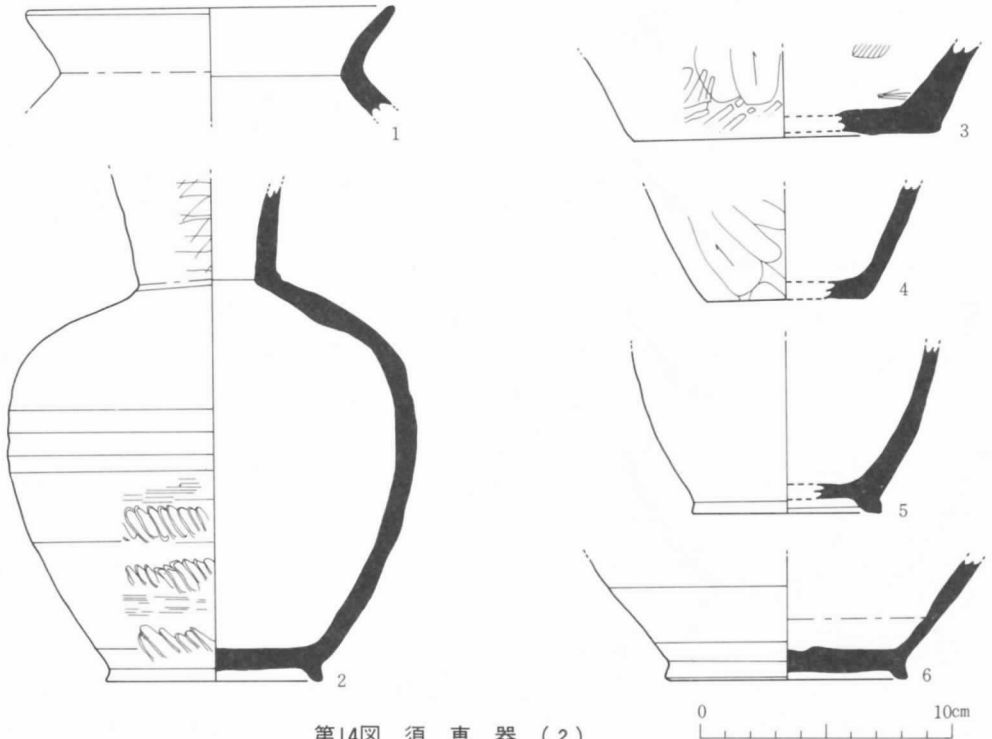
蓋 (第13図 第6表 図版6)

身受部分の遺存する2点と天井部の細片1点である。図化する1点は抓部を欠いているが、円形に剝落痕が残る。天井部が緩やかに膨らみ、身受部分より外反して丸味を帯びる。口径は13.8cmと推定される。他の1点は身受部分で殆ど水平をなし、外縁は短く沈線状をなして上下に逸き出される。共にロクロナデ痕を残し、再調整は明らかでない。外面は暗緑色を呈し、灰被りが部分的に認められる。胎土は灰色を呈し、器厚は0.35~0.45cmを計る。

壺 (第12・14図 第1・7表 図版6)

口縁部4点、体部55点、底部7点まで確認される。須恵器全体の10.8%を占める。完形のもの含まれず、口縁部を欠く長頸壺1点を除いてすべて破片である。

口縁部は共に小片であるが、やゝ外反して口縁端部が上方に逸き出され、ロクロ痕を残す。



第14図 須恵器 (2)

第7表 同観察表 (2)

実測図 No.	登録 No.	出土地点・層位	器種	残存率		口 径	底 径	器 高	器面調整		底 部	色調		備 考
				口縁 分の1 ~10	底部 分の1 ~10				内 面	外 面		内 面	外 面	
14- 1	2	Aef15 I	甕?			(14.7)			ロクロナデ	ロクロナデ		褐 灰	褐 灰	
2	3	Bcd12 ?	壺		1		8.7		〃	ヒタタキ タタキ	糸切り	灰	灰	高台内に細線1条が走る
3	1	Bad65 I	甕		4		(12.2)		〃	ヘラケズリ ロナ ロナ		〃	〃	
4	1	Aij21 III	〃		4		(6.2)		〃	ロクロナデ		褐 灰	褐 灰	
5	2	〃 II	壺		~10		(7.6)		〃	〃	ロナ ロナ	オリ ブ 灰	オリ ブ 灰	
6	1	Bcd18 II	甕		3		(9.6)		〃	タタキメ	〃	灰	灰	
15- 1	1	Bab65 III	〃		3		24.7		〃	〃		〃	〃	
2	32	Aij21 III	〃		2		23.8		ロクロナデ アテ工具	〃		〃	〃	
3	33	Bcd21 III	〃		1				〃	〃	丸底	〃	〃	
4	1	Aij21 II	〃		~10	2	(49.8)	(18.0)						

( ) は推定値

内外面灰色を呈するほか、外面が黒色、または褐色がかかる各1点が含まれる。口径は9.0~15.5cmと推定され、器厚は0.45~0.60cmを計って甕に比して薄手となる。

体部は外面にロクロナデ、ヘラ削り痕が認められるものがそれぞれ25、26点であり、前者には下半に斜方向の打圧痕を有するものが含まれる。内面は共に横ナデによっている。色調は大部分灰色、または灰黒色を呈するが、外面が灰褐色がかかるもの7点、黒色5点、緑褐色2点等があり、光沢を有するもの1点が含まれる。内面では灰褐色8点、黒色1点、赤褐色1点がある。胎土は甕のそれに類似し、一様な灰色をなす28点、縞状となる27点があり、後者には中央部が赤褐色を呈するサンドイッチ状のもの22点が含まれる。器厚は0.35~0.90cmを計り、0.

45~0.65cmが37点でもっとも多い。

底部は回転糸切り1点、ヘラ削り3点があり、他にロクロ痕を有するものに高台付1点がある。内面はロクロ、またはナデツケ痕を有する。色調は内外面灰色、または灰黒色を呈するほか、外面が緑灰色をなすもの1点、内面が暗赤褐色を呈する1点が含まれる。胎土は中央部が赤褐色、または褐色となる縞状の2点があり、他は灰色である。共に粗粒を合むものである。底径は6.6~9.8cm、器厚0.55~0.70cmを計る。

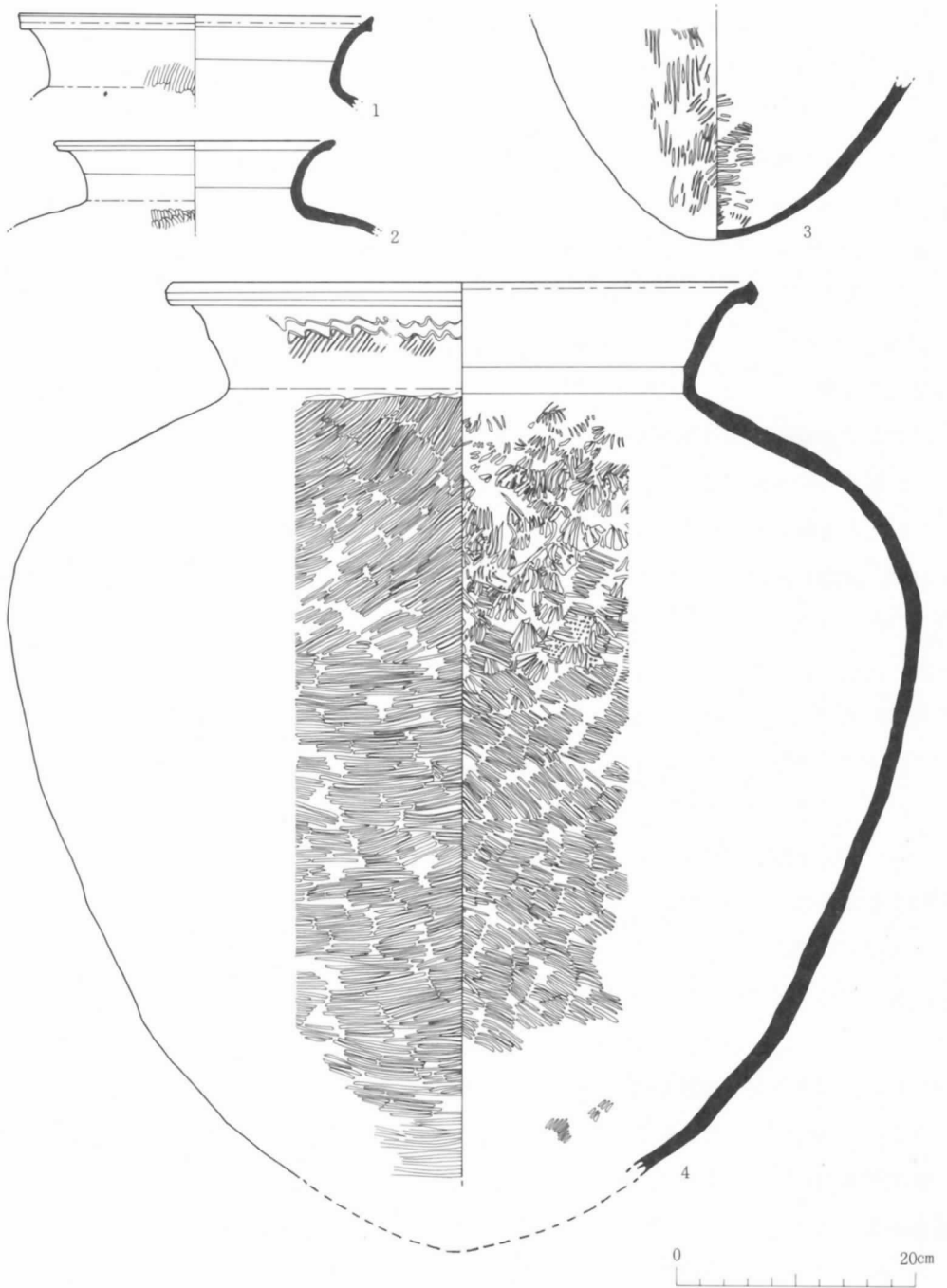
甕 (第14・15図 第1・7表 図版6・7)

細片で識別できないものが含まれるが、口縁部17点、体部316点、底部2点である。須恵器中の66.3%を占めてもっとも多い。4分の1以上の遺存する口縁部及び底部は合せて6点であり、口縁部より底部まで残存するものは僅か1点である。

口縁部は外反して口縁端が上下に強く、またはやゝ弱く逸き出されるものと直線的に立ち上がり、短く丸味を有するものが若干含まれる。共にロクロナデ痕が認められ、頸部外面に斜方向の打圧痕を残すもの3点、波状の櫛目文を有する1点がある。色調は大部分一様な灰色を呈するが、外面が黒色をなすもの5点、暗褐色をなすもの2点がある。また、灰被りは外面に1点、内面に2点があり、斑点状に広がるものである。胎土は粗粒の目立つものが含まれ、硬質で灰色を呈し、淡褐色をなすものは1点である。口径は19.8~23.8cmが5点、25.6~32.0cmが7点である。器厚は0.40~1.10cmを計り、0.40~0.70cmの15点と0.85cm以上6点に2分される。

体部は同一個体をみられる破片を除いているが、壺と判別できないものが含まれる。外面は打圧痕を有するものが251点で全体の79.4%にあたり、他はヘラ削り30点、ロクロナデ21点等である。打圧痕は器形に平行、またはやゝ斜方向に認められるものが189点ともっとも多く、更に平行する叩き目に木目の観察されるもの44点、格子状4点、直交して重複する14点がある。また、肩部より頸部にかけては叩き目よりロクロナデに移行するものが含まれる。内面はロクロ痕、横ナデ痕を有するものがそれぞれ56、176点と合せて73.4%を占める。当て工具痕は66点あり、平行、または斜方向のもの44点、木目の残るもの1点、直交して重複するもの10点、青海波文6点、蓮ぐう文2点等である。また、体部に青海波文、肩部では蓮ぐう文に変化するもの含まれ、外面の打圧痕に対応しないもの含まれる。

体部の色調は灰色、また灰黒色を呈するもの198点、灰褐色18点、黒色50点、うち光沢を有するもの5点、赤褐色、また暗褐色2点、褐色、または淡褐色22点である。淡褐色をなすものは比較的軟質で平行する打圧痕が認められる。そのほか、斑点状に暗緑色がかった9点が含まれる。内面では灰色、または灰黒色246点、黒色12点、灰褐色14点、淡褐色14点、赤褐色、または暗褐色16点、灰白色6点等外面に相違するもの含まれる。胎土は一様の灰色186点、内外面に沿って2分するもの24点、内外面及び中央部にサンドイッチ状を呈するもの106点である。いず



第15図 須恵器(3)

れも砂粒を含み、特に色調等による変化を有しない。器厚は位置によって一様でないが、0.35～1.70cmを計り、0.55～1.00cmに74.1%が集中している。

底部は平底のもの5点と丸底2点が含まれる。前者はナデ、ヘラ削り痕が認められ、外面に砂粒の付着するもの1点が含まれる。後者は内外面に平行、または斜方向に叩き締めるものである。色調は外面が灰色、黒色、黒褐色等を呈し、内面はすべて灰色である。胎土は体部と同様に粗砂を含むものが多く、灰色4点、赤褐色と灰黒色に分かれる1点、赤褐色のサンドイッチ状を呈するもの3点である。丸底の2点は共に灰色である。器厚は0.50～1.20cmを計り、厚手のものが含まれる。

図化する(4)は推定口径49.8cm、最大胴部径77.0cm、器高76.7cm以上であり、もっとも大きい甕とみられる。

## 5 陶器 (第1表)

甕の体部、鉢の口縁部、摺鉢の口縁部各1点である。共に小片で全体は不明である。甕と小鉢は調査区域の北に、摺鉢は南辺に出土する。

甕は体部下半の破片とみられ、ロクロ成形される小型甕と推定される。内外面共に光沢の強い青味がかかった褐色を呈し、胎土は灰褐色で粗粒が含まれる。器厚は1.10cmを計る。

小鉢は折り返し口縁で外面にロクロ成形痕を残す。薄い褐色釉で被われ、胎土は明褐色を呈し、磁器化している。器厚は体部で0.40cmを計る。

摺鉢の細片は口縁部を欠いているが、やゝ外反して丸く逸き出される。内外面共に褐色を呈し、光沢は殆どない。胎土は淡褐色をなす。器厚は0.60cmである。

その他、素焼きの焼成良好な破片1点がある。体部下端より3.8cm上方に穿孔の痕跡を有する。底径は12.2cmと推定され、下端の器厚は0.85cmである。

## 6 石製品 (第1表)

石硯の2点であり、共に小片で硯式は明らかでない。調査区域の北辺及び東辺に出土する。東辺出土の1点は、現存長6.3cm、幅6.1cm、厚さ0.9cmである。墨堂と硯唇の一部であり、硯唇の大部分と硯背が全面に渡って剝落している。墨堂幅は5.0cmを計り、僅かに中央部が滑らかである。稚拙な硯縁に沿って滯墨が認められる。硯背には円形をなす打痕が残る。石材は紫色の輝緑凝灰岩である。

他の1点は、現存長2.2cm、幅3.0cmで硯面を欠いている。硯背とみられる裏面には細線状の擦痕が切断面に直交して走行する。黄褐色がかかった粘板岩製である。

## VI まとめ

調査区域が限定され、調査上明確でない点もあって遺跡の性格や遺物包含層の形成等については明らかではないが、黒沢川岸の段丘上に立地して多量の遺物、主として貯蔵・調理・食膳用の遺物が出土する点で調査区域の周辺、または近接して営まれる生活施設の存在が推定されるものである。

遺物の分布によっては、概して調査区域の北西方向に密であり、特に集中する区域に何らかの関連施設が推定され、特に須恵器の坏の偏在する傾向が認められる点で時間的経過と生活空間の推移を伺うこともできる。しかし、層位的には縄文時代より近代までの遺物が混入して出土し、後世の二次的移動を考慮するならば、いずれも不明といわざるを得ない。

出土遺物は縄文時代前期初頭とみられる繊維土器、近代以後の陶器、時期不明の石硯若干のほかは主として平安時代の土師器及び須恵器である。

土師器は若干のロクロ不使用の甕を除いてすべてロクロ成形によるものである。甕は大部分長胴形のものともみられ、口縁部がくの字状に外反して逸き出され、大部分体部下半に削り調整痕を、上半にロクロ成形痕を有するほか、叩き目の残るものが若干含まれる。そのほか、ロクロ成形により、糸切り無調整の底部を有する小型甕が認められる。坏はすべてロクロ成形され、底部の切り離しはすべて回転糸切りによるものとみられ、少量の手持ちヘラ削り調整されるものが混在する。大別して黒色処理の坏と非黒色処理の坏に分けられるが、後者は所謂赤焼き土器や須恵系土器と呼称されるものと思われる酸化炎焼成の坏である。そのほか、高台付坏・鉢があるが、いずれも器形の大小が推測され、比較的精良な胎土を有し、焼成も良好である。

須恵器は坏・蓋のほか、大型の甕と長頸壺が含まれる。坏は硬質の燻色を呈するものと白色がかった軟質のものが含まれ、底部の切り離しは前者がすべて回転糸切りによっているのに対し、後者はヘラ切りであり、焼成不良のものとみなされる。甕は丸底の大型のものが含まれるが、これより小型のものも推定される。内外面の調整や打圧痕によっては数種に分類されるものの、胎土や焼成に特徴は見いだし得ず、僅かに焼成不良の淡褐色を呈するものが若干含まれるにすぎない。

器種による個体数は全体の器形が明確でないため、その概数を求め得ないが、口縁部及び底部の遺存率によって試算するならば以下ようになる。土師器の坏では内面黒色処理のもの28点、内外面黒色処理のもの5点、非黒色処理のもの193点となり、高台付坏は同様に黒色処理14点、非黒色処理70点となる。須恵器では識別できる底部によって硬質の坏41点、白色がかった軟質の坏12点となり、合せて53点前後と推計される。そのほか、土師器の甕・鉢が24点である。須恵器では蓋3点、甕・壺合せて24点となる。これによって個体数による土師器と須恵器はほゞ

第8表 土器 遺存率 比較表

遺物		遺存率	分の1 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
黒色処理	坏・台付坏	口縁		2	(1) 1			2	(2) 2	5	3	(10) 121	(13) 136
		底	2	13	(1) 8	(1) 12	(2) 16	(1) 14	8	(1) 13	1	(3) 59	(9) 146
		台底	7	(1) 4			1	3	(2) 1	1	1	(3) 5	(9) 23
	鉢	底								1		2	3
非黒色処理	坏・台付坏	口縁	1	3	4	3	12	16	15	40	35	1,799	1,928
		底	26	41	49	87	97	122	73	96	40	375	1,005
		台底	10	21	13	10	19	29	11	25	5	86	229
	甕鉢	口縁										364	364
	底	3	3	6	8	1	6	4	7	5	72	115	
須恵器	坏	口縁		1		2		1	6	4	2	53	69
		底	1	5	9	6	9	11	3	4	4	15	67
		蓋								1		2	3
	甕壺	口縁		2	1							1	17
底		2		1	2		2		1		6	14	
計			52	96	94	131	157	207	127	199	97	2,989	4,149
比率			1.25%	2.31	2.27	3.16	3.78	4.99	3.06	4.80	2.34	72.04	100.0

( ) は両面黒色処理

4 : 1 であり、黒色処理のものと非黒色処理のものの割合は 1 : 5.6 となる。これを破片数による比率と比較するならば土師器と須恵器は 12.5 : 1 となり、器種と細片化の相違によるものと扱えられる。しかし、いずれも不確定要素が大きく、器種を含めて組成については推定の域を出るものでない。

土師器及び須恵器の年代についてはこれを一括してみる場合、ロクロ未使用の甕を若干伴い、須恵器にはヘラ切り坏を含んでいるが、ロクロ使用の土師器を主体とする構成であり、ロクロ導入による量産体制が定着する段階と扱えられるものである。これに基くならばその上限は、ロクロ土師器の普及する 9 世紀代に求められるが、土師器の組成や技法によっては平安時代後半にその様相を求めることができるものとみられる。

注(1) 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代坏形土器」『研究紀要』I 多賀城跡調査研究所 (1974)

(2) 北上市教育委員会「尻引遺跡調査報告書」(1977) ほか





写 真 图 版

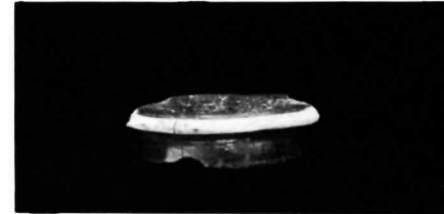
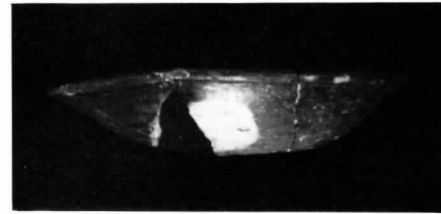
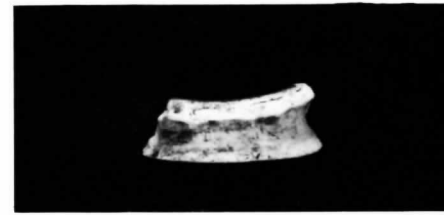
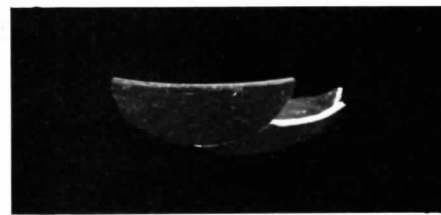
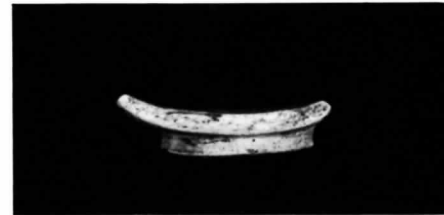
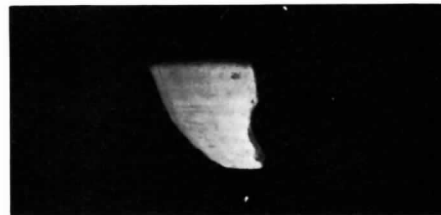
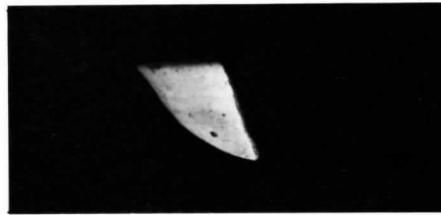
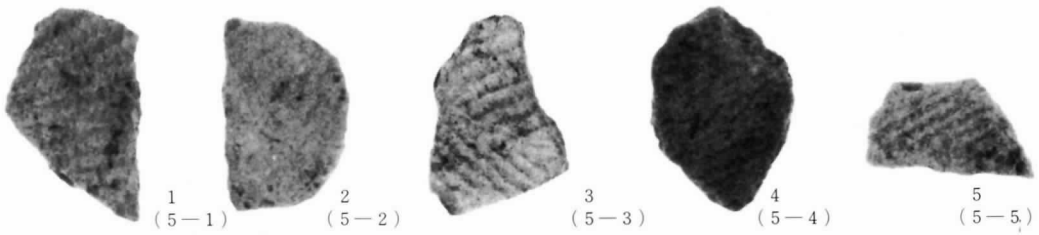
写真図版目次（下谷地A）

遺跡の位置……………図版 1  
縄文土器・黒色処理の土師器……………図版 2  
非黒色処理の土師器(1)……………図版 3  
同(2)……………図版 4  
同(3)……………図版 5

須恵器(1)……………図版 6  
同(2)……………図版 7  
遺物の縮少率は主旨実測図に準じる。( )は実測  
図Noである。



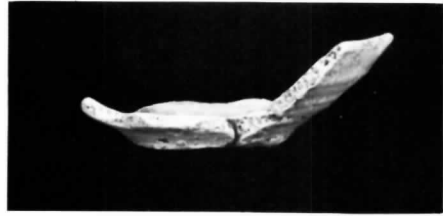
図版 I 遺跡の位置



図版 2 縄文土器・黒色処理の土師器



1  
(9-1)



8  
(9-8)



2  
(9-2)



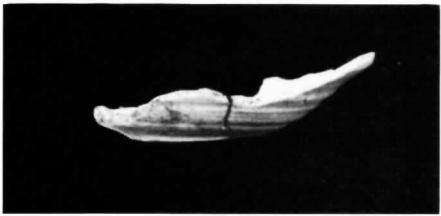
9  
(9-9)



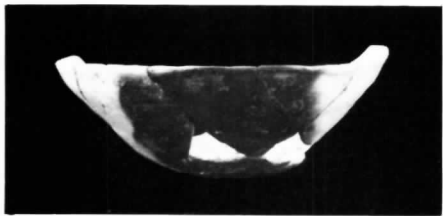
3  
(9-3)



10  
(9-10)



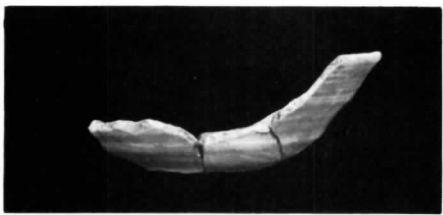
4  
(9-4)



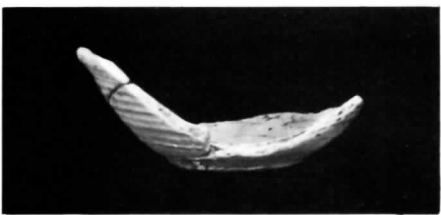
11  
(9-12)



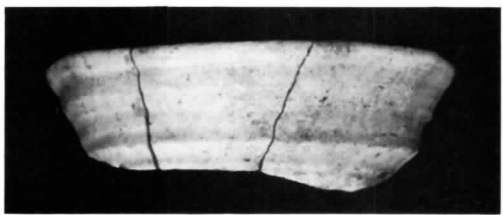
5  
(9-5)



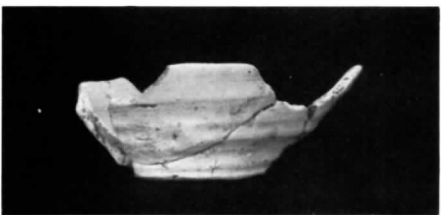
12  
(9-13)



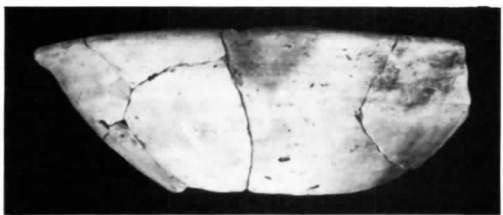
6  
(9-6)



13  
(9-14)

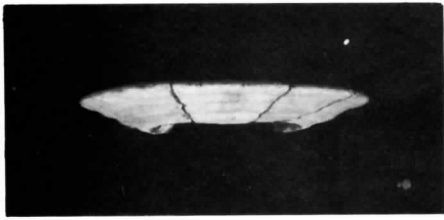


7  
(9-7)



14  
(9-15)

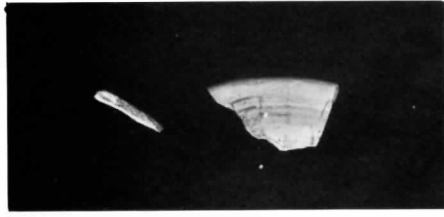
図版3 非黒色処理の土師器



1  
(10-1)



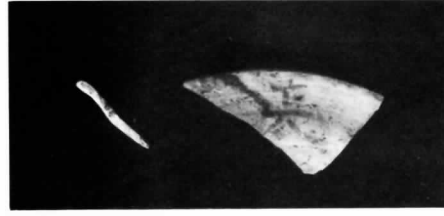
8  
(10-8)



2  
(10-2)



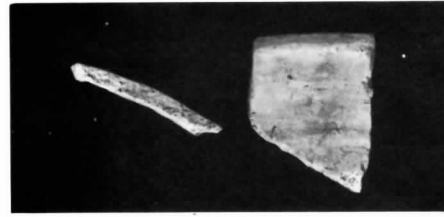
9  
(10-9)



3  
(10-3)



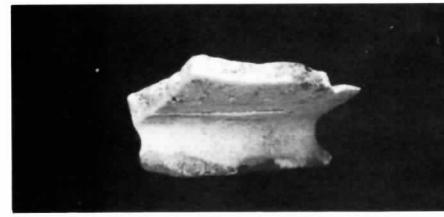
10  
(10-10)



4  
(10-4)



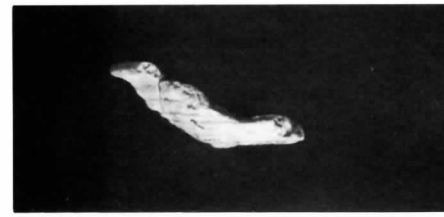
11  
(10-12)



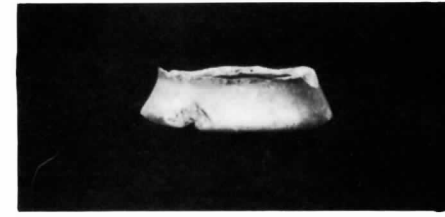
5  
(10-5)



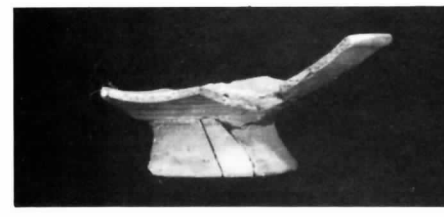
12  
(10-13)



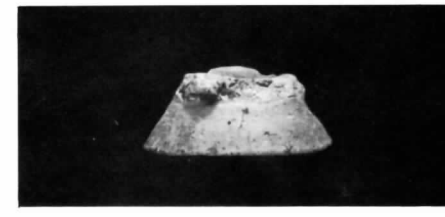
6  
(10-6)



13  
(10-15)



7  
(10-7)



14  
(10-16)

図版 4 非黒色処理の土師器



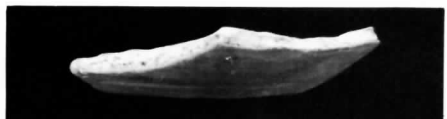
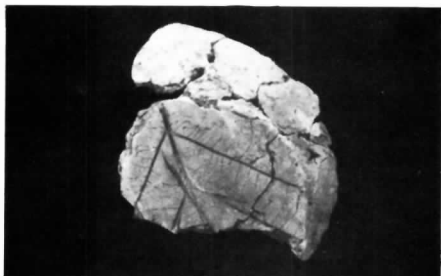
1  
(11-1)



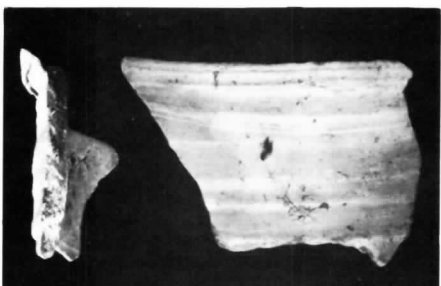
8  
(11-7)



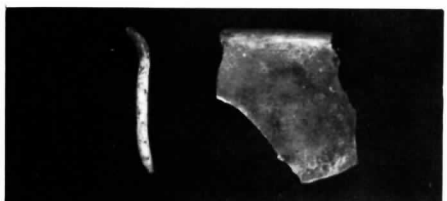
2  
(11-2)



3  
(11-3)



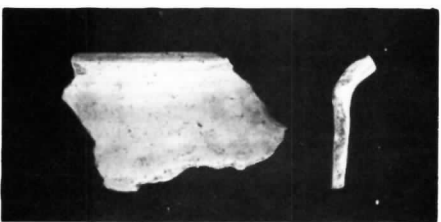
9  
(11-8)



4  
(11-4)



5  
(11-5)



10  
(11-9)



6  
(11-6)



11  
(11-10)

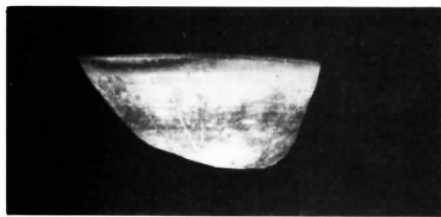


7  
(11-12)

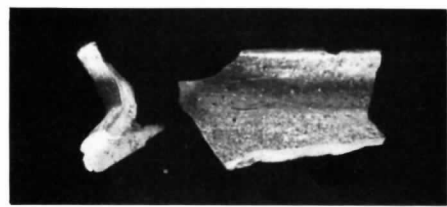


12  
(11-11)

図版 5 非黒色処理の土師器



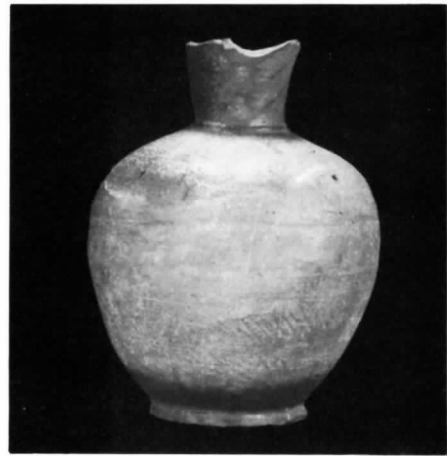
1  
(13-1)



8  
(14-1)



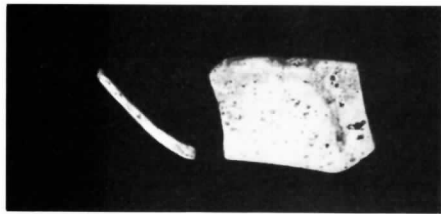
2  
(13-2)



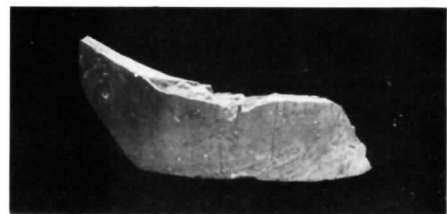
9  
(14-2)



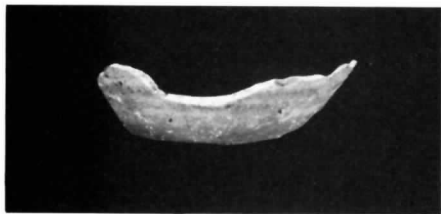
3  
(13-4)



4  
(13-5)



10  
(14-3)



5  
(13-6)



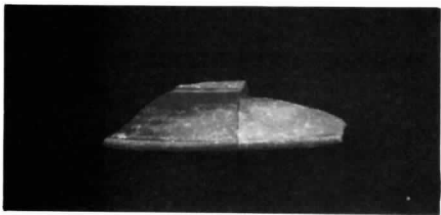
11  
(14-4)



6  
(13-7)



12  
(14-5)



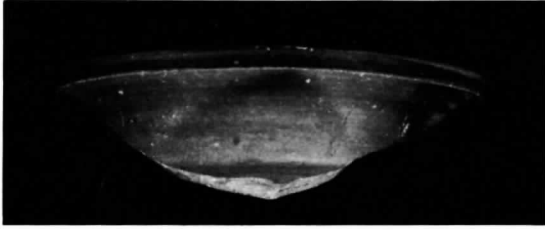
7  
(13-9)



13  
(14-6)

図版 6 須 恵 器(1)

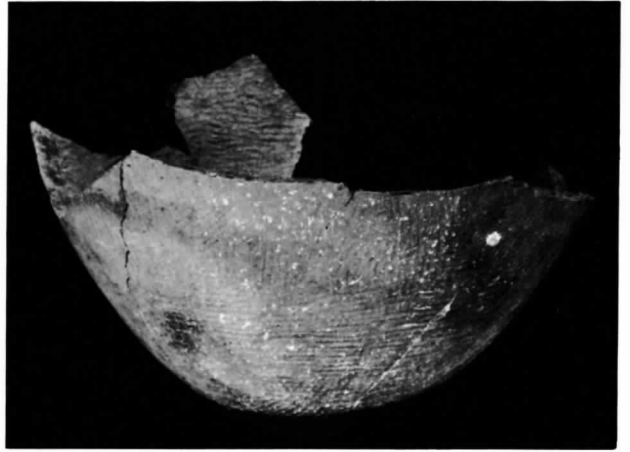




1 (15-1)



2 (15-2)



3 (15-3)



4 (15-4)

図版 7 須 恵 器(2)



しも や ち  
下 谷 地 B 遺 跡

遺 跡 名：下谷地B遺跡(略号SY74)

遺跡所在地：和賀郡江釣子村北鬼柳

第12地割13ほか

調査期間：昭和49年6月19日～8月1日

調査対象面積：600㎡

発掘調査面積：580㎡

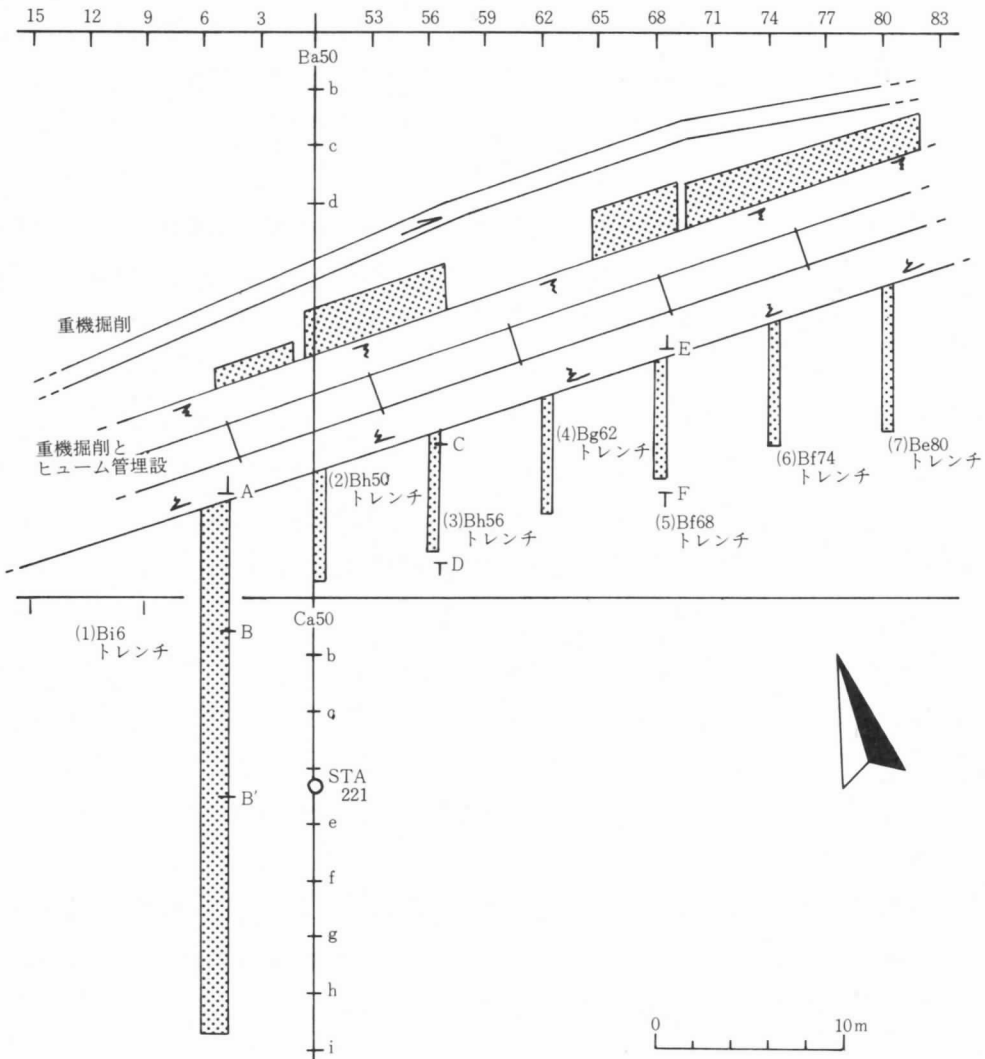
図 表 目 次

第1図	グリット配置と調査区域図	125	第5表	トレンチ外出土遺物集計表	142
第2図	土層断面図	127	第6表	石器一覧表	144
第3図	遺物包含状況図	129	第7表	環における残存率集計表	145
第4～11図	トレンチ出土遺物(1)～(8)	131	第8表	黒色処理の土器観察表(1)	152
第12図	縄文土器	142	第9表	黒色処理環の法量値集計表	154
第13～14図	石器(1)～(2)	143	第10表	黒色処理の土器観察表(2)	158
第15～19図	黒色処理の土器(1)～(5)	147	第11表	非黒色処理の土器観察表(1)	165
第20図	黒色処理環の法量比	155	第12表	非黒色処理環の法量値集計表	168
第21～24図	黒色処理の土器(6)～(9)	157	第13～15表	非黒色処理の 土器観察表(2)～(4)	171
第25～29図	非黒色処理の土器(1)～(5)	161	第16表	須恵器観察表(1)	178
第30図	非黒色処理環の法量比	168	第17表	須恵器環の法量値集計表	179
第31～33図	非黒色処理の土器(6)～(8)	170	第18表	須恵器観察表(2)	183
第34～36図	須恵器(1)～(3)	176	第19表	器種別陶磁器一覧表	184
第37図	須恵器環の法量比	180	第20表	陶磁器観察表	186
第38～39図	須恵器(4)～(5)	181	第21～25表	木製品計測表(1)～(5)	189
第40図	陶磁器	185	第26表	遺物集計表	198
第41図	鉄・石製品	187	第27表	器形別土器一覧表	200
第42～50図	木製品(1)～(9)	188	第28表	器面調整一覧表	202
第51図	環の法量比分布図	204	第29表	器種別計測表	203
第52図	落合II遺跡出土環の法量比分布図	205	第30表	環・高台付環容量集計表	206
第53～55図	墨書文字(1)～(3)	208	第31表	墨書文字一覧表	207
第1表	トレンチ出土遺物集計表	128	第32表	用途別木製品	212
第2～4表	トレンチ出土 土器観察表(1)～(3)	132			

## I 位置と立地 (下谷地A遺跡第1図 同図版1)

下谷地A遺跡に重複する主として南半部分にあたり、下谷地A遺跡に既述する通りである。現状は下谷地A遺跡における調査区域の大部分をなす水田及び畑地の南端より道・水路を境にして若干低位となる水田である。標高は道・水路に沿う畑地で72.20m、南の水田では71.27mである。

## II 調査の経過 (第1図)



第1図 グリッド配置と調査区域図

— 下谷地 B 遺跡 —

下谷地 A 遺跡の南端を東西に走る道・水路が重機によって開削され、これに伴って多量の遺物が出土した。これにより、昭和49年に至って発掘調査したものである。

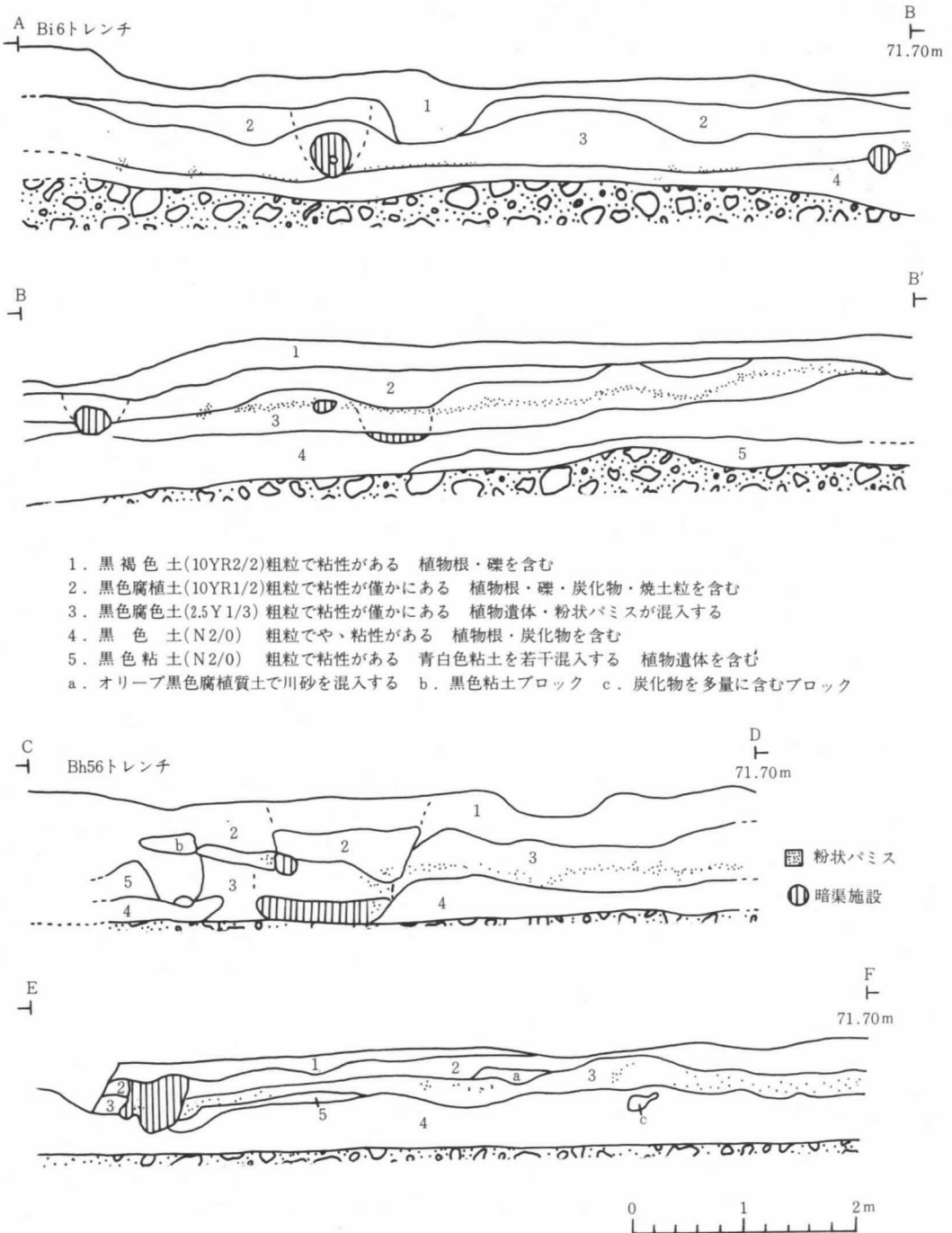
グリット配置は、下谷地 A 遺跡における基点を踏襲して区割する。調査区域は東西81.6m、南北47.0mに及び、B～C区にあたる。東西の道路に沿って東流する北水路以北では東西12.0m、南北2.6mを最大に4区域を設定し、南水路以南では東西1.5m、南北28.2mのBi 6トレンチのほか、6トレンチに設けて調査するものである。

### III 遺跡の層序 (第2図)

北水路に沿った畑地における層序は明らかでないが、南側水路以南では以下の通りである。

- 第1層 黒褐色土 植物根・礫を含み、粘性のある腐植質土である。層厚は一様でないが、0.20～0.30mを計る。耕作土とみられ、Bg 68トレンチ南端では消滅して明確でない。
- 第2層 黒色土 植物根・礫のほか、炭化物・焼土粒を含む腐植質土である。層厚0.20～0.30mであり、Bh 56トレンチでは断続している。また、Bg 68トレンチでは川砂の混入するオリープ黒色腐植質土がブロック状をなして認められ、共に第3層を被っている。
- 第3層 黒褐色土 僅かに粘性のある腐植質土であり、Bi 6トレンチ南端で消滅する。Bi 6・Bh 56トレンチには粉状パミスが混入し、北側では最下面に、南側では上・中位層にあって一様でない。層厚は最大0.50mである。
- 第4層 黒色土 植物根や炭化物粒を含み、やや粘性がある。層厚は0.20～0.50mを計り、大部分は砂礫層にのる。
- 第5層 黒色粘土 粘性が強く、青白色粘土を若干混入する。Bi 6トレンチの南端では第4層によって、Bh 56・Bg 68トレンチではそれぞれ第1・3層によって被われ、共に断続している。また、Bg 68トレンチには炭化物を多量に混入するブロックがある。層厚はBg 68トレンチで0.05～0.15mである。これより下層は砂礫層である。

遺物はBi 6トレンチ北端に集中し、第1～4層に包含される。特に第3・4層では土器及び木製品を含む植物遺体が多く認められる。しかし、遺構は近・現代の暗渠施設を除いて確認されず、旧河道とされる部分も未確認である。



1. 黒褐色土(10YR2/2)粗粒で粘性がある 植物根・礫を含む
  2. 黒色腐植土(10YR1/2)粗粒で粘性が僅かにある 植物根・礫・炭化物・焼土粒を含む
  3. 黒色腐色土(2.5Y 1/3)粗粒で粘性が僅かにある 植物遺体・粉状バミスが混入する
  4. 黒色土(N2/0)粗粒でや、粘性がある 植物根・炭化物を含む
  5. 黒色粘土(N2/0)粗粒で粘性がある 青白色粘土を若干混入する 植物遺体を含む
- a. オリーブ黒色腐植質土で川砂を混入する b. 黒色粘土ブロック c. 炭化物を多量に含むブロック

第2図 土層断面図

## IV トレンチの出土遺物

土師器・須恵器・石製品・木製品を合せて506点である。その大部分は小破片であり、出土地点や層位の不明なものが含まれるが、次表によって分類するならば土師器が449点で88.7%を占めてもっとも多く、次いで須恵器54点、10.7%、木・石製品0.6%の順となる。

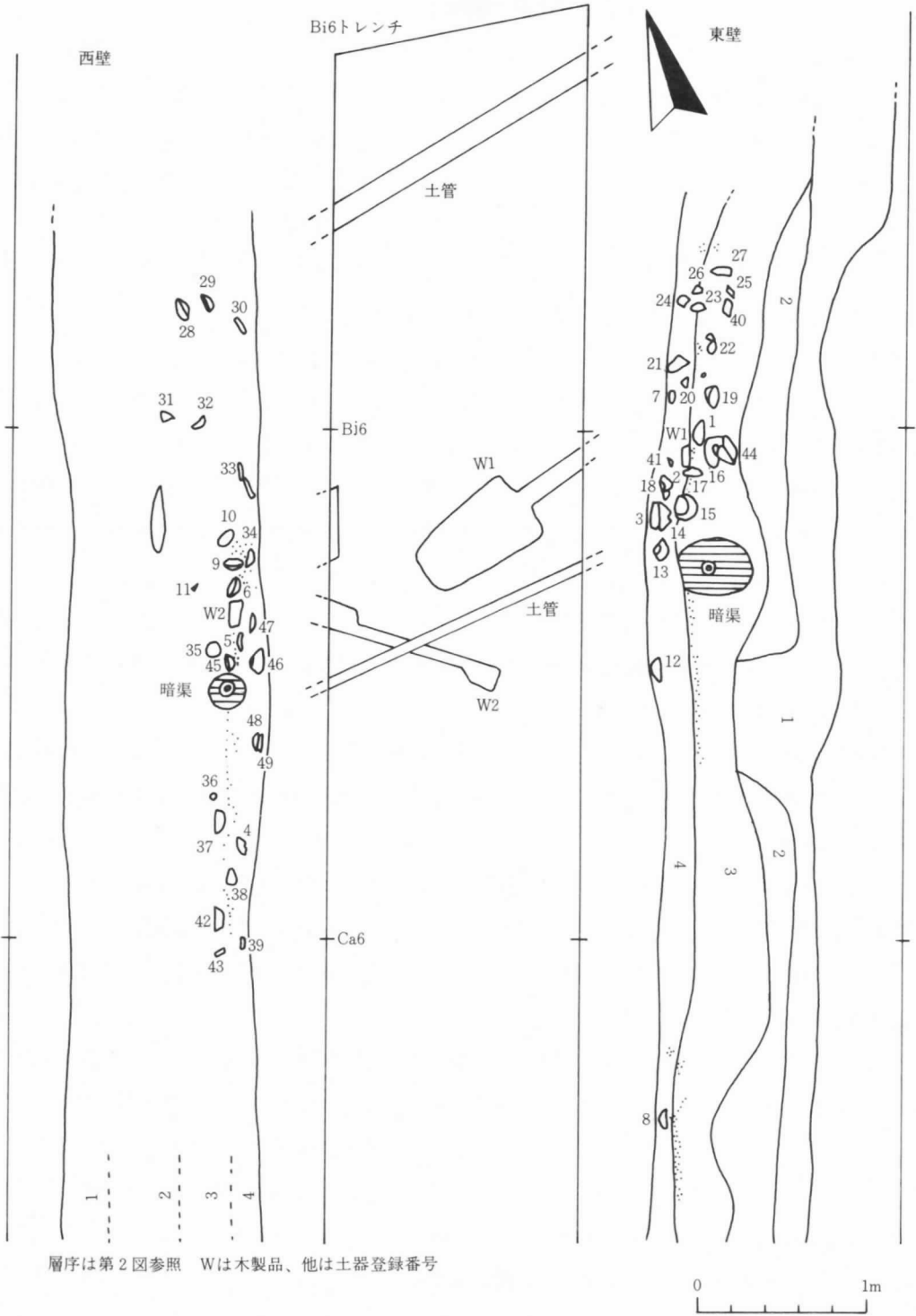
トレンチ別では西端のBi 6トレンチに全体の61.3%が集中し、他はBg 62・Bh 56・Be 80トレンチに若干多い。前者はトレンチの規模に対応するものであるが、東西間にはやゝ波状に増減する傾向が認められる。

第 I 表 トレンチ出土遺物集計表

トレンチ			(1) Bi 6					(2) Ch50	(3) Bh56	(4) Bg62		(5) Bf68	(6) Bf74	(7) Be80	不明	計			
層	位		1/2	3	3/4	4	不明	2	1/2	2	不明	1/2	2	2	1/3か	小計	合計	比率	
土師器	黒色処理	口	(4) 4	(1) 4	3	9	(3) 6			2	3			2	1	42	114	22.5%	
		体	3	1	1	3	3			4	4		1	1		21			
		底	4	1		4	(1) 36	1		2				2		51			
	高台付処理	口	1			(1)									(1)	3	11	2.2%	
		体												1		1			
		底脚	2				2			2				1		7			
	鉢	口					1									1	1	0.2%	
	非黒色処理	壊	口	22	15	12	5	16	1	3		8	2	1	7	1	83	216	42.7%
			体	13	1		1	3		5	1	4	2	3	5		38		
			底	18			1	50		6	2	12	2		4		95		
高台付処理		口	3				1				6	2	1	8		21	48	9.5%	
		体					7		1	1				1		10			
		底脚	5				6		2	3				1		17			
鉢・甕	口	1				1	1	3	2	3	1	1	1		14	59	11.7%		
	体	7						18	2	5	3		4		39				
	底	2				1		2	1						6				
須恵器	壊	口			1	6	8	1	3			2		1		22	35	6.9%	
		体				1				1				1		3			
		底	1			2	4		1	1		1				10			
	壺・甕	口		1												1	19	3.8%	
体		2			1			4	2	4	3				16				
底	1					1									2				
石製品									1							1	1	0.2%	
木製品				1	1											2	2	0.4%	
計	小計	93	14	18	35	150	4	50	20	54	18	7	41	2		506	100.1	100.1	
	合計	310					4	50	74	18	7	41	2		506				
	比率	61.3%					0.8	9.9	14.6	3.6	1.4	8.1	0.4		100.1				

口縁部～底部の破片は口縁部に含み、( ) は両面黒色処理





層序は第2図参照 Wは木製品、他は土器登録番号

第3図 遺物包含状況図

### 1 土師器 (第3～8図 第1・2表 図版1～5)

還元炎焼成によるくすべ色、または灰白色を呈する須恵器を除いて酸化炎による焼成とみられる橙色、褐色系の色調を有するものすべてを含むものである。大別して内面、または内外面に黒色処理の施されるものとこれを認めない非黒色処理の土器に2分される。黒色処理の土師器には坏と高台付坏、鉢があり、合せて126点である。非黒色処理のそれでは坏、高台付坏、鉢、甕が含まれ、323点である。その比率は2：5となり、非黒色処理の土器が圧倒的に多い。

器種別では小破片のため明確でないものが若干あるが、坏330点、高台付坏59点、鉢・甕合せて60点となり、坏は全体の73.5%を占めている。

#### (1) 黒色処理の土器 (第3～5図 第1・2表 図版1・2)

内面、または内外面を黒色処理する土師器は合せて126点であり、全体の24.9%である。完形品は含まれず、小破片が多いが、器種は坏、高台付坏、鉢と推定される。坏がもっとも多く、坏と高台付坏の破片数による比率はほぼ10：1の割合となる。そのうち、内外面黒色処理される坏と高台付坏は合せて11点である。鉢は内面黒色処理の1点である。出土地点別ではBi 6トレンチに集中し、比較的上層に分布している。

#### 坏 (第3・4図 第2表 図版 )

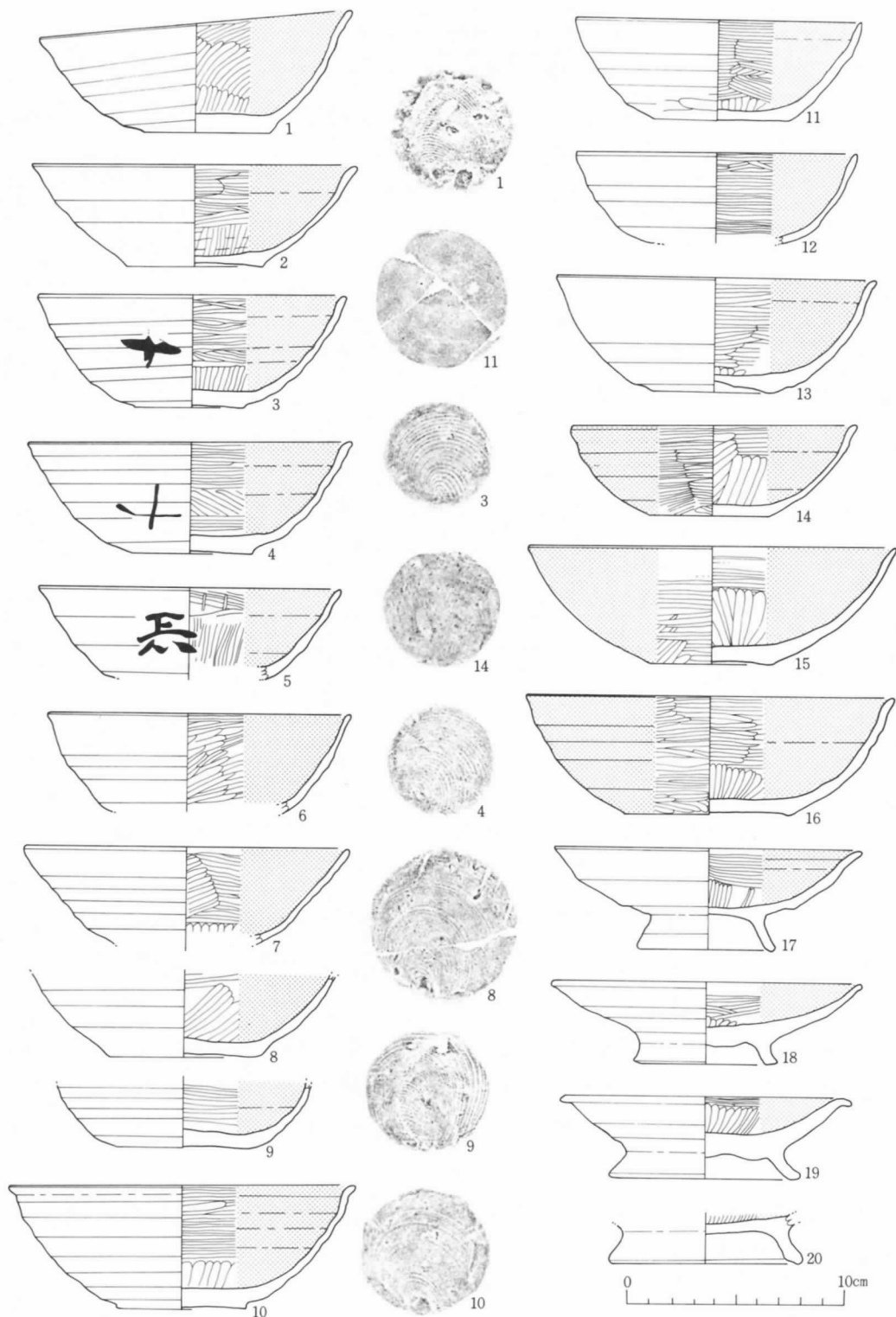
114点のうち、口縁部より底部まで残存するものは7点である。9点が内外面黒色処理されるほかは内面を黒色処理する坏である。

内面黒色処理の坏では、体部よりほぼ直線状に外傾するものとや、内彎して立ちあがるものがあり、後者では更に口縁部の外反するものが含まれる。共に強弱があり、口縁部にや、肥厚するものが多い。

体部は共にロクロ成形痕を残し、特に外面に強い。外面の篋削りされるものは少なく、体部下端に手持ち篋削りされるものは底部に篋削りされるものである。内面は底部が放射状に篋磨きされるのに対し、体部より口縁部にかけては横、または斜方向に認められ、底部に先行して調整されるものが多い。

底部は体部下端より厚手となり、体部境に稜を残して切り離されるものと滑らかに丸味をもって底部に続くものがある。共に回転糸切りによって切り離され、外面中央部に僅かにあがるものが多い。また、周縁には不整な凹凸を残すものや全体に歪みのあるものが含まれる。切り離しの不明なものは全面が篋削りされるものであるが、中央部に回転糸切り痕を残して篋削りされるものがあり、すべて回転糸切りによる切り離しと推定される。内面の篋磨きは肥厚する中心部より放射状を呈して認められ、横、または斜方向にのみよるものが若干含まれる。

胎土は細粒のものが多いが、砂質で粗粒のものや小石を含むものがあり、色調はいずれにもぶい褐色、または橙色系を呈する。底部、または体部外面に黒斑を残すものがある。



第4図 トレンチ出土遺物(1)

第 2 表 トレンチ出土土器観察表 (I)

実測図 No	登録 No	出土地点・層位 (トレンチ)	器種	残存率		口径	底 高台	器 高	径高指数	外傾指数	器面調整		切り離し 調整	外面色調	墨書文字			備考
				口縁	底部						内面	外面			文字	位置	No	
1	1	Bi6 4	環	分の2	分の1	14.4	5.7	5.7	39.6	29.8	ヘラミガキ 横放射	ロクロナデ	糸切り	にぶい褐色			容量 (366.7)cc	
2	8	" "	"	3	3	(14.0)	(5.8)	4.7	(33.6)	48.9	" "	"	"	にぶい橙				
3	15	" 3~4	"	2	1	14.3	5.1	5.3	37.1	37.7	" "	"	"	橙	十	体部	141	
4	21	" 4	"	3	1	(15.0)	5.1	5.2	43.3	43.3	" 横斜	"	"	にぶい赤褐	"	"	74	底部に黒斑あり
5	22	" 3	"	3		(14.0)					" 横放	"	"	にぶい橙	夾	"	135	
6	20	" 4	"	4		(14.0)					" 斜	"	"	にぶい褐				
7	17	" "	"	6		(13.0)					" 横斜	"	"	"				
8	41	" 3~4	"		1		7.3				" 横放	"	糸切り	にぶい橙				体部下端に黒斑あり
9	46	" 4	"		1		6.0				" "	"	"	橙				黒色処理消失
10	38-1	" "	"	8	1	(16.0)	5.9	5.7	(35.6)	42.1	" "	"	"	にぶい橙				
11	51	" ?	"	2	1	13.2	6.2	4.6	34.8	32.6	" "	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙			(335.2)cc	
12	11	" 3	"	6		(13.0)					" 横	ロクロナデ		にぶい褐				黒色処理消失
13	52	" ?	"	4	2	(14.8)	5.6	5.3	(35.8)	35.8	" 横放	"	糸切り	褐・黒褐				
14	37	Bi6 3	"	2	1	13.2	5.5	4.3	(32.6)	43.0	" "	ヘラケズリ ヘラミガキ 横	ヘラケズリ	浅黄橙				一部黒色 処理消失 (317.4)cc
15	5	" ?	"	10	1	(17.0)	5.6	5.4	(31.8)	46.3	" "	ヘラミガキ 横	糸切り	黒				
16	3	" "	"	4	2	(17.0)	6.8	5.5	(32.4)	36.4	" "	" "	ヘラケズリ	"			(568.5)cc	
17	1	" 2	高台付環	5	1	(14.2)	5.5	4.7	(21.8)	67.7	" "	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙				
18	25	" ?	"	2	3	14.4	(6.1)	3.8	20.1	84.5	" "	"	菊花状	にぶい褐			(124.7)cc	
19	14	" "	"	10	3	(13.4)	(8.8)	3.8	19.4		" "	"	ロクロナデ	"				
20	2	" 2	"		3		(7.0)				" 放	"	糸切り	にぶい黄橙 褐				
21	2	" ?	鉢	7	~10	(23.6)	(10.6)	(9.1)			" 横	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい橙				口縁部のみ 黒色

( ) は推定値

墨書文字は 5 点にあり、共に体部外面に位置する。「十」2 点のうち 1 点は、底部を上方にして記される。

口径はやゝ歪みのあるものを含むが、13.0~16.0cmを計り、底径は5.1~7.2cm、器高4.7~5.7cmである。径高指数は33.6~39.6となり、若干大小のばらつきがある。しかし、器形上の変化は殆ど認められない。また、層位的にも混在して特徴は見いだし得ない。

内外面黒色処理の環は、内黒処理の環に更に外面に横方向の筥磨きが施される。器形は体部より内彎して立ちあがり、口縁部では僅かに外反して強弱がある。底部の切り離しは回転糸切りのほか、全面を筥削りされて不明となるものがある。その他は内黒処理の環とほぼ同様である。

口径は(13)を含めて大小があり、最大17.0cmと推定される。底径は5.5~6.8cm、器高は4.3~6.8cmを計り、径高指数は31.8~32.6となって内黒処理のそれに比してやゝ低い。

高台付坏 (第3・4図 第2表 図版2)

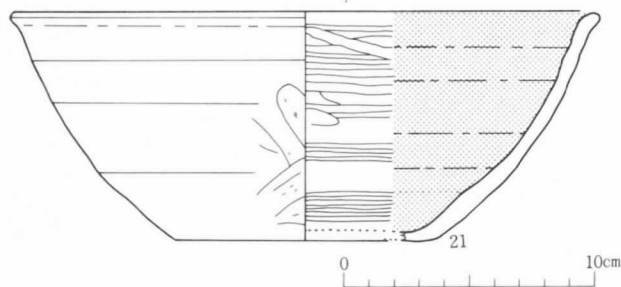
内外面黒色処理の2点を合せて黒色処理の高台付坏は11点である。口縁部より高台部まで遺存するものは内面黒色処理の坏1点である。坏部は器高が全体に低く、皿型を呈するものと内彎して立ちあがり、これより深いものに2分される。図化する3点は共に前者に含まれ、口縁部が外反して薄く逸き出されるものと端反りするものである。体部にはいずれもロクロ成形痕が残る。他はすべて坏の場合と同様である。

高台は付高台で全体に低く、直線状に外傾するが、高台端でやや外反して稜をなすもの、丸味をもつものがある。後者では高台端部に肥厚して幅広となり、高台内側に沈線状に微かな段を形成するものが含まれる。高台内外面は共に滑らかにロクロナデされ、底部の切り離しの不明となるものと回転糸切り痕を残存させるものがある。大部分は後者の形状をなすが、前者には全面ロクロナデされるものと菊花状に篋状工具の痕跡を有するものが含まれる。

口径は13.4~14.4cm、高台径5.5~8.8cm、器高3.8~4.7cmを計る。坏部による径高指数は19.4~21.8で小さく、外傾指数は67.7~84.6と坏に比して著しく高い。

鉢 (第5図 第2表 図版2)

口縁部より底部まで残存する破片1点である。体部より内彎気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。体部は外面下半に不整な篋削り痕があり、内面は横方向の篋磨きが施される。底部は全面に篋削りされ、切り離しは不明である。



第5図 トレンチ出土遺物(2)

口縁部の内面を除いてにぶい橙色を呈し、胎土は0.3~0.5cm前後の小石を含み、全体に粗雑である。口径23.6cmと推定され、器高は9.1cmを計る。

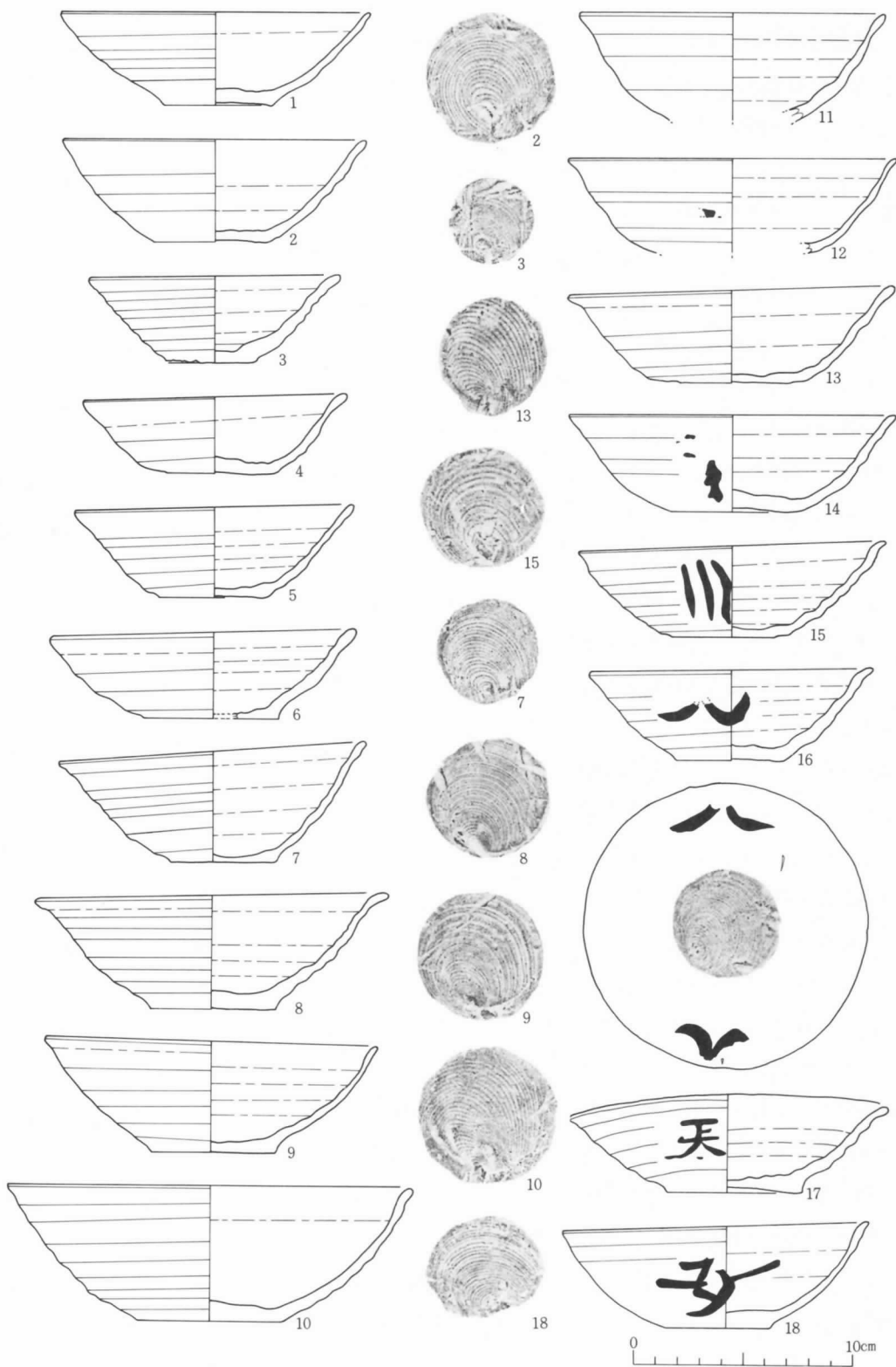
(2) 非黒色処理の土師器 (第3・6~8図 第1・3表 図版1・3~5)

非黒色処理の土器は坏、高台付坏、鉢、甕を合せて323点である。坏の完形品4点が含まれるほかはすべて破片である。破片数による割合では、坏がもっとも多く66.9%を占め、高台付坏を含めて81.7%にのぼる。鉢・甕はそれぞれ1.5、16.7%である。

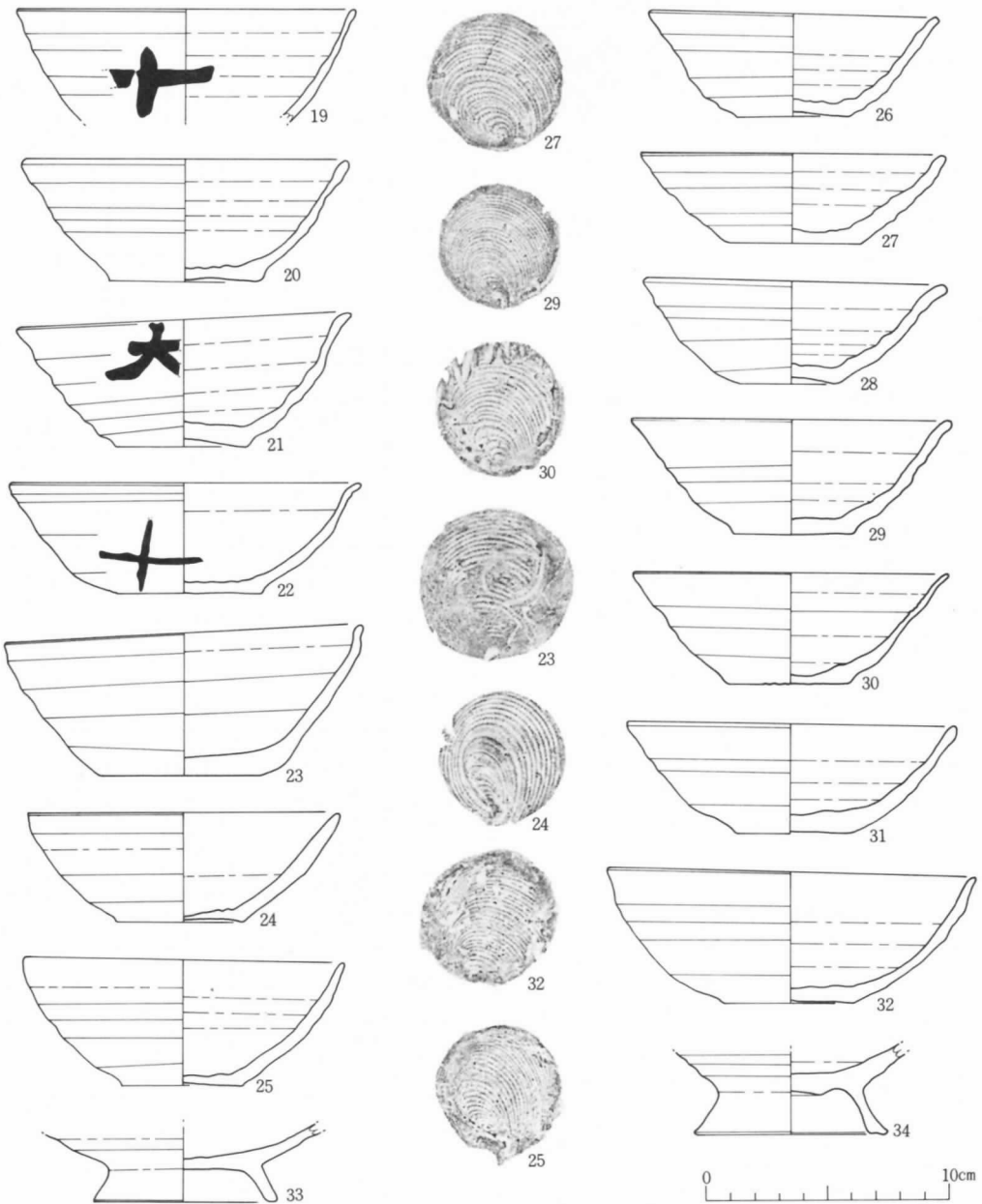
坏 (第3・6~7図 第1・3表 図版1・3・4)

口縁部83点、体部38点、底部95点であるが、口縁部及び体部片には坏と識別できないものが含まれ、実数では多少これより少ないものとみられる。完形品4点を含め、図化できたものは24点である。すべてロクロ成形される黄橙色、または褐色系の色調を呈するものである。

— 下谷地 B 遺跡 —



第 6 図 トレンチ出土遺物(3)



第7図 トレンチ出土遺物(4)

口縁部は体部に続いてほぼ直線状に外傾するもの、内彎して立ちあがるものがあり、後者は更に直上に逸き出されるものと外反して端反りするものがある。口縁端部はやや肥厚するものが大部分である。

体部は下方ほど肥厚するが、底部境が丸味をなすものは殆ど変化がない。内外面は口縁部直下よりロクロ成形痕を有し、特に体部外面に著しい凹凸を残すものが含まれる。また、底部と

第 3 表 トレンチ出土土器観察表 (2)

実測図 No	登録 No	出土地点・ (トレンチ)	層位	器種	残存率 口縁 底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	径高指数	外傾指数	器面調整		切り離し 調整	色調		墨書文字		備考	
											内面	外面		内面	外面	文字	位置		No
1	1	Bg62	2	坏	分の1 2	14.2	5.0	4.3	30.3	58.1	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	にぶい 黄褐色	にぶい 褐色			容量 (309.3)cc	
2	27	Bi6	2	"	2	13.9	5.3	4.7	33.8	48.9	"	"	"	浅黄橙	浅黄色			(320.4)cc	
3	10	"	3	"	2	11.5	4.2	4.1	35.7	53.7	"	"	"	にぶい黄橙	橙			(166.7)cc	
4	28	"	"	"	2	12.1	5.2	3.7	30.6	48.6	"	"	"	にぶい黄橙	にぶい黄橙				
5	29	"	"	"	2	12.8	5.0	4.4	34.4	47.7	"	"	"	"	橙			(250.0)cc	
6	42	"	"	"	2	14.0	6.5	4.5	32.1	42.2	"	"	"	にぶい褐	にぶい褐				
7	19	"	"	"	1	14.3	5.0	5.6	39.2	42.9	"	"	"	にぶい黄橙	にぶい黄褐			305.6cc	
8	16	"	"	"	2	16.2	5.8	5.4	33.3	59.6	"	"	"	"	"				
9	45	"	"	"	2	15.2	6.1	5.6	36.8	41.1	"	"	"	"	褐			外面に煤付着。 (453.7)cc	
10	6	"	"	"	2	18.6	6.6	6.6	35.5	40.9	"	"	"	"	にぶい黄橙			(805.5)cc	
11	40	"	"	"	4	(14.0)					"	"	"	褐	黒褐			外面に煤付着。	
12	26	"	3-4	"	3	(15.0)					"	"	糸切り	にぶい橙	にぶい黄橙	□	体部	193	
13	44	"	"	"	2	15.0	5.3	4.5	30.0	53.3	"	"	"	にぶい黄橙	"			(248.2)cc	
14	43	"	"	"	4	(15.0)	5.4	4.4	(29.3)	56.8	"	"	"	にぶい黄褐	にぶい橙	□	体	304	
15	9	"	"	"	2	14.1	5.6	4.5	31.9	56.7	"	"	"	褐	暗褐	川	#	167	(281.5)cc
16	35	"	"	"	1	13.0	5.0	4.2	32.3	53.6	"	"	"	にぶい黄橙	にぶい黄橙	八?	#	169	237.1cc
17	27	"	"	"	2	14.6	6.2	4.3	29.5	55.8	"	"	"	褐	"	天	#	134	(205.6)cc
18	32	"	"	"	4	(14.0)	5.3	4.9	(35.0)	45.3	"	"	"	にぶい橙	"	安	#	157	
19	46	"	4	"	5	(14.0)					"	"	糸切り	にぶい黄橙	にぶい黄橙	十	#	303	
20	48	"	"	"	8	(14.0)	6.3	5.0	(35.7)	41.0	"	"	"	"	"			(250.0)cc	
21	38.2	"	"	"	2	13.8	5.6	5.5	39.9	44.0	"	"	"	"	"	大?	体	192	
22	34	"	"	"	2	14.5	6.2	4.6	31.7	46.7	"	"	"	橙	にぶい橙	十	#	142	(357.4)cc
23	4	"	"	"	2	14.8	6.5	6.2	41.9	34.7	"	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙			(468.5)cc	
24	1	不明	"	"	2	12.9	5.3	4.5	34.9	46.7	"	ロクロナデ	糸切り	にぶい褐	にぶい褐黒			(233.3)cc	
25	20	Bi6	不明	"	2	13.2	5.0	5.2	39.4	36.5	"	"	"	橙	橙			(298.2)cc	
26	22	"	"	"	2	11.9	4.6	4.2	35.3	45.2	"	"	"	にぶい黄橙	にぶい黄橙			(166.7)cc	
27	9	"	"	"	1	12.6	5.5	3.7	29.4	53.2	"	"	"	に黄橙	浅黄橙			203.7cc	
28	7	"	"	"	1	12.5	4.1	4.3	34.4	54.0	"	"	"	にぶい黄橙	にぶい黄橙			213.7cc	
29	15	"	"	"	2	13.2	4.9	4.8	36.4	45.8	"	"	"	橙	浅黄橙			(279.6)cc	
30	19	"	"	"	2	13.0	5.0	4.6	35.4	52.2	"	"	"	にぶい黄橙	にぶい黄橙			煤付着 (257.4)cc	
31	50	"	"	"	2	13.6	4.8	4.6	33.8	39.6	"	"	"	"	"			(253.0)cc	
32	18	"	"	"	2	15.2	5.3	5.4	35.5	38.9	"	"	"	褐	にぶい褐			(435.2)cc	
33	1	Bh56	2	高台付坏	3	(8.0)					"	"	"	にぶい橙	にぶい橙				
34	1	Bg62	不明	"	1		7.5				"	"	糸切り ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙				
35	1	Bi6	"	鉢	~10	(30.5)					"	ロクロナデ ヘラケズリ		にぶい橙	にぶい橙			内面に煤付着。	
36	10	"	"	甕	~10	(14.0)					"	ロクロナデ		にぶい褐	にぶい褐				
37	3	"	"	"	1	(7.6)					ヘラナデ	ヘラミガキ	木葉痕	にぶい橙	浅黄橙				

( )は推定値



同様に体部下端に篋削りされるものが含まれる。

底部では体部境に明瞭に稜を残すものと丸味を有して体部下端に続くものがあり、器厚に厚薄がある。内面はロクロ痕を残すものと殆ど平滑になるものがあり、外面では中央部に凹んで薄手となるもの、水平に近いものが混在する。切り離しは篋削りによって不明となる 1 点を除いてすべて回転糸切り痕を残す。

胎土は均質・細粒のものが多く、粗悪なものは歪みのあるものを除いて特に認められない。そのほか、外面に煤の付着するものが含まれる。また、墨書土器は 11 点があり、いずれも体部外面に記される。判明するのは「十」、「川」、「天」、「大」等である。

全体における口径は 11.5~18.6cm を計り、12.8~15.2cm に集中している。底径は 5.0~6.5cm である。器高は比較的小さい 3.7~5.0cm と 5.4~6.6cm のものに 2 分される。径高指数は 29.3~41.9、外傾指数 34.7~59.6 であり、黒色処理の坏に比してばらつきがある。

#### 高台付坏 (第 7 図 第 1・3 表 図版 4)

口縁部 21 点、体部 10 点、底部及び高台部 17 点であるが、口縁部及び体部は坏と判別できないため、多少増加するものと思われる。口縁部より底部まで遺存するものは皆無であり、全体の明らかなものはない。

図化する 2 点は共に体部下半より高台の一部まで残存するが、体部より口縁部にかけては直線状に外傾するとみられ、器高の低い皿型に近いものと推定される。

坏部は内面が比較的滑らかであり、外面にロクロ痕が残る。高台は共に外傾して高台端に丸味をなすものと高台端に肥厚し、高台内に偏って沈線状に凹むものがある。高台内は前者が糸切り痕を残し、後者は全面をロクロナデしている。胎土や焼成は坏のそれと同様である。

他の破片における高台は殆ど同様であるが、高台内を全面に渡ってロクロナデするものは 17.6% である。

#### 鉢 (第 8 図 第 1・3 表 図版 5)

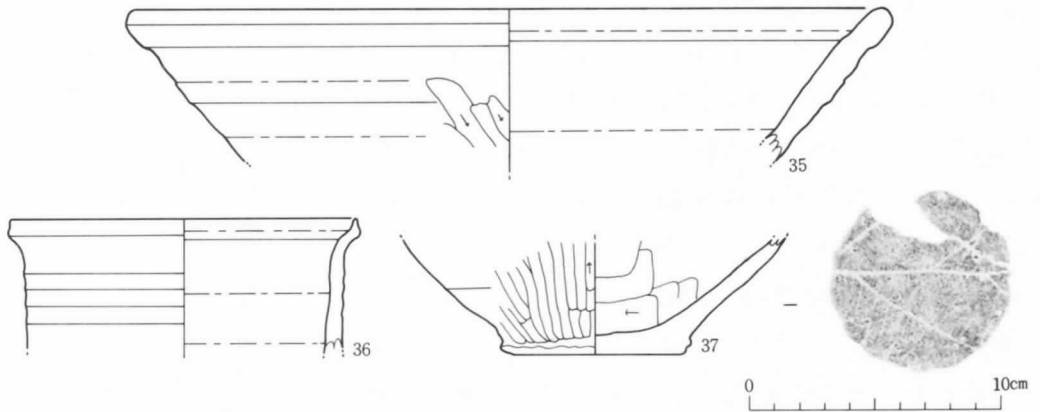
口縁部 4 点、体部 1 点の破片である。共に器高の低い極めて厚手の成形である。口縁部は内彎気味に逸き出されるものとやゝ外反して薄手となるものがある。体部はロクロ痕のほか、外面に篋削りされるものがあり、全体に粗雑である。焼成は他と同様であるが、胎土には径 0.3cm 前後の小石を含む。また、内外面に煤の付着するものがある。口径は 30.0cm 前後と推定され、体部における器厚は 0.7~1.2cm である。

#### 甕 (第 8 図 第 1・3 表 図版 5)

口縁部 10 点、体部 38 点、底部 6 点であり、ロクロ不使用のものが含まれる。共に 10 分の 1 以下の小片で図化できるものは少ない。口縁部はくの字状に外反し、更に直上に逸き出されるもの、直線状に外傾するもの等が含まれ、口径 20.0cm 前後のものが含まれる。体部はロクロナデ

のほか外面に篋削りされるものが大部分であり、内面に刷け毛目を有するものが若干である。胎土には砂粒・石英を含むものが多い。

底部は砂粒が付着するもの1点と木葉痕を有する1点が含まれる。後者は内面に篋ナデ痕があり、外面に丁寧な篋磨き状の調整痕を残す。



第8図 トレンチ出土遺物(5)

## 2 須恵器 (第3・9図 第1・4表 図版1・5)

還元炎焼成によるものとみられる灰色、灰白色を呈する土器は、坏が焼成良好な硬質のものや、灰白色がかかった軟質のそれを合せて35点、壺、または甕が19点である。その大部分が小破片であり、坏の完形2点を含めて図示できるのものは10点である。破片数による遺物全体の出土比率は10.7%を占め、須恵器中では坏が64.8%である。

### 坏 (第3・9図 第1・4表 図版5)

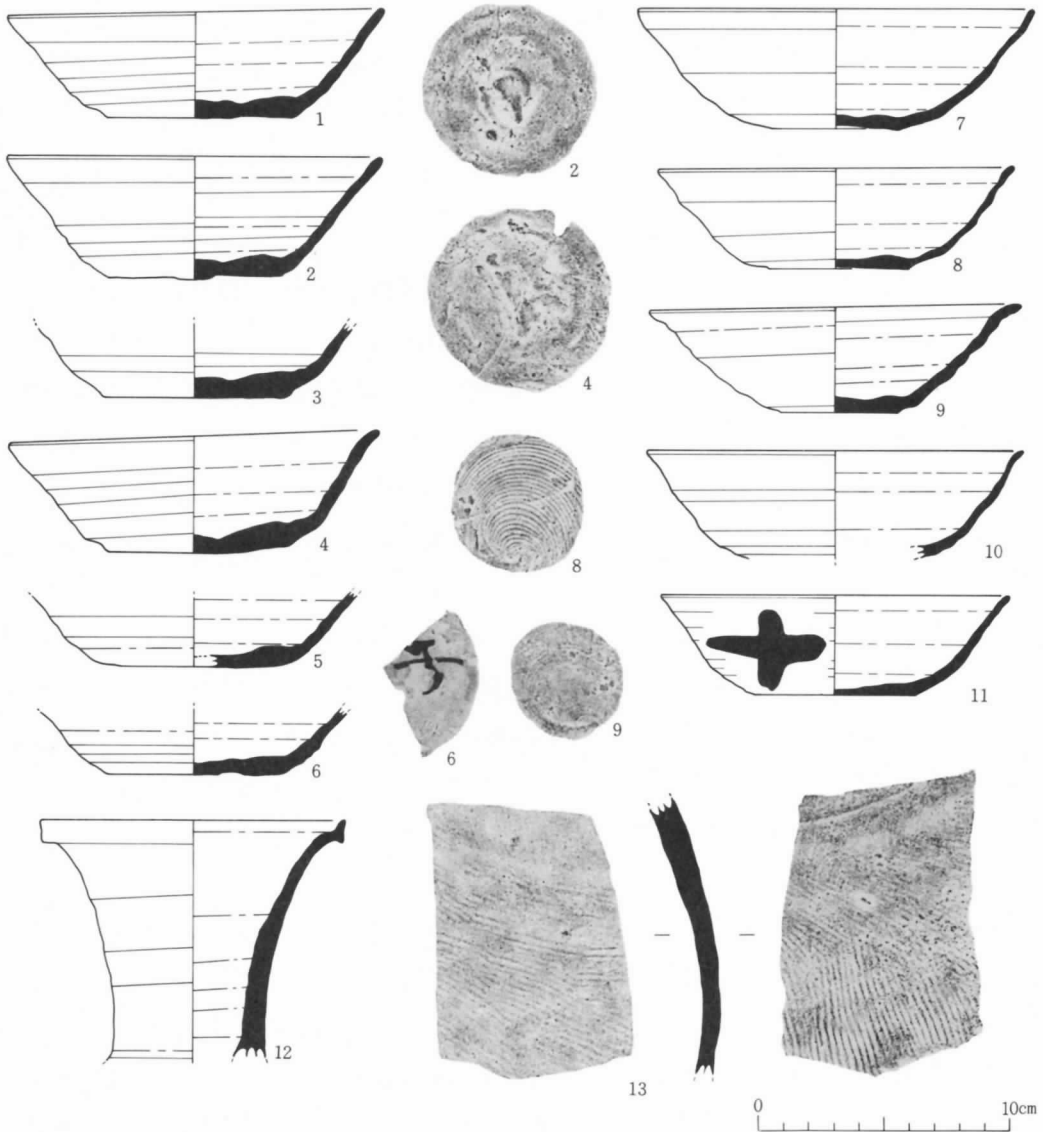
33点のうち口縁部より体部にかけての破片が多いが、器高の得られる坏は7点である。大別して灰白色を呈する軟質、またはや、硬質のものと灰色の硬質の坏に分けられる。破片数では灰白色のや、硬質の坏が14点でもっとも多い。層位的な変化は特に認められないが、下層では灰白色の軟質の坏が4層に集中している。しかし、出土状況の不明なものが多く、明確でない。

灰白色の坏は口縁部まで直線状に立ちあがり、口縁端部に僅かに薄手となる。体部は下半に弱い凹凸が残るが、口縁部ほど滑らかにロクロナデされる。内面は見込みに凹凸が残って平滑なものはない。底部の切り離しは粗粒な胎土で灰色かかった1点が糸切りされるほか、いずれも篋切りによっており、中央部に不整な残痕を有する。(1)~(6)の口径は15.0cm、底径6.9~7.7cm、器高4.3~4.9cmを計り、ばらつきが小さい。墨書文字は底部に1点がある。

これよりや、硬質の坏では全体に薄手で内彎気味に立ちあがり、口縁端部に僅かに肥厚する。共に内外面に弱い凹凸を有するか、または平滑にロクロナデされる。底部の切り離しはすべて回転糸切りにより、再調整は認められない。口径は14.6~15.8cm、底径4.9~5.0cm、器高4.8~4.

9cmと推定される。

灰色を呈する硬質の坏は薄手のものが多く、内彎気味に立ちあがって外反し、弱い端反り状をなすものと直線状に立ち上がるものがある。内外面は極めて滑らかで内面底部には平滑となるものと凹凸の目立つものがあり、後者は比較的底径が小さい。底部の切り離しは回転糸切りであり、全面を手持ち篋削りされて不明となるもの1点がある。4点による口径は13.4~15.4cm、底径4.8~5.6cm、器高4.4~4.6cmと推定される。灰白色の軟質の坏に比しては底径が小さく、口径のばらつきが大きい。墨書文字は体部外面に「十」1点がある。



第9図 トレンチ出土遺物(6)

第 4 表 トレンチ出土土器観察表 (3)

実測図 No	登録 No	出土地点 (トレンチ)	層位	器種	遺存率		口径 cm	底径 cm	器高 cm	径高指数	外傾指数	器面調整		切り離し 調整	色調			墨書文字 文字位置 No	備考
					今の1 分の2	分の1 1						内面	外面		内面	外面	外面		
1	2	Bi 6	4	坏			15.0	7.7	4.3	28.6	46.5	ロクロナデ	ロクロナデ	へら切り	灰白色	灰白色			容量 (369.6)cc
2	3	"	"	"	2	1	15.0	7.3	4.9	32.7	50.0	"	"	"	"	"			(392.6)cc
3	7	"	"	"		1		7.3				"	"	"	"	"			
4	12	"	"	"	1	1	15.0	7.4	4.9	32.7	42.9	"	"	"	"	"			353.7cc
5	41	"	"	"		3		(7.0)				"	"	"	"	"			
6		不明	"	"		3		(6.9)				"	"	"	"	"	□万	底部	230
7	5	Bi 6	4	"	8	1	15.8	5.0	4.8	30.4	47.9	"	"	糸切り	褐灰色 灰白色	褐灰色 灰白色			
8	13	"	"	"	2	1	14.2	5.6	4.6	32.4	39.1	"	"	"	オリブ灰	オリブ灰			(327.8)cc
9	14	"	"	"	1	1	14.9	4.8	4.4	29.5	61.4	"	"	"	灰色	灰色			307.4cc
10	23	"	3-4	"	3		(14.0)					"	"		褐灰色	褐灰色			
11	18	"	不明	"	3	3	(14.4)	7.0	4.0	(28.6)	47.5	"	"	へら削り	灰色	灰色	十	体	85
12	36	"	3	壺	2		12.2					"	"		灰白色	暗緑 緑白色			
13	30	"	4	甕								ロクロナデ 平行アテ	タタキメ		"	褐灰色			体部片

( ) は推定値

壺・甕 (第 9 図 第 1・4 表 図版 5)

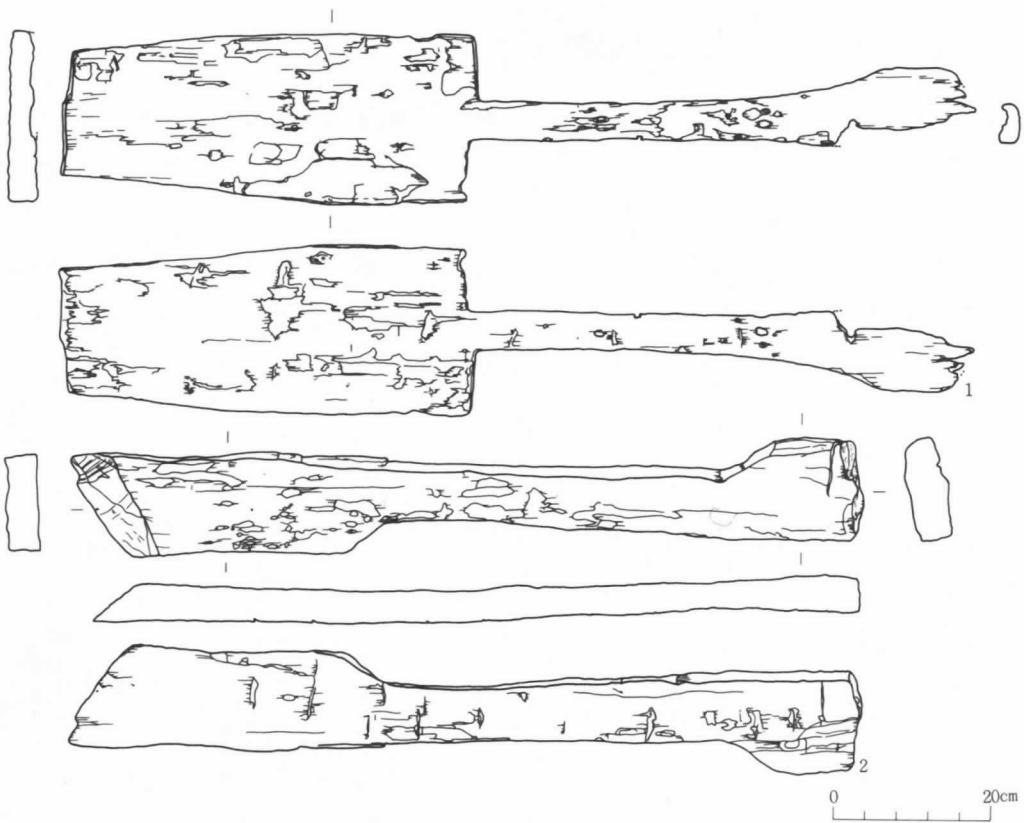
壺、または甕とみられる破片は 19 点である。共に全体の器形の判明するものはない。大別して小型の壺と大型のものに分けられ、前者には長頸壺が含まれる。

長頸壺は口頸部 1 点である。口縁部は頸部より外反し、口縁端部が上下に逸き出される。頸部は内外面滑らかにロクロナデされ、外面の大部分は光沢があり、黒灰色を呈する。内面は口縁部ほど斑点状に灰白色をなす。胎土は均質で暗赤褐色を呈し、下端の接合部では灰色となる。下端における頸部径は 6.1cm、口縁部までの高さは 9.5cm である。他の体部片 3 点は外面に篋削りされる小片である。

中・大型の壺、または甕の破片 14 点はすべて体部片である。外面は平行する叩き目痕を横、または斜方向に残すものが大部分であり、木目の観察されるもの 1 点、格子状を呈するもの 1 点が含まれる。内面は同様の平行する当て工具痕のほか、花卉状の蓮ぐう文 1 点がある。色調は灰色を呈し、胎土は中央部に赤褐色となるもの 2 点がある。図示する(13)は肩部に厚手となり、胎土は赤褐色を呈するが、中央部で灰黒色となる。

3 木製品 (第 3・10 図 第 1 表 図版 35)

用途不明の木製品 2 点であり、共に Bi6 トレンチの 3~4 層に出土するものである。(1)は篋状、または櫛状を呈し、上端で腐蝕欠損している。現存長 115.8cm、最大幅 21.4cm、厚さ 3.8cm、重さ 1.79kg を計り、板状をなす。両面共腐蝕しているが、刃痕とみられる木目に直交する加工痕が認められるほか、中央部の側縁に沿ってやや平滑な面が残存する。側面は先端に不整な切断痕があり、他は柄部を含めて面取りされる加工痕を有する。柄の上方では幅広となるが、一方を欠損して明確でない。そのほか、柄部に虫喰孔がみられる。



第10図 トレンチ出土遺物(7)

(2)は保存のよいアカシデである。全長100.6cm、最大幅13.2cm、厚さ4.8cm、重さ3.68kgを計る。全体に換れた板状をなす。先端は斜方向に鋭く断ち切れ、上下面及び側面は平滑となる。中央部にもっとも狭まり、幅7.2cm前後となる。上方では再び幅広となり、上端ほど工具痕を粗雑に残す。この点では先端部分を主体とする使用が推定される。

#### 4 石製品 (第11図 第1表 図版6)

不整な長方形を呈する砥石1点である。現存長20.1cm、最大幅6.3cm、高さ10.6cm、重さ2,094gの流紋岩製である。上下2面の使用面には共に細線状の研磨痕が認められる。また、側面には幅1.5cm前後の鑿状石切り工具痕が重複している。Bi6 トレンチ1層の出土である。



第11図 トレンチ出土遺物(8)

## V トレンチ以外の出土遺物

縄文土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器・石製品・鉄製品・木製品等すべてを合せて22,327点である。その殆どは小破片であるが、次表によって分類するならば、土師器及び須恵器が大部分を占めるものである。

出土地点は東西に走る水路開削によって盛土とされた掘削土中に含包される遺物であり、明確に位置や層位の把握できるものはなく、トレンチ外出土として一括するものである。従って遺物の分布や出土状況についてもすべて不明である。

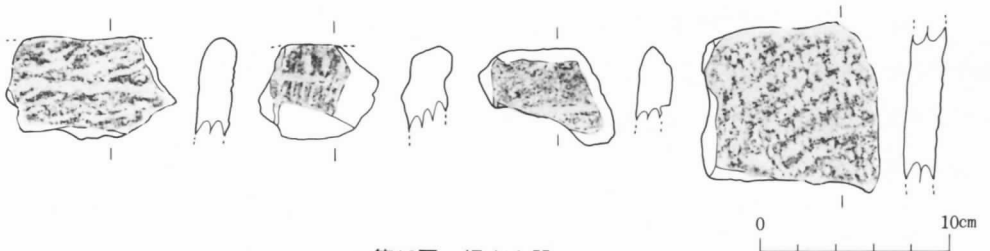
第5表 トレンチ外出土遺物集計表

種類	点数	比率 %	器種		環				高台付環			鉢				壺 甕				その他	合計	比率 %				
			部位	口底	口径	体部	底部	口底	口・体	底・高	口縁	体部	底部	口底	口縁	体部	底部									
縄文土器	11	0.05																								
石器	11	0.05																								
土師器	20,481	91.73	土	内面黒色処理	126	2,163	1,484	855	20	17	102	6	6	7										4,786	21.6	
須恵器	1,692	7.58	土	両面黒色処理	4	176	203	59			11												1	1	455	2.0
陶磁器	47	0.21	器	非黒色処理	245	4,998	4,488	2,365	17	12	481	78	61	9	1	285	2,026	179					4	15,240	68.7	
石製品	1	0.01		須恵器	68	339	220	100				2			1	52	888	22						1,692	7.6	
鉄製品	2	0.01		小計	443	7,676	6,395	3,370	37	29	594	86	67	16	2	337	2,914	202					5	22,173	99.9	
木製品	46	0.21		合計		17,884					660			169		3,455						5				
植物種子など	36	0.16		比率		80.7%					3.0			0.8		15.6						0.0		100.1		
計	22,327	100.00																								

### 1 縄文土器 (第12図 第5表 図版6)

口縁部3点と体部8点の合せて11点の小破片である。口縁部の1点は斜縄文が施され、繊維を含んで黒褐色を呈する。他は刺突文の認められるものと隆帯下に沈線の巡るものである。

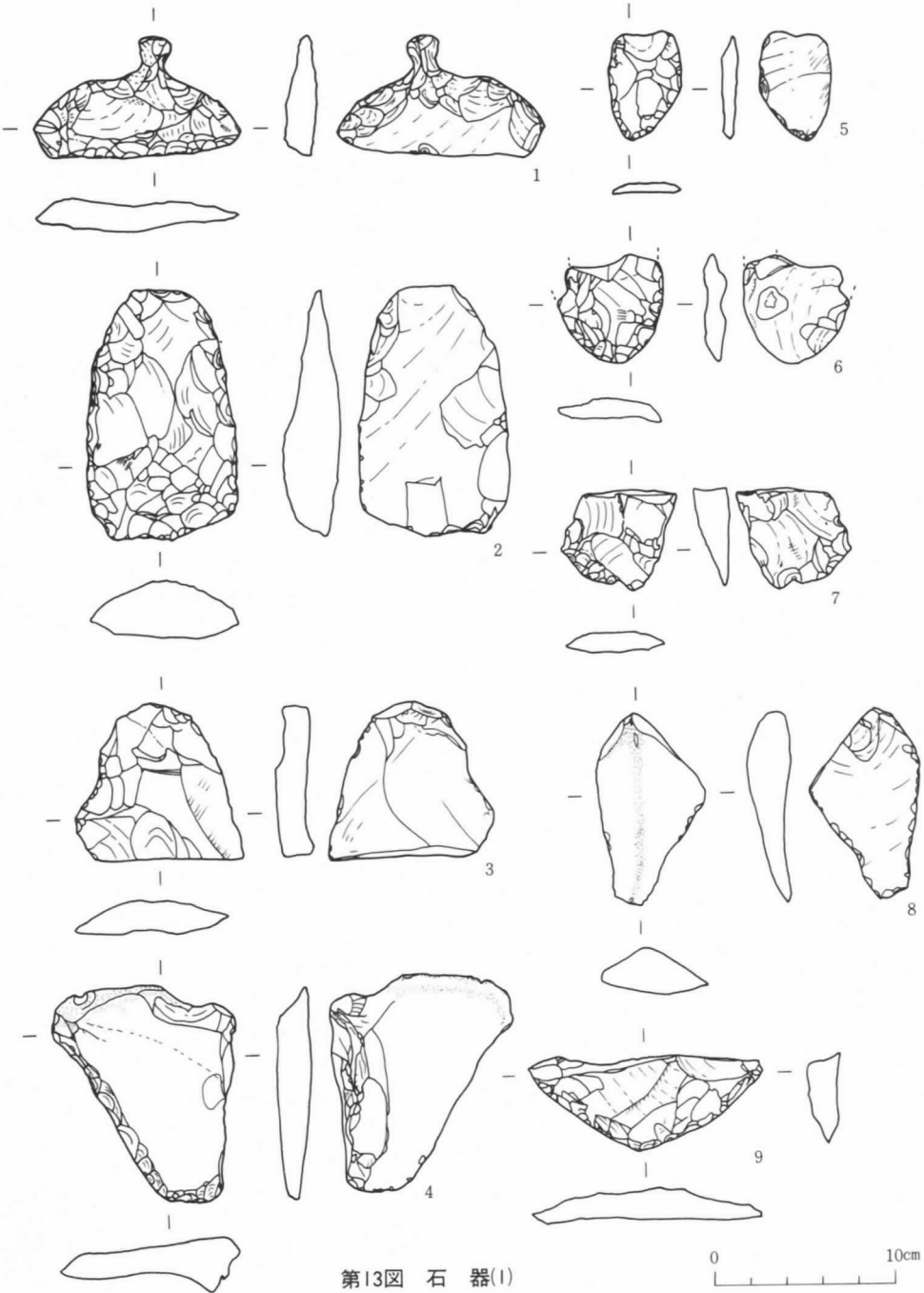
体部は4点が単節斜縄文を有し、うち3点が暗褐色を呈する繊維土器である。ほかに細かい原体による斜縄文の施される破片が含まれる。



第12図 縄文土器

2 石器 (第13・14図 第5・6表 図版6)

剥片石器は石鏃1点、石匙1点、石篋状石器2点、不定形石器5点の合せて9点であり、ほかに磨石1点がある。



第13図 石器(1)

第6表 石器 一 覧 表 注(1)

実測図 No.	登録 No.	種 別	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 材 ・ 産 地 等	備 考
1	1	石 匙	3.3 cm	5.7 cm	0.8 cm	14.0 g	珪質泥岩、奥羽山地、中新統	
2	2	石 筥 状	6.9	4.2	1.6	48.6	石質細粒凝灰岩	
3	7	〃	4.3~	4.3~	0.9~	20.3~	〃	欠損
4	8	不 定 形	6.0	5.1	1.5~	37.3	〃	〃
5	5	石 鏃	3.0	2.0	0.4~	2.6~	硬質凝灰質泥岩	〃
6	4	不 定 形	3.0~	2.9~	0.6~	5.3~	珪質泥岩	〃
7	3	〃	2.8	2.8	0.9	7.2	硬質凝灰質泥岩	〃
8	6	〃	2.6	6.5	0.9	13.7	珪質泥岩	〃
9	9	〃	5.3	3.0	1.2	16.8	〃	〃
10	10	磨 石 状	9.1	8.7	4.1	448.0	両輝石安山岩、焼石岳火山群、第4紀	

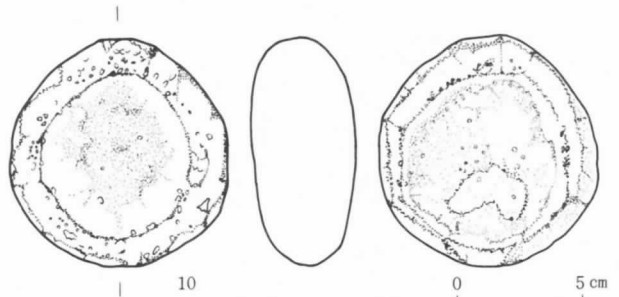
石鏃は基部の中央か僅かに扶られ、尖頭部の側縁が不整にやゝ張り出す。両面に調整剥離が加えられるが、背面には一次剥離面が残る。

石匙は抓部とこれに直交する刃部が幅広となる横型である。剥片上部の左右より扶られる抓部は刃部に直交して形成され、断面は三角形に近い。刃部及び側縁は両面より調整剥離されるが、背面には一次剥離面をもつ。

石筥状石器の1点は基部より両側縁が僅かに幅広となり、やゝ丸味をなして刃部に続く。全周縁に調整剥離を加えるが、背面では入念な調整は認められない。共に一次剥離面を有する。他の1点は同様の形状とみられるが、基部を除いて調整剥離される。

そのほか、不定形石器とするものには自然面を残す縦長の石器、全周縁に調整剥離される横長の石器等が含まれ、削器、または搔器に相当するものが含まれる。

磨石はやゝ不整な円形をなす扁平な安山岩礫である。磨面は上下両面のほか、側面にあって共に平滑となる。側面では最大3.5cm幅で不規則に巡るほか、更に上面境に小さい磨面が認められる。



注(1) 石材等は佐藤二郎氏の御教示による

### 3 土師器 (第15~33図 第5・7~15表 図版7~23 29・30)

酸化炎焼成によるとみられる橙色、または褐色系の色調を有する土器は合せて20,481点である。黒色処理の有無によって2分され、黒色処理されるものには内面のほか、更に外面に施されるものが含まれる。共に完形品は少なく、殆どが残存率10分の1以下の小破片である。

黒色処理の土師器には坏、高台付坏、鉢、または甕、壺、耳皿等があり、合せて5,241点である。そのうち坏がもっとも多く、高台付坏を含めて5,220点となり、黒色処理土師器の99.6%を占めている。



非黒色処理の土器はトレンチ外出土土器の68.7%を占める。器種別では坏、高台付坏、鉢、甕、その他若干が含まれ、黒色処理の場合と同様に坏が著しく多い。高台付坏を含めて82.7%である。甕は16.3%、鉢は僅か1.0%である。

破片数による黒色処理の施されるものと施されない土器の比率は大凡1 : 3となり、非黒色処理の土器が上回っている。器種別でもっとも多い坏では高台付坏を含めて2 : 5となる。また、須恵器の坏を含む坏類全体の黒色処理の坏と非黒色処理の坏は、それぞれ27.6、67.9%を占めている。

(1) 黒色処理の土師器 (第15~24図 第5・7~10表 図版7~14)

内面を黒色処理する所謂内黒4,786点と内外面を黒色処理する両黒455点である。前者には坏高台付坏、鉢、または甕が含まれ、坏がもっとも多い。高台付坏を含む破片数では93.5%を占める。後者では坏、高台付坏、壺等に限られ、内黒処理されるものに比して極めて少数である。

坏 (第15~20図 第7~9表 図版7~12)

4,528点のうち、完形品は1点も含まれず、口縁部より底部まで残存するものは132点であり、そのうち内外面黒色処理の坏は僅か4点である。図化するものは合せて95点であるが、器高の得られるものは80点である。

破片による口縁部及び底部の残存率はそれぞれ口径及び底径の10等分によって細分するものであり、10分の1とするものには更に10分の1未満の細片が含まれる。また、口縁部及び体部片には高台付坏と識別できない破片が多く、これを坏に含め、更に器高の得られる126点を加えるならば次表の通りとなる。黒色処理の坏では10分の1以下の小片が口縁部で82.9%を占めるが、底部では4分の1以上のものが49.6%を占めて細片化が低い。底部片によって個体数を推計するならば、各乗数によって346個体が得られる。しかし、実数では10分の1未満の細片が

第7表 坏における残存率集計表

残存率	口 縁 部				底 部				合 比 計 率
	内黒処理	両黒処理	非黒色処理	須 恵 器	内黒処理	両黒処理	非黒色処理	須 恵 器	
1/10			(9)	(1)	76 (60)	1 (3)	118 (98)	9 (30)	3.4%
2	4 (25)	(1)	2 (44)	(20)	70 (36)	1 (1)	245 (55)	15 (21)	4.5
3	7 (18)	(1)	14 (36)	1 (9)	103 (9)	2	270 (19)	14 (10)	4.3
4	9 (17)		28 (28)	4 (11)	140 (6)	6	302 (20)	17 (4)	5.0
5	37 (10)	1 (1)	74 (20)	10 (4)	93 (5)	11	256 (17)	14 (1)	4.6
6	33 (17)	1	91 (17)	16 (4)	103 (1)	8	143 (11)	5 (1)	3.8
7	65 (5)	2	121 (13)	25 (4)	68 (2)	7	65 (2)	10	3.3
8	81 (5)	3	161 (13)	12 (5)	29 (2)	2	28 (7)	3	2.9
9	72 (6)		130 (9)	15 (2)	8 (3)	3	7 (3)	(1)	2.2
10	1,853 (23)	169 (1)	4,377 (56)	256 (8)	165 (2)	18	922 (13)	13	66.0
計	2,163(126)	176 (4)	4,998(245)	339 (68)	855(126)	59 (4)	2,356(245)	100 (68)	100.0
合計	2,289	180	5,243	407	981	63	2,601	168	11,932

( ) は口縁部~底部まで残存

含まれ、また、同一個体として換算できない点で更にこれを上回る個体数と推測される。

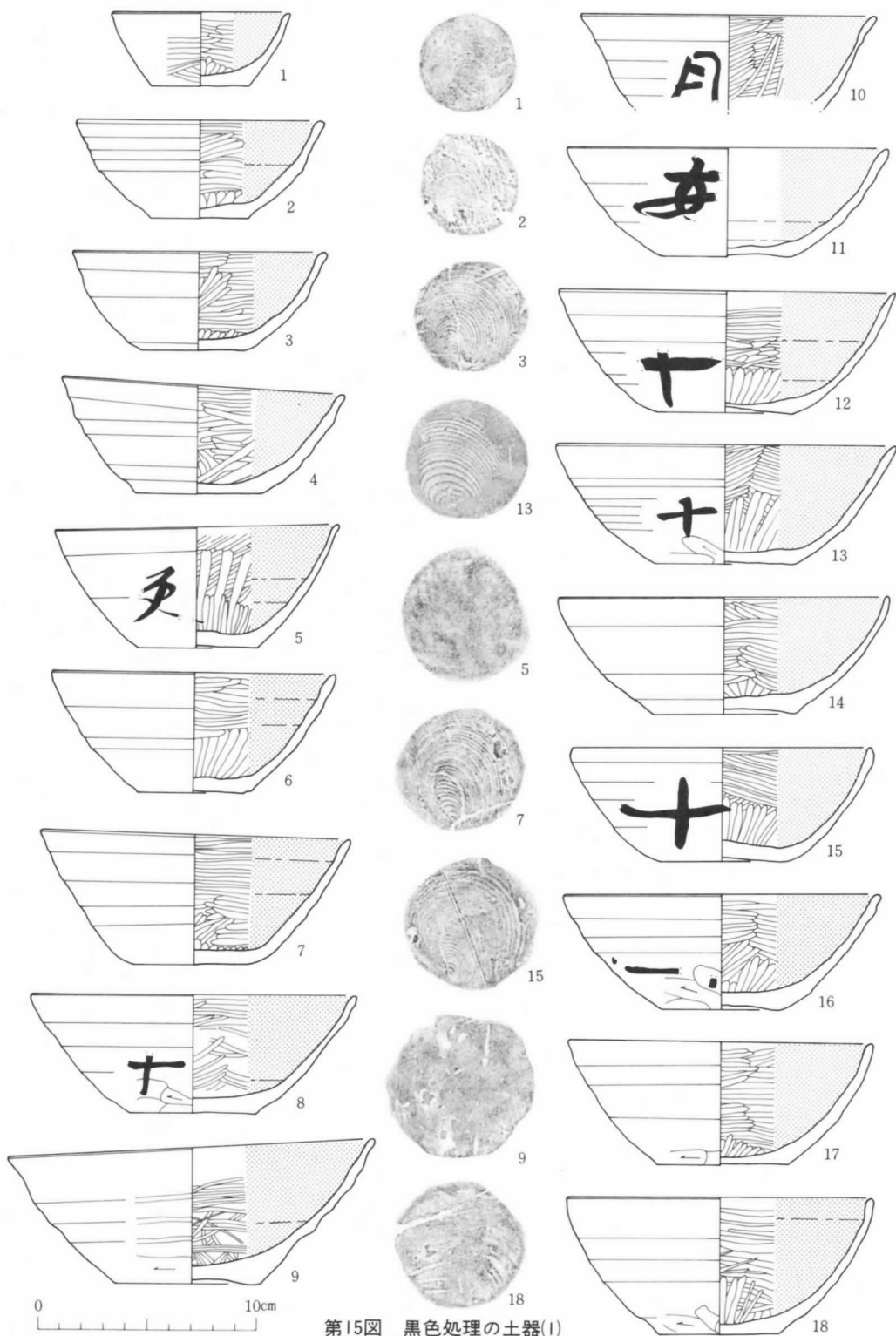
内黒処理される坏の口縁部は、その形状により3分され、体部に続いてほぼ直線状に立ちあがるもの、やゝ内彎して立ちあがるもの、端反り状に外反するものに分けられる。それぞれ強弱があり、前二者では薄手をなして逸き出され、後者ではやゝ肥厚するものが多い。内面は体部より横方向の篋磨きが施され、底部より放射状に続く篋磨きが口縁部、または口縁部直下に及ぶものも若干含まれる。そのほか、口縁部内外面に横方向の篋磨きを有し、口縁部の外傾する同一個体とみられる小片2点がある。底部境に稜をもち、篋削りされる丸底とみられる唯一のものである。また、内面に篋磨きの施されないもの1点が混入する。

体部は共にロクロ成形痕を有するが、著しく凹凸を残すものは少ない。体部下端に篋削りされるものは全体の20.8%であり、底部境より横、または斜方向に手持ち篋削りされるものが大部分である。内面は底部の磨きに先行して横、または斜方向に篋磨きされ、右回転によって施こされるものが多い。その単位は一定の規則性を認めないが、井桁状に巡るものが含まれる。また、下方ほど底部より続く放射状の磨きが重複し、磨き幅に大小があって一定していない。そのほか、内面横方向に篋磨きされる丸底とみなされる坏の体部片2点がある。

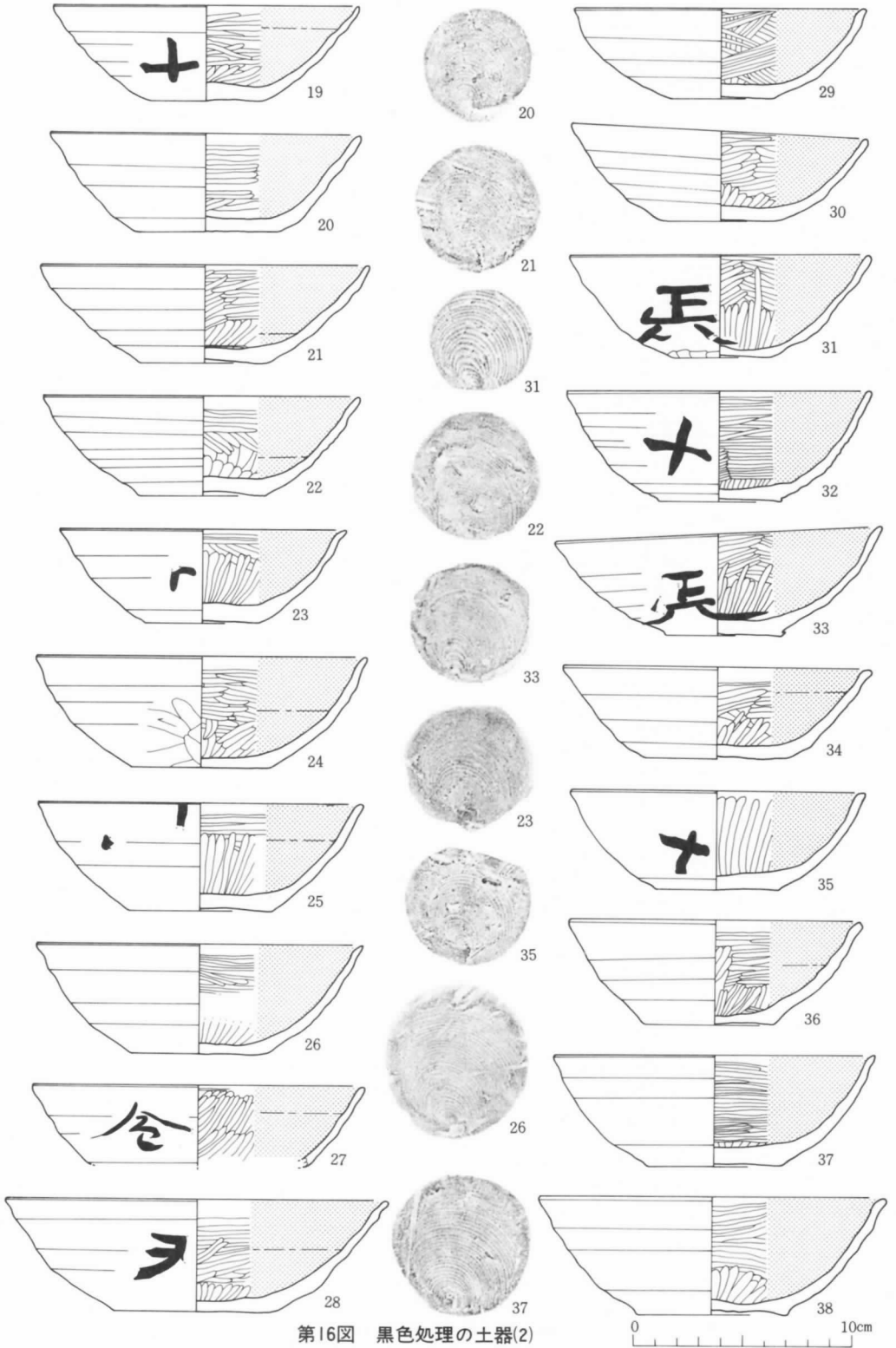
底部は体部境より肥厚するものが比較的多く、丸味をもつものと明瞭に体部境を形成するものがある。底部の切り離しは判明するものすべてが回転糸切りによっている。全面を篋削りによって不明となるものは749点中14.8%が含まれるが、糸切り痕を残して篋削りをうけるものが10.2%に達し、いずれも回転糸切りによる切り離しとみられる。底部の篋削りは一定方向のほか、井桁状に再調整されるものがあり、共に手持ち篋削りである。大部分は体部下半の篋削りに対応するが、底部・体部それぞれ個々に篋削りされるものが含まれる。内面は全体に平滑となるもの、中央部に僅かに盛りあがるもの、低く凹状を呈するものが混在し、器厚に厚薄がある。その殆どは中央部より放射状に篋磨きが施され、体部に続く。磨きは一様ではなく、重複して入念な磨きの施されるものと粗雑に間隙を有し、体部境に磨きの認められないものが含まれる。

胎土は全体に稠密であり、特に粗悪なものはない。外面の色調はにぶい褐色、またはにぶい橙色を呈するものが多く、暗褐色や褐灰色のものが若干含まれる。また、内面は黒色の失なわれるものや光沢のないものが混在するほか、全面に漆の固着するもの3点がある。

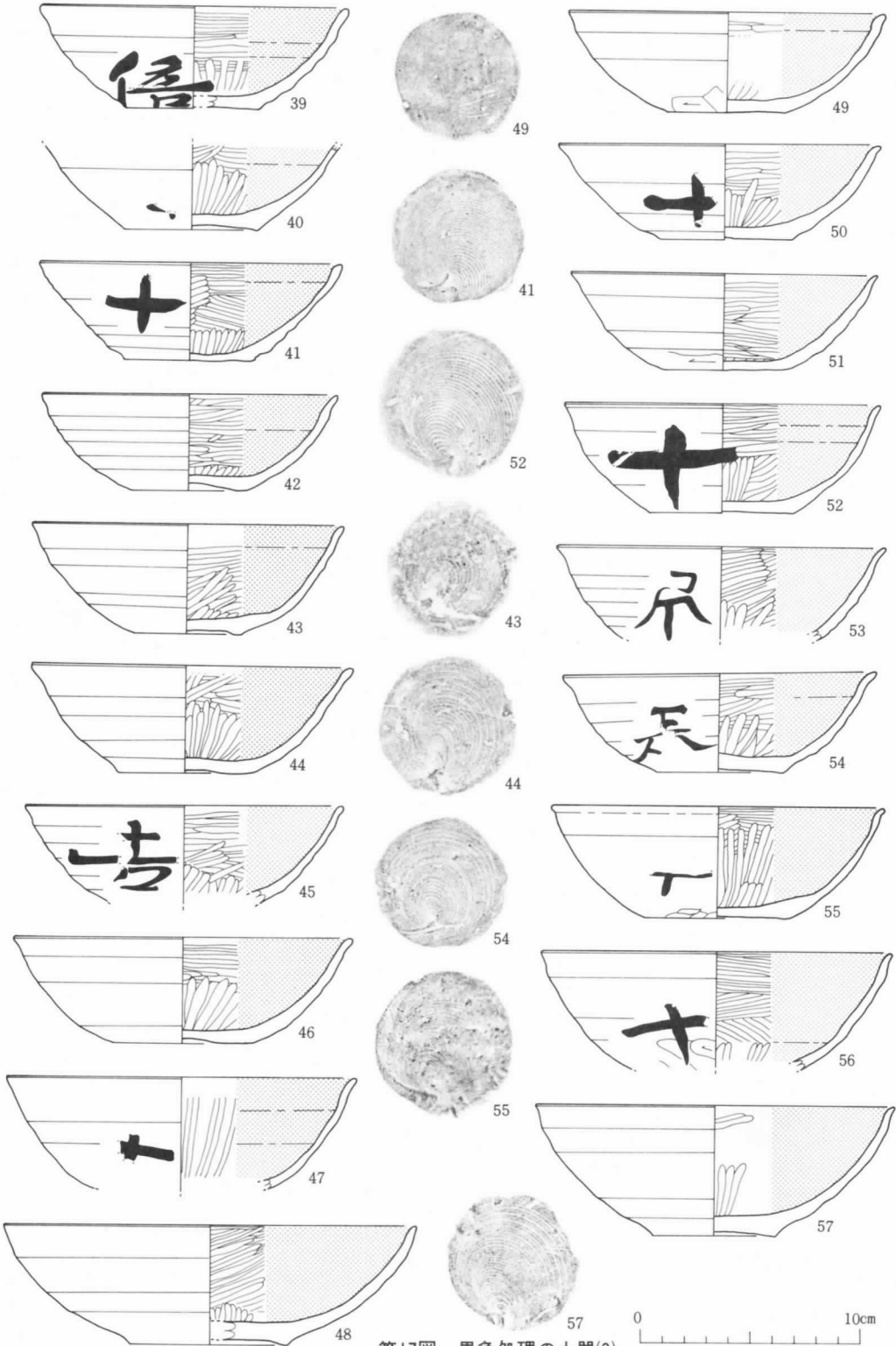
墨書土器は破片を含めて157点がある。うち体部に記されるものは155点で大部分を占め、更に口縁部にかかる1点がある。殆どは口縁部を上を墨書されるが、底部を上にする逆字が含まれる。また、同一個体に2字を記するもの3点がある。判明する文字は「十」、「令」、「尻」、「吉」、「安」、「守」、「天」、または「天」、「倍」があり、「十」が60点でもっとも多い。



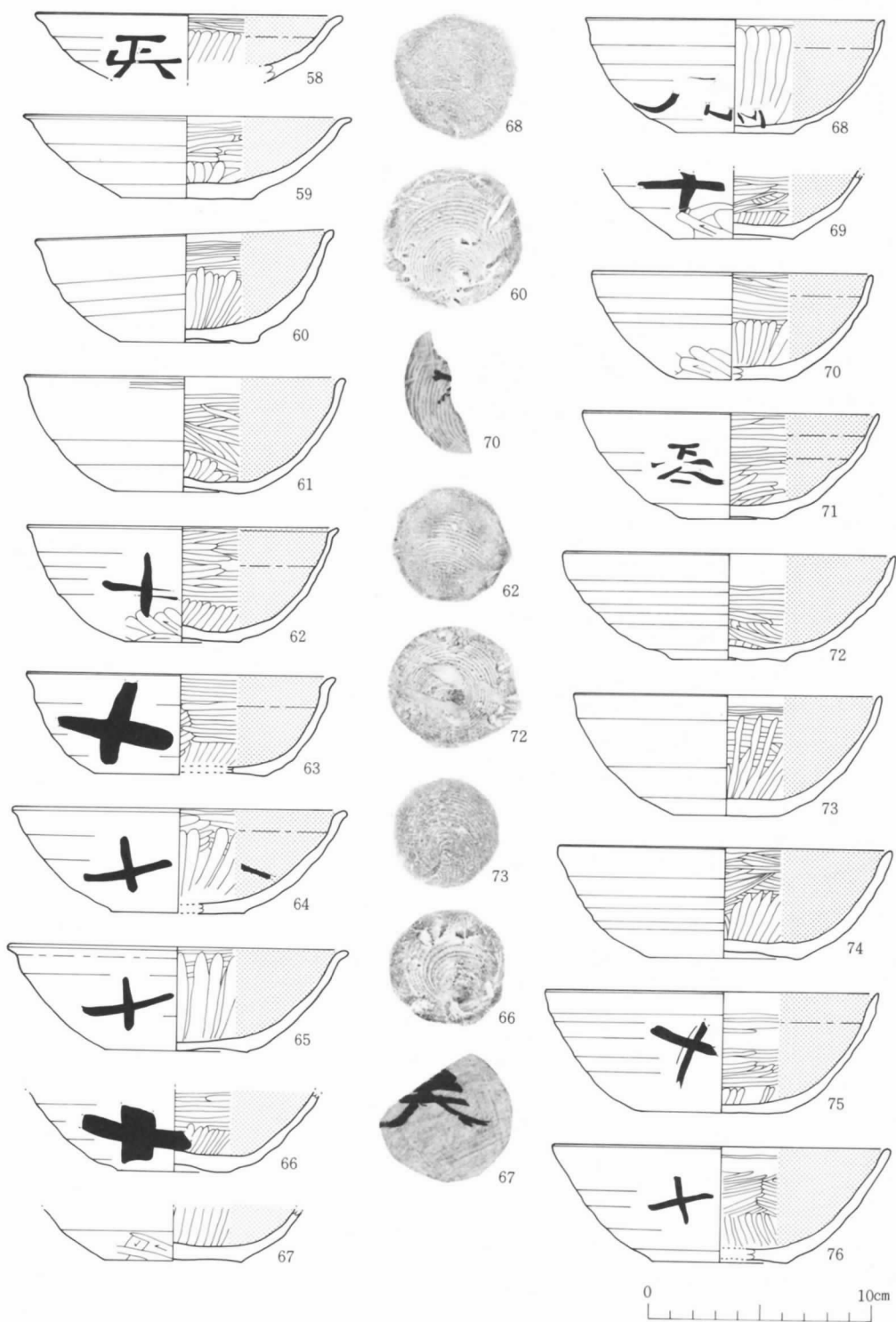
第15図 黒色処理の土器(I)



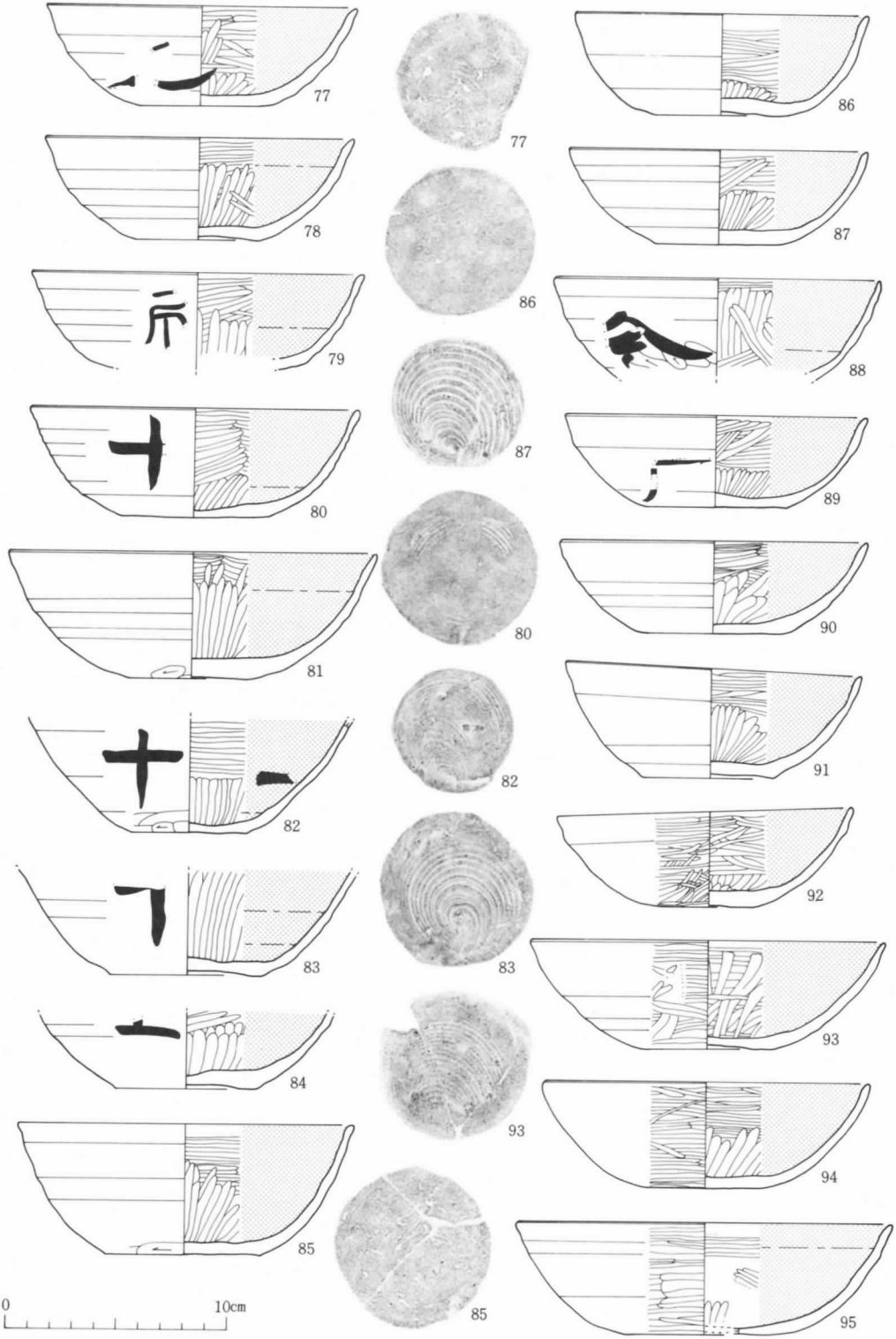
第16図 黒色処理の土器(2)



第17図 黒色処理の土器(3)



第18図 黒色処理の土器(4)



第19図 黒色処理の土器(5)

第 8 表 黒色処理の土器観察表 (I)

実測図 No	登録 No	器種	残存率 口径 分の1 2	底径 分の1 1	口径 cm	底径 cm	器高 cm	径高指数	外形指数	器面調整		切り離し 調整	外色	墨書文字 位置	文字 No	備考
										内面	外面					
1	16	坏	3	1	8.2	4.4	3.4	41.5	32.4	ヘラミガキ 横放射	ロクロナデ	糸切り	黒褐色			容量(92.6)cc
2	25	#	3	1	(11.3)	4.5	4.5	(39.8)	37.8	#	#	#	褐			(213.7)cc
3	21	#	2	1	11.6	4.8	4.5	38.8	38.9	#	横斜放	#	#			(213.0)cc
4	3	#	2	1	12.9	5.7	5.0	38.8	32.1	#	横斜	#	#	にふい橙		(294.5)cc
5	#	3	1	(13.0)	5.4	5.5	(42.3)	33.6	#	横放	#	糸切り ヘラケズリ	褐	夫? 体部	174	(359.3)cc
6	20	#	2	1	13.0	5.2	5.5	42.3	36.9	#	#	#	糸切り	暗褐		(364.8)cc
7	10	#	2	1	14.1	5.3	5.9	41.8	35.5	#	#	#	#			(409.3)cc
8	41	#	10~	1	(14.8)	5.7	5.5	(37.2)	42.2	#	横斜	#	ヘラケズリ	にふい橙	十 体	
9	17	#	2	1	16.7	6.1	6.2	37.2	52.4	#	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にふい橙			(537.1)cc
10	#	6		(13.5)						#	横 ロクロナデ		にふい褐	□ 体	260	
11	#	10	1	(14.6)	6.1	5.0	(34.2)	40.0	ロクロナデ	#	糸切り	にふい褐 黒	安	#	156	内面黒色のためこれを含む
12	34	#	2	1	15.4	6.3	5.5	35.7	38.2	ヘラミガキ	横放射 ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にふい褐	十	#	35 (520.4)cc
13	#	2	1	15.5	6.4	5.5	35.5	40.0	#	#	#	#	にふい橙	#	#	33 ほぼ完形(442.6)cc
14	13	#	4	1	(15.1)	6.5	5.4	(35.8)	29.6	#	#	ロクロナデ	糸切り	にふい黄褐		
15	#	4	1	(13.8)	5.8	5.2	(37.7)	33.9	#	#	#	#	橙	十 体	25	内面漆付着、底部外面に糸線あり
16	15	#	4	1	(14.4)	5.3	5.3	(36.8)	43.8	#	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にふい褐	□	#	305
17	19	#	4	1	(13.9)	6.0	5.7	(41.0)	32.5	#	#	#	糸切り	にふい黄橙		
18	12	#	3	1	14.0	5.4	6.3	45.0	31.7	#	#	#	糸切り ヘラケズリ	暗褐		(469.2)cc
19	#	3	2	(14.0)	5.1	4.4	(31.4)	52.7	#	#	ロクロナデ	糸切り	にふい橙	十 体	48 257	
20	24	#	4	1	(14.2)	6.6	4.5	(31.7)	43.6	#	#	#	#	にふい黄橙		
21	58	#	9	1	(15.1)	5.9	4.5	(29.8)	51.6	#	#	#	#	灰黄褐		
22	30	#	2	1	14.5	5.8	4.6	31.7	46.7	#	#	#	褐			(348.2)cc
23	#	10	1	(13.1)	5.2	4.3	(32.8)	48.8	#	#	#	#	#	十 体	43	
24	83	#	2	2	15.2	6.2	5.1	33.6	38.2	#	#	#	にふい褐			
25	#	3	1	(14.9)	6.5	5.0	(33.6)	43.0	#	#	#	#	#	□ 体	263	
26	40	#	9	1	(14.9)	6.1	5.1	(34.2)	42.2	#	#	#	褐			黒色処理一部消失
27	#	6		(15.2)						#	横斜	#	にふい褐	令 体	145	
28	#	2	2	17.5	7.4	5.2	29.7	51.0	#	横放	#	糸切り ヘラケズリ	にふい橙	□	#	151
29	18	#	2	2	13.4	4.6	4.2	31.3	46.4	#	#	#	糸切り	にふい褐		(265.8)cc
30	11	#	2	1	13.6	5.3	4.2	30.9	47.1	#	横斜放	#	#	にふい黄橙		
31	#	2	1	13.8	4.5	4.7	34.1	46.4	#	横放	#	糸切り ヘラケズリ	にふい褐	灰 体	119	(296.3)cc
32	#	4	2	(14.0)	5.1	5.1	(36.4)	37.3	#	#	#	糸切り	褐	十	#	36
33	#	2	1	15.0	5.4	4.7	31.3	44.7	#	#	#	#	#	灰	#	120
34	6	#	2	2	14.1	6.5	4.2	29.8	49.0	#	#	#	暗 にふい黄橙			(298.2)cc
35	#	5	1	(13.5)	5.6	4.5	(33.3)	40.4	#	#	#	#	にふい橙	十 体	29	
36	14	#	2	1	13.4	6.0	4.8	35.8	43.8	#	#	#	#			(313.0)cc
37	23	#	3	1	(14.7)	6.1	5.1	(34.7)	39.8	#	#	#	にふい褐			
38	53	#	3	2	(15.9)	6.8	5.4	34.0	43.5	#	#	#	#			



39		環	6	3	(14.0)	6.0	4.6	(32.9)	43.5	ヘラミガキ	横放	ロクロナデ	糸切り	にふい橙	倍	体	170	
40	8	#		1		6.0				#	#	#	#	十口	#		2字の墨書	
41		#	3	1	(13.8)	6.0	4.4	(31.9)	50.5	#	#	#	#	褐	十	#	27	光沢を失なう
42	60	#	3	2	(13.5)	5.0	4.4	(32.6)	40.0	#	#	#	#	にふい褐				
43	7	#	2	1	14.2	4.7	5.0	35.2	37.0	#	#	#	#	にふい褐 灰				内外面摩滅
44	8	#	2	1	14.6	6.1	4.9	33.6	43.5	#	#	#	#	暗褐				(348.2)cc
45		#	9		(14.4)					#	横斜放	#	#	にふい黄橙	吉	体	121	
46	33	#	2	2	15.4	6.4	4.9	31.8	41.8	#	横放	#	糸切り	にふい橙				
47		#	5		(15.9)					#	#	#	#	暗褐	十	体	38	
48	113	#	6	3	(18.8)	(7.1)	5.5	(29.3)	46.9	#	#	#	糸切り	にふい橙				
49	55	#	4	1	(14.4)	5.4	4.6	(31.9)	43.0	#	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	にふい黄橙					内面摩滅
50	37	#	7	2	(14.7)	6.0	4.3	(29.3)	45.3	#	ロクロナデ	糸切り	にふい橙	十	体			
51	59	#	5	2	(14.0)	5.7	4.4	(31.4)	45.5	#	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	赤	褐				
52		#	4	1	(14.4)	6.6	5.0	(34.7)	36.4	#	ロクロナデ	糸切り	褐	十	体	24		
53		#	7		(15.0)					#	横斜放	#	#	にふい橙	尻	#	137	
54		#	2	1	14.3	5.8	4.5	31.5	46.0	#	横放	#	糸切り	褐	罌	#	118	(337.5)cc
55		#	8	1	(15.2)	6.6	5.1	(33.6)	39.2	#	#	#	#	にふい褐	口	#	40	
56		#	8		(16.0)					#	ロクロナデ ヘラケズリ		褐	十	#	31		
57	22	#	5	1	(16.3)	5.6	6.0	(36.8)	42.7	#	ロクロナデ	糸切り	にふい褐					内面摩滅(605.6)cc
58		#	4		13.9					#	横斜	#	#	暗褐	罌	体	128	
59	82	#	8	2	(14.7)	5.9	4.7	(32.0)	41.5	#	横放	#	糸切り	浅黄橙				
60	1	#	2	1	13.4	6.2	4.8	35.8	31.4	#	#	#	#	褐				ほぼ完形(324.1)cc
61	57	#	7	1	14.4	6.0	5.2	36.1	31.7	#	#	#	#	にふい褐				
62		#	10~	1	14.0	5.2	5.2	37.1	35.6	#	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	褐	十	体	1		
63		#	5	4	(13.8)	(7.4)	4.5	(32.6)	28.9	#	ロクロナデ	糸切り	にふい褐	#	#	2		
64		#	4	3	(15.0)	(5.9)	4.7	(31.3)	42.6	#	#	#	#	にふい橙	#	#	22	
65	114	#	2	2	15.2	6.4	4.7	30.9	46.8	#	#	#	#	にふい褐	#	#	34	(390.8)cc
66		#		1		5.1				#	#	#	#	褐	#	#	6	
67		#		2		6.1				#	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にふい褐	口	底	238		
68		#	7	1	(13.4)	5.2	5.1	(38.1)	30.4	#	ロクロナデ	糸切り	にふい橙	口	体	250	底部外面に×印の細線あり	
69		#		2		5.4				#	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	褐	十	#	54		
70		#		3	12.6	(4.7)	4.8	38.1	35.4	#	#	#	糸切り	黒褐	口	底	239	
71		#	6	2	(13.3)	4.2	4.7	(35.3)	43.6	#	横斜	ロクロナデ	#	褐	罌	体	121	
72	31	#	5	1	(14.9)	5.0	4.8	(32.3)	41.0	#	横放	#	#	黒	相			
73	50	#	3	1	(13.8)	4.8	5.3	(38.4)	34.0	#	#	#	#	にふい橙				
74	28	#	3	2	(14.9)	6.8	4.9	(32.9)	34.3	#	#	#	#	にふい褐				
75	84	#	10	1	(15.0)	6.6	5.4	(36.0)	35.2	#	#	#	#	淡	橙	十	体	18
76		#	6	3	(15.1)	(6.1)	5.2	(34.4)	41.3	#	#	#	#	#	#	#	4	内外面摩滅
77		#	6	2	(14.0)	5.7	4.5	(32.1)	37.8	#	横斜放	ロクロナデ ヘラケズリ	淡 にふい橙	口	#	271		
78	26	#	5	1	(13.9)	5.9	4.6	33.1	37.0	#	横放	#	糸切り	褐				外面に黒色付着物あり
79		#	8		(15.0)					#	#	#	#	#	尻	体	138	

— 下谷地 B 遺跡 —

80	64	坏	4	1	(14.9)	6.9	5.0	(33.6)	33.0	ヘラミガキ	横敷	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にふい橙	+	体	3	
81	27	"	4	1	(16.6)	5.6	5.7	(34.3)	36.8	"	"	"	"	"				(568.5)cc
82		"		1		5.2				"	"	"	糸切り	"	十口	体	23	2字の墨書
83		"		1		6.9				"	"	ロクロナデ	"	にふい褐	十?	"	30	
84		"		1		6.3				"	"	"	"	"	□	"	247	
85	112	"	3	1	(15.2)	6.9	6.0	(40.3)	28.0	"	"	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にふい橙				
86	35	"	6	2	(13.2)	5.7	4.6	(34.8)	26.1	"	"	ロクロナデ	糸切り	にふい黄橙				外面摩滅
87	9	"	2	1	13.5	5.5	4.3	31.9	34.9	"	"	"	"	"				(305.2)cc
88		"	5		(14.7)					"	"	ロクロナデ ヘラケズリ		暗褐	令	体	147	
89		"	4	1	(13.6)	6.3	4.2	(30.9)	37.0	"	"	"	ヘラケズリ	にふい赤褐	□	"	20	
90	52	"	6	2	(13.9)	6.0	4.2	(30.2)	40.5	"	"	ロクロナデ	糸切り	にふい橙				
91	5	"	2	1	13.4	5.9	5.0	37.3	36.2	"	"	"	"	浅黄 灰				黒色処理消失(364.8)cc
92	1	"	2	1	13.4	4.4	4.3	32.1	40.2	"	"	ヘラミガキ 横・斜	"	褐 黒	灰			(259.3)cc
93	6	"	10	1	(16.0)	5.8	4.9	(30.6)	43.9	"	"	"	"	黒				
94	2	"	5	1	(14.8)	5.0	4.8	(32.4)	40.6	"	"	"	横ヘラケズリ	"				
95	4	"	3	2	(17.0)	7.0	5.1	(30.0)	38.4	"	"	"	"	褐 黒	灰			

法量値のうち、口径の得られるものは推定を含めて207点である。大小が混在し、8.2~18.8cmを計る。次表によって8.2cm 1点、11.3~11.6cm 2点が小さく、17.5~18.8cm 3点がやゝ離れて分布するが、その間は殆ど連続し、特に13.0~15.5cmに集中している。図化する84点については12.6~15.5cmに86.9%が集中し、平均では14.3cmとなる。

底径は424点によって4.1~8.2cmを計る。5.0~6.5cmに80.4%が集中する。図化する73点では4.2~7.4cmであり、平均は5.8cmである。また、口径に対する底径の比率は1.86~3.17に及び、平均2.45となる。

器高は2.1~7.4cmを計り、4.3~6.1cmまでに77.1%が含まれる。器高4.0cm未満の坏はいずれも口径8.0~9.0cmの小型の坏に限られる。図化する82点の平均では5.7cmである。口径及び底径に対する器高の割合はそれぞれ2.22~3.42、0.86~1.55であり、各平均では2.92、1.34となる。

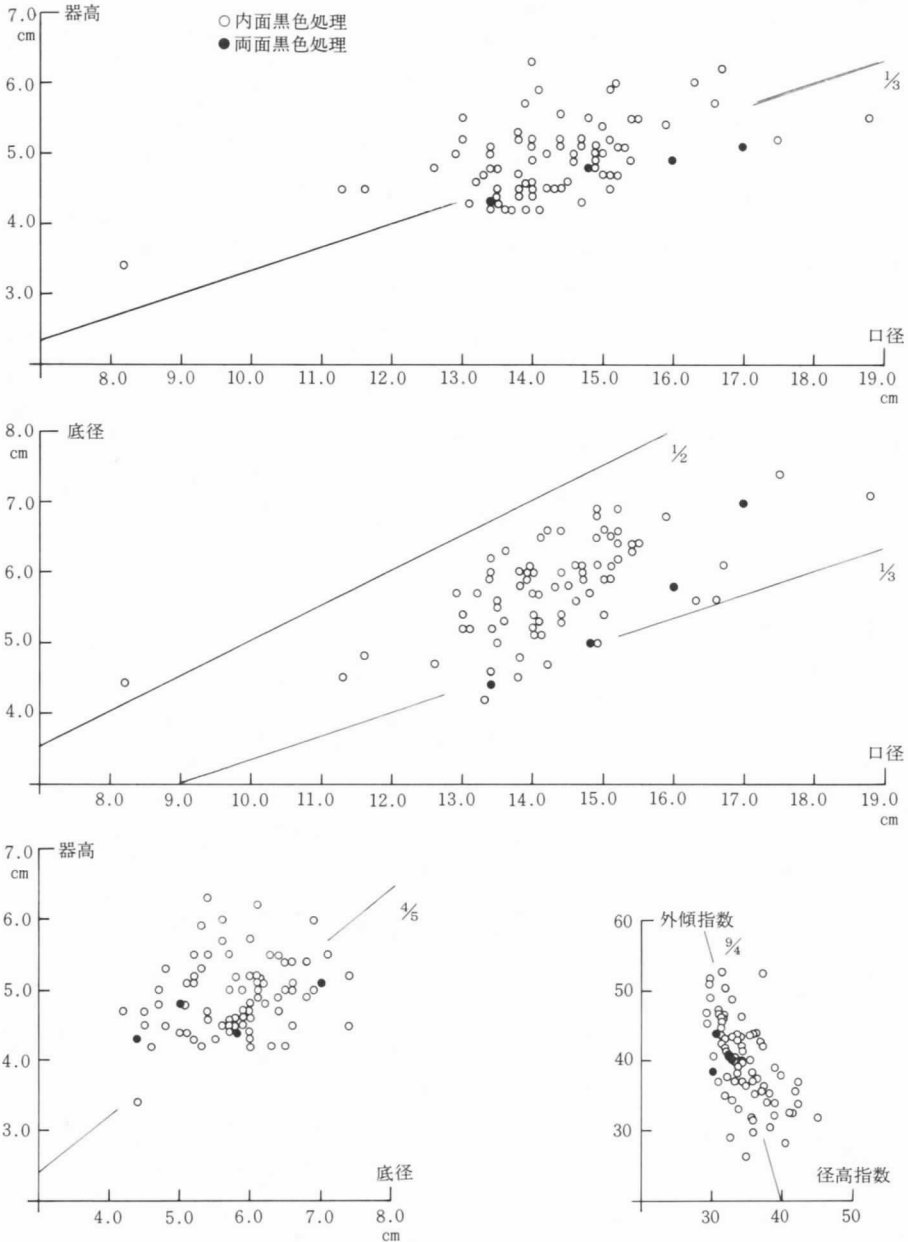
第9表 黒色処理坏の法量値集計表

口径	点数	比率	底径	点数	比率	器高	点数	比率
8.2 cm	1	0.5%	4.1~4.4 cm	6	1.4%	2.1 cm	1	0.8%
11.3~11.9	3	1.4	4.5~4.9	15	3.5	3.4~3.8	3	2.3
12.0~12.9	16	7.7	5.0~5.4	86	20.3	4.0~4.4	19	14.4
13.0~13.9	68	32.9	5.5~5.9	104	24.5	4.5~4.9	25	18.9
14.0~14.9	70	33.8	6.0~6.4	133	31.4	5.0~5.4	27	20.5
15.0~15.9	37	17.9	6.5~6.9	51	12.0	5.5~5.9	25	18.9
16.0~16.7	9	4.3	7.0~7.4	23	5.4	6.0~6.4	19	14.4
17.5~17.8	2	1.0	7.5~7.8	4	0.9	6.5~6.9	10	7.6
18.8	1	0.5	8.1~8.2	2	0.5	7.1~7.4	3	2.3
計	207	100.0	計	424	99.9	計	132	100.1

但し、推定値を含む

また、外傾指数は26.1~52.7となるが、特に他と相関する傾向は把握できない。

内外面黒色処理の坏は口縁部より底部まで残存するものは僅か4点である。他は口縁部176点、体部203点、底部59点の破片である。しかし、口縁部及び体部には高台付坏が若干含まれるものとみられる。底部によって算出される個体数は13である。



第20図 黒色処理坏の法量比

器形は殆ど内黒処理される坏と同様であり、更に外面に横方向の篋磨きが施される。底部の切り離しは32点中篋削りされる3点、篋磨きされる1点を除いて回転糸切りによるものである。

口径は11.4~17.0cm、底径3.6~8.0cm、器高4.3~5.1cmを計り、共に内黒処理の坏と差異はない。

#### 高台付坏 (第21・22図 第5・10表 図版14)

内面黒色処理の高台付坏は口縁部より高台部まで残存するもの20点である。口縁部及び体部片は坏に含めているが、ほかに識別できる底部及び高台部を合せて130点がある。高台によって算出される個体数は遺存率の乗数により、38個体以上と推計される。

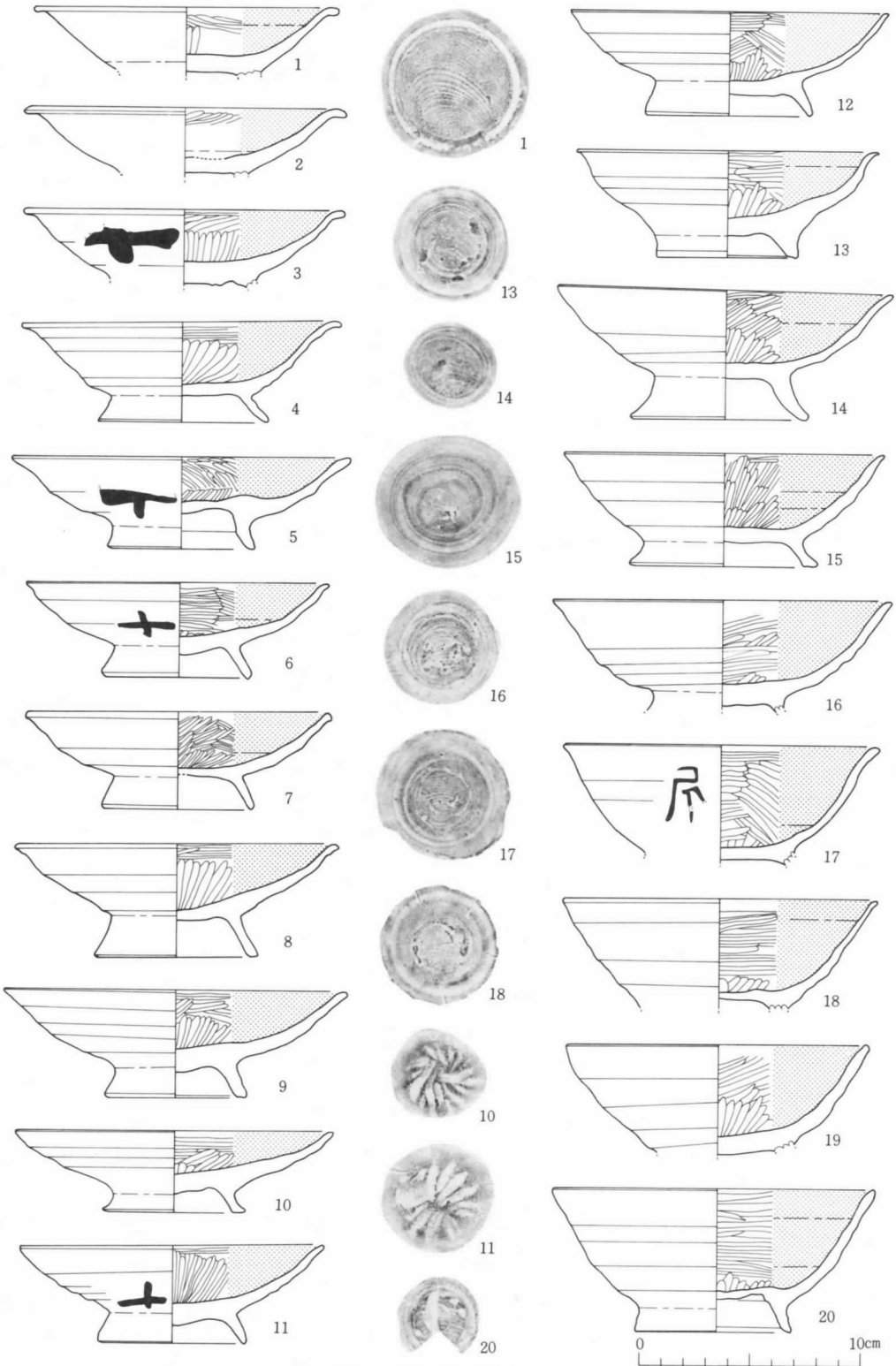
図化する28点によってみると、坏部は器高が低く、外傾指数の高い皿型をなすものとしてこれより器高の大きい外傾指数60以下のものに分けられる。前者には緩やかに内彎して立ちあがるもの、口縁部の端反りするものがあり、口縁部が薄く逸き出されるものや丸くなって肥厚するもの等が混在する。後者では内彎して立ちあがるもの、やゝ直線状に近いものがあり、全体に内黒処理の坏に類似する。内外面は体部、底部共に坏の場合と同様であるが、底部の器厚は高台の貼付けに伴って著しく薄手になるものが含まれる。また、坏部の器高の低いものでは粗粒の胎土を有するものが認められる。

高台は共に比較的低い安定した付高台である。底部より外傾するもの、外反するもの、内彎するもの等があり、高台端部は肥厚して幅広となるもの、丸味をなすもの、鋭く狭まるものが含まれる。高台内は89点中回転糸切り痕を残すもの64点、ロクロナデによって不明となるもの4点、菊花状の押圧痕を残してロクロナデされるもの20点となり、糸切り痕を残すものには更に菊花状の圧痕を有するもの1点がある。しかし、いずれも坏部や高台部の形状に対応する関係は認められない。

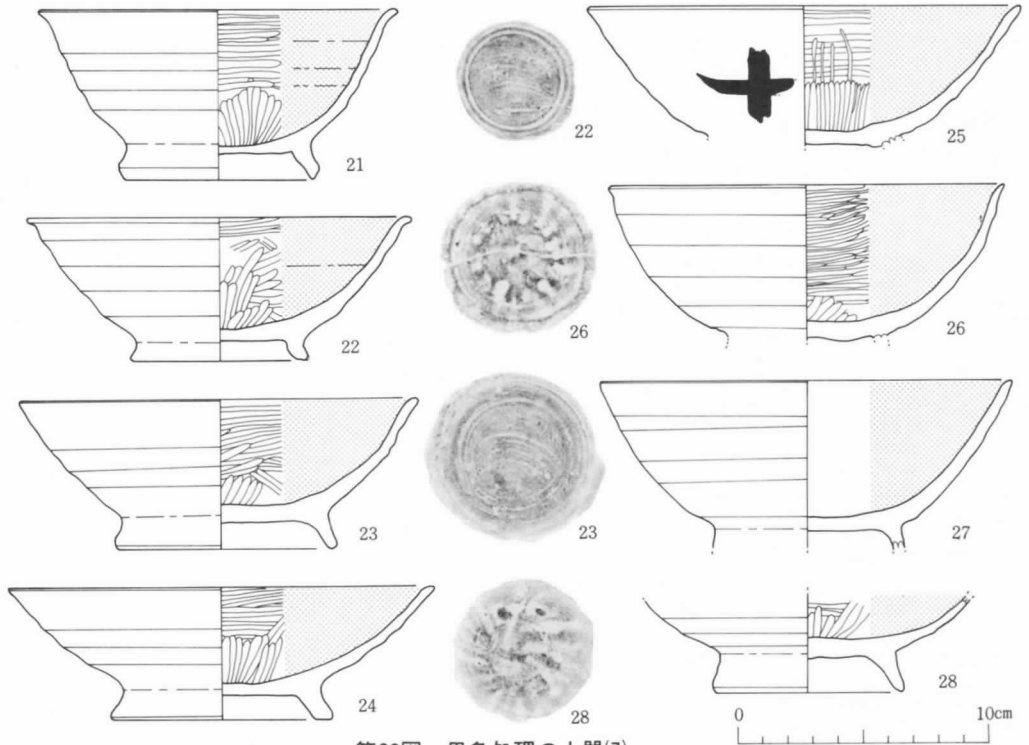
墨書文字のある高台付坏は5点まで確認され、いずれも体部外面に記される。「十」と判読されるもの4点、「卍」1点である。

法量値は推定値を含めて口径が13.4~17.2cm、高台径5.5~9.4cm、器高3.7~6.8cmを計る。図化する18点では口径13.6~15.3cmに76.5%が集中し、平均は14.7cmである。また、器高の平均は6.8cmとなる。高台高は0.7~1.9cmである。全体に口径の大きいものは高台径、器高共に大きい、口径の小さいものに器高の大きいものが含まれる。

内外面黒色処理の高台付坏は、口縁部より高台部まで残存するものはなく、高台の欠損する底部、または一部高台の遺存する11点の破片である。内黒処理のそれと同様であるが、坏部外面に横方向、高台では横、または縦方向の篋磨きが施される。高台内はロクロナデされ、回転糸切り痕を有するもの6点、菊花状を呈するもの1点が含まれる。2分の1を残存する高台径は7.0~8.8cmを計る。



第21图 黑色处理土器(6)



第22図 黒色処理の土器(7)

第10表 同観察表(2)

実測図 No.	登録 No.	器種	残存率 口縁 高台	口径 cm	高台 径 cm	器高 cm	径高指数	外縁指数	器面調整		切り離し 調整	外面色調	墨書文字		備考
									内面	外面			文字	位置	
1	26	高台付杯	2	13.7				80.0	ヘラミガキ 放射	クロロナデ	糸切り	褐			容量(151.9)cc
2	33	"	3	(14.5)				89.3	"	"	不明	にぶい黄橙			内外面摩滅
3	"	"	~10	(14.5)				81.8	"	"	糸切り クロロナデ	にぶい赤褐	十?	体	11
4	32	"	2	14.4	7.7	4.5	31.3	78.3	"	"	"	にぶい黄褐			(250.0)cc
5	"	"	8	1 (15.2)	6.7	4.2	(27.6)	76.4	"	横斜	クロロナデ	にぶい橙	十?	体	9
6	6	"	2	13.7	6.8	4.3	31.4	76.5	"	放射	菊花状 クロロナデ	"	十	"	28
7	7	"	3	2 (13.8)	6.9	4.4	(31.9)	68.3	"	"	不明	"			
8	13	"	8	2 (14.6)	7.4	5.1	(34.9)	88.4	"	"	菊花状 クロロナデ	"			
9	22	"	2	1 15.5	6.4	4.8	31.0	80.2	"	"	"	浅黄橙 にぶい橙			ほぼ完形(216.7)cc
10	25	"	2	3 14.3	(6.5)	3.7	25.9	102.5	"	"	"	橙			
11	11	"	4	1 (13.7)	6.7	4.4	(32.1)	80.6	"	"	"	にぶい褐			
12	12	"	8	2 (14.3)	7.6	4.7	(32.9)	69.3	"	"	糸切り クロロナデ	"			
13	3	"	4	1 (13.6)	6.4	4.8	(35.3)	60.2	"	"	クロロナデ	にぶい橙			
14	10	"	2	1 15.2	8.1	5.9	38.8	65.1	"	"	糸切り クロロナデ	褐			(284.0)cc
15	8	"	10	1 14.5	8.5	5.1	35.2	52.5	"	"	"	灰褐			
16	24	"	2	15.3				56.9	"	横斜	"	淡橙			
17	"	"	2	14.3				44.8	"	横放	"	にぶい橙	尻	体	136 (401.9)cc
18	31	"	2	14.2				43.5	"	"	"	浅黄 褐	橙 灰		内面摩滅(366.7)cc

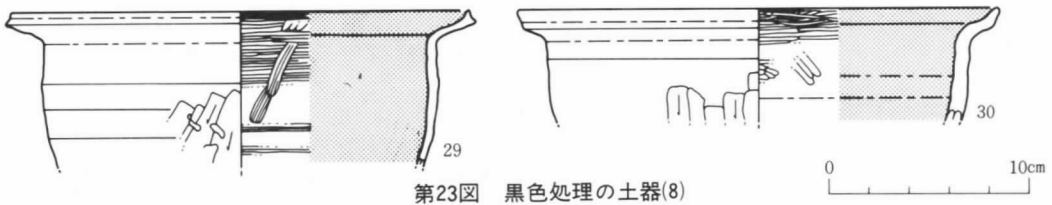
19	35	高台付杯	2		13.6				40.3	ヘラミガキ	横放	ロクロナデ	不	明	暗	褐			(274.3)cc
20	1	"	4	2	(14.6)	7.0	6.5	(44.5)	35.0	"	"	"	糸切り ロクロナデ	糸切り ロクロナデ	にぶい 暗	にぶい 黄			
21	2	"	3	1	(14.3)	8.0	6.8	(47.6)	36.2	"	"	"	糸切り ロクロナデ	糸切り ロクロナデ	浅	黄	橙		
22	5	"	4	2	(15.3)	7.1	5.7	(37.3)	51.0	"	"	"	"	"	明	褐			
23	23	"	4	1	(15.8)	8.8	5.9	(37.3)	57.1	"	"	"	"	"	にぶい 暗	黄 褐			
24	15	"	~10	1	(16.9)	8.8	5.3	(31.4)	69.8	"	"	ロクロナデ	糸切り ロクロナデ	にぶい 黒	にぶい 黒				
25	"	"	~10		(17.2)				47.3	"	"	"	糸切り ロクロナデ	にぶい 黒	十	体	10		
26	4	"	2		15.7				33.9	"	"	"	菊花状 ロクロナデ	にぶい 黒					(597.4)cc
27	30	"	2		16.4				39.0	"	"	"	糸切り ロクロナデ	にぶい 黒					内面摩滅(635.2)cc
28	64	"		1	7.6					"	"	"	菊花状 ロクロナデ	にぶい 黒					
29	1	鉢	4		(23.5)					"	横斜	ロクロナデ ヘラケズリ							
30	2	"	10		(24.2)					"	"	"							
31	3	壺		底部 1	3.8					ヘラミガキ ロクロナデ		ヘラミガキ	ヘラミガキ						
32	6	耳皿	10							ヘラミガキ		"							

( ) は推定値

鉢 (第23図 第5・11表 図版14)

内面黒色処理の口縁部6点、体部6点、底部7点の破片である。口縁部は短かく外反し、口縁端部が上方に逸き出される。外面はロクロ痕を有し、下半が不整に筥削りされる。内面は横、または斜方向の筥磨きが施される。

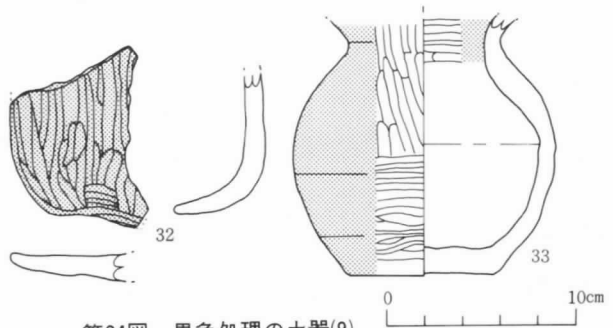
体部は共に外面に縦、または斜方向の筥削りが不整に走る。内面は横方向の筥磨きが施される。底部は筥削りをうけるもの2点、回転糸切り痕を残すもの1点がある。後者は器高が低く口径の大きい鉢とみられ、底径は9.0cmと推定される。ほかに14.2cmの1点がある。胎土は共に砂粒、小石を含み、外面はにぶい橙色、または褐色を呈する。



第23図 黒色処理の土器(8)

その他 (第24図 第5・10表 図版14)

内外面黒色処理される小壺1点と耳皿1点がある。壺は口縁部より体部にかけて欠損しているが、ロクロ成形される胴部の張る小壺である。外面は体部上半まで縦方向に、これより下半は横方向に筥磨きされ、内



第24図 黒色処理の土器(9)

面は頸部まで横方向に施される。底部は全面が不定方向に篋磨きされ、切り離しは不明である。胴部の最大径は6.9cm、底径は3.8cmを計る。

耳皿は口縁部の破片で歪みをもつ。内外面に入念な篋磨きが施され、やゝ光沢がある。

(2) 非黒色処理の土師器 (第25~33図 第5・7・11~15表 図版15~23 29・30)

非黒色処理の土器は坏、高台付坏、甕、鉢、その他を含めて15,240点である。うち完形品は僅か4点である。破片数による比率は坏79.3%、高台付坏3.3%、甕・鉢0.2%である。

坏 (第25~30図 第5・7・11・12表 図版15~21)

口縁部より底部まで残存するものは245点であり、他の破片は口縁部4,998点、体部4,488点、底部2,356点である。口縁部及び体部片には高台付坏と識別できない破片が含まれ、実数ではこれより減少するものとみられる。細片化傾向の小さい底部片によって推計される個体数は732であるが、細片が多い点では若干これを上回るものと推定される。

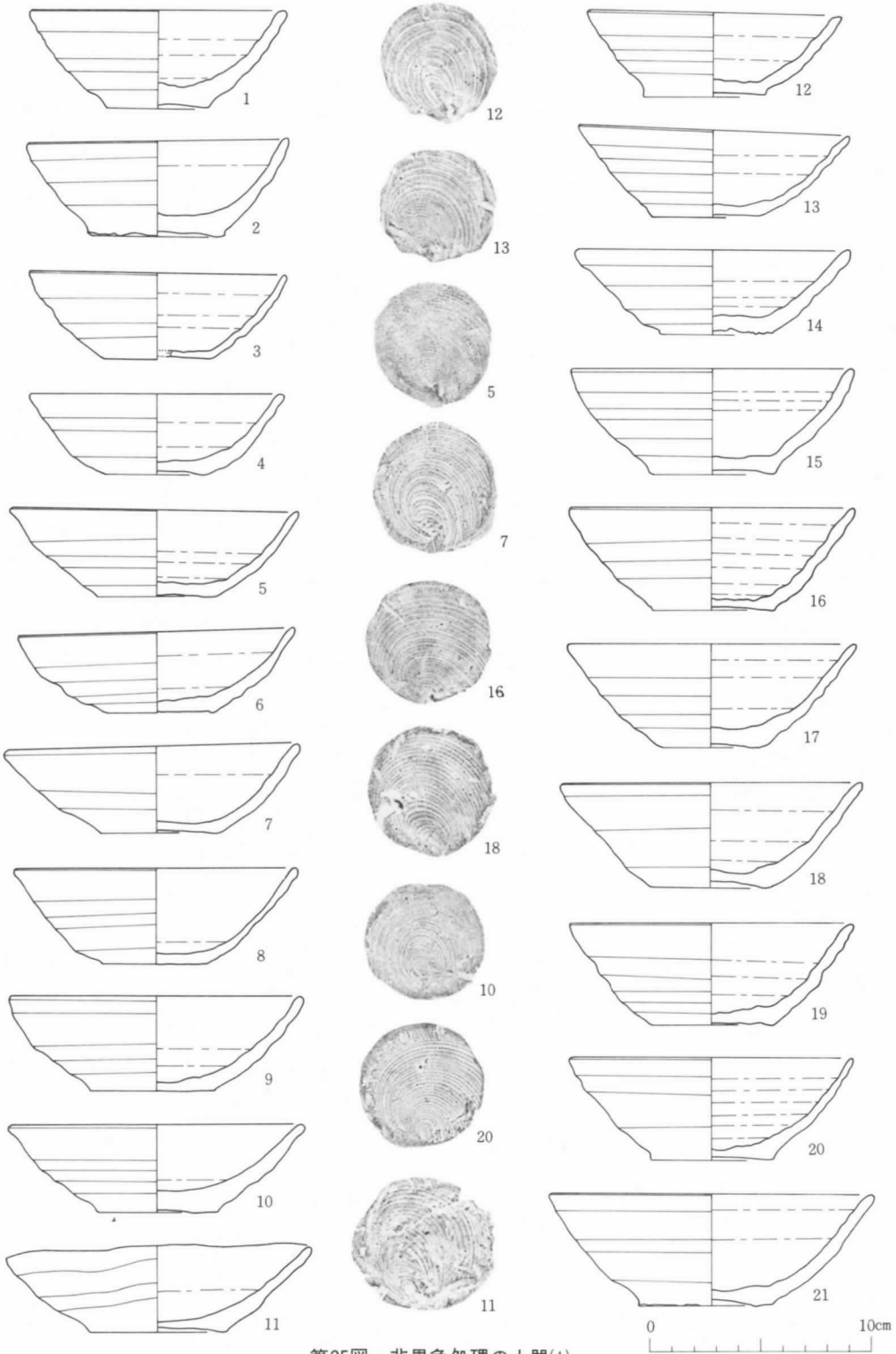
口縁部は体部に続いて外傾するもの、内彎して立ちあがるものがあり、後者では端反りするものが含まれる。共に強弱があつて明確に分類できないが、口縁端部が外反して逸き出されるものがやゝ多い。口縁端部の外傾するものがやゝ肥厚するのに対し、内彎、または端反りするものでは体部に比して薄手となる傾向がみられ、全体に歪みのあるものが多い。ほかに内面が横方向に篋磨きされるものが1点含まれる。ほかに口縁部直下に穿孔される1点があり、径0.3~0.4cmの2孔がやゝ不整に対応する。1孔は外面より、他は内面より穿たれ、内外面に煤状の炭化物が付着する。

体部は内外面にいずれもロクロ痕を残し、特に外面の凹凸が顕著である。再調整をうけるものは図化する89点のうち5点で極めて少ない。外面全面に回転篋削りされる1点を除いては下端に横方向の手持ち篋削りが不整に認められるものである。共に底部の篋削りに対応するものである。内面では篋ナデとみられるものと既述の篋削りされる各1点がある。

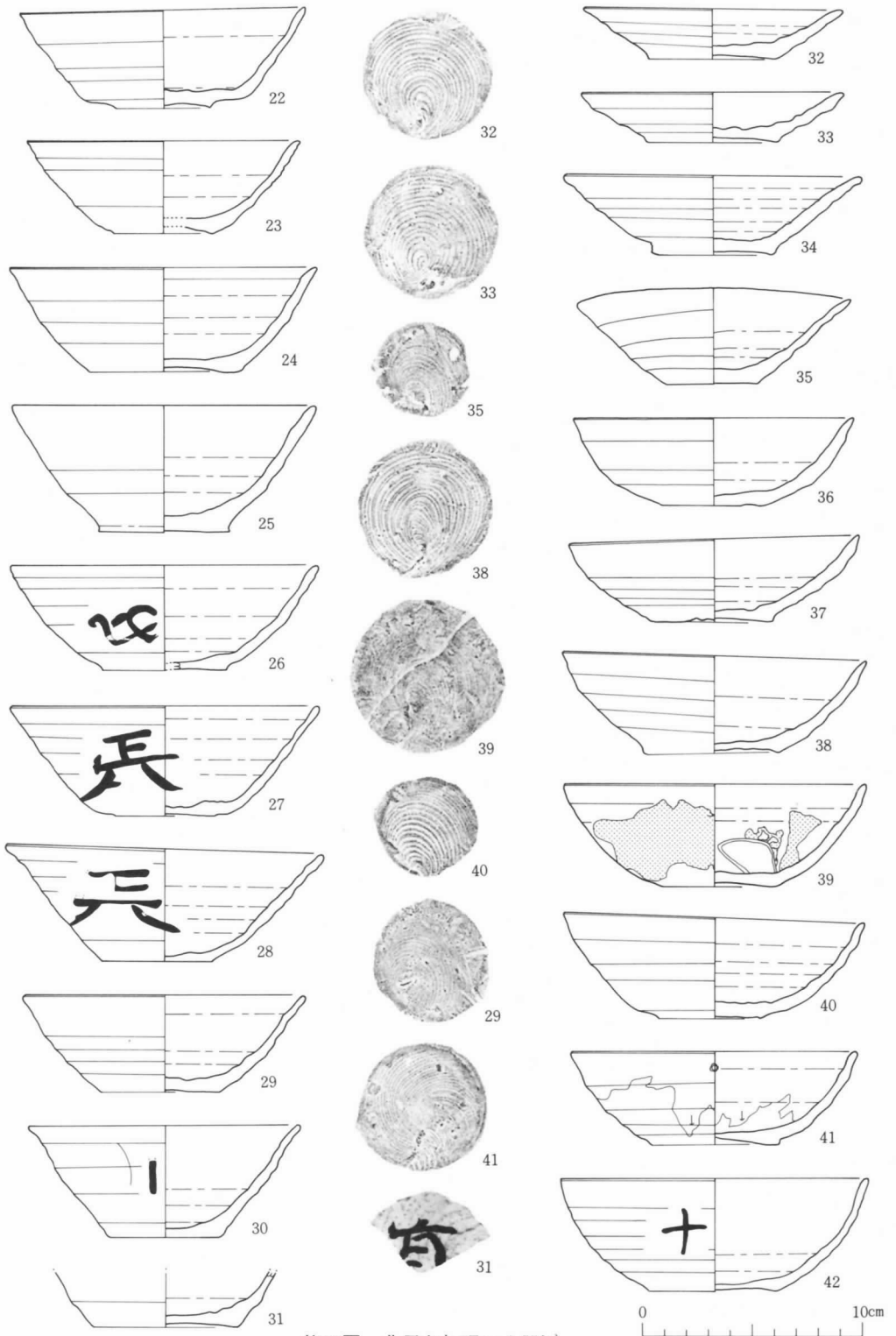
底部は体部境より肥厚するものと逆に薄手となるものがあり、体部境が丸味をなすものは殆どない。共に底部外縁に比して中央部が高く、水平をなすものは少なく不整である。切り離しは篋削りによって不明となる6点を除いてすべて回転糸切りによっている。篋削りされるものは井桁状、または特定方向に認められるもの、不定となるものがある。また、糸切り底に更に糸切りされた底部を貼付け、その外縁を篋削りするものや二度切りによって底部を調整するものが含まれる。そのほか、長さ0.6cm、幅0.3cm、深さ0.1cmの靱の圧痕を有するもの、糸切り後細い条線を刻するものがある。

底部の内面はロクロ痕が残って平滑をなすものが少なく、凹凸のあるものが大部分である。篋磨きされる1点は内面黒色処理の坏と同様に放射状の磨きが施されるものである。そのほか内面に漆液の固着する漆とき用とみられるもの、燈心痕とみられる細紐状の痕跡や油痕・煤の

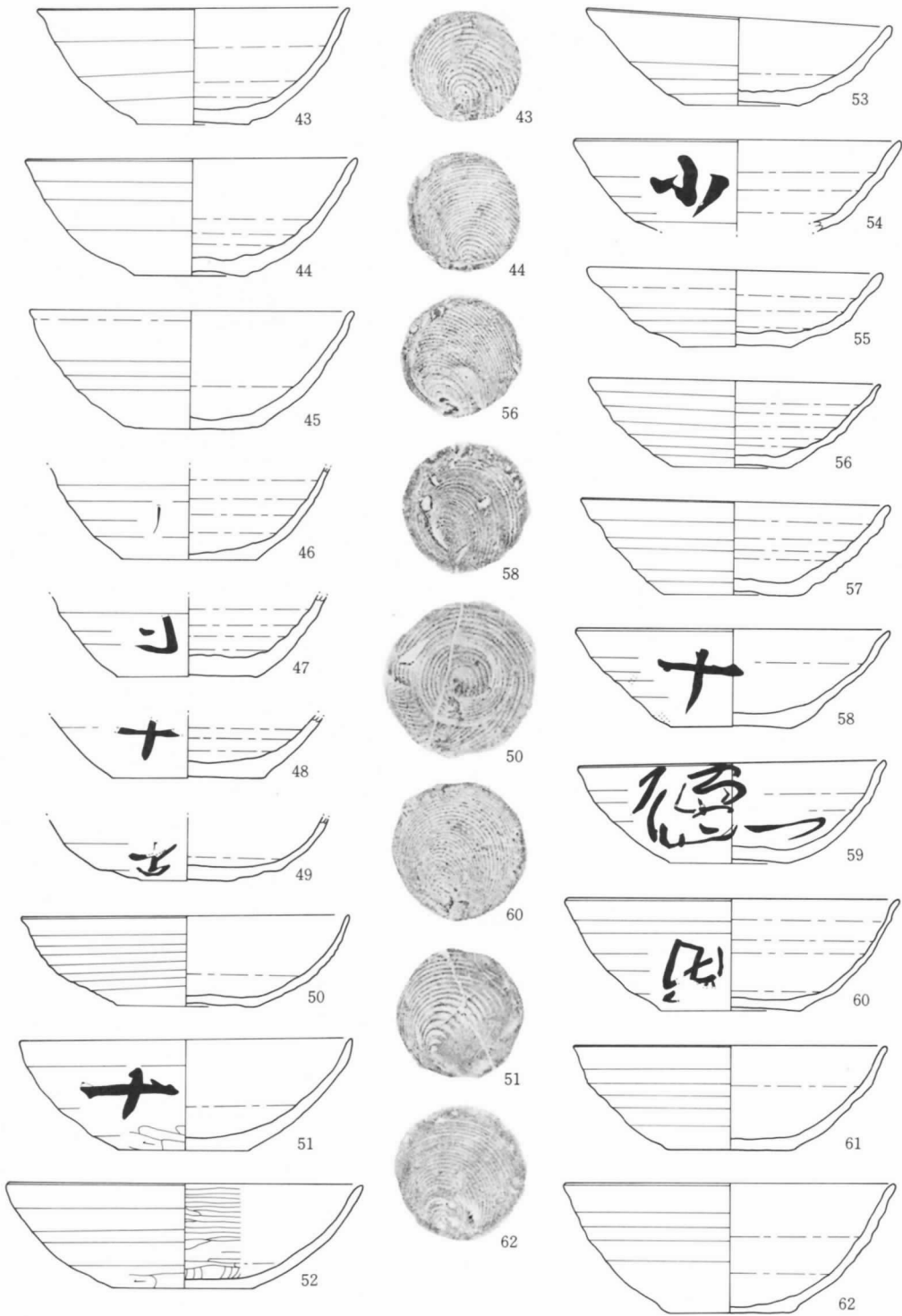




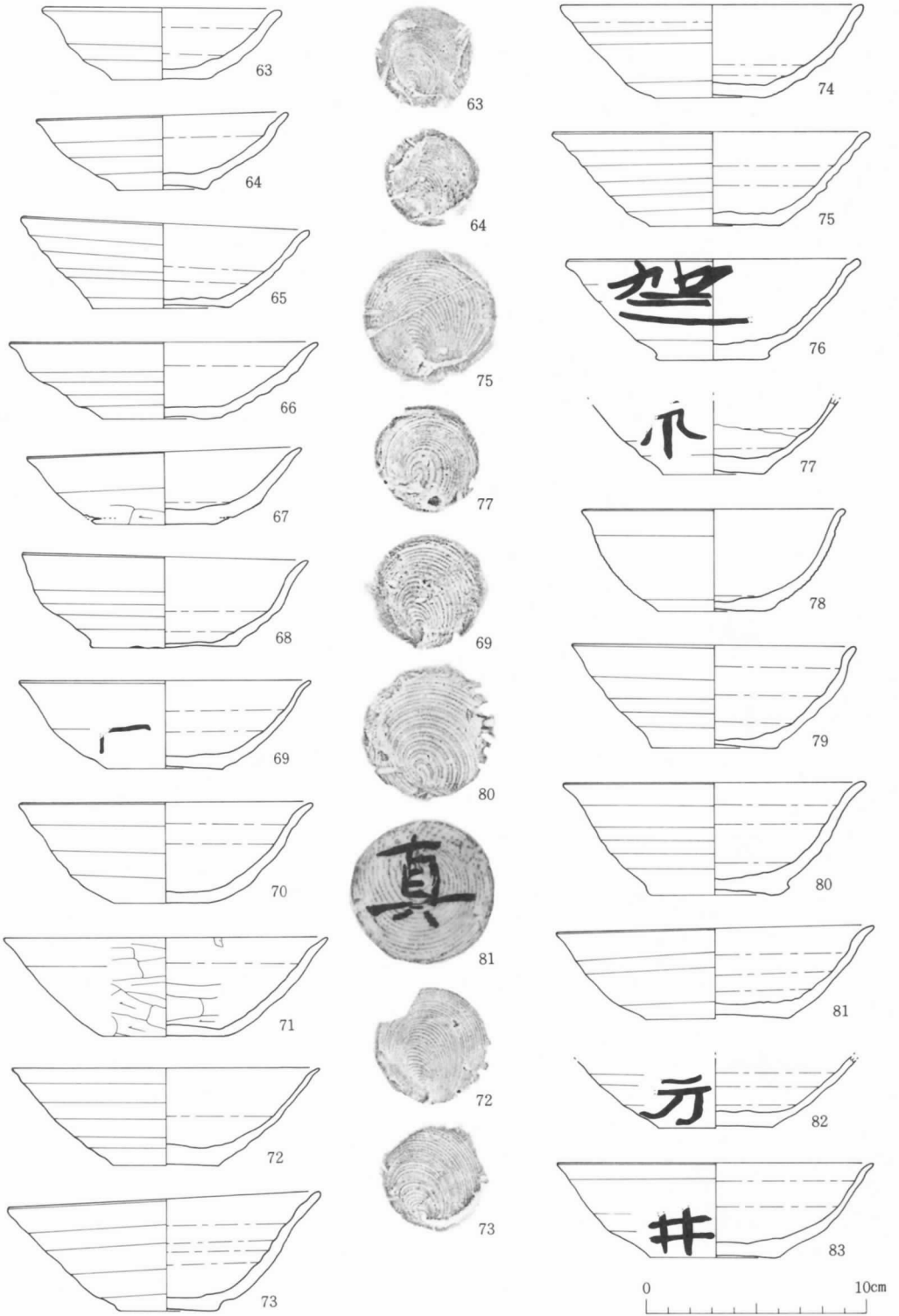
第25図 非黒色処理の土器(1)



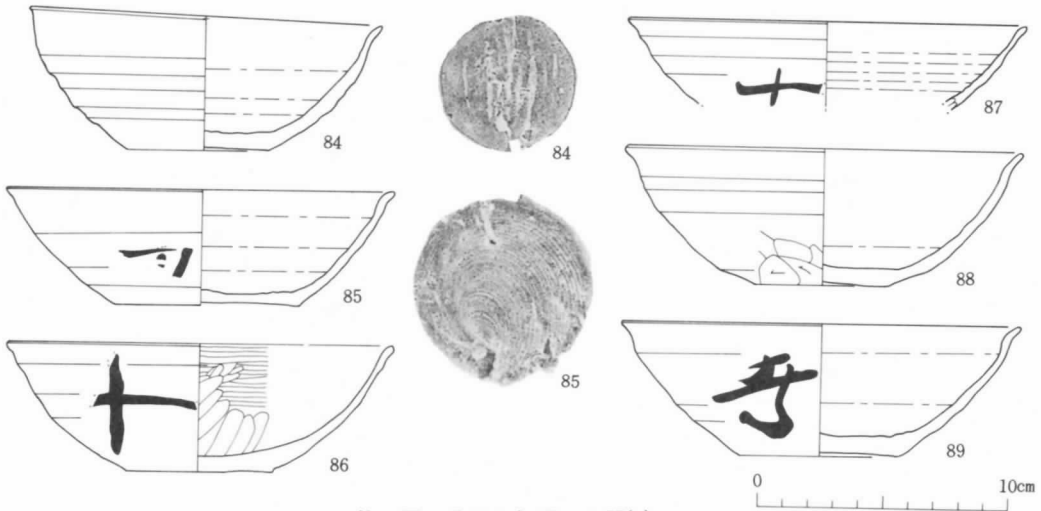
第26図 非黒色処理の土器(2)



第27図 非黒色処理の土器(3)



第28図 非黒色処理の土器(4)



第29図 非黒色処理の土器(5)

第II表 同観察表(1)

実測図 No.	登録 No.	器種	残存率		口 径	底 径	器 高	径高指数	外傾指数	器面調整		切り磨し 調整	色調		墨書文字		備考
			口縁	底部						内面	外面		内面	外面	文字	位置	
1	219	坏	4分の1	1分の1	(11.6)	4.6	4.4	(37.9)	45.5	クロロナア	クロロナア	糸切り	黒	にぶい黄橙			内面に炭化物付着
2	49	#	2	1	11.8	6.2	4.3	36.4	36.0	#	#	#	灰	白	浅黄橙		容量(201.5)cc
3	26	#	2	3	11.6	(5.0)	3.9	33.6	42.5	#	#	#	浅黄橙	#			(201.9)cc
4	67	#	3	1	(11.5)	4.5	3.6	(31.3)	41.1	#	#	#	にぶい褐	灰黄褐			
5	21	#	2	1	13.0	5.4	3.9	30.0	55.6	#	#	#	にぶい橙	にぶい橙			(205.6)cc
6	3	#	1	1	12.5	4.9	3.7	29.6	45.6	#	#	#	にぶい黄橙	にぶい黄橙			(194.5)cc
7	205	#	2	1	13.4	5.5	3.9	29.1	45.0	#	#	#	黒	褐	黒	褐	内・外面の一部に煤付着 (255.6)cc
8	32	#	2	1	12.8	4.7	4.3	33.6	46.6	#	#	#	橙	橙			
9	45	#	2	1	13.3	5.6	4.2	31.6	46.5	#	#	#	灰黄褐	橙黒			内面の一部と外面に油灰・ 煤付着 (231.5)cc
10	37	#	3	1	13.3	5.4	4.0	30.1	60.0	#	#	#	にぶい褐	橙	灰		外面の一部に黒色付着物あり
11	232	#	2	1	13.8	6.1	3.9	28.3	58.4	#	#	#	浅黄橙	浅黄橙			歪みが強い (211.1)cc
12	14	#	2	1	11.5	5.5	3.8	33.0	44.9	#	#	#	#	#			(179.7)cc
13	84	#	2	1	12.2	5.0	3.9	32.0	49.4	#	#	#	灰	褐	灰	褐	(368.5)cc
14	1	#	1	1	12.4	5.1	3.8	30.6	50.0	#	#	#	にぶい橙	にぶい橙			174.1cc
15	66	#	3	1	(12.8)	5.7	4.7	(36.7)	44.2	#	#	#	浅黄橙	浅黄橙			
16	29	#	1	1	12.9	5.5	4.7	36.4	45.7	#	#	#	にぶい黄橙	にぶい黄橙			263.0cc
17	77	#	4	1	(13.0)	4.5	4.7	36.2	48.5	#	#	#	黒	褐	黒	褐	内面に炭化物付着
18	17	#	2	1	13.6	5.4	4.7	34.6	51.6	#	#	#	浅黄橙	浅黄橙			
19	46	#	2	2	12.8	5.6	4.6	35.9	43.5	#	#	#	黒	褐	にぶい褐	黒	内・外面に油・灰・炭化物 付着
20	10	#	2	1	12.8	5.6	4.6	35.9	46.8	#	#	#	浅黄橙	浅黄橙			
21	38	#	2	1	14.7	6.0	5.0	34.0	45.1	#	#	#	#	浅黄橙	橙	灰	内・外面の一部に煤付着
22	93	#	2	2	13.0	4.3	4.5	34.6	40.4	#	#	#	橙	にぶい赤褐			
23	115	#	2	3	12.4	4.5	4.2	33.9	48.8	#	#	#	浅黄橙	浅黄橙			
24	53	#	10	1	(13.0)	6.8	4.7	(36.2)	41.7	#	#	#	橙	橙			や、軟質の焼成で胎土細粒
25	48	#	3	2	(13.8)	6.0	5.8	(42.0)	39.7	#	#	#	浅黄橙	浅黄橙			

— 下谷地 B 遺跡 —

26		環	3	3	(14.0)	(5.6)	4.8	34.3	44.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸 切り	にぶい褐	にぶい褐		丸	184	
27		#	5	2	(14.1)	4.6	5.0	35.3	46.5	#	#	#	#	#	平	#	130	口縁部に歪みあり
28		#	2	1	14.5	5.1	5.1	35.2	51.4	#	#	#	#	にぶい黄橙	#	#	129	
29	12	#	2	1	12.9	5.4	4.5	34.9	43.3	#	#	#	にぶい黄橙	にぶい黄橙				ほぼ完形(251.9)cc
30		#	4	2	(12.4)	5.3	5.1	(41.1)	46.6	#	#	#	橙	灰 褐	□	体	194	口縁部内外面に炭化物付着
31		#		4		(6.5)				#	#	#	黒	にぶい		真	底	161
32	101	#	2	1	11.8	5.8	2.3	19.5	89.6	#	#	#	にぶい	にぶい				(103.3)cc
33	39	#	2	1	12.0	6.0	2.3	19.2	87.0	#	#	#	にぶい黄橙	にぶい黄橙				(101.9)cc
34	24	#	1	1	13.6	5.6	4.0	29.4	70.7	#	#	#	明	褐	明	褐		167.8cc
35	204	#	2	1	12.4	4.1	4.4	35.5	70.1	#	#	#	灰 黄	褐	灰 黄	褐		底部外面に糠の圧痕 (174.1)cc
36	47	#	3	2	(12.7)	4.7	4.0	(31.5)	40.0	#	#	#	にぶい赤褐	にぶい赤褐				
37	206	#	1	1	13.2	5.5	3.8	28.8	55.0	#	#	#	にぶい	にぶい				容量207.4cc
38	4	#	1	1	13.8	6.2	4.4	31.9	45.7	#	#	#	にぶい	にぶい				口縁部内・外面に油痕付着 250.5cc
39	4-1	#	2	1	13.7	5.2	4.7	34.3	41.5	#	#	#	にぶい黄褐	にぶい黄褐				内外面に炭化物付着
40	25	#	2	1	13.7	4.8	4.6	33.6	42.4	#	#	#	橙	にぶい				
41	227	#	1	1	13.1	5.8	4.3	32.8	40.5	#	#	#	黒	灰 黄	黒	灰 黄		内・外面に油痕・炭化物付着 2穿孔(261.1)cc
42	113	#	3	1	(14.0)	5.4	5.1	(36.4)	33.3	#	#	#	橙	にぶい	+	体	95	
43	16	#	2	1	13.9	5.0	5.1	36.7	37.1	#	#	#	浅 黄	橙	浅 黄	橙		内外面の一部に炭化物付着 (359.3)cc
44	207	#	2	1	14.8	5.0	5.1	34.5	38.7	#	#	#	にぶい	にぶい				外面に黒色部分あり (435.2)cc
45	212	#	2	2	14.4	6.2	5.3	36.8	37.7	#	#	#	浅 黄	橙	浅 黄	橙		
46		#		2		6.0				#	#	#	にぶい	にぶい	□	体	254	内面に墨汁痕?あり
47		#		2		6.4				#	#	#	にぶい	にぶい	□	体	190	内面に黒色付着物あり
48		#		2		6.8				#	#	#	橙	橙	+	体	99	
49		#		1		4.1				#	#	#	にぶい	にぶい	□	体	188	
50	30	#	3	1	(14.6)	5.3	4.0	(27.4)	37.1	#	#	#	にぶい黄橙	にぶい黄橙				
51	52	#	2	1	14.8	5.5	4.9	33.1	43.6	#	#	#	にぶい	にぶい	+	体	96	
52	105	#	2	2	15.8	6.1	4.6	29.1	43.2	ヘラミガキ ヘラケズリ	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	浅 黄	橙	浅 黄	橙		
53	36	#	2	1	13.6	5.0	3.9	28.7	59.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸 切り	灰	褐	黒	褐		(199.6)cc
54		#		8	(14.6)					#	#	#	にぶい黄橙	にぶい		小	体	183
55	35	#	2	1	13.2	4.9	3.4	25.8	56.3	#	#	#	灰 黄	褐	灰 黄	褐		(201.9)cc
56	11	#	2	1	13.0	5.1	3.9	30.0	52.5	#	#	#	橙	橙				ほぼ完形(218.5)cc
57	44	#	2	2	13.8	6.0	4.1	29.7	53.6	#	#	#	にぶい	にぶい				口縁部内面と外面に黒色炭化物付着
58		#	10	1	(14.0)	5.4	4.4	(31.4)	54.5	#	#	#	#	にぶい	+	体	94	体部に黒斑あり
59		#	3	2	13.8	5.4	4.4	31.9	39.1	#	#	#	褐	褐	徳	体	165	
60	86	#	3	1	14.9	6.2	5.0	33.6	41.0	#	#	#	にぶい	にぶい	留	体	191	
61	210	#	4	1	(14.0)	5.7	4.7	33.6	45.7	#	#	#	赤	灰	橙			
62	89	#	3	1	14.8	5.7	5.8	39.2	39.3	#	#	#	にぶい黄橙	にぶい				
63	8	#	1	1	10.9	4.4	3.3	30.3	50.7	#	#	#	#	にぶい黄橙				121.8cc
64	2	#	1	1	11.5	4.1	3.3	28.7	59.2	#	#	#	#	#				125.9cc
65	23	#	2	1	13.2	6.3	3.9	29.5	47.6	#	#	#	にぶい	浅 黄				(209.3)cc
66	103	#	2	1	14.1	5.4	3.5	24.8	67.1	#	#	#	浅	灰	にぶい			

67	129	環	3	1	(12.5)	5.4	3.3	(26.4)	51.4	ロクロナア	ロクロナア ヘラケズリ	糸切り	におい褐	におい褐 黒			底部に高台を付加して重合する	
68	5	#	2	1	13.0	6.7	4.1	31.5	37.9	#	ロクロナア	#	におい橙	におい橙			ほぼ完成(237.5)cc	
69		#	10	1	(13.3)	5.3	4.0	(30.1)	52.5	#	#	#	におい褐	におい黄橙	十	体	101	
70	33	#	2	1	13.4	4.4	4.5	33.6	48.4	#	#	#	におい黄橙	#			(285.2)cc	
71	97	#	2	2	14.7	5.5	4.5	30.6	55.6	ロクロナア ヘラナテ	ヘラケズリ	網代? ヘラケズリ	におい橙	浅黄橙			(331.5)cc	
72	34	#	3	1	(14.0)	4.8	4.4	(31.4)	60.2	ロクロナア	ロクロナア	糸切り	におい黄橙 褐	褐				
73	13	#	2	1	14.3	4.6	5.1	35.7	45.9	#	#	#	におい橙	におい褐				
74	76	#	2	1	13.8	5.0	4.2	30.4	49.4	#	#	#	におい褐	黒 褐			口縁部内面の一部に炭化物付着	
75	28	#	2	1	14.5	5.9	4.3	29.7	57.5	#	#	#	浅黄	浅黄			ほぼ完成(321.1)cc	
76		#	5	2	(13.4)	5.2	4.6	(34.3)	54.3	#	#	#	におい褐	におい褐	皿	体	187	
77		#		1		4.6				#	#	#	におい黄橙 黒	におい黄橙 灰	尻	#	139	
78	209	#	4	1	(12.0)	5.0	4.6	(38.3)	34.8	#	#	#	褐	におい褐			(253.7)cc	
79	62	#	3	2	(12.9)	5.8	4.7	(36.4)	49.5	#	#	#	橙	橙				
80	31	#	3	1	(13.8)	6.5	5.1	(37.0)	46.6	#	#	#	におい橙	におい黄橙				
81		#	2	1	14.5	6.5	4.1	28.3	49.1	#	#	#	黒	#	真	底	162	
82		#		2		5.2				#	#	#	におい褐 黒	におい褐 黒	□	万	体	189
83		#	10	2	(14.4)	6.0	4.3	(29.9)	47.7	#	#	#	におい橙	灰 褐 におい橙	井	#	176	
84	6	#	2	1	14.1	5.6	5.3	37.6	38.2	#	ロクロナア ヘラケズリ	ヘラケズリ	浅黄橙 におい橙	浅黄橙 灰			(353.7)cc	
85	208	#	2	1	15.5	7.3	4.6	29.7	43.5	#	ロクロナア	糸切り	浅黄橙	浅黄橙	□	体	97	
86		#	10	1	(15.4)	5.9	5.1	(33.1)	45.5	ヘラミガキ	#	#	におい褐	におい褐	十	#	100	
87		#	10		(15.9)					ロクロナア	#	#	におい橙	におい橙	十	#	98	
88	218	#	10	1	(15.8)	5.2	5.4	(34.2)	42.6	#	#	糸切り	灰黄褐 黒	灰黄褐 黒			内面に炭化物付着	
89		#	10	1	(16.0)	6.3	5.3	(33.1)	47.7	#	#	#	におい褐	におい橙	寺	体	186	

( )は推定値

付着するものがあり、灯明皿用としての使用が推定されるもの等が含まれる。また、口縁部直下に穿孔する環の底部では炭化物の付着は中央部に限って認められず、台皿としての使用も推測される。

胎土は著しく粗粒のものは含まれず、砂粒や小石の含むものが若干含まれる。色調はにおい橙色、または褐色がかったものが多く、焼成は全体に良好である。また、体部の外面、または底部に黒班を有するものが若干含まれる。

墨書される土器は小破片を含めて74点である。底部に2点が記されるほかは体部外面に位置し、2字を記すもの1点、底部を上にする逆字5点がある。判明する文字は「十」、「小」、「井」、「丸」、「尻」、「寺」、「平」、「真」、「留」、「徳」、「□万」等11字である。もっとも多いのは「十」7点であるが、稚拙なものが含まれる。

口径は推定値を含めて9.0~17.0cmを計り、13.0~14.8cmが328点で72.8%を占める。図化する82点の平均では13.5cmである。全体に間断なく分布するが、特に口径の小さいものには直線状に立ちあがる器形のものとして著しく器高の小さい皿型のものが含まれる。最大径19.8cmを計る

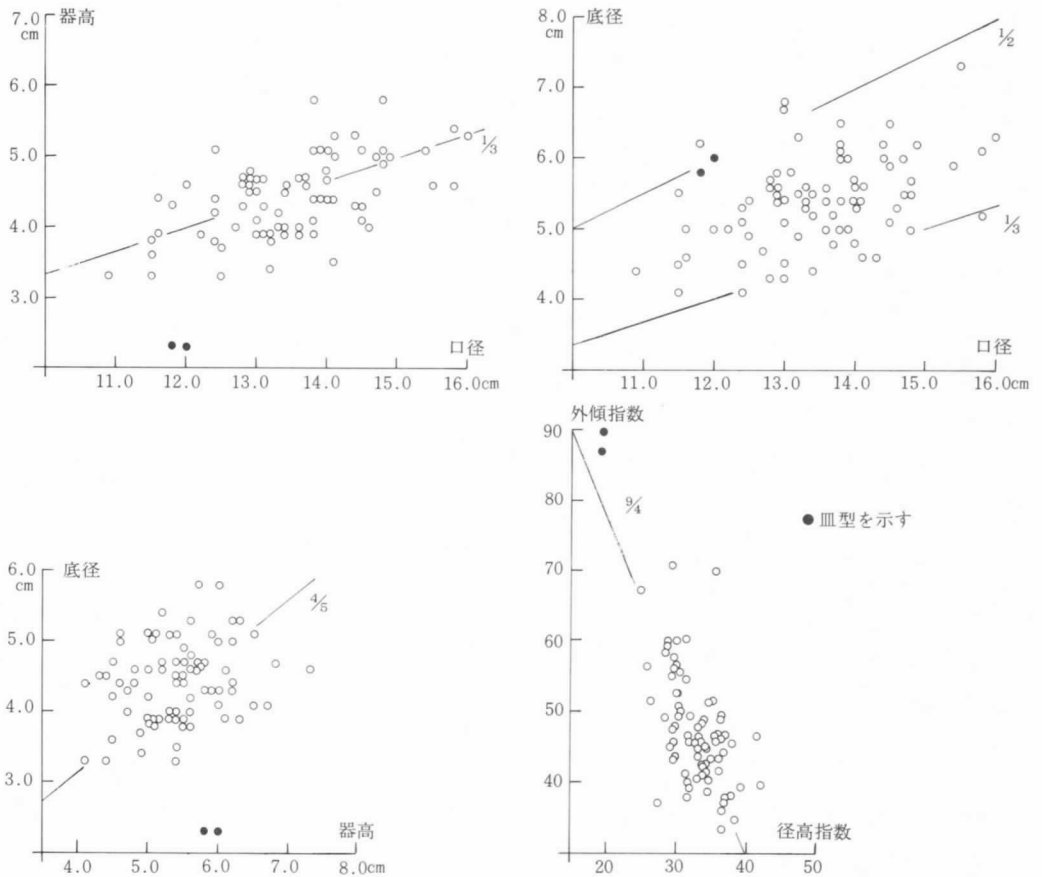
第12表 非黒色処理坏の法量値集計表

口径	点数	比率	底径	点数	比率	器高	点数	比率
9.0~9.8cm	2	0.4%	3.8~3.9cm	3	0.3%	1.8 cm	2	0.8%
10.0~10.9	9	2.0	4.1~4.4	48	5.0	2.1~2.3	6	2.5
11.2~11.9	39	8.6	4.5~4.9	134	13.9	2.7~2.9	8	3.3
12.0~12.9	95	21.1	5.0~5.4	323	33.6	3.3~3.4	17	7.0
13.0~13.9	127	28.2	5.5~5.9	260	27.0	3.5~3.9	43	17.8
14.0~14.9	117	25.9	6.0~6.4	143	14.9	4.0~4.4	70	28.9
15.0~15.9	45	10.0	6.5~6.8	38	4.0	4.5~4.9	65	26.9
16.0~16.9	15	3.3	7.0~7.3	10	1.0	5.0~5.4	25	10.3
17.0~(19.8)	2	0.4	7.6~7.8	3	0.3	5.5~5.8	6	2.5
計	451	99.9	計	962	100.0	計	242	100.0

( ) 高台付坏 ?

1点は高台付坏とみられるものである。

底径は3.8~7.8cmをみる。全体では5.0~5.9cmに60.7%が含まれ、図化する87点における平均では5.4cmとなる。底径は口径に対応する傾向にあるが、底径が小さく器高の大きいものが混在している。



第30図 非黒色処理坏の法量比



器高は1.8～5.8cmである。1.8～2.3cm及び2.7～2.9cmの低いものと3.3cm以上のこれより大きいものに2分され、前者は比較的口径の小さい皿型をなし、いずれも外傾指数は80以上を計り、全体の3.3%を占める。

完形品9点とほぼ完形に近い4点によって得られる容量は121.8～321.1ccを計る。厚さ0.01mmのポリエチレンを使用して自然状態で計測するものであり、歪みのあるものは更に多少の増量が見込まれる。大凡123.1～125.9cc、167.8～218.5cc、237.5～263.0cc、321.1ccに分けられ、180ccをもって1合とするならば平均値ではそれぞれ0.69、1.07、1.40、1.78合となる。

#### 高台付坏 (第31図 第5・13表 図版21)

口縁部より高台部まで残存するものは17点であり、完形品は含まれていない。ほかに高台の剝離欠損する坏部12点、底部232点と高台249点がある。口縁部及び体部片では坏と識別できないため既述の坏に含めるものである。底部による個体数は84個体以上と推計される。

図化する17点によってみると、坏部は器高が低く皿型をなすものとこれより器高の大きいものに分けられる。前者は底部より外傾して立ちあがり、更に口縁端部の外反するものが含まれ、肥厚するものと薄く逸き出されるものである。後者は体部より内彎気味に立ちあがる。

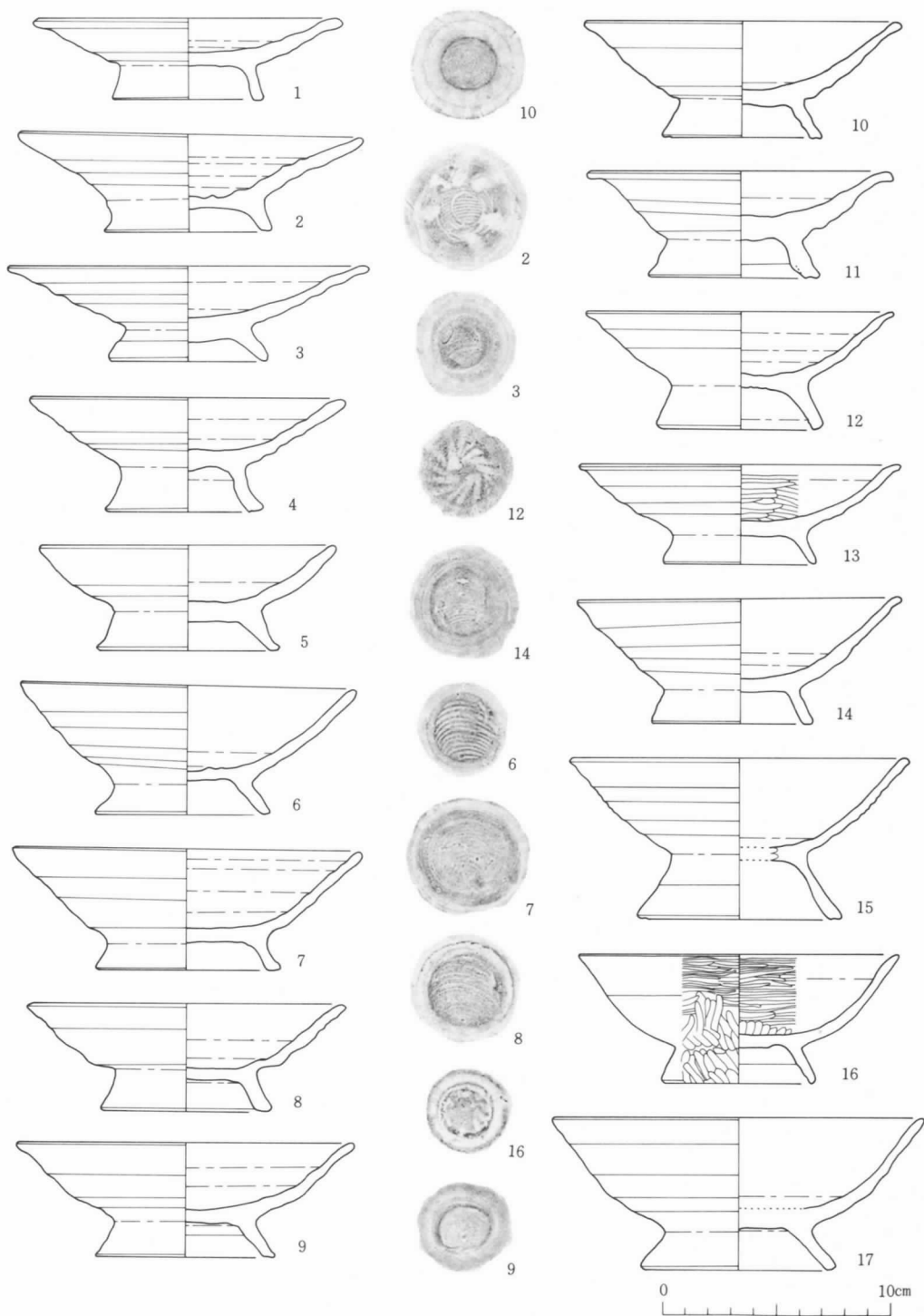
体部は坏と同様に内外面にロクロ痕が目立ち、うち2点は篋磨き痕を有し、高台内を除いて篋磨きされるものがある。磨き方向は黒色処理のそれと同様である。底部は内面の平滑となるものが多いが、著しい凹凸をなすものが混在する。中央部における器厚は0.4～1.1cmを計り、全体では0.2～1.3cmである。

高台は外傾、または外反気味に開き、高台端部に広狭がある。薄く逸き出されるものはやゝ丸味をなす若干を除いて肥厚し、平滑、または高台内側に凹状をなすものが大部分である。高台内外面は篋磨きされる1点のほか、すべてロクロナデされ、全体に滑らかである。高台内は回転糸切り痕を残す9点、全面ロクロナデされる6点、菊花状の圧痕を有する2点があり、糸切り痕のあるもの2点は更に菊花状の押圧痕を有し、高台に沿ってロクロナデされる。判明する全体の底部片95点中のうち86.3%が糸切り痕を持ち、他は菊花状を呈するものである。

口径は13.1～15.4cmでばらつきが小さく、平均では14.3cmを計る。しかし、他の破片を含む推定口径は13.8～17.1cmとなり、更に口径の大きい高台付坏が含まれる。

高台径は6.6～9.1cmであり、図化する17点の平均では7.5cmである。全体では6.2～10.6cmであり、7.0～8.4cmに66.6%が含まれる。高台高は1.2～2.9cmを計り、全体に坏部の器高の小さいものが低い傾向にある。

坏部によって得られる外傾指数は径高指数に対称的な傾向を示し、皿型をなすものから坏部の器高の大きいものまで3分される。しかし、高台の形態との対応は判然としない。



第31図 非黒色処理の土器(6)

第13表 非黒色処理の土器観察表 (2)

実測図 No.	登録 No.	器種	残存率		口 径	底 径	器 高	径高 指数	外傾 指数	器面調整		切り離し 調整	色調		備 考
			口縁	高台						内面	外面		内面	外面	
1	11	高台付杯	10	2	(13.6)	6.6	3.6	(26.5)	114.3	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り ロクロナデ	にぶい 橙色	にぶい 橙色	
2	20	#	2	2	15.2	7.4	4.3	28.3	105.2	#	#	糸切り ロクロナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	容量(161.1)cc
3	14	#	10	1	(14.9)	7.0	4.2	(28.2)	130.3	#	#	糸切り ロクロナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	
4	1	#	2	1	13.9	7.0	5.0	36.0	71.3	#	#	ロクロナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	内面に黒色部分あり(140.7)cc
5	10	#	2	8	13.1	(8.0)	4.7	35.9	67.6	#	#	#	#	#	
6	22	#	2	1	14.8	7.7	5.7	38.5	60.7	#	#	糸切り ロクロナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	(261.1)cc
7	21	#	3	1	(15.4)	8.1	5.3	(34.4)	64.6	#	#	#	褐	褐	口縁部内面に黒色付着物あり
8	4	#	3	1	(14.0)	7.6	4.8	(34.3)	68.0	#	#	#	にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	
9	9	#	2	2	14.9	7.9	5.0	33.6	70.0	#	#	ロクロナデ	にぶい 橙	浅黄 橙	
10	17	#	4	2	(14.0)	7.0	5.1	(36.4)	74.1	#	#	#	褐 灰	にぶい 黄橙	
11	7	#	7	4	13.5	(7.6)	4.7	34.8	78.7	#	#	#	にぶい 黄橙	#	
12	8	#	10	1	(13.6)	7.3	5.2	38.2	75.8	#	#	菊花 ロクロナデ	#	灰 白	
13	13	#	4		(14.1)	6.7	4.4	31.2	78.7	#	ヘラミガキ	糸切り ロクロナデ	#	浅黄 橙	
14	23	#	2	1	14.3	7.1	5.5	38.5	61.0	#	ロクロナデ	糸切り ロクロナデ	#	にぶい 黄橙	(270.4)cc
15	6	#	7	3	(15.0)	(9.1)	7.1	(47.3)	64.1	#	#	ロクロナデ	褐 灰	褐 黒	黒色処理?
16	15	#	6		(14.1)	6.8	5.7	(40.4)	47.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	菊花 ロクロナデ	橙	褐 灰	
17	5	#	4	1	(15.4)	8.6	6.7	(43.5)	46.9	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り ロクロナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	

( ) は推定値

鉢 (第32図 第5・14表 図版23)

口縁部78点、体部61点、底部9点まで確認されるが、甕と識別できない細片は甕に含めており、実数はこれよりやや多いものとみられる。

口縁部は体部に続いて外反し、僅かに縁帯状をなして上方に逸き出されるものとやや上方に折り曲げられるものが含まれる。共にロクロ使用による成形である。

体部は内面が比較的滑らかであるが、外面はロクロナデのほか、縦、または斜方向の篋削りを不整にうけるものが含まれる。そのほか、内面に横方向の篋磨きを施すもの1点が混入する。全体に器壁が厚く、0.6~1.2cmを計る。

底部は体部と同様に厚手であり、外面に糸切り痕、または更に篋削り痕を有して平滑である。内面はロクロナデされるほか、体部下端より刷け毛目状の調整痕を有するものがある。

胎土は砂粒や小石を含み、色調はにぶい橙色系が多い。また、底、体部の外面には黒色炭化物の付着するものがみられ、共に甕と同様である。

口径は20.6~35.9cmを計り、底径は7.8~11.9cmと推計される。

甕 (第32図 第5・14表 図版23)

口縁部より底部まで残存するものは僅か1点であり、他は口縁部285点、体部2,026点、底部178点の破片である。小片のため詳細の判明しないものが多いが、ロクロ使用の有無によって2

分される。ロクロ使用の甕は口縁部230点、体部1,934点、底部73点となり、不明のものを含む全体では89.9%を占める。底部片における個体数は29となるが、すべて接合しない底部片であり、底部の破片数に準ずるものと推測される。

口縁部はいずれも外反し、ロクロ使用の甕ではくの字状に外反するものと更に上方に逸き出されるものが含まれる。それぞれ強弱、長短が認められる。器壁は特にロクロ使用の甕に厚薄が目立ち、内外面は不整に横ナデされる。また、ロクロ不使用の甕にあつては歪みが大きく、押圧痕を有するものが含まれる。そのほか、外面に丹塗りを施す小片1点と直線状をなして立ちあがるロクロ使用のもの1点がある。

体部は口径に比して頸部よりやや張り出すものと緩やかに下降するものがある。ロクロ不使用の甕では外面に篋削り、縦、または斜方向の刷け毛目を有するものが多く、全体に不整である。内面は刷け毛目、横ナデ等によつてゐる。ロクロ使用のそれではロクロ痕のほか、更に縦、または斜方向の不整な篋削りを疎にうけるものがあり、前者が比較的厚手となる。そのほか、体部下半に平行する叩き目を有するもの3点が含まれる。

底部は体部より緩やかに丸味をなして続くもの、鈍角をなすもの、体部下端より底径が大きく、やや張り出すもの等が混在する。器厚は0.25~1.35cmを計り、体部に比して厚手となる。概して小型の甕は薄手であり、ロクロ使用の底部がやや厚い。いずれも外縁に比して中央部にやや高い。外面は51点中、回転糸切り痕36点、糸切り後の篋削り痕1点、叩き目痕1点、木葉底9点、網代編ともじり編痕3点、砂粒の付着する2点が判明する。内面はロクロ痕のほか、ロクロ不使用の甕においてはナデ、または篋ナデ、刷け毛目状を呈する。

口径は10.3~24.6cmを計り、10.3~13.8cm 5点と16.9~24.6cm 8点があり、ほぼ2分される。底径は152点によつてロクロ使用の甕は5.0~10.3cm、不使用のそれでは6.0~11.6cmを計り、器高の得られるロクロ使用の甕は14.3cmである。

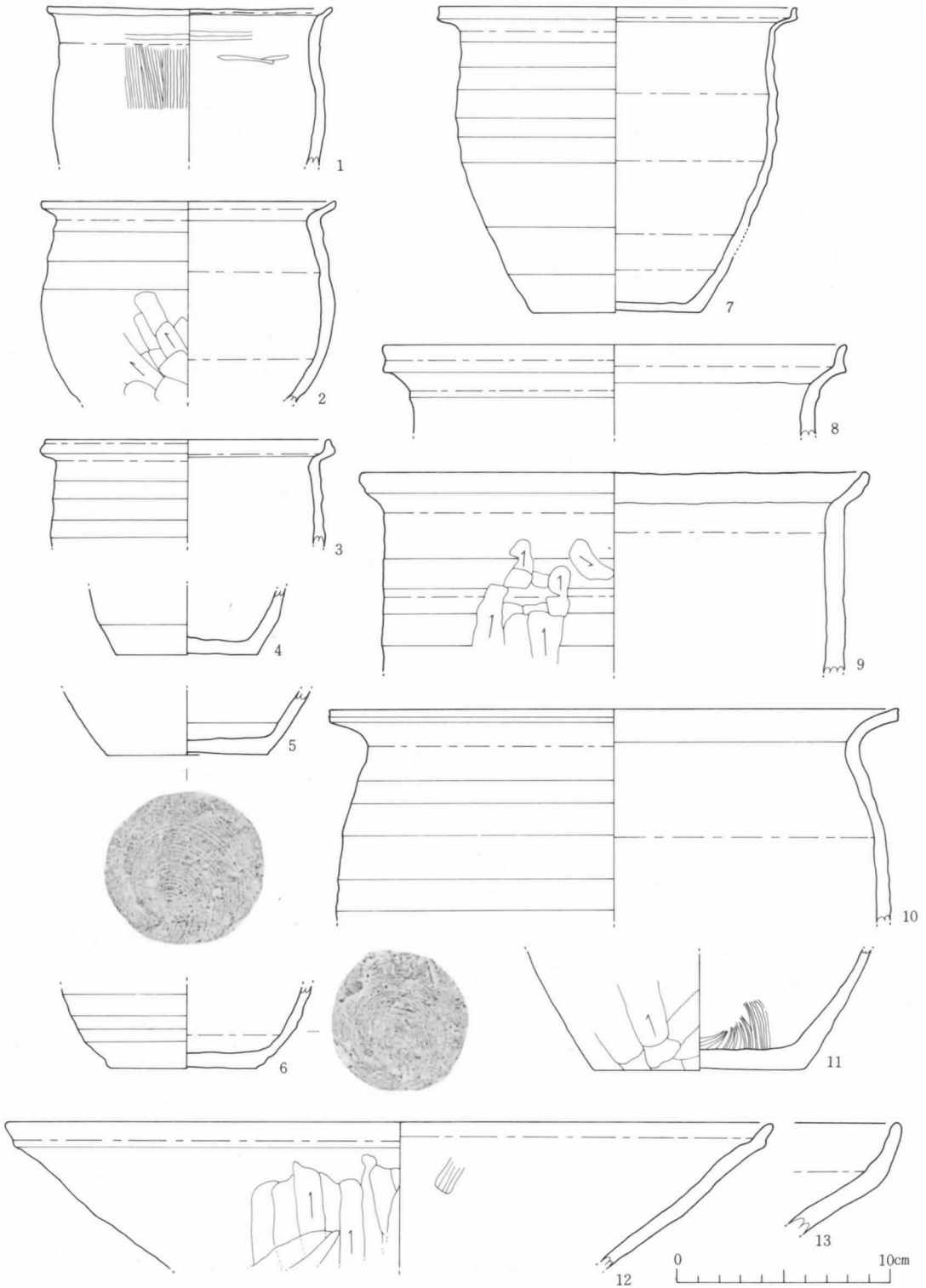
#### 壺・その他 (第33図 第5・15表 図版22)

壺1点、把手2点のほか、坏の底部をみられる円版状の土製品、手握ねによる象形土製品各1点がある。

壺は体部より底部まで残存するロクロ成形の小壺である。内外面は比較的滑らかであるが、底部は中央に歪みのある糸切り痕を残す。底径3.4cmである。

把手2点のうち1点は上方に丸く、下方に不整な稜をもち、先端はやや粗雑になる手握ねである。他の1点は両端を欠損しているが、全体に滑らかである。断面は接合部を除いて環状を呈し、ロクロ使用による穿孔とみなされる。

円版状土製品は、両面に対称的な回転糸切り痕を有し、二度切りに伴う坏の底部とみられる。そのほか手握ね土製品は内面に指圧痕、外面に縦方向の細線が走り、上下2段に区画される。

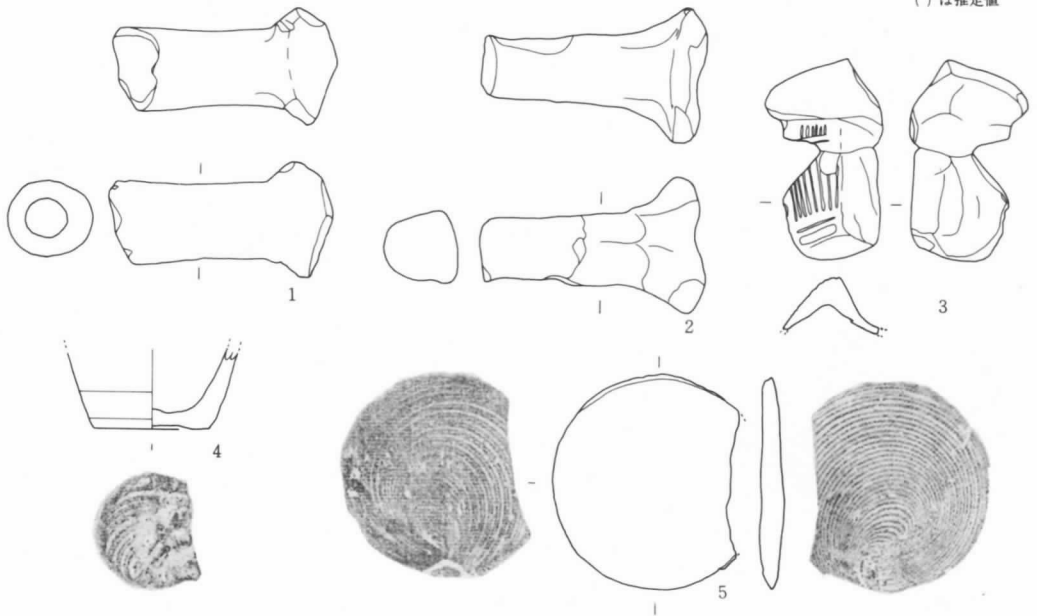


第32図 非黒色処理の土器(7)

第14表 非黒色処理の土器観察表 (3)

実測図 No	登録 No	器種	残存率		口径	底径	器高	器面調整		切り離し 調整	色調		備考
			口縁	底部				内面	外面		内面	外面	
1	19	甕	3		(13.4)			横ナデ ナ	横ナデ ハケメ		にふい褐色	にふい橙色	ロクロ不使用
2	3	"	3		(13.8)			ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ		褐 灰	褐 灰	ロクロ使用
3	47	"	4		(13.8)			"	ロクロナデ		にふい褐	黒 褐	" 煤付着
4	5	"		2		6.7		"	"	糸切り	にふい橙	赤 橙	"
5	4	"		1		7.5		"	"	"	"	にふい褐	"
6	1	"		1		6.8		"	"	"	黒 褐	灰 褐	" 煤付着
7	1	"	3	1	(16.9)	7.9	14.3	"	"	"	にふい橙	にふい橙	"
8	39	"	4		(23.9)			"	"		橙	橙	"
9	52	"	3		24.6			"	ロクロナデ ヘラケズリ		"	"	歪みが大きい、ロクロ使用
10	1	"	4		25.7			"	ロクロナデ		にふい褐	灰 褐	" 煤付着
11	2	"		1		9.8		ハケメ	ヘラケズリ	砂粒付着	にふい橙	褐 灰	ロクロ使用
12	15	鉢	~10		(35.9)			ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ		橙	橙	"
13	29	"	~10					"	ロクロナデ		にふい橙	にふい橙	"

( ) は推定値



第15表 非黒色処理の土器 (4)

No	種別	長さ	幅 底径	高さ	厚さ	色調	備考
1	把手	6.6	3.4		0.8	にふい橙色	空測をなし、ロクロ使用による一部欠損
2	"	6.6	4.0			"	手控ね 一部欠損
3	土製品	5.9	3.4	5.7	1.0	橙	"
4	壺		3.4		0.5	にふい橙	体部上半より欠損
5	土製品		6.4		0.7	にふい褐	一部欠損 環の底部とみられる

計測値は現存最大値

第33図 非黒色処理の土器(8)

#### 4 須恵器 (第34~39図 第5・7・16~18表 図版24~30)

環元炎焼成によるとみられる灰色、または灰白色を呈する土器は合せて1,692点であり、土器全体では7.6%を占める。破片が大部分を占め、器形の明らかなものは少ないが、坏、壺、鉢、甕等の器種が推定される。そのうち甕、壺類が須恵器中の56.9%、坏が43.0%を占める。坏に軟質のものが若干含まれるほかは硬質の焼成である。

##### 坏 (第34~37図 第5・7・16・17表 図版24・25)

口縁部より底部まで残存するものは68点、うち完形は1点である。他は口縁部339点、体部220点、底部100点である。図化するものは39点であるが、大部分は反転復元するものである。破片を含めた細片化傾向の小さい底部片によって求められる個体数は78以上と推定される。

口縁部は体部に続いて殆ど直線状をなして立ちあがるものと内彎、または内彎気味に立ちあがるものがあり、後者には口縁部の外反するものが若干含まれる。いずれも薄く逸き出されるものと肥厚するものが混在し、直線状に立ちあがる前者に薄手となるものが多い。

体部は内外面共に対応するロクロ痕を残す。比較的体部下半に顕著なものが多く、上半より口縁部にかけては平滑となる。

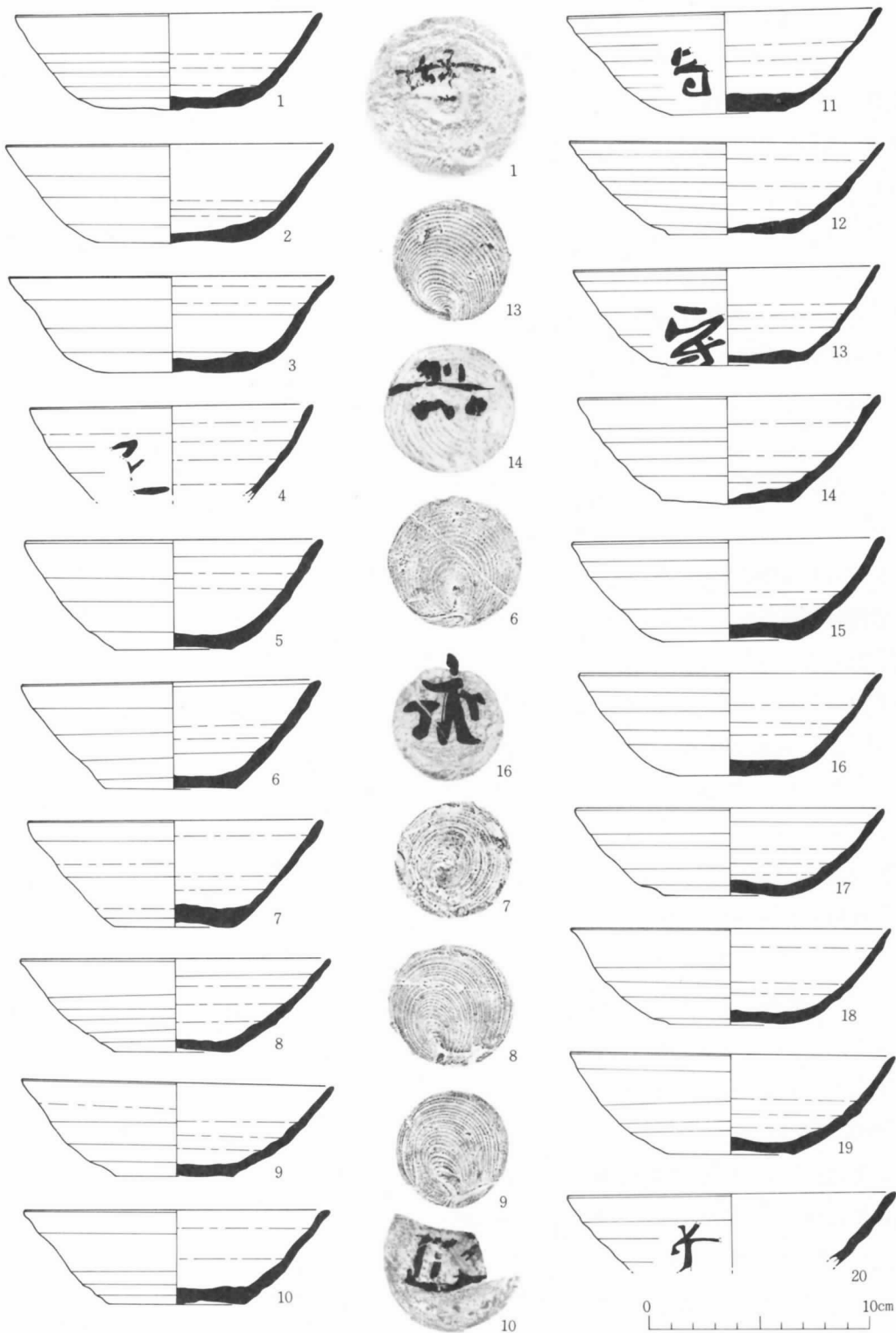
底部は体部下端よりやや丸味をなして続くものと体部境に稜をなすものがあり、大部分が体部に比して厚手となる。切り離しは篋切りによるものと回転糸切りによるものがあり、糸切り底が84.4%で圧倒的に多い。そのほか全面を不定方向の篋削りによって不明となる1点がある。篋切り底の外面は中央部に不整な残痕があつて不安定となるものが含まれるが、糸切り底においては中央部に凹み状を呈するものが大部分である。共に内面は平滑なものは少なく、ロクロ痕の残るものが多い。

胎土は特に粗粒の目立つものは少ない。篋切りされる坏は灰色硬質のものと灰白色を呈してやや軟質のものがある。糸切り底の坏にあつては灰、灰白色のほか、褐色、または黄橙色がかつたものが含まれ、焼成は一様でない。

墨書文字のある坏は破片を含めて体部に34点、底部に10点の合せて44点がある。そのうち体部の3点には2字の墨書が判明する。体部では「十」、「上」、「大」、「夫」、「令」、「守」、「尻」、「真」、「廿万」、「髪十」等があり、底部では「大」、「赤」、「真」等が判明する。合せて「十」が15点、「大」、「守」、「真」、「𠄎」が各2点、他はいずれも1点である。

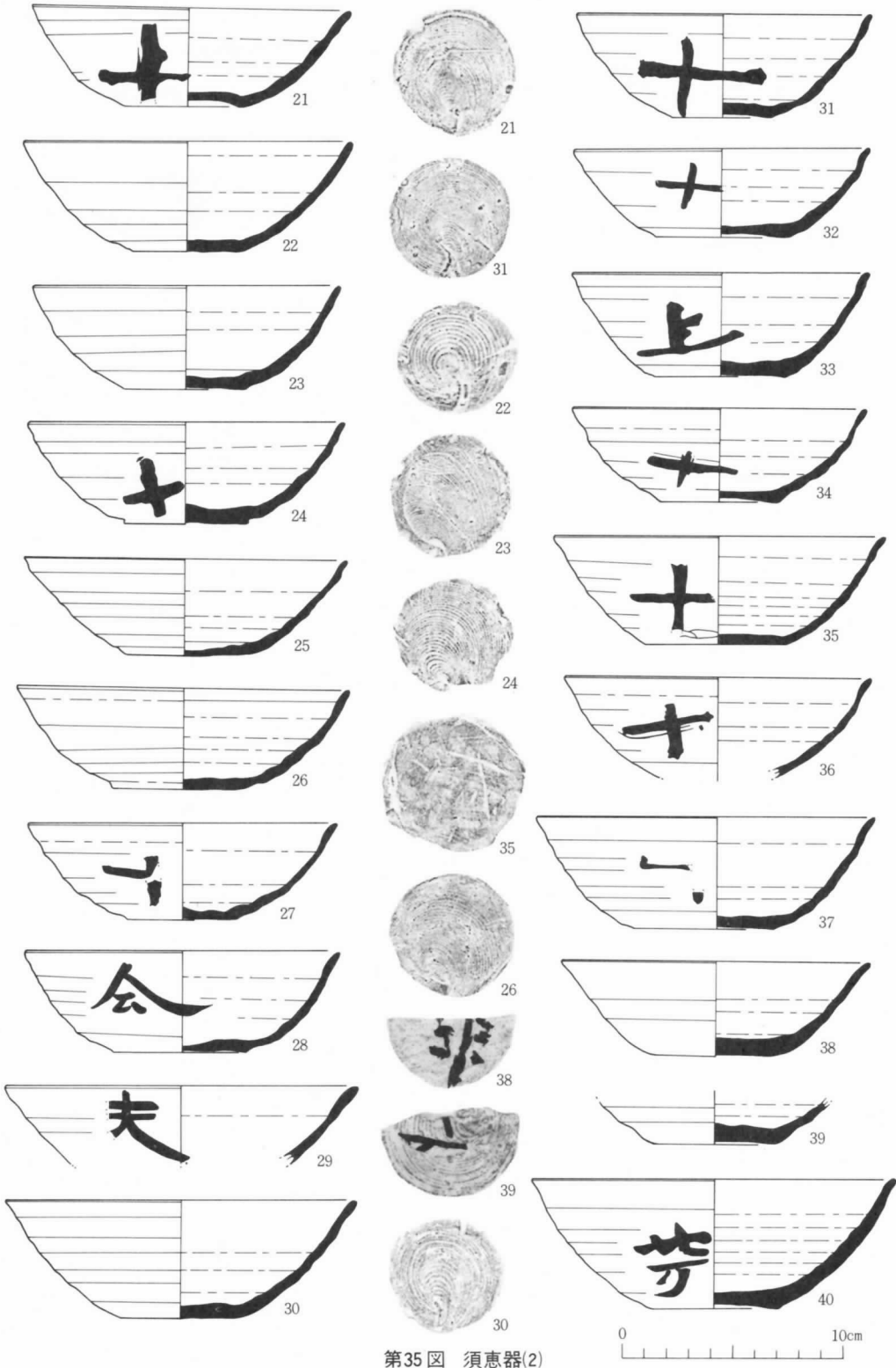
口径は図化する47点で12.9~16.5cmを計り、全体では12.2~16.5cmと推計される。篋切り底の坏では13.0~15.7cmでばらつきが小さく、糸切り底の坏は分散が大きいが、13.0~15.4cmに90.7%が集中する。

底径は4.1~8.3cmを計り、全体では5.0~6.4cmに78.3%を占める。篋切りの坏は4.1cmと6.0~7.4cmに大小2分され、糸切りの坏では殆ど間断なく分散する。



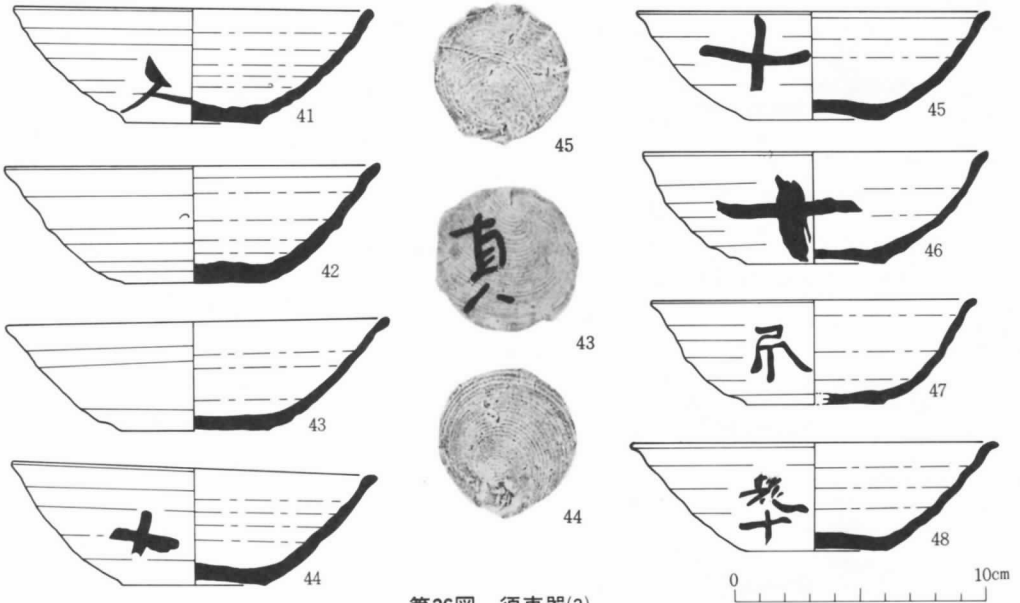
第34図 須恵器(1)





第35図 須恵器(2)

— 下谷地 B 遺跡 —



第36図 須恵器(3)

第16表 同観察表(1)

実測図 No	登録 No	器種	残存率		口 径	底 径	器 高	径高 指数	外傾 指数	器面調整		切り離し 調整	色調		墨書文字		備考			
			口縁 分の1 10	底部 分の1 1						内面	外面		内面	外面	文字	位置				
1		坏			cm (13.9)	cm 6.4	cm 4.4	(31.7)	43.2	ロクロナテ	ロクロナテ	へら切り	灰	白	灰	白	□底	232		
2	19	#	7	1	(15.0)	7.0	4.5	(30.0)	45.6	#	#	#	灰	白	灰	白				
3	20	#	4	1	(14.8)	7.0	4.4	(29.7)	44.3	#	#	#	#	#	#	#				
4		#	8		(12.9)					#	#		灰	白	灰	白	□体	221		
5	2	#	2	1	13.6	5.4	5.0	36.8	42.0	#	#	糸切り	灰		灰				体部内面に煤付着 容量(274.1)cc	
6	21	#	2	1	13.7	5.9	4.9	35.8	44.9	#	#	#	灰	褐	灰	褐				
7	47	#	8	1	(13.4)	5.4	4.9	(36.6)	48.0	#	#	#	灰	褐		灰				
8	25	#	4	1	(14.2)	5.4	4.3	(30.3)	55.8	#	#	#	灰	白	にぶい	褐				
9	15	#	2	1	14.2	5.3	4.5	31.7	46.7	#	#	#	黄	灰	黄	灰			(305.6)cc	
10		#	10	2	(14.0)	4.1	4.3	(30.7)	52.3	#	#	へら切り	灰	褐	灰	白	智?底	233		
11		#	9	1	(14.3)	5.7	4.6	(32.2)	48.9	#	#	糸切り	灰	白			守体	182		
12	24	#	2	2	14.3	5.8	4.3	30.1	51.2	#	#	#	#	#	#	#				
13		#	2	1	13.9	5.6	4.4	31.7	42.0	#	#	#	灰		灰		守体	178	(338.9)cc	
14	72	#	2	1	13.8	6.0	4.9	35.5	48.0	#	#	#	#	#	#	□底	163		(327.8)cc	
15	41	#	8	1	(14.2)	6.4	5.1	(35.9)	37.3	#	#	#	#	#	#	大	#		口縁部に歪みがある	
16		#	8	1	(13.8)	5.0	4.6	(33.3)	45.7	#	#	#	#	#	#	赤	#	179		
17	29	#	6	2	(14.1)	5.8	4.0	(28.4)	48.8	#	#	#	#	#	#	#				
18	23	#	2	1	14.6	5.4	4.4	30.1	46.6	#	#	#	淡	黄	灰	白			(355.6)cc	
19	1	#	2	1	14.8	5.8	4.6	31.1	46.7	#	#	#	灰	白					(414.8)cc	
20		#	6		(14.9)					#	#	#	灰	白	にぶい	褐	大	体	222	
21	17	#	2	1	14.4	5.5	4.5	31.2	47.8	ロクロナテ	ロクロナテ	糸切り	灰	白	褐	灰	十	#	80	(390.7)cc
22	4	#	2	1	14.9	5.0	5.0	33.6	49.0	#	#	#	灰	白	灰	白			(377.8)cc	

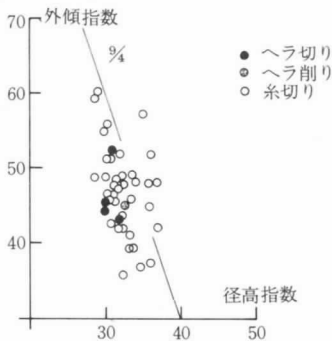
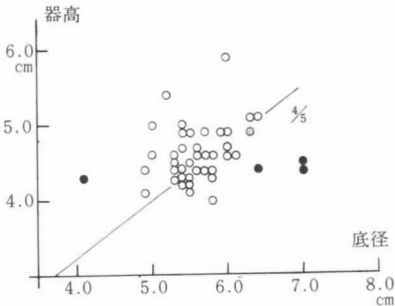
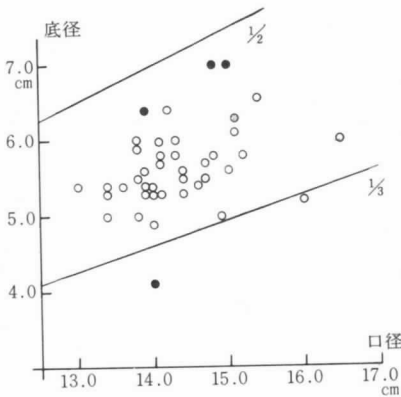
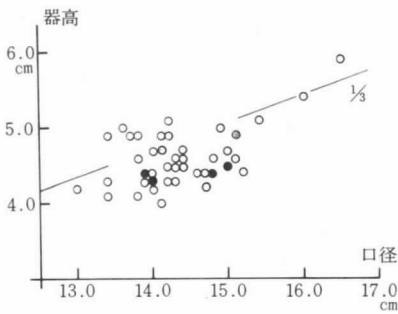
23	3	坏	2	1	14.0	5.4	4.7	33.6	39.4	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	灰黄褐	灰黄褐				(374.1)cc
24		#	4	1	(14.4)	5.6	4.6	(31.9)	43.5	#	#	#	褐灰	灰白褐	+	体	79	
25	6	#	2	1	14.7	5.7	4.4	29.9	48.9	#	#	#	灰	灰				
26	22	#	2	2	15.1	6.1	4.6	30.5	45.7	#	#	#	灰白	灰白				
27		#	6	2	(14.0)	4.9	4.4	(31.4)	47.7	#	#	#	#	#	+	体	83	
28		#	2	2	14.3	6.0	4.6	32.2	35.9	#	#	#	灰褐	灰白	令	#	149	(381.5)cc
29		#	~10		(16.0)					#	#	#	褐灰	灰褐	夫	#	153	
30	13	#	3	1	(16.0)	5.0	5.4	(33.8)	48.1	#	#	糸切り	にふい黄橙	灰白				
31	12	#	1	1	14.2	5.5	4.9	34.5	36.7	#	#	#	#	灰黄褐	+	体	77	388.8cc
32	80	#	2	2	13.4	4.9	4.1	30.6	42.7	#	#	#	褐灰	黄灰	灰褐	#	#	81
33		#	6	2	(14.1)	6.0	4.7	(33.3)	39.4	#	#	#	褐暗赤	灰褐	褐	□	#	185
34		#	3	2	13.4	5.4	4.3	32.1	41.9	#	#	#	灰褐	褐黒	灰褐	#	#	76
35		#	2	2	15.1	6.3	4.9	32.5	44.9	#	#	ヘラケズリ	#	にふい黄橙	#	#	84	(422.2)cc
36		#	5		(13.9)					#	#	糸切り	灰白	褐灰	#	#	86	
37		#	2	2	15.4	6.3	5.1	33.1	41.2	#	#	#	灰灰	褐白	灰	十?	#	82
38		#	5	2	(14.0)	5.4	4.3	(30.7)	51.2	#	#	#	灰	灰白	白?	#	164	
39		#		2		5.6				#	#	#	灰白	#	□	底	231	
40		#	10	3	(16.5)	6.0	5.9	(35.8)	51.7	#	#	#	褐灰	灰白	#	#	177	
41		#	10	2	(14.4)	5.3	4.6	(31.9)	52.2	#	#	#	灰褐	灰	廿万	体	180	
42	30	#	8	2	(15.0)	5.6	4.7	(31.3)	48.5	#	#	#	灰	#				
43	16	#	3	1	(15.2)	5.8	4.4	(28.8)	60.2	#	#	#	#	灰白	真	底	160	
44	81	#	2	1	14.1	5.7	4.9	34.8	57.1	#	#	#	褐灰	褐灰	十	体	78	(355.6)cc
45	38	#	2	1	14.1	5.3	4.4	31.2	45.5	#	#	#	灰黄	灰白	白	#	87	
46	33	#	2	1	13.8	5.5	4.1	29.7	54.9	#	#	#	褐	灰白	白	#	75	(322.2)cc
47		#	4	3	(13.0)	(5.4)	4.2	(32.3)	42.9	#	#	#	灰にふい	白	灰にふい	白	尾	140
48		#	~10	2	(14.7)	5.5	4.2	(28.6)	59.5	#	#	#	褐	灰	灰	白	□	81

( ) は推定値

第17表 須恵器坏の法量集計表

口 径	点 数	比 率	底 径	点 数	比 率	器 高	点 数	比 率
12.2~12.3cm	2	1.9%	4.1~4.9cm	4(1)	3.3%	3.3~3.9cm	2(2)	3.2%
12.5~12.9	2	1.9	5.0~5.4	24	20.0	4.0~4.4	24(3)	38.1
13.0~13.4	11(1)	10.4	5.5~5.9	37	30.8	4.5~4.9	30	47.6
13.6~13.9	18(2)	17.0	6.0~6.4	33(2)	27.5	5.0~5.4	5	7.9
14.0~14.4	36(1)	34.0	6.5~6.9	5(3)	4.2	5.9	1	1.6
14.6~14.9	13(1)	12.3	7.0~7.4	12(8)	10.0	6.0	1	1.6
15.0~15.4	17(2)	16.0	7.5~7.8	3(2)	2.5	計	63	100.0
15.7	4(2)	3.8	8.1~8.3	2(1)	1.7			
16.0~16.5	3	2.8	計	120	100.0			
計	106	100.1						

( ) は断切り



第37図 須恵器環の法量比

器高は3.5~6.0cmであり、4.0~4.9cmに63点中の85.7%が含まれる。篋切りの坏は3.3~4.4cmに限られ、殆ど一定しており、糸切りの坏では4.0cm以上である。

図化する47点による径高指数はばらつきが小さく、28.4~36.8になるが、外傾指数ではやゝ大きく、特に篋切りの坏においては大小に2分される。

鉢 (第39図 第5・18表)

同一個体とみられる口縁部より体部上半までの2点である。全体の器形は不明であるが、僅かに外反して立ちあがり、口縁部にやゝ肥厚する。内外面共に横方向の細かい篋磨きが施されて平滑となる。他の1点は口縁部が外反して上方に逸き出され、内面にカキメ、外面は篋削りされる。共に非黒色処理の鉢に類似する器形と推定される。

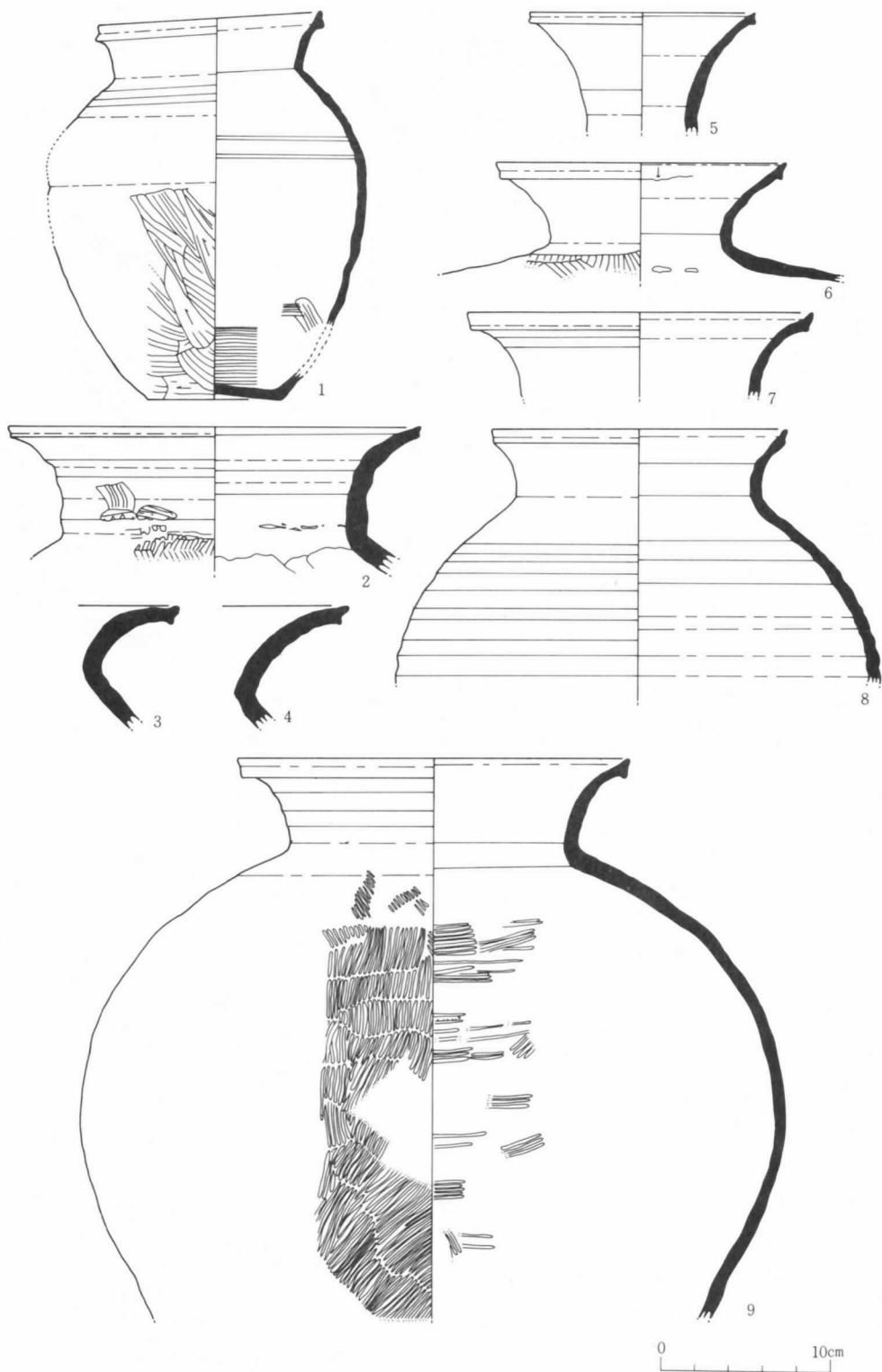
胎土は稠密であり、灰白色を呈して硬質である。前者の外面には黒色炭化物が付着する。体部における器厚はそれぞれ0.9cm、0.4cmを計る。

壺・甕 (第38・39図 第5・18表 図版27・28)

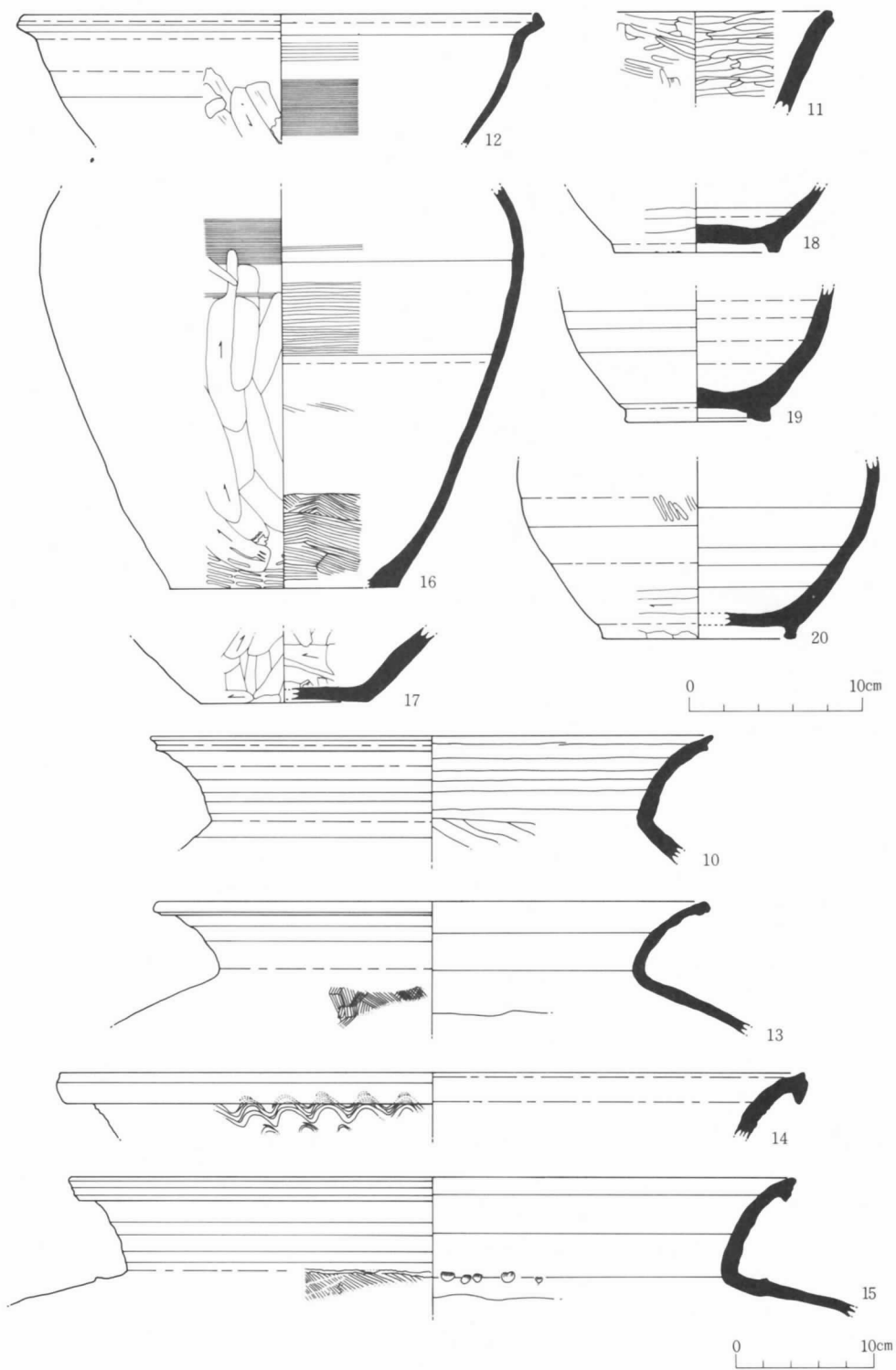
口縁部より底部まで残存するもの1点である。他は口縁部42点、体部888点、底部17点の破片である。底部片は体部と識別できるものが著しく少なく、接合しない口縁部によっては42点の個体数となる。

器形は破片が多く、不明なものが多いが、口頸部によって長頸壺と短頸壺、または甕に分けられ、口径によっては大小が混在する。

長頸壺は口頸部2点、底部4点が推定される。口頸部は緩やかに外反して立ちあがり、口縁部に薄手となる。口縁端部は上下に逸き出されてその中央に凹む。体部では小型の短頸壺や甕と識別できるものは少なく、ロクロナデのほか、縦、または斜方向に篋削りされるもの、斜方向に叩き目を有するものが含まれる。底部は低い付高台をなし、高台端部の幅広となるものと丸味をなして狭まるものがある。前者は平滑をなし、高台内側にやゝ低



第38図 須恵器(4)



第39図 須恵器(5)

第18表 須恵器観察表 (2)

実測図 No	登録 No	器種	残存率		口径 cm	底径 cm	器高 cm	器面調整		色調				備考
			口縁 分の1 2	底部 分の1 1				内面	外面	内面	外面	胎工		
1	1	甕			13.2	8.0	22.3	ロクロナデ カキメ	ロクロナデ ヘラナズリ	赤 灰	灰 明赤 灰	灰 赤 灰	灰 襷	
2	22	甕?	8		(24.4)			ロクロナデ タタキメ	ロクロナデ タタキメ	灰 白	灰 白 黄	灰 白 黄	灰 白 黄	焼成不良
3	38	"	~10					"	"	灰	灰 黄 襷	灰 黄 襷	灰 白 黄	斑点状灰被り
4	25	"	"					"	ロクロナデ	"	灰	"	"	
5	7	長頸壺	3		(13.3)			"	"	黄 黒	灰 襷	灰 黄 襷	"	
6	5	甕?	5		(17.2)			"	ロクロナデ タタキメ	灰	灰 オリブ 黒	灰 白 黒	灰 赤	斑点状灰被り
7	4	"	2		20.4			ロクロナデ	ロクロナデ	"	灰 白 灰	灰 白 灰	灰 赤	
8	3	"	3		(17.4)			"	"	灰 襷	灰 黄	灰 白 黄	灰 白 黄	焼成不良
9	2	"	2		23.2			ロクロナデ タタキメ	ロクロナデ タタキメ	灰	襷	灰 赤	灰 赤	
10	13	"	9		40.8			ロクロナデ	ロクロナデ	"	襷 灰	灰 襷	灰 白 黄	
11	1	鉢	~10					ロクロナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	襷	灰 襷	灰 赤	灰 白	同一個体とみられる破片1点がある
12	55	"	~10					ロクロナデ カキメ	ロクロナデ ヘラナズリ	灰	灰 白	灰	"	"
13	8	甕?	8		(39.8)			ロクロナデ タタキメ	ロクロナデ タタキメ	黄	灰 黄	灰 黄	灰 黄	
14	34	"			(53.8)			"	ロクロナデ クシメ	灰	灰 白	灰 赤	灰 赤	
15	1	"	3		(52.2)			"	ロクロナデ ナ	襷 暗	灰 赤	暗 赤	暗 赤	斑点状灰被りのほか灰白色付着物あり
16	7	"	3		(11.2)			ロクロナデ カキメ	ロクロナデ ヘラナズリ タタキメ	灰 暗	灰 暗	灰 暗	灰 白 黄	肩部斑点状に灰白色となる
17	1	"	3		(9.6)			ヘラナデ	ヘラナズリ	暗	襷	灰	灰	底部外面に砂粒付着する
18	5	壺	2		9.6			ロクロナデ カキメ	ロクロナデ ヘラナズリ	灰	"	灰 黄	灰 黄	高台内菊花状を呈する
19	2	"	2		8.5			ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	襷	灰	高台内に細一糸織が走る
20	3	"	4		(11.2)			"	ロクロナデ タタキメ	"	オリブ 灰	暗 灰	暗 黄	

く削りとられる。高台内外面は共にロクロナデされ、高台内に菊花状を呈するもの1点がある。また、底部の内面には粗雑なロクロ痕を残すものがある。

短頸壺、または甕は口径によって13.3cm、17.2~25.7cm、40.8~53.8cmに3分される。口頸部はいずれも強弱を有して外傾、または外反する。頸部より緩やかに外反するもの、大きく外反するもの、頸部に直立し、これより外傾するもの等が含まれる。共に口縁端部が上下に逸き出され、断面三角形状を呈するものが多い。大型壺においては更に折り返し状を呈するもの、不整に丸味をなすものが含まれる。口頸部内外面は共にロクロナデされるが、外面に叩き目や3~5条の波状沈線を刻するものがある。波状の沈線は3点に認められ、上方より下方へ、左方より右方へ一部重複して描かれる。

体部は肩部の張るもの、丸味をなすもの、なだらかに下降するものがあり、前者は口径の大きい短頸壺に認められる。小・中型壺、または甕の器面はロクロナデのもの、ロクロナデに斜方向の篋削りをうけるもの、更に体部に叩き目を有するものが含まれる。大型のものではいずれも平行する叩き目が縦横に重複する。内面にロクロナデ、ヘラナデ、カキ目のほか、外面と同様の平行するあて工具痕や青海波文、蓮ぐう文等が大型の甕に認められる。

底部は小・中型の壺、または甕にあっては平底とみられる。外面には押圧痕のほか、砂粒の付着するものが含まれ、内面は体部と同様である。底径の得られるものは8.0~12.0cmを計る。大型甕では大部分丸底とみられ、体部と同様であるため明瞭に識別できるものは含まれていない。

5 陶磁器 (第40図 第5・19・20表 図版31)

染付2点、陶器47点である。器形の全体が明らかなのは少ないが、器種別では碗、皿、土瓶、向付、鉢、摺鉢、壺、甕等が含まれる。摺鉢がもっとも多く、次いで壺、甕の貯蔵用、碗、皿等の供膳用の順である。

碗・皿 (第40図 第19・20表 図版31)

碗7点、皿2点である。碗4点は体部より僅かに内彎気味に立ちあがる染め分けの碗である。内外面に細かい貫入が多く、浅黄色、または淡緑色を呈し、体部下半より暗赤褐色をなす。施釉は畳付を除いて全面に及んでいる。そのほか、灰白色に施釉される1点があり、畳付及び高台内が露胎をなすもの、底部内面に目跡を残す染付片があり、後者は淡青色の条線が内外に巡る。共に貫入が著しく、光沢が強い。

皿2点のうち、削り出し高台の1点は淡い緑色がかった白色釉が畳付及び高台内を除いて薄く施釉され、内面に暗い発色の花文がみられる。他の1点は碁筈底をなし、畳付を除いて柔らかい貫入の目立つ白色釉が被っている。底径は3.6cmである。

鉢 (第40図 第19・20表 図版31)

口縁部4点のうち、体部より若干薄手となって立ちあがる1点と口縁部が外反して肥厚、または玉縁状をなすもの3点がある。前者は染め分け碗と同様の施釉でやゝ緑色が強い、後者は共にロクロ成形痕を残し、(4)では磁器化が進んでいる。体部1点は褐色釉で内面の光沢が強い断片である。

壺 (第40図 第19・20表 図版31)

口縁部2点、体部1点、底部1点である。口縁部は共に細片であり、口縁部の外反する小壺とみられ、1点は暗緑色釉の大部分がとんでいる。体部は光沢のある黒褐色を呈し、頸部に隆線状の条線があって長頸壺と推定される。底部(10)はやゝ厚手の成形で外面に板目状の圧痕が残る。体部下半には黒色釉の釉流れがある。

甕 (第40図 第19・20表 図版31)

口縁部2点、体部4点、底部4点があり、内面が露胎をなして有蓋と思われるものが含まれ

第19表 器種別陶磁器一覧表

器種	口縁部	体部	底部	計	比率
碗	3	2	2	7	14.9%
皿			2	2	4.3
鉢	4	1		5	10.6
摺鉢	7	3	1	11	23.4
壺	2	1	1	4	8.5
甕	2	4	4	10	21.3
土瓶・急須			2	2	4.3
不明		6		6	12.8
計	18	17	12	47	100.1

個体数で算出



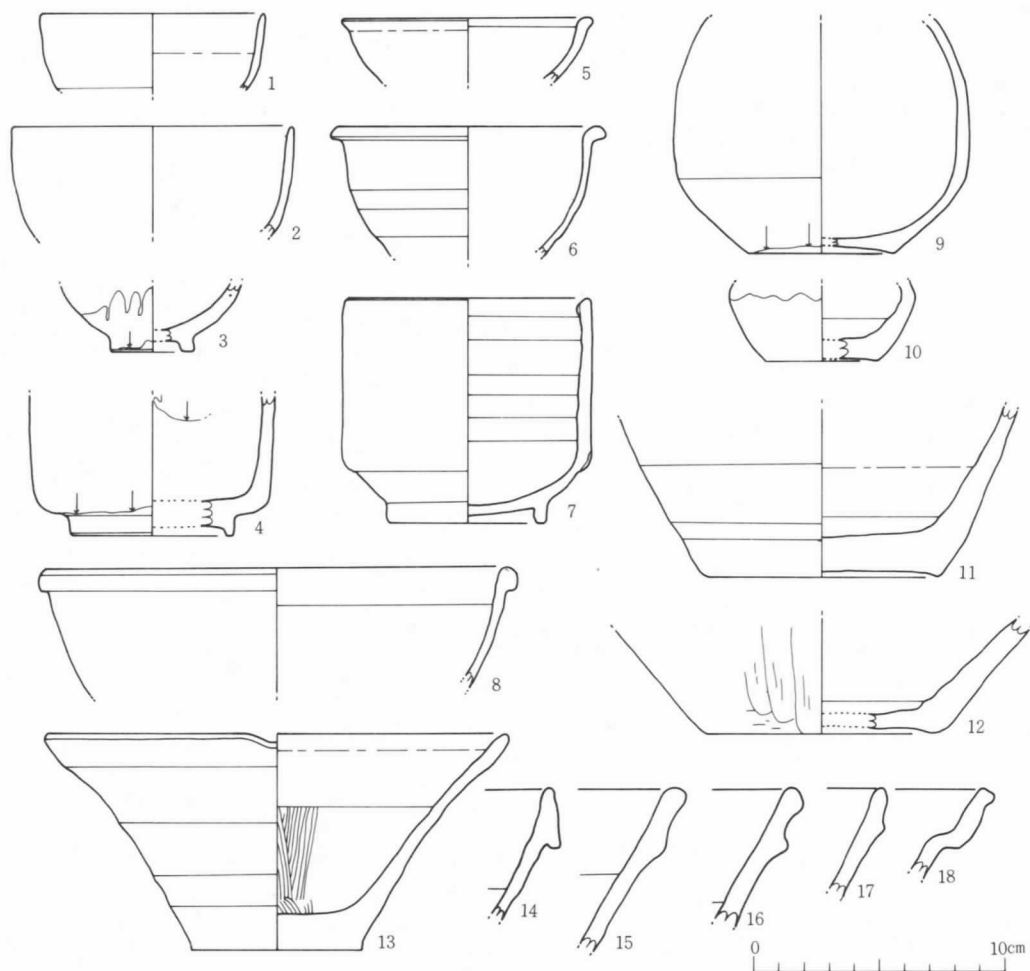
る。(7)は筒形をなし、口縁部に肥厚する。体部下端より無釉となり、内外面共に黄褐色を呈する。内面はロクロ痕を残すが、底部及び高台は丁寧に削り出される。他の1点は口縁部が外反して肥厚する小片である。

体部には大型の甕とみられる厚手のものとこれよりやや小型とみられる3点があり、後者はいずれも光沢の強い褐色を呈する。

底部は糸切り底2点、削り出し高台の1点である。ほかに外面が篋削りされる平底の(12)があり、やや焼き締りが弱く、無釉である。

土瓶・急須 (第40図 第19・20表 図版31)

(9)は球形をなし、土瓶とするものである。外面は体部下半に稜を有し、内面では滑らかに内彎して全面に細かいロクロ痕を残す。施釉は体部下端まで及び、底部脇で削りとられる。底



第40図 陶磁器

部は外面全面を削り、切り離しは不明である。ほかに急須の小片があり、底部に微細な網目の圧痕がみられる。

摺鉢 (第40図 第19・20表 図版31)

全体の器形が推定される (13) のほかは、口縁部 6 点、体部 3 点、底部 1 点である。(13) が小型で注口を有し、他は口径の大きい摺鉢である。口縁部は折縁状に外反して更に上方に逸き出される (18) のほか、口縁端部に肥厚して丸くなるもの、縁帯状をなして薄くなるものがある。注口の確認されるものは (13) 1 点である。底部では糸切り痕を残すものと篋削りされるものが含まれる。

条痕は体部全面に間断なく施され、6 条、または 8 条を単位としている。底部では (13) が 6 条単位で放射状に巡り、右回りによる 15 の施条が認められる。内外面は暗褐色、または暗赤褐色を呈し、(13) の口縁部にのみ緑色がかかった黄褐色釉が不整に施される。

その他 (第19表)

器種不明の細片は 6 点である。内面の露胎となるものには緑色釉 2 点、光沢の強い褐色釉 1 点があり、水注や壺等が推定される。また、内外面施釉のものには白色釉 2 点、褐色釉 1 点がある。

第20表 陶磁器観察表

実測図 No.	登録 No.	器種	残存率		口 径	底 高台 径	器 高	色 調			備 考
			口 縁	底 部				内 面	外 面	素 地	
1	17	碗	分の1 ~10	分の1	cm	cm	cm	浅黄色	極暗赤褐	灰 白	染め分け碗
2	18	"	"		(11.2)			にふい黄橙	にふい黄橙	にふい黄橙	
3	13	"		4		(3.3)		褐 灰	灰 褐 白	"	削り出し高台
4	21-2	甕		"		(6.6)		暗 赤 褐	暗 黒 赤 褐	褐 灰	
5	14	鉢	~10		(10.0)			オリーブ灰	オリーブ灰	灰 白	
6	23	"	"		(10.6)			黄 褐	黄 褐 オリーブ灰	黄 灰	口縁部直下の外面青灰色
7	15	甕	"	2	(9.7)	6.5	9.0	褐	明オリーブ灰 にふい黄褐	にふい黄褐	削り出し高台
8	4	鉢	"		(18.4)			暗 赤 褐	暗 赤 褐	褐	
9	20	土瓶		2		5.8		明 赤 褐	にふい黄橙 褐	明 赤 褐	糸切り底
10	10-2	壺		3		(4.4)		暗 赤 褐	暗 赤 褐	赤 灰	底部板目状圧痕
11	38	甕		1		9.2		"	"	褐 灰	糸切り底
12	33	摺鉢		3		(9.3)		褐 灰	極暗赤褐	灰 黄 褐	外面篋削り
13	47	"	2	1	18.5	7.0	8.8	黄 褐 極暗赤褐	黄 褐 極暗赤褐	明 赤 褐	糸切り底
14	1	"	~10					極暗赤褐	極暗赤褐	灰 褐	
15	26	"	"					暗 褐	暗 褐	褐 灰	
16	2	"	"					暗 赤 褐	暗 赤 褐	"	
17	24	"	"					"	"	"	
18	3	"	"					"	"	灰 白	

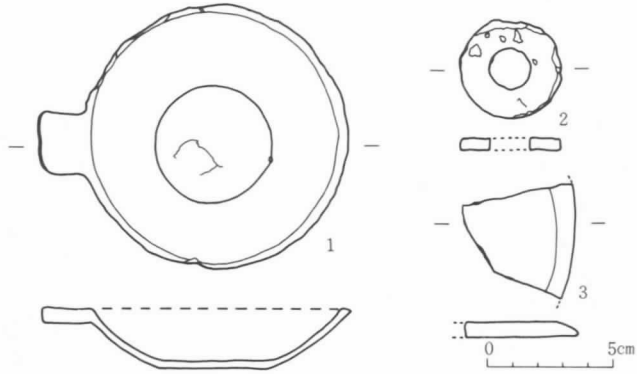
( ) は推定値

## 6 石製品 (第41図3 図版36)

円盤状の鑛とみられる破片 1 点である。両面共に平滑をなし、外縁に沿って丸味をなす。厚さ 0.6cm を計り、外径は 21.0cm 前後と推定される。灰色を呈する金剛石製である。

## 7 鉄製品 (第41図1、2 図版36)

把手のある皿と座金状の製品各 1 点である。鑄造の皿は口径 10.6cm、底径 5.4cm を計り、器高は 2.4cm である。口縁部は幅 0.2~0.4cm の平縁をなし、体部に比してやゝ立ちあがり強い。底部は内外面共に平滑であり、特に外面は滑らかである。把手は平縁に続いて付され、長さ 2.0cm、幅 2.4cm のやゝ



第41図 鉄・石製品

不整な方形をなす。皿に比して厚手であり、断面は下方に彎曲して半円状を呈する。灯明皿などの用途が推察される。

座金とみられる (2) は、外径 5.1cm の円形をなし、外縁の腐蝕が進行している。内径は 1.6cm、厚さ 0.5cm である。精巧な穿孔と平滑な表・裏面を有し、近代の製品とみなされる。

## 8 植物遺体 (第42~50図 第21~25表 図版32~36)

すべての植物遺体は 81 点余りである。そのうち木質物がもっとも多く、加工痕のあるものは 46 点である。しかし、腐蝕が進み、また、断片となって用途や機能の明らかでないものが多い。そのほか、植物種子や果実、若干の植物、菌類等が含まれる。

### (1) 木製品 (第42~50図 第21~25表 図版32~36)

加工痕を有するもの 46 点のうち、用途の判明するものは、食膳用の容器、曲物、装飾品、履物、編具、農具等である。

### 椀 (第42図 第21表 図版32)

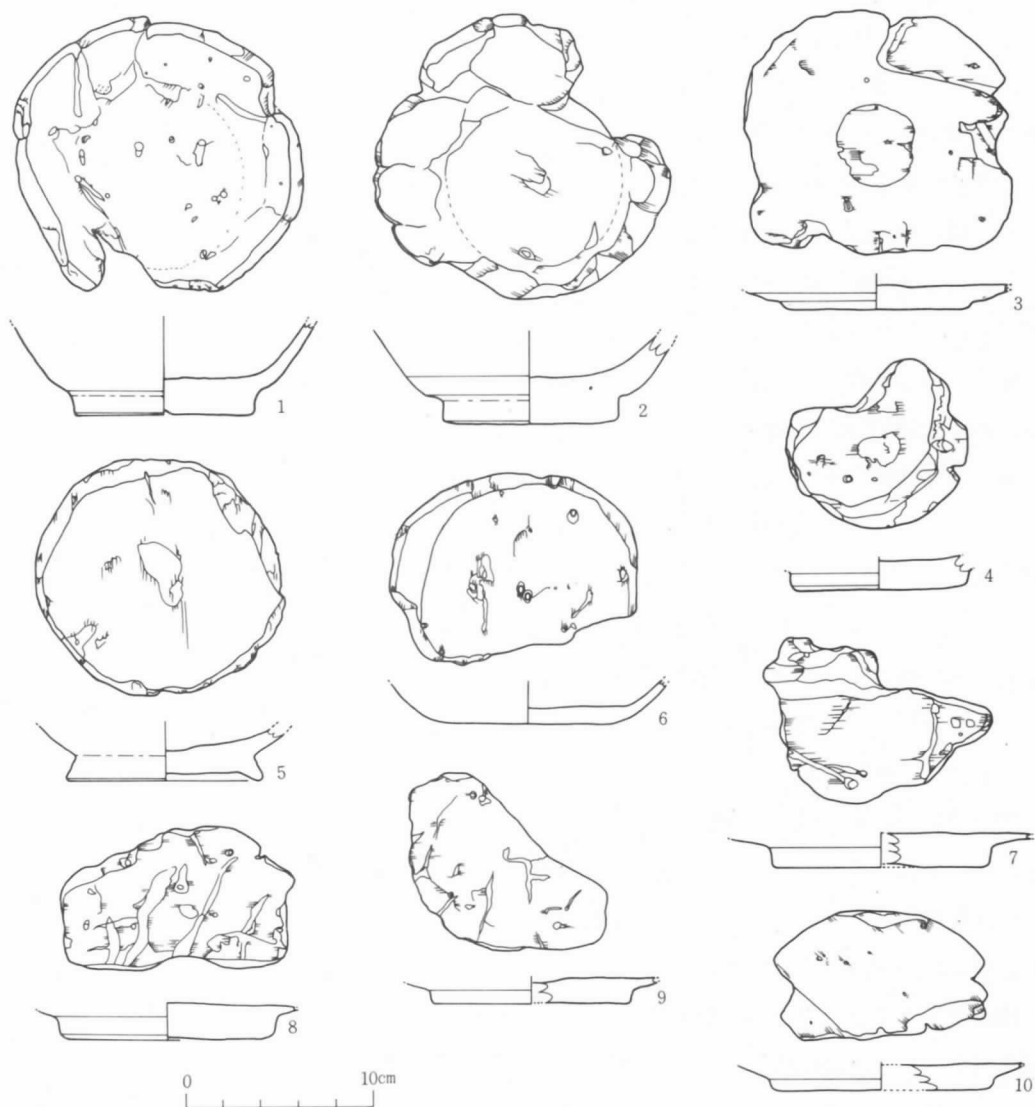
小破片を含めて木地椀 7 点、漆椀 2 点である。前者は口縁部及び体部の小片 2 点があり、同一個体をなす可能性がある。確認される個体数は 4 点であり、漆椀を含めて 6 点である。しかし、いずれも全体の器形が明らかなものはない。

図示する 4 点は、共に体部より高台部の遺存するものであり、(4) は高台径によって椀に含めるものである。口縁部は (2) の小片によって小さく外反し、端反り口縁を有するものとみられる。体部は内彎気味に立ち上がり、下方が若干肥厚している。高台は (1)、(2)、(4) が平滑で高台脇まで直上、またはやゝ緩やかに削り出されるのに対し、(5) は高台内を浅く蛇

の目状に削り出し、高台脇に鋭角をなす。高台径は前者が9.3~9.5cm、後者は10.4cmである。高台高は1.0~1.4cmを計り、底部における器厚は1.6~2.9cmの厚手である。共に口径19.0cm前後と推測される大型の椀である。

いずれも横木取りによるロクロ挽き成形であるが、腐蝕にあつてツメ痕跡等は明確でない。また、内面では中央部に僅かに凹みを有するもの、焼けて黒色となるものが認められる。材はすべてセンである。

漆椀 2点のうち、(13) の口縁部は薄手の木地に両面黒漆を塗布し、特に内面の光沢が強い。体部より直線状に立ちあがっており、口径が小さく器高の大きい椀と推定される。推定口径は



第42図 木製品(1)

10.2cmである。他の1点(14)は内彎する体部の小片である。外面に黒漆、内面に朱漆が疎に遺存するのみである。

皿(第42図 第21表 図版32)

椀と同様に横木取りのロクロ挽きによる成形である。6点共に口縁部を欠損して全体は明らかでない。大別して器高が低く、削り出し高台を付す(7)~(10)と薄手で内彎して立ち上がる(6)に2分される。

前者は厚手の高台を有し、内面は殆ど平滑をなすものとみられる。高台はほぼ水平をなし高台脇まで直線状、またはやや緩やかに削り出される。高台径は9.8~11.4cm、高台高は0.5~1.2cmを計り、(3)がやや小さい。底部における器厚は1.3~1.9cmであり、中央部に若干の厚薄がある。

後者の(6)は底径が小さく、体部は薄手となって立ちあがる。前者に比して口径の大きい皿と推測される。底径は8.2cm、底部の器厚は1.0cmである。

第21表 木製品計測表(1)

実測図 No.	登録 No.	器種	長さ	幅	厚さ	底 高台 径	高台高	重さ	樹種	備考
1	17	椀	13.7cm	15.1cm	2.1	9.5cm	1.2cm	97g	セ ン	A.E.法保存処理
2	21	"	15.1	15.9	2.9	9.3	1.4	100	"	"
3	15	皿	12.9	13.9	1.3	9.8	0.5	52	"	"
4	13	椀 ?	8.8	9.7	1.6	9.4	1.0	27	"	"
5	16	椀	12.6	13.1	2.3	10.4	1.3	72	"	"
6	18	皿	9.7	13.1	1.0	8.2		31	"	"
7	20	"	7.4	12.2	1.9	11.4	1.2	39	"	"
8	12	"	8.8	9.9	1.4	10.5	0.7	19	"	"
9	19	"	8.3	11.2	1.9	11.4	1.1	26	"	"
10	14	"	5.8	11.2	1.4	10.4	0.6	41	"	"
⑪	22	椀	3.2	3.8	0.8			9	"	体部断片、内面焦跡あり
⑫	48	"	2.7	5.5	1.1			2	"	口縁部小片
⑬	47	"	2.4	3.4	0.2			2	不 明	口縁部小片、内外面黒漆
⑭	46	"	2.4	4.2	0.7			1	セ ン	体部片、外面黒、内面朱漆

ほかに椀の体部細片がある。計測値は現存による

桶(第43・44図 第22・23表 図版33~34)

桶蓋・底板とみられる一枚板は小型の曲物容器に付随するものが推定され、これを含めて8点である。また、桶の側板とみられるものは1点である。

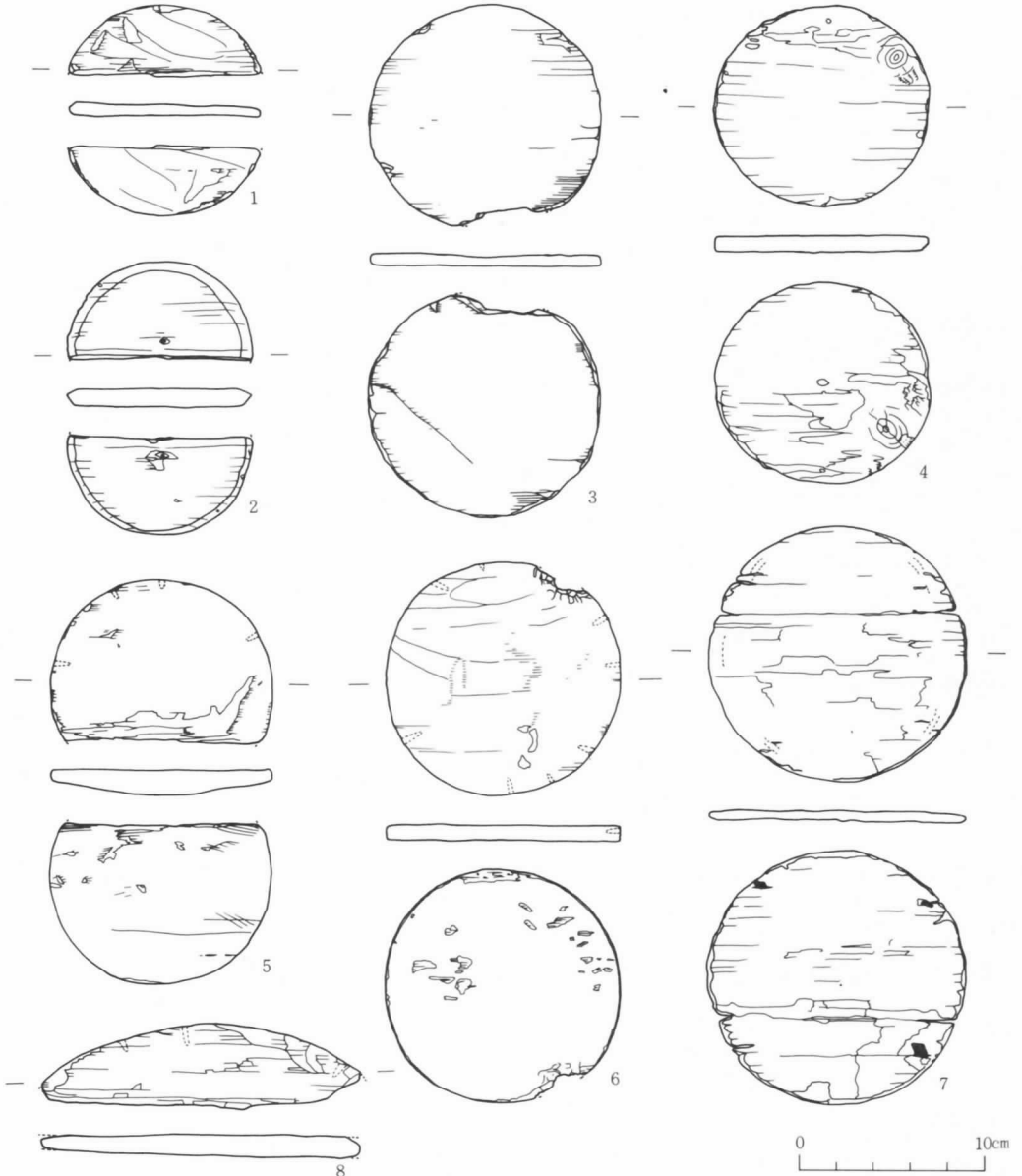
蓋、または底板は(8)がもっとも大きく、径27.8cm前後と推定されるほか、(3)~(7)が11.6~14.0cm、(2)が10.1cmで若干小さい。厚さは(7)が0.6cmで薄手となるが、他は0.7~1.2cm、(5)が最大1.4cmを計る。

内外面共に腐蝕しているものが多いが、殆ど偏平をなし、(6)には平滑に削りとした鉋状の工具痕が征目に沿って認められる。(5)のみは中央部に厚手となり、ロクロ挽きによって整形されているとみられる。また、(6)、(8)の2点は両面共焦げて黒色となり、(6)は一部を

焼失している。

蓋とみられる (7) は内面に側板の痕跡が桜皮に沿って微かに巡り、他に比して薄手である。縫はほゞ9.0cmの等間隔で4箇所があり、外縁部の径は12.5~12.8cm、側板の厚さは0.7~0.9cmと推定される。

側面は厚手のものがいずれも面取りされ、鑿状工具痕が残る。(2) では両面より削り出し、内面に浅く幅広となる。水もの用と推測されるものである。また、(5)、(6)、(8)の3点に



第43図 木製品(2)

は径0.2~0.3cm、長さ0.9~1.2cmの不整な木、または竹釘孔が穿たれる。共に不規則で内外面のいずれかに偏して位置する。材質はクリ、スギに限られている。

桶の側板とみられるものには板状の破片(4)がある。木口より4.0cmをおいて僅かに薄手となり、外面に箍かけによるとみられる細かい亀裂が認められる。現存長21.8cm、幅4.6cm、厚さ1.1~1.5cmを計る。内面に若干彎曲しており、これによっては30.0cm前後の外径が推定される。

第22表 木製品計測表 (2)

実測 No.	登録 No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考	実測 No.	登録 No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考
1	92	桶底	10.3 <sup>cm</sup>	3.7 <sup>cm</sup>	0.6 <sup>cm</sup>	8 <sup>g</sup>	スギ	一部欠損	5	29	曲物底	12.0 <sup>cm</sup>	8.6 <sup>cm</sup>	1.4 <sup>cm</sup>	34 <sup>g</sup>	スギ	釘孔4、一部欠損
2	25	#	10.1	5.3	1.0	19	#	#	6	33	#	12.7	12.7	0.9	60	#	釘孔8、一部欠損
3	32	#	12.5	11.7	0.7	25	#	#	7	26	蓋	14.0	13.8	0.6	35	クリ	桜皮の縫あり
4	28	#	11.6	10.8	0.9	36	#		8	30	曲物底	16.6	4.6	1.2	28	不明	釘孔3、一部欠

すべてA.E.法保存処理

曲物 (第44・45図 第23表 図版33)

曲物の側板とみられるものは2点である。(3)は現存長21.6cm、幅5.6cmであり、両端を折損している。柱目のへぎ板を2枚重ねて綴じ合せ、外面上端が僅かに薄くなって湾曲する。内面には3条のけびきが征目に直交して走り、やゝ内彎している。縫は3箇所があり、最大幅1.4cmの桜皮である。大型の曲物が推定される。

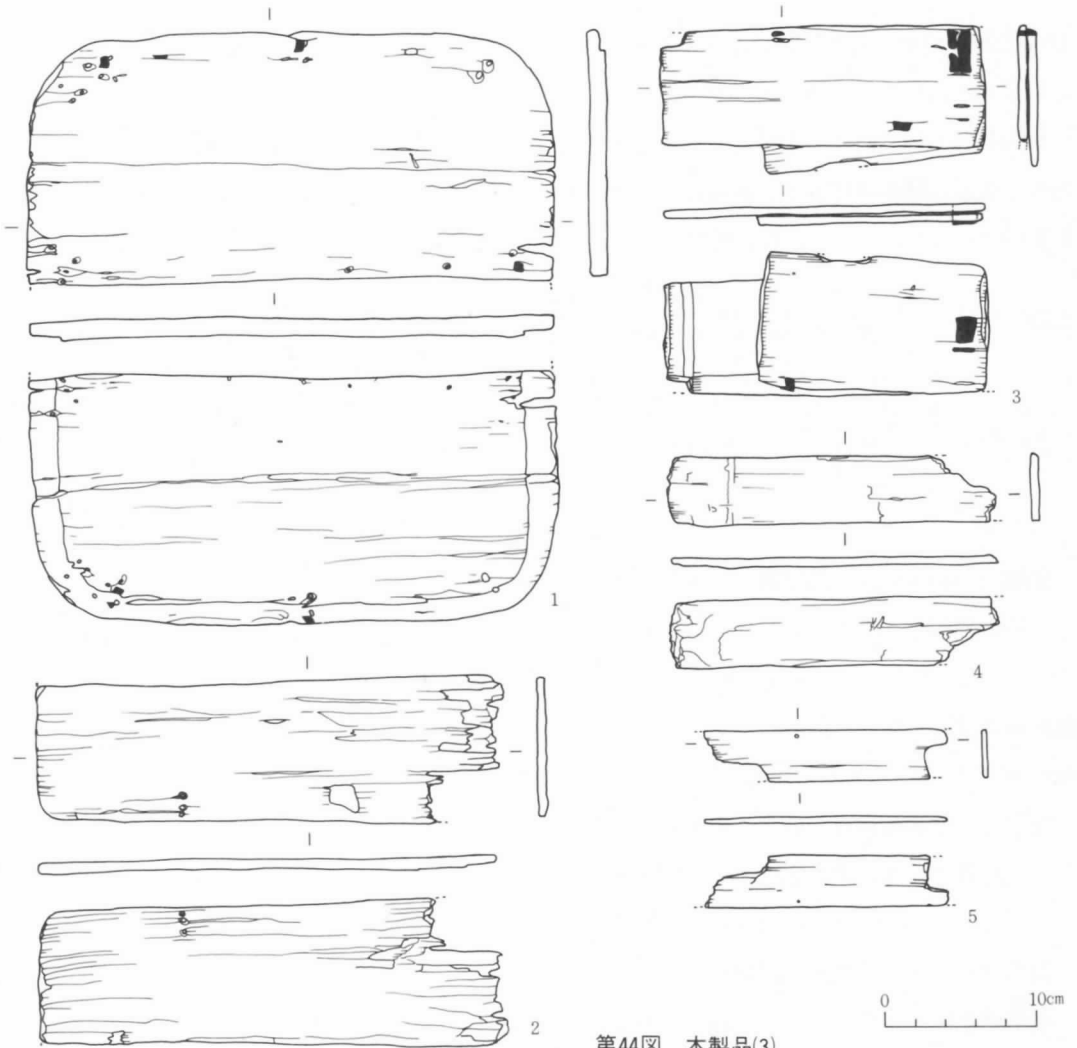
その他、曲物の縫用とみられる桜皮がある。先端で細く薄くなり、他は直線状に断ち切られる。現存長19.3cm、最大幅1.8cm、厚さ0.6cmである。

(5)は穿孔のある厚さ0.4cmのへぎ板断片である。材は(3)共にヒノキである。

折敷 (第44図 第23表 図版33・34)

折敷状木製品は2点であり、共に欠損して全体は明らかでない。(1)は現存長35.2cm、厚さ1.4cmを計り、両面を平滑に削り、隅丸に整形する一枚板である。外縁と接合面に沿って合せて8箇所の縫があり、7箇所に桜皮を残す。更に上面より18の穿孔があり、外縁では殆ど対をなして配置される。外縁中央部に桜皮と重複する穿孔があり、また、近接している点で数度の補修が行なわれているとみられる。接合面に近い1孔には竹材が遺存し、穿孔は竹釘用と考えられる。裏面では外縁より1.5~2.1cm幅をおいて内側にやゝ斜方向の鑿状工具による切り込みがあり、これより外縁まで厚さ1.0cmに削り取っている。桜皮や穿孔は共にこの切り込み端により間をおき、これによる台径は31.0cm前後と推計される。

(2)は厚さ0.7cmの角形に近い征目材であり、3孔が穿たれる。表面は(1)と同様、不定方向の細線状の擦痕が認められる。裏面は外縁より1.5cmをおいて征目に直交する微かな凹みがあり、接合痕とみられる。穿孔幅に一致する点で角隅部分と推測される。



第44図 木製品(3)

第23表 同計測表 (3)

実測図 No.	登録 No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考	実測図 No.	登録 No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考
1	8	折敷	34.2 <sup>cm</sup>	16.5 <sup>cm</sup>	1.4 <sup>cm</sup>	136 <sup>g</sup>	スギ	補修あり	4	40	桶	21.8 <sup>cm</sup>	4.5 <sup>cm</sup>	0.7 <sup>cm</sup>	28 <sup>g</sup>	スギ	銅板
2	6	"	31.0	9.6	0.8	73	"		5	11	曲物	16.0	3.5	0.4	8	"	へぎ板
3	9	曲物	21.6	5.6	1.1	71	"	へぎ板	6	50	縄皮	19.3	1.8	0.6	2.3	サクラ	水浸保存

No 1 ~ 5 は A.E. 法保存処理

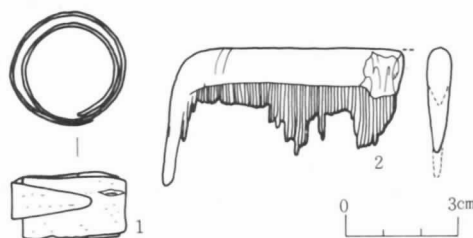
柄杓 (第48図 第25表 図版34)

柄を欠損している削貫きの柄杓である。現存長13.8cm、幅7.7cm、高さ7.0cmを計り、外縁と内面底部の一部を欠いている。セン材を瓜実状に削り出し、底部をやゝ平滑に整形している。削形は隅丸にとり、長さ9.5cm、幅5.7cm、深さ4.8cmで側壁は全体に滑らかに削り、外縁ほど薄手となる。内面底部の中央が木芯に一致し、柄はこれよりやゝ上方に位置して径1.5cm前後の円形とみなされる。容量は現存で166.7ccを計る。



櫛 (第45図 図版34)

装身具としては櫛 1 点である。現存長6.0cm、幅2.8cm、台幅0.7cmを計り、隅丸に切って末広をなす。櫛歯は棟境に浅い切り込み線を入れ、両面より切り込んで成形される。合せて69枚まで認められ、歯厚、歯間は 1 枚あたり0.8cmとなる。櫛歯の細かい点では挽櫛とみられる。暗褐色を呈する黄楊材である。



第45図 木製品(4)

下駄 (第46図 第24表 図版35)

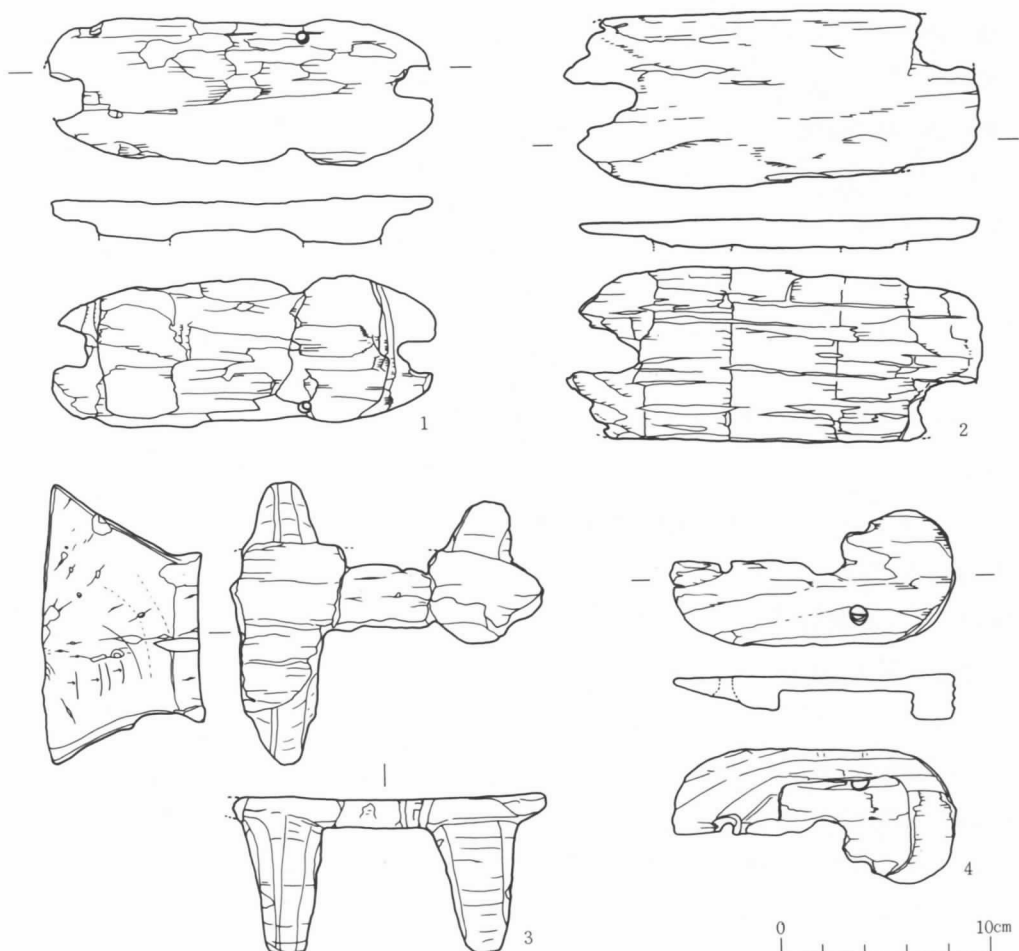
腐蝕し、欠損のある 4 点であり、共に全体の形状は明確でない。連歯下駄 3 点と女兒用のぼっくり 1 点である。

(1) は台長18.1cm、台幅6.9cmの前後共に丸く整形される駒下駄である。前壺は明瞭でないが、後壺は径0.6cmの円形に穿たれ、横緒 2 孔間は4.8cmを計る。前後歯は木口より2.3cmをおいて成形され、歯間が厚く、両小口まで薄くなる。歯幅は前歯で3.5cm、後歯4.0cm前後で不揃いであり、切断痕が粗雑に残る。

(2) は台長19.5cm、台幅8.3cmを計る。(1) に比してやゝ角隅状を呈する。前壺は木口より3.3cmに痕跡を留めるが、後壺は明らかでない。歯は共に木口より3.5cmをおいて3.5cm前後幅に造り出し、歯間は5.0cmを計る。歯両端に切り込み痕を残すが、殆ど扁平となって歯高は得られない。全体に(1)に類似する整形であり、一つ目下駄であろうか。

(3) は银杏歯の連歯下駄である。現存の台長14.8cm、台幅8.0cmを計り、全高は7.5cmで高下駄といえる。台座は左右両端に高く、これより中央部に低く平滑となる。後木口は丸く整形され、台裏より削り落して薄くなる。前壺と左後壺は共に焼火箸状の工具によって穿孔され、前、後壺間は8.5cm前後である。银杏歯は後小口より1.5cm前後をおいて造り出され、歯間は台裏で5.0cm、下端で8.1cmとなる。下方ほど広がって歯厚が小さい。前歯における歯幅は台裏で7.6cm、下端で13.5cmを計り、台座より30°前後で拡大する。両面共に鑿状工具痕を残して整形され、左右を丸く削りだしている。材は(1)~(3)ともクリである。

(4) はぼっくりと称される台裏を削貫く一木造の下駄である。台長13.5cm、台幅6.2cm以上全高2.1cmである。前壺は小口より2.3cmに台裏より穿たれ、後壺は径0.9cmの円形をなし、やゝ斜方向に付される。壺間は5.6cmである。台裏は前小口より13°前後で斜に削り、削貫き部分で殆ど扁平となる。削形は後小口まで2.0cm前後をおいて、長さ6.0cm、幅4.8cmの隅丸となり、歯高は1.2cmを計る。材はスギである。



第46図 木製品(5)

第24表 同 計 測 表 (4)

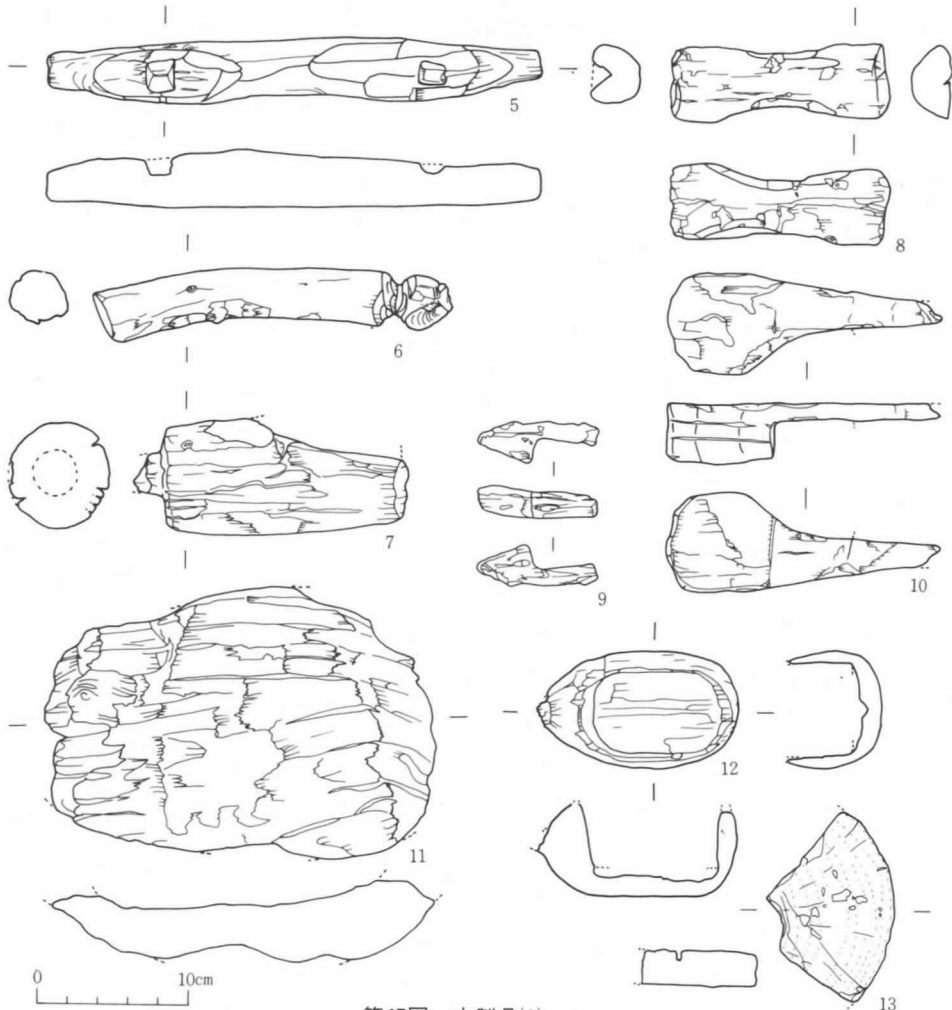
実測図 No	登録 No	種別	台長	台幅	全高	歯幅	歯間	歯高	重さ	木樹種	備考
1	36	連歯下駄	18.1cm	6.9cm	2.3cm	3.5 4.0	5.0cm	0.7cm	80g	クリ	A. E. 法保存処理
2	35	"	19.5~	8.3	1.4	3.5	5.0	0.5	60	"	"
3	34	高下駄	14.8~	8.0~	7.5	4.2	5.0	6.0	112	"	"
4	37	ぼっくり	13.5	6.2	2.1		6.0	1.2	28	スギ	女児用 "

槌 (第48図 第25表 図版34)

頭部と柄の一部を残す横槌である。頭部は長さ15.2cm、最大径7.7cmの円筒状をなし、柄ははその中央に径3.0cmの円形に造り出される。柄部の切り込み面には鑿状の刃痕が残り、敲面は先端まで摩耗して滑らかである。

槌の子 (第48図 第25表 図版34)

先端と中央部の一部を欠損しているが、編具の錘とみられる。樹皮を剥ぎ、両端を切って半割し、中央部にくびれをなす。両端には粗い切断痕を有し、くびれ部分には縦長の加工痕が残



第47図 木製品(6)

第25表 同 計 測 表 (5)

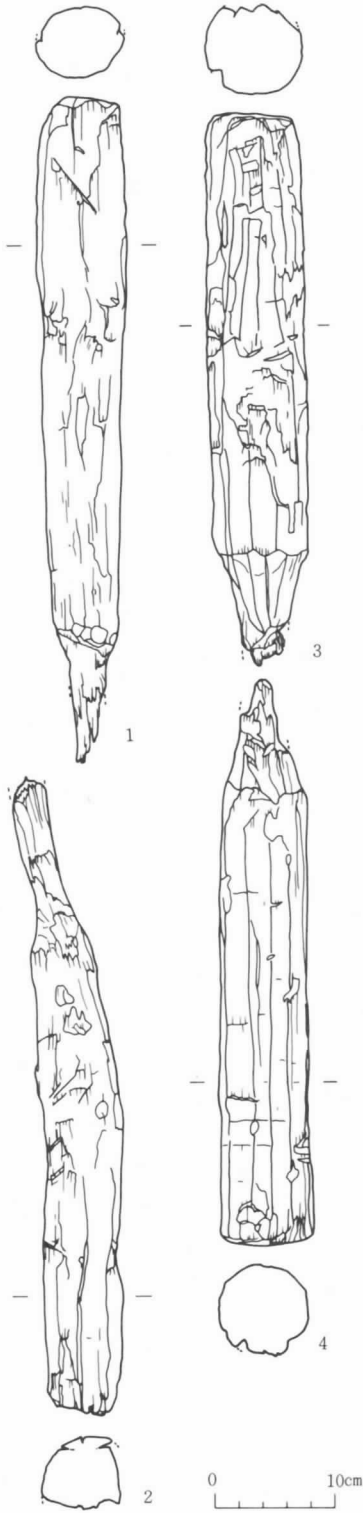
実測図 No.	登録 No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考	実測図 No.	登録 No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考
1	1-1	杵	55.6 <sup>cm</sup>	7.6 <sup>cm</sup>	5.9 <sup>cm</sup>	690 <sup>g</sup>	ナラ		8	39	籠のみ	14.6 <sup>cm</sup>	5.0 <sup>cm</sup>	2.6 <sup>cm</sup>	45 <sup>g</sup>	ナラ	
2	1-2	"	52.8	6.8	6.2 <sup>cm</sup>	548	"	No.1と同一個体	9	38	不明	7.7	2.6	1.9	8	"	鉤形、焼失欠損
3	2-1	"	46.3	8.2	7.6	810	"		10	44	"	18.2	6.6	4.0	71	不明	
4	2-2	"	47.5	7.4	7.4	895	"	No.3と同一個体	11	24	"	25.7	17.6	4.8	428	クリ	
5	51	不明	32.8	4.2	3.9	70	スギ?	割貫きあり、自然乾燥	12	23	柄杓	13.5	7.7		90	セン	
6	41	"	23.7	3.8	3.7	88	マツ	陽物形	13	27	不明	12.3	8.5	2.5	64	"	切板
7	43	榑	18.0	7.7	6.5	158	セン	P.E.G.法保存処理	14	5	"	38.8	13.0	3.4	350	クリ	

No.5、7を除いてA.E.法保存処理

る。全長14.6cm、頭部幅5.0cm、くびれ部分は3.3cm幅である。材はナラである。

杵 (第47図 第48表 図版35)

丸太材を使用した豎杵2点である。共にほぼ完形で出土するものであるが、中央部で折損する。(1)、(2)は出土段階で全長90.0cmを計り、(1)の腐蝕が進んでいる。(2)の搦部は8



第48図 木製品(6)

角形に面取りされ、径3.7~4.1cm、中央部の握りまで18.5cm前後である。搦面の使用による磨耗は腐蝕して明らかでない。

(3)、(4)は出土時の全長100.0cmを計る。共に斜方向の細かい刃痕が認められほか、腐蝕が進んで明瞭でない。材は2点共ナラである。

**墨書木製品 (第49図 図版36)**

木筒を転用する木札状の木製品1点である。現存長13.4cm、最大幅4.3cm、厚さ0.2~0.3cmを計り、右より下方を残して欠損している。表面は板目に鉋状の不整な削り痕を残し、下端に節穴がある。裏面は同様に平滑であり、側縁より0.6~0.7cmをおいて穿孔し、径0.3~0.5cmの不整な8孔が貫通している。左及び右上方は欠損面によって穿孔の痕跡とみなされるが、左右の間隔は2.2~3.4cmとなって上方に幅広となり、必ずしも対応する配置は認められない。右側面は滑らかに削り取って直線状をなし、下方は隅丸に落して共に面取りされる。材はアカマツである。

墨書は表面上端に廳とみられる1字があるほか、右側にこれより小さく月日が記される。月日は裏面からの穿孔によって不明となり、「日」の一部は削りとられているが「三月二日」と判読される。更に月日の右には墨痕があり、文字の認められない左を含めて4行まで推定される。

積文<sup>(1)</sup>。



三月二日

×廳

・(文字なし)

**その他の木製品 (第47・50図 第25表 図版34)**

7点の用途不明の木製品、または破片がある。(5)は両端を切断した丸いセン材に面取りし、径1.7cm前後の方形に鑿状工具によって削貫いている。深さは1.0cmと0.5cmを計り、やや粗雑な加工である。(6)は陽物形をなす。全長11.9cm、径3.2cmのマツ材を鋸状工具で切断して樹皮を剥ぎ、更に鉋状工具

でくびれをとって頭部を造り出している。胴部に縦長に加工痕が残るが、全体に粗雑である。

(11) は鋤状をなすが、両端を欠損して全体は明らかでない。やゝ両端に湾曲するが、腐蝕が進んで加工痕は不明である。(14) は鋸状工具によって角隅に切られて篋状を呈する。一端は薄くなって柄部とみなされる。共に平滑をなし、一面には手斧状の刃痕が認められる。

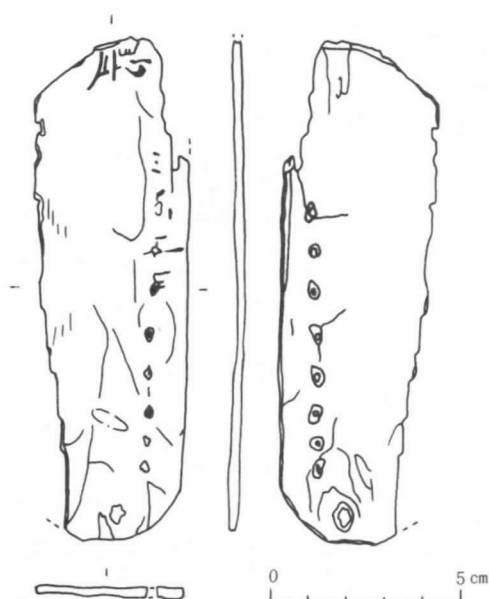
(10) は一端を欠く木製品であり、半円状に面取りされる。更に6.4cmをおいて切り込み面があり、対称的な形状も推定される。中央部の厚さは0.8cmである。(9) は鉤状に加工された断片である。全体に焦げて加工痕は明らかでない。(13) はセン材の断片であり、皿等の用材が推定される。

#### 種子・果実<sup>(2)</sup> (図版36)

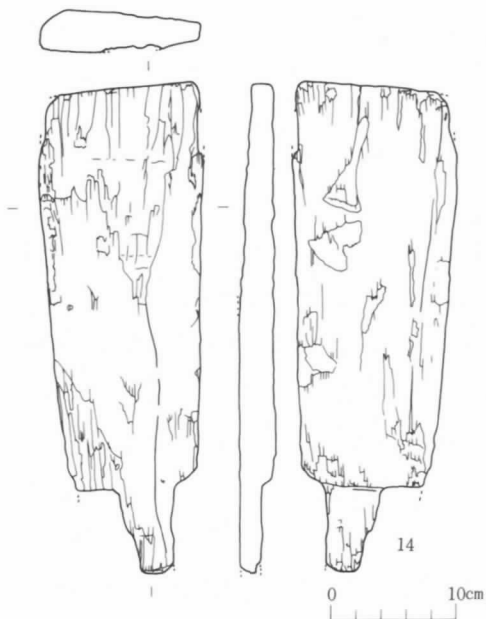
半割された胡桃23点、栃6点、栗1点、瓢箪の小破片2点のほか、マンサクとみられる種子、摺鉢のタールに付着する粗殻片1点、稗とみられる種子1点等がある。胡桃は長さ2.6~3.1cm、幅2.5~3.1cmを計るオニグルミである。栃は長さ2.8~3.5cm、幅2.6~3.3cmを計り、若干の大小差がある。栗1点は1.9×1.6cmの小さい山栗である。

#### その他

種子に混在する植物数点があり、水生植物とみられる。そのほか、12.8×9.6cmの茸1点がある。サルノコシカケに類似する不整な半円状を呈する。



第49図 木製品(8)



第50図 木製品(9)

注(1) 東北歴史資料館企画科長平川南氏の御教示による (1981)

(2) 分析・鑑定の項参照

## VI まとめ

下谷地 B 遺跡の遺構はこれに隣接する下谷地 A 遺跡と同様に確認されたものはない。しかし、遺物は著しく多量に出土し、すべてを合せて 22,833 点に及ぶ。大別して縄文時代の土器、石器、平安時代の土師器、須恵器、木製品、近、現代の陶磁器のほか、石製品、鉄製品等であり、木製品、鉄製品の一部は若干時期の不明なものが含まれる。なかでも土師器及び須恵器の出土量が多く、全体の 99.3% を占めている。ここではもっとも多量の出土をみた平安時代の什器類を中心としてその若干を記述することとする。

第26表 遺物集計表

種類	点数	比率	器種	坏	高台付坏	鉢	壺・甕	その他	計	比率
縄文土器	11	0.05%	内色面処黒理	4,733	148	20			4,901	21.61%
石器	11	0.05	内色面処黒理	451	13		1	1	466	2.06
土師器	20,930	91.67	非処黒色理	12,303	558	153	2,545	4	15,563	68.63
須恵器	1,746	7.65	須恵器	762		2	982		1,746	7.70
陶磁器	47	0.21	計	18,249	719	175	3,528	5	22,676	100.00
石製品	2	0.01	比率	80.48%	3.17	0.77	15.56	0.02		100.00
鉄製品	2	0.01	すべての破片数による							
木製品	48	0.21								
植物種子など	36	0.16								
計	22,833	100.02								

### 1 出土状況と遺物

遺物の分布域は下谷地 A 遺跡に続いてやゝ低位となる南接部分に集中し、これより更に南寄りでは殆ど皆無に近い。東西ではやゝ粗密を呈するが、ほゞ調査区域を横断するかたちで分布し、やゝ西方に密となる。このことは下谷地 A 遺跡の遺物出土量が西方に偏在する傾向と同様であり、接合個体が認められるなど、連続する同一遺跡であることを示すものである。

調査段階においては水路が東流し、これより以前は旧河道が蛇行して東西にのびていたことが伝えられ、大小の暗渠施設も確認されている。しかし、明確な流路はトレンチによって確認されていない。砂礫層は全体に南へ低位となり、これを被う堆積層はグライ化する黒褐色土層であり、同様の堆積層をなす。遺物の出土状況によっては既に破壊された掘削部分とも解されるが、全体として湿地に近い状況と推定されるものである。

遺物の出土層は砂礫層上の 1～4 層に及ぶ。上層は攪乱されている可能性が強く、また、下谷地 A 遺跡の削平等により、二次的に移動していることが推定され、これより下層においても暗渠施設等の事業に伴う攪乱があつて層的な把握は必ずしも十分ではない。僅かに波状をなす粉状パミスが堆積し、この上、下層に木製品を含む植物遺体や土器が含まれる。この粉状パミス堆積の前後には著しい流出の状況は認められず、遺物は粉状パミス堆積に近接する段階に

位置付けられるものと推測される。

従って最下層出土の遺物である土師器及び須恵器、木製品の一部はもっとも初期の遺物であり、粉状パミスの降灰時期を9世紀～10世紀初頭に求めるならば<sup>註(1)</sup>これを近接する時期と扱えられるものである。粉状パミスを境にした変化は特に須恵器の坏における底部切り離し技法にみられ、篋切りによるものから回転糸切りによる切り離しとなるが、層位的に不明な遺物が多量を占めて必ずしも断定できる根拠は求め得ない。

#### (1) 土器 (第26～31表)

平安時代の土器は大別して土師器とする酸化炎焼成とみられるもの20,930点、須恵器とする環元炎焼成とみられる1,746点である。前者には黒色処理の有無があり、黒色処理の施されない土器には所謂赤焼き土器や須恵系土器<sup>註(2)</sup>とよばれる土器が含まれる。推定される個体数は残存率等によって黒色処理の土器419点、非黒色処理の土器934点、須恵器156点となり、実数は更にこれを上回るものと推定される。

器種によって分類するならば、黒色処理の施される坏、高台付坏、鉢、壺があり、非黒色処理の坏、高台付坏、鉢、壺、甕、須恵器では坏、鉢、壺、甕がある。そのほか、黒色処理の耳皿、非黒色処理の小型土製品等が含まれる。そのうち高台付坏を含む坏類は全体の83.7%を占めて圧倒的に多く、壺、甕類は15.6%である。

#### 器形 (第27表)

坏若干を除いて全体の器形が判明するものは極めて少なく、図化できたものによってみると次表の通りである。

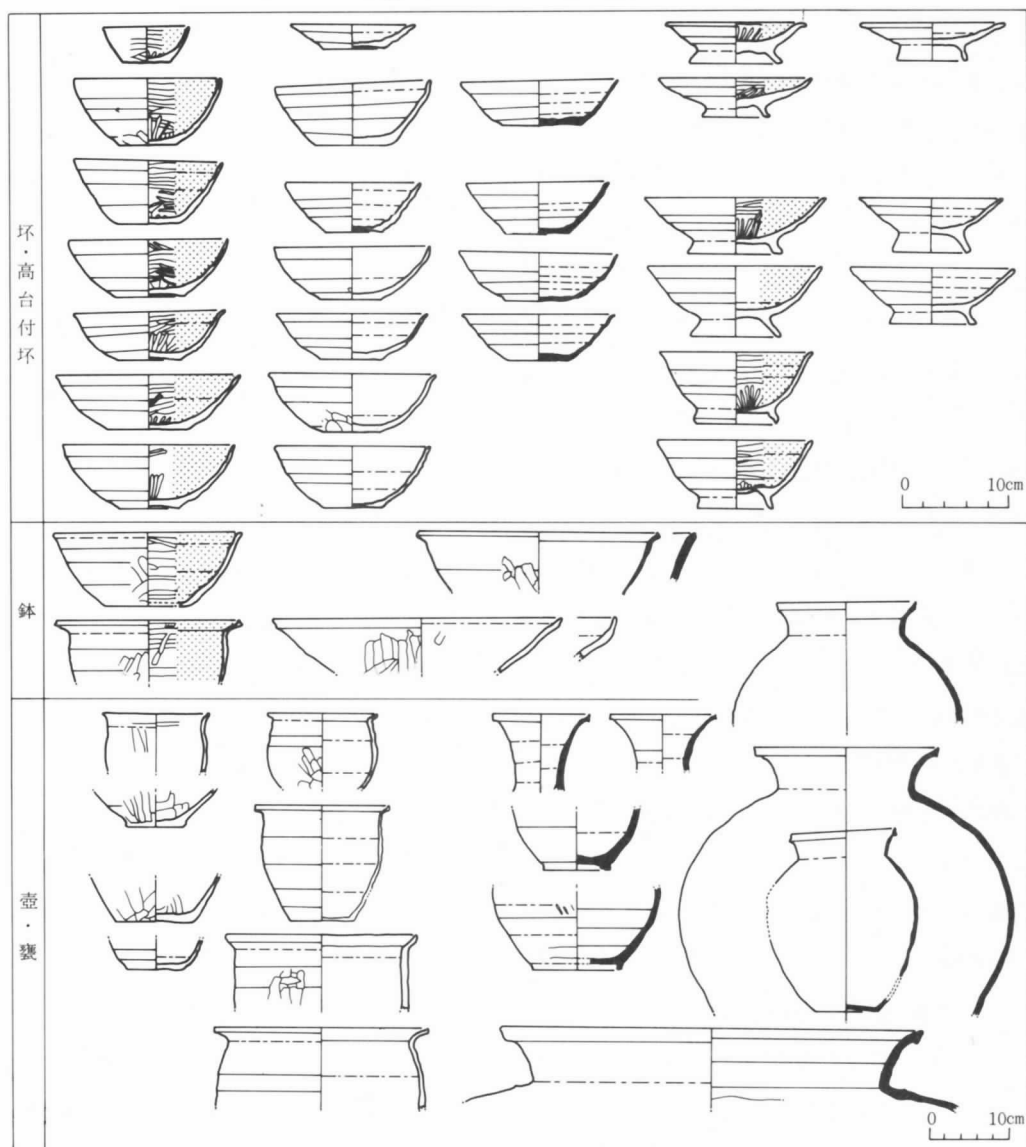
甕の一部にロクロ不使用のものが含まれるほか、すべてロクロを使用するものであり、細部に渡る画一性は求め得ない。

坏は全体に底部からの立ちあがりによって直線状をなすものと内彎、または内彎気味のものがあり、後者では口縁部の外反するものが含まれ、ほゞ3分される。出土比率では内彎して立ちあがり、口縁部の外反するものが若干多い。底部は黒色処理の坏に丸底状の4点が含まれるほかはすべて平底である。また、器高によっては著しく低い皿型をなすものとこれより深いものがあり、大部分が後者にあつて更に大小に分けられる。

高台付坏は坏部の器高に大小があり、坏と同様に皿型とこれより深いものに分けられ、立ちあがりには坏に準ずるが、器高の低いものに口縁部の外反するものがやゝ多い。高台はいずれも貼付され、内彎気味となるもの、外反、または外傾するものが混在し、高台端部や高台内の形状も多様であり、坏部との対応は判然としない。

鉢は浅鉢とこれより口径の小さい深い鉢がある。後者は坏型をなすものと口縁部の外反するものがあり、共に内面黒色処理が施される。出土量は圧倒的に浅鉢が多く、外傾して立ちあが

第27表 器形別土器一覽表



るものと口縁部がやゝ内彎気味になるものが含まれる。大部分非黒色処理の浅鉢であるが、須恵器のそれが混入する。

壺は小壺を除いては須恵器の長頸瓶がある。全体の明らかなものはないが底部に高台を付すものと平底をなすものが含まれる。また、短頸の壺も含まれると思われるが明確でない。

甕は若干のロクロ不使用のものと大部分を占めるロクロ使用のものがあり、前者には口縁部が比較的短く外反する長胴形の甕が含まれる。後者では口縁部が外傾、または外反し、共に口縁部が上方、または下方に逸き出される。体部は肩部の張るもの、緩やかに下降するもの等が



混在する。底部は小さい平底のほか、大型の甕にあっては丸底状を呈するものと推定される。また、口径の大小によってはほゞ3分され、中、大型のものは大部分が須恵器である。

#### 器面調整 (第28表)

器種別の成形には非黒色処理の甕にロクロ不使用のものが若干含まれ、また土製品に手捏ねが含まれるほか、すべてロクロ使用によるものである。焼成及び器種別の調整を主として図化できたものにより、底部の切り離しや調整を含めてみるならば、ほゞ次表の通りである。

坏は大部分を占める再調整の認められないものを含めて21種の組合せとなる。もっとも多様な組合せとなる黒色処理の坏では内外面の篋磨きされるものが両面黒色処理の施されるものであり、他は内面黒色処理である。後者には各種の組合せがあり、外面に篋削り、篋磨きを施し、底部が全面篋削りされるものや無調整のものが少数ながら混入する。体部の篋削りは回転によるものが体部上半に及び、他の大部分はいずれも下半、または下端に限られる。底部の切り離しは須恵器の若干が篋切りによるほか、全面篋削りされるものを含めて回転糸切りによるものと推測される。

高台付坏は16種の組合せとなり、坏部は大部分の坏と同様である。高台はすべて付高台であり、高台内の調整は全面をロクロナデするものと高台に沿ってのみロクロナデされるものに2分される。後者には回転糸切り痕を残すものと菊花状に篋状工具痕を有してロクロナデされるものがあり、更に中央部より糸切り痕、菊花状の押圧痕を共に残してロクロナデされるものが含まれ、内外面黒色処理のそれも同様である。

鉢は須恵器の底部が不明であるが、7種まで認められる。更に非黒色処理の鉢では底部の篋削りも推定されるが、全体の残存するものが少なく明確でない。

壺・甕では全体の器形が不明なものが殆どである。小型の壺を除いて非黒色処理のものでは7種以上が推定され、ロクロ不使用の底部を含めては更に多様な組合せが推定される。体部外面の叩き目は焼成不良の須恵器を除いて頸部に及ぶものが含まれる。また、須恵器においては付高台の5種のほか、平底が含まれ、甕を含めて多様な組合せが想定される。

全体に器形の小さい坏にもっとも多様な組合せがあり、特に黒色処理の土器に種々の調整が施されるといえる。

#### 法量 (第29表)

器種別に口径、底径、器高の得られるものは極めて少ない。推定値を含めて全体の傾向をみると次表の通りである。

坏は著しく器高の低い皿型をなすものとこれより深いものがある。後者は口径によって更に大小に分けられ、全体では13.0~14.9cmにもっとも集中している。同様に底径では5.0~6.4cm、器高は4.0~5.9cmにもっとも多い。図化できたものによっては口径と器高及び底径の比率はそ

第28表 器面調整一覽表

器種	焼成 黒色処理の有無	器面調整		切り離し調整	備考
		内面	外面		
坏	黒色処理	へらミガキ ロクロナデ	ロクロナデ へらケズリ へらケズリ へらミガキ	回転紙切り 糸切り後 へらケズリ 全面 へらケズリ 回転糸切り	内外面黒色処理のものを含み、内黒処理の底部には丸底状の4点がある 体部外面のへらケズリは下半に限られる 体部のへらケズリは回転により、上半に及ぶ 非黒色処理の混入か
	非黒色処理	ロクロナデ ロクロナデ へらナデ へらミガキ	ロクロナデ ロクロナデ へらケズリ	回転糸切り 糸切り後 へらケズリ 全面へらケズリ	体部下半のへらケズリは下半に限られる
	須恵器	ロクロナデ	ロクロナデ	へら切り 回転糸切り 全面へらケズリ	
高台付坏	黒色処理	へらミガキ	ロクロナデ へらミガキ	回転糸切り 糸切り後 菊花状 菊花状 全面 ロクロナデ	内外面黒色処理のものを含む
	非黒色処理	ロクロナデ へらミガキ	ロクロナデ へらミガキ	回転糸切り 糸切り後 菊花状 菊花状 全面 ロクロナデ	
鉢	黒色処理	へらミガキ	ロクロナデ ロクロナデ	回転糸切り 糸切り後 へらケズリ 全面 へらケズリ	内面黒色処理のものに限られる
	非黒色処理	ロクロナデ	ロクロナデ へらケズリ	回転糸切り 糸切り後 へらケズリ	
	須恵器	ロクロナデ カキメ ロクロナデ へらミガキ	ロクロナデ へらケズリ ロクロナデ へらミガキ		底部不明
壺 (瓶)	黒色処理	へらミガキ ロクロナデ	へらミガキ	へらミガキ	内外面黒色処理の小型壺
	非黒色処理	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	小型の壺
	須恵器	ロクロナデ カキメ	ロクロナデ タタキメ ロクロナデ へらケズリ	ロクロナデ 菊花状	
甕	非黒色処理	ナデ (ハケメ) へらナデ ロクロナデ ロクロナデ ハケメ	ナデ ハケメ ナデ へらケズリ へらケズリ へらケズリ へらケズリ	(ナデ) 木葉痕 回転糸切り	底部はほかに網代底、砂底がある 外面調整はほかにロクロナデ、タタキメがある
	須恵器	ロクロナデ (へらナデ) ロクロナデ カキメ ロクロナデ (あて工具痕)	ロクロナデ へらケズリ ロクロナデ へらケズリ タタキメ ロクロナデ (波状沈線文) (タタキメ)	ロクロナデ (ナデ) 砂底	底部はほかに丸底が推定される
耳皿	黒色処理	へらミガキ	へらミガキ	(へらミガキ)	両面黒色処理の小片

れぞれ 3 : 1、2 ~ 3. : 1 前後に分布し、底径と器高では僅かに器高の比率が低い傾向にある。この傾向は焼成別の出土比率がやゝ異なる北上川東岸の落合 II 遺跡<sup>(註 3)</sup>においてもほぼ同様である。

焼成及び黒色処理の有無によってみると全体に須恵器では口径や器高のばらつきがもっとも小さい。逆に黒色処理の坏では口径のばらつきが大きく、比較的器高の大きいものが含まれ、非黒色処理の坏は底径、器高がやゝ小さい。しかし、底径のばらつきは殆ど共通している。

径高指数及び外傾指数は全体に外傾指数のばらつきが大きく、ほぼ 1 : 2 の比率となる。黒色処理の坏では外傾指数が小さく、須恵器で大きい傾向を示す。非黒色処理の坏には径高指数の大きいものが含まれる。

高台付坏は坏部が殆ど坏と同様であるが、口径の大きいものに限られる。高台は全体に低く高台径は 7.0 ~ 8.4cm にもっとも多い。皿型のものは坏部の外傾指数が著しく大きくなり、器高は 5.0cm 未満である。

鉢は口径によって大小 2 分される。23.5 ~ 24.2cm の内面黒色処理の鉢と 30.5 ~ 35.9cm の非黒色処理のそれである。底径は殆ど同様であるが、前者は器高が高く、後者は浅鉢である。

壺は両面黒色処理と非黒色処理の小壺を除いて口径 12.2 ~ 13.3cm を計り、底径は 8.5 ~ 11.2cm とほぼ一定している。共に長頸瓶とみられる。

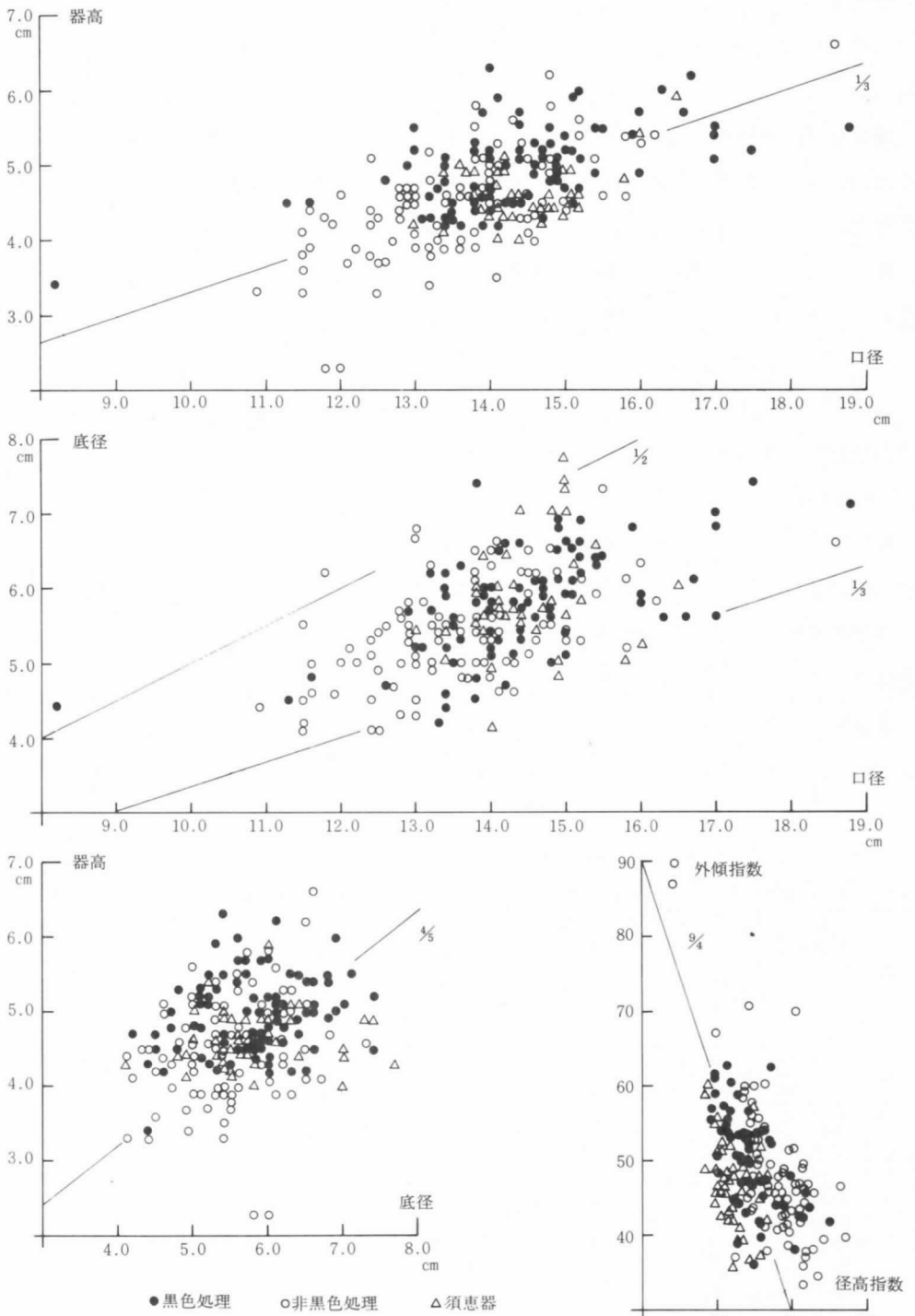
甕はロクロ不使用の土師器では口径 20.0cm 以下となり、ロクロ使用の甕は大小が混在してこれに対応する底径を有するものとみられる。須恵器の甕は口径によって 13.3cm、17.2 ~ 25.7cm、

第29表 器種別計測表

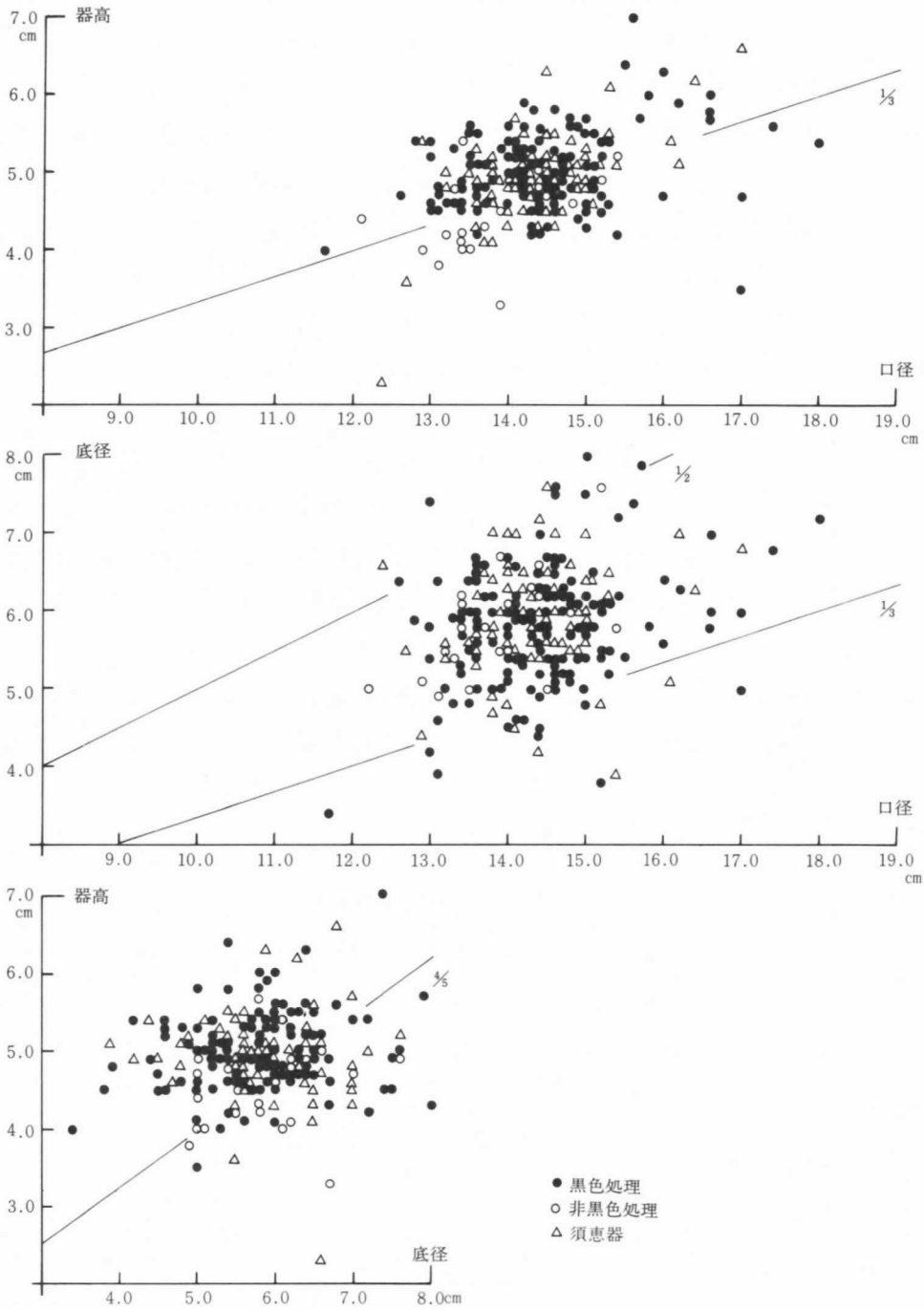
器	種	黒色処理	非黒色処理	須恵器	備考
坏	口径	8.2 ~ 18.8 <sup>cm</sup>	9.0 ~ 19.8 <sup>cm</sup>	12.2 ~ 16.5 <sup>cm</sup>	非黒色処理には高台付坏が含まれる
	底径	4.1 ~ 8.2	3.8 ~ 7.8	4.1 ~ 8.3	
	器高	2.1 ~ 7.4	1.8 ~ 5.8	3.3 ~ 6.0	
高台付坏	口径	13.4 ~ 17.2	13.1 ~ 17.1		
	高台径	5.5 ~ 19.6	6.5 ~ 9.3		
	器高	3.7 ~ 6.8	3.6 ~ 7.1		
鉢	口径	23.5 ~ 24.2	30.5 ~ 35.9		
	底径	9.0 ~ 14.2	7.8 ~ 11.9		
	器高	9.1			
壺	口径			12.2 ~ 13.3	
	底径	3.8	3.4	8.5 ~ 11.2	黒色処理及び非黒色処理の壺は共に小壺である
	器高				
甕	口径		10.4 ~ 24.6	13.3 ~ 53.8	
	座径		5.0 ~ 11.6	11.2	
	器高		14.3	22.3	

推定値を含む

— 下谷地 B 遺跡 —



第51図 坏の法量比分布図



第52図 落合II遺跡出土土坏の量比分布図

(『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』VI所収の「落合II遺跡」より作成)

40.8~53.8cmに3分される。底径は比較的小さく、小型のものでは土師器に共通する。器高は不明なものが多く、大型の甕では70.0cm以上に及ぶものが含まれると推定される。

容量 (第30表)

容量の得られるものは完形品が少なく、僅かに坏106点、高台付坏14点である。完形に近く、また計量誤差の小さい残存率良好な120点による計量結果は次表の通りである。全体に歪みのあるものを含めて自然の状態による計量のため、特に口縁部の歪みによって多少の誤差が見込まれ、完形品以外はすべて推定である。

坏類全体では92.6~805.5ccまで大小が分散し、180ccを1合とすると0.5~4.8合までとなる。器種によって計量個体数を異にするが、181~405ccに81.7%が集中し、0.5~4.8合にもっとも多い。

黒色処理の坏では内外面黒色処理のものを含めて容量差がもっとも大きく、0.5~3.5合に及ぶ。非黒色処理の坏では皿型及び口径の小さいものが0.5合程度であり、黒色処理の最小の坏にはほぼ一致する。これより口径の大きい坏では1.0~2.0合に集中するほか、4.0合以上のものが1点含まれ、後者では使用目的の相違も推定される。須恵器はもっともばらつきが小さく、ほぼ1.5~2.4合に限られる。

高台付坏のうち黒色処理のそれでは坏に準じて大小が混在し、0.7~3.5合を計る。非黒色処理では計量点数が少なく明確ではないが、非黒色処理の坏と同様に比較的容量の小さい傾向を示すものと扱えられる。

容量による坏類の器形や調整による変化は容量の著しく大きいものを除いて特に認められ

第30表 坏・高台付坏容量集計表

容 量	坏			高 台 付 坏		計	比 率
	黒色処理	非黒色処理	須 恵 器	黒色処理	非黒色処理		
90~135cc (0.51~0.75)合	1	4		1		6	5.0%
136~180 (0.76~1.00)		6		1	2	9	20.0
181~225 (1.01~1.25)	2	13				15	
226~270 (1.26~1.50)	2	14	1	2	1	20	31.7
271~315 (1.51~1.75)	5	6	4	2	1	18	
316~360 (1.76~2.00)	8	8	6			22	30.0
361~405 (2.01~2.25)	4	1	7	2		14	
406~450 (2.25~2.50)	1	3	2			6	6.7
451~495 (2.51~2.75)	1	1				2	
496~540 (2.76~3.00)	2					2	3.3
541~585 (3.01~3.25)	2					2	
586~630 (3.26~3.50)	1			1		2	2.5
631~675 (3.51~3.75)				1		1	
766~810 (4.26~4.50)		1				1	0.8
計	29	57	20	10	4	120	100

推定値を含む

ず、焼成による傾向に相違はあるものの、最小の容量が0.5合とみられる。また、墨書土器では1.0~3.0合を計るなど共通する点もあげられる。焼成や黒色処理の有無を含めて使用目的等による何らかの規制要因も推定されるが、全体の不明なものが多く明確でない。

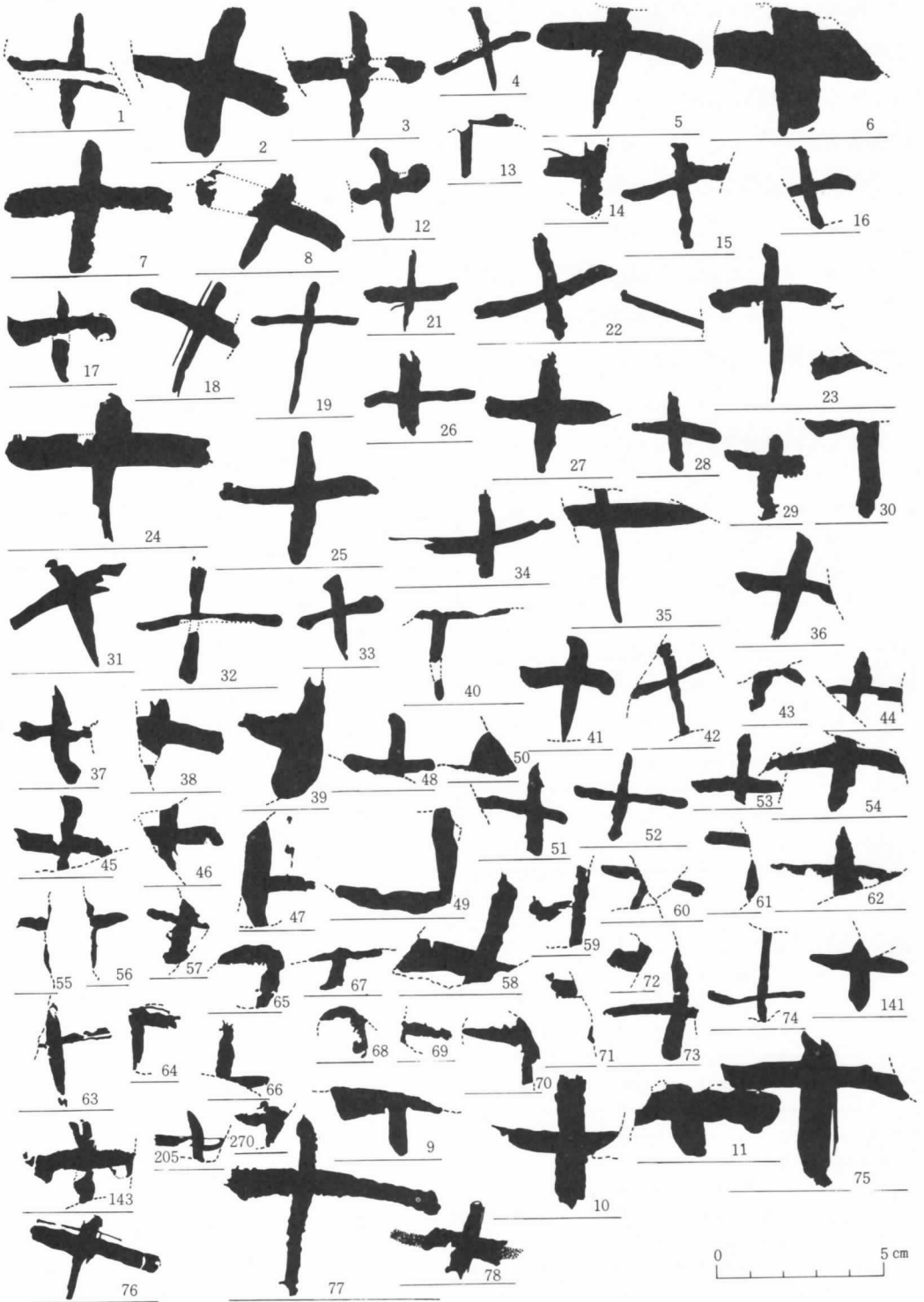
墨書土器 (第53~55図 第31表)

墨書される土器は小破片を含めて297点である。内面黒色処理されるものにもっとも多く、56.2%を占める。次いで非黒色処理が27.9%、須恵器15.8%の順である。器種は坏類に限られ、高台付坏は5点まで確認される。墨書の位置はすべて外面にあって13点が底部に、他は体部にある。底部に記されるものは非黒色処理の坏に皆無であり、須恵器にもっとも多い。特に器形や底部の切り離し、外面調整との関連は認められず、須恵器では底部の篋切りされるものに10点が含まれる。

墨書文字は判読できないものが含まれるが、全体で27~29種297点である。そのうち2点は同

第31表 墨書文字一覧表

No.	文 字	黒色処理		非黒色処理		須 恵 器		計	比 率	備 考
		体 部	底 部	体 部	底 部	体 部	底 部			
1	八?			2				2	0.7%	同一個体に2字あり
2	十	60(4)		20		16		100	33.7	高台付坏と点を含む 同一個体に2字の対応 する2字を記するもの 1点がある
3	上?	2						2	0.7	
4	丸			1				1	0.3	
5	大?					1	2	3	1.0	
6	小			1				1	0.3	
7	川?			1		1		2	0.7	
8	井			1				1	0.3	
9	夫?	1		2		1		4	1.3	
10	令	4				1		5	1.7	
11	卒	1						1	0.3	
12	尻	2(1)		2		1		6	2.0	高台付坏1点を含む
13	吉	1						1	0.3	
14	守	1				2		3	1.0	
15	安	1		4				5	1.7	
16	寺			1			1	2	0.7	
17	赤						1	1	0.3	
18	翌			1				1	0.3	
19	采	14		7				21	7.1	采、采等を含む
20	倍	1						1	0.3	
21	留			1				1	0.3	
22	真				2		1	3	1.0	
23	徳			2				2	0.7	
24	六						2	2	0.7	異か?
25	廿万					1	1	2	0.7	
26	□万			1				1	0.3	1字不明
27	髪十	1				1		2	0.7	
28	□十	1						1	0.3	1字不明
29	不明	70	2	36		11	1	120	40.4	
	計	160(5)	2	83	2	36	9	297	99.8	高台付坏5点を含む



第53図 墨書文字(1)





第54図 墨書文字(2)



NoはB.Noを示す

第55図 黒書文字(3)

一文字が同一個体に対応して記されるものであり、異なった2字を記すものは6点まで確認される。1字を記すものは2～14画の文字であり、比較的画数の少ない文字が多く、9画となる文字は含まれていない。もっとも頻度の高い「十」は33.7%を占め、高台付坏を含めてすべて体部に限られる。次いで「𠄎」が多いが、「𠄎」、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎等があつて若干の相違がある。須恵器を除いて体部外面に位置するものである。そのほかは4～1点であり、共通して体部に記されるものには「𠄎」、𠄎、または𠄎がある。黒色処理される坏に限られる文字は「上?」、「吉」、「𠄎」、「倍」等があり、非黒色処理の坏では「八?」、「丸」、「小」、「井」、「寺」、「𠄎」、「留」、「真」、「徳」等でもっとも多い。また、須恵器の坏では「大?」、「赤」、「真」、「𠄎(興?)」があり、後3者は底部に限られる。

2字を記すものは対応する「八?」と「十」を除いて「廿万」と「𠄎十」各2点である。吉事の文字とも解される。

書体はやゝ稚拙なものから達筆なものまで含まれ、大部分は口縁部を上にして記されるが、「十」、「𠄎」、「丸」等は底部を上にして、または斜方向に墨書される。墨痕は鮮明なものが少なく、摩耗するものが大部分である。

県内でもっとも多量の墨書土器の出土する落合II遺跡<sup>註(3)</sup>においては210文字中「𠄎」が93.0%以上を占めており、共通する文字には「𠄎」のほか「寺」、「真」等がある。

#### 使用形態

主として供膳用・煮炊・調理用・貯蔵・醸造用等の用途があげられ、器形の小さいものは前者に、大きいものは後者に含まれるものとみられるが、供献用や祭祀用としての使用も推定される。

もっとも多量な出土をみた坏は全体の80.5%を占め、木製の椀・皿類と共に食膳用具を主目的とするものとみられる。焼成や黒色処理の有無、墨書文字によっては更に使い分けられていることも推測される。使用に伴う痕跡を残すものには、漆液の固着するものや油痕、煤の付着するものがあり、漆とき用や、灯明皿、あるいは台皿等の使用が推定される。そのほか、墨汁痕を有して墨書用とみられるものが含まれ、転用碗も推定されるが明確でない。

煮炊用や調理用とみられるものは土師器の甕や鉢があげられ、11.9%を占める。特に非黒色処理のものでは煤や黒色の付着物があつて煮炊用としての使用が推定される。

貯蔵・醸造用とする甕・壺類はいずれも容量が大きく、小型のものでは供膳用も考えられる。下谷地A遺跡における長頸の壺では頸部までの容量が1,750ccを計り、ほゞ1升到近い。

注(1) 分析・鑑定項参照

(2) 高橋信雄「岩手県のロクロ土師器について」『考古風土記』第2号(1977)

(3) 岩手県教育委員会「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」IV(1980)

(4) 東北歴史資料館企画科長平川南氏の御教示による(1981)

(2) 木製品 (第32表)

植物種子等を除く木製品は46点である。推定される用途別によって農・工具、織機用具、容器を含む食膳用具、装身具及び履物、祭祀具、その他に分けられる。容量及び食器類が全体の58.7%を占めてもっとも多く、他はいずれも少数である。

農・工具は杵2点、槌1点である。

ほかに鋤状のものも推定されるが明らかでない。杵はナラ材を加工するやゝ短い堅杵であり、中央部の握り部分より上下に対応して整形される。槌は同様に小型とみられ、加工の容易なセン材を使用している。

織機具はナラの割材をやゝ粗雑に

加工する槌の子1点である。ほかに用途不明の木製品には織機の一部とみられるものが含まれる。槌の子は蓆編み等に使用されたことが推定される。共伴する土器の底部には網代痕を残すものがあり、これによっては2種類の編み方が推定され、縦糸に対して表裏に交錯するものと縦糸によって編みあげるもじり編みものが含まれる。

容器では曲物、桶がある。曲物では底板によって径12.0~12.7cm、16.6cmの大小がある。共に釘孔を有し、位置は不定であるが、大きさは殆ど一定している。底・へぎ板ともスギ材であり、縫は桜皮である。桶は蓋、底板、側板が推定され、径10.1~12.5cmとこれより大きいものが含まれる。側板による器高は21.8cm以上である。材はクリ、スギ材である。そのほか、柄杓1点があり、ほゞ1合の容量と推計される。

食器類には椀・皿のほか、折敷が推定される。椀・皿は木地椀・皿と漆椀があり、漆椀には朱・黒漆の塗分けと黒漆椀が含まれる。全体の器形が共に明らかでないが、椀は高台をつくり出し、1点は低い輪高台をなす。高台径、高台高は殆ど一定している。皿は1点がべた底をなして浅い皿とみられるが、他は高台をつくり出し、著しく器高が小さく殆ど扁平をなす。前者の底径が若干小さく、後者の高台径は椀に比して僅かに大きい。共にセン材の横木取りの挽物であり、用途不明のセン材は皿材であることが推定される。

折敷は共に方形とみられ、1点は隅丸を呈する。縫は桜皮であり、補修されるものである。

装身具・履物類では櫛1点と下駄4点である。履物はクリ材の蓮齒下駄のほか、スギ材を刳貫くぽっくりがある。女兒用のぽっくりは近世とみられており、これによっては時期を異にするものが含まれている可能性もあげられる。

祭祀用具・その他では陽物形の木製品1点、木簡を転用した木札状の木製品1点があげられ

第32表 用途別木製品

No.	用途	種類	樹種	点数
1	農・工具	杵、槌	ナラ、セン	3
2	織機具	つちのこ	ナラ	1
3	容器	曲物、桶、柄杓	スギ、クリ、セン	13
4	食器	椀、皿、折敷	セン、スギ	14
5	装身具	櫛	ツゲ?	1
6	履物	下駄	クリ、スギ	4
7	祭祀具?	陽物形木製品	マツ	1
8	その他	木簡転用品	マツ	1
9	不明	板材	アカシデ、ナラ、クリ、セン、ツゲ	8

桜皮1点は容器を含む

る。後者は「廳」の一字と月日が判明し、文書の一部とみなされる。

そのほか、用途不明の木製品には建築材等の想定されるものがあるが、確認できるものはない。

## 2 まとめ

下谷地 A 遺跡を含めて明らかな遺構は確認されていないが、平安時代の共通する遺物が中心である。その殆どは集落遺跡に普遍的に認められる土器であり、土師器、須恵器のほか、赤焼き土器、または須恵系土器<sup>註(1)</sup>と呼称される土器である。しかし、著しく多量の土器と木製品の出土は集落遺跡に比してやゝ様相を異にするものである。殊にも墨書土器の比率が高く、また、木製品では木簡を含む多種の木製品を伴っている。この傾向は北上川東岸の落合 II 遺跡<sup>註(2)</sup>に極めて類似するものである。

焼成別の土器では須恵器の比率が低く、非黒色処理の酸化炎焼成が主体をなし、甕の一部を除いてロクロ使用の土器である。大部分を占める坏は焼成や黒色処理の有無、調整技法等に若干の相違があるが、殆ど回転糸切り無調整のものであり、多様な形状を呈する。換言すればロクロ使用による土器生産が普遍化する段階と解され、全体の特徴によっては9世紀代より10世紀にかけての時期が推定される<sup>註(3)</sup>。このことは層位的に粉状パミス堆積の時期<sup>註(4)</sup>に符合するものではある。

木製品はその大部分が土器と併用されるものとみられる。同時に農耕の普及、鉄器の使用等が推定され、土器を含めて文字の享受されうる状況が推測される。殊にも木簡には「廳」が判読され、斤に何らかの関連をもつことも推定される。胆沢城跡では同様の椀・皿のほか、「廳」が墨書土器に認められている<sup>註(5)</sup>。

しかし、遺跡の性格や時期についてはいずれも周辺の未調査区域、特に西方における調査を待つて解明される課題であり、立地の共有する縄文時代や近世以降の遺構についても同様である。

注(1) 前掲「岩手県のロクロ使用土師器について」

(2) 前掲「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」IV (1980)

(3) 岡田茂弘・桑原滋郎 「多賀城周辺における古代環形土器の変遷」『研究紀要』I 多賀城跡調査研究所 (1974) ほか

(4) 付篇「東北地方における奈良～平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて」

(5) 水沢市教育委員会 「胆沢城跡」昭和51年度発掘調査概報 (1977)

## 遺物の鑑定と分析

### 1 下谷地 B 遺跡出土植物種子の同定

村 井 三 郎

下谷地 B 遺跡の植物種子には、種々のものが混在しており、オニグルミが主体をなす。それにトチを混入するほか、特殊な種子を混入していた。それはマンサク（落葉性低木）の種子のようにみられ、沢山混入していた。

第 1 表 オニグルミ計測表

No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅	備 考	No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅	備 考
1	3.3 <sup>cm</sup>	2.8 <sup>cm</sup>	1.4 <sup>cm</sup>	1.18	9.24	2分の1欠損	13	3.4 <sup>cm</sup>	2.7 <sup>cm</sup>	1.5 <sup>cm</sup>	1.26	9.18	2分の1欠損
2	3.2	2.8	1.3	1.14	8.96	"	14	3.2	2.9	1.3	1.10	9.28	"
3	3.5	3.1	1.5	1.12	10.85	"	15	3.1	2.8	1.5	1.11	8.68	"
4	3.6	2.9	1.4	1.24	10.44	"	16	3.2	2.8	1.4	1.14	8.96	"
5	3.2	2.6	1.3	1.23	8.32	"	17	3.5	2.8	1.3	1.25	9.80	"
6	2.8	2.8	1.1	1.00	7.84	"	18	3.7	2.7	1.3	1.37	9.99	"
7	3.5	2.9	1.4	1.21	10.15	"	19	3.7	2.7	1.4	1.37	9.99	"
8	3.5	3.0	1.5	1.17	10.50	"	20	3.3	2.7	1.3	1.22	8.91	"
9	3.7	2.6	1.3	1.42	9.62	"	21	3.4	2.8	1.3	1.21	9.52	—
10	3.7	2.7	1.3	1.37	9.99	"	22	3.5	2.0	0.7			3分の1欠損
11	3.3	2.5	1.3	1.32	8.25	"	23	2.6	2.5	2.6			先端欠損
12	3.3	2.8	1.2	1.18	9.24	"	平均	3.39	2.78	1.35	1.26	9.41	No.22、23を除く

第 2 表 トチ計測表

No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅	備 考	No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅	備 考
1	3.2 <sup>cm</sup>	3.3 <sup>cm</sup>	2.5 <sup>cm</sup>	0.97	10.56	完形	5	3.5 <sup>cm</sup>	2.9 <sup>cm</sup>	2.7 <sup>cm</sup>	1.21	10.15	完形
2	3.1	3.0	2.4	1.03	9.30	"	6	3.0	3.2	2.5	0.94	9.60	"
3	2.8	2.6	2.2	1.08	7.28	"	計	18.5	17.7	14.6	6.30	54.72	
4	2.9	2.7	2.3	1.07	7.83		平均	3.08	2.95	2.43	1.05	9.12	

(すべて水浸保存するものであり、計測は整理者で行なった)

## 2 土器の岩石学的方法による分析結果

照井 一 明

### I はじめに

土器の製作地推定のため、岩石学的方法で分析を行なった。また、窯跡周辺の粘土も比較のため分析を行なった。

### II 試料

下谷地B遺跡分

S<sub>1</sub>……非黒色処理の土師器、坏の口縁部より体部までの破片、トレンチ外出土

S<sub>2</sub>……須恵器、坏の体部より底部までの破片、トレンチ外出土

### III 分析方法

① 試料をカナダバルサムで固定し、100分の3mmの厚さの薄片を各3枚ずつ作成した。粘土は、φ4の標準篩で水洗し、残砂を乾燥した後薄片を作成した。

② 偏光顕微鏡を用い、鉱物組成、特徴、岩片の種類・頻度を調べた。

③ 1つの試料について、それぞれ500~1,000個の粒子について検討を行なった(0.05mm以下の鉱物は基質として扱った)。

④ 鉱物、岩種別構成から、粘土の供給源の地質を推定し、製作地を考察した。

### IV 分析結果

S<sub>1</sub>……岩片に古生層・花崗岩・プロピライトを含み、火山ガラスが認められる。

S<sub>2</sub>……古生層の岩片から主に構成され、火山ガラスを含まない。

No.	内 眼 的 特 徴	鉱 物 組 織						岩 片	源 岩	備 考
		Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py			
S <sub>1</sub>	(色)淡 褐	+++	++				+	Chert Granit Quartzite Propylit (orporphyrite)	古 生 層 + 花 崗 岩 + プロピライト (又はひん岩) + 火山ガラス (凝 灰 岩)	図版37
	(組織)シルト岩状	Py:斜方輝石								
	(鉱物)石英とわずかな有色鉱物が認められる。	その他:火山ガラス・鉄鉱・緑レン石								
	(岩片)白色・灰色 岩片は少量									
S <sub>2</sub>	(色)灰 色	+++	+	+				Chert Tuff(?)	古 生 層 + 火山ガラス (凝 灰 岩)	図版38
	(組織)シルト岩状、緻密	その他:火山ガラス(微量)(脱ガラス化)								
	(鉱物)石英のほかは認められない。	鉄鉱								
	(岩片)白 色									

Q:石英 Pl:斜長石 K-F:カリ長石 Bi:黒雲母 Ho:角閃石 Py:輝石

- ① 各試料の鉱物組成・岩片構成・特徴は上表の通りである。
- ② 須恵器の焼かれた温度は、石英→鱗珪石に再結晶していることから推定すると、 $\beta_2$ -鱗珪石（高温型）の安定な870~1,470°Cであろう。
- ③ 各土層は、石英・斜長石の破片結晶から主に構成されるが、試料によっては、黒雲母・角閃石・輝石（特に斜方輝石）の含有量が増加する。
- ④ 岩片としては、チャート・珪石・ホルンフェルス・花崗岩類・班岩・安山岩・玄武岩・凝灰岩・苦鉄質火山岩類などがみられる。
- ⑤ 土器の多くは、火山ガラスを含んでいるが、これらの供給源は粘土の分析結果から北上川層群の凝灰岩が考えられる。
- ⑥ 土器・粘土の組成と地質とを考慮すると、土器の大半は北上川流域およびその周辺の粘土から作られたものである。
- ⑦ 各遺跡から出土した土器は、異なった粘土、あるいは産地のものが混じっている。
- ⑧ 窯跡の粘土、あるいは使用された粘土の大半は鮮新統の凝灰岩・シルト岩、および河岸段丘のシルト岩である。
- ⑨ 安山岩・玄武岩を含む粘土の産地としては、古生層・花崗岩などの岩片および火山ガラス（凝灰岩）を特徴的に伴うことから判断すると、北上山地で鮮新統の凝灰岩が分布し、さらに中性～塩基性火山岩類の分布する地質状況が推定され、稲瀬火山岩類分布地域周辺の可能性が最も強い（北上川東側の地域）。
- ⑩ 野外の露頭で採集された粘土（水沢市見分森、江刺市瀬谷子、北上市飯豊森、同藤沢、紫波町杉の上、和賀町岩崎新田など11点）の特徴をみると、一般に北上川の西側地域の粘土には火山ガラスが全く含まれないか、あるいは微量である（飯豊森、藤沢、杉の上、岩崎新田）。角閃石・輝石は含まれる場合と含まれない場合とがある。水沢市見分森の粘土は、火山ガラスを含む角閃石・輝石を含まない特徴がある。紫波町日詰杉の上の粘土には、結晶片・岩片・大山ガラスが含まれずチャート・シルト岩を主として構成される。江刺市瀬谷子の粘土は、チャート・珪岩・英崗岩などの岩片と、石英・斜長石・鉄鉱・ジルマン・緑レン石を含み、火山ガラスを含むことが多い。凝灰岩や凝灰質シルト岩には輝石や角閃石が一般的に認められる。

付記 分析試料及び分析結果は了解を得て下谷地B遺跡についてのみ抜粋するものである。また、写真図版も同様である。他遺跡については、「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」XIII、XIV、XV、XVI（1982）に掲載している。



写 真 图 版